

果樹園

第119号

伊東 静雄 新資料

日 記
沙弥満誓の歌
虎に騎る
偷

蓮田善明とその死

小高根二郎

故	山	浅野	晃
ヘリック	詩抄	森	亮
コギトの思ひ出	田中	克己	
スカイライン	吉本	青司	
寂しい並木で	大村	直子	
榎貞介の断章	青木	敬磨	
未	知	美堂	正義
トラクター詩抄	平井	俊夫	
老	年	浅田	二三男

日記

伊東 静雄

×月×日

昨夜ラヂオが警報した颱風は、遙か紀州沖合から東支那海の方にそれたと言ふ。今朝空は晴れてゐるが、自分で自分の力を抑へくしてゐるやうな風が、家の周囲の柳や榆の梢をゆさぶる。読書二三。夕方さかんな空焼け。二階から見てみると、その夕焼けの中を例の盲人が通る。夕方になると毎日、この静かな丘陵地の道を通る人である。若く瘦せた、長身白哲の盲目の人はいつものやうに、白紬の着物に絹の羽織をかさね、黒の洋傘で夕陽をさけてゐる。三つになるわが家の女の子が門

口からちよこくと歩き出して、その人の杖にすがつた。わたしがこらこらと娘の名を呼んで制止すると、そのひとは道の上にたたずんで足許の子供と、二階のわたくしの聲とに半々に微笑してしばらくじつとしてゐた。そしてあちらに去つて行つた。

夜は故郷の姉に手紙書く。

昭和十三年「新日本」十一月号、一二号の日記

沙弥満誓の歌

しらぬひ筑紫の綿は身につけていま

だは著ねどあたたかに見ゆ

(沙弥満誓 万葉卷三)

いつの頃から私がこの歌を心に止めたのか

はつきりしない。或は十四五年前佐賀の高等学校の寄宿舎で、いゝ加減な本で初めて万葉集など読み出した時分の、初心な気持に何といふこともなしに覚えたのか知れない。
不知火筑紫とつゞいてゐるだけで、もう自分の住んでゐる土地を情緒化して考へたのかも知れない。しかし私はその頃ひどくさびしがり屋ではあつたが、不知火など神秘めかしく考へる質ではなかつた気もするし、暖かさうな綿の生えつゞけたのをみたわけでもない。それにこの歌は高校生の愛語歌にしては少し技巧的で、沈着な風がありすぎるやうに思はれる。

或は案外大学の国文の教室か何かで蕭洒な、ハイカラともいひ度い所もあるその趣をひそかによろこんだのかもわからない。
然しそれだけのものでもなささうだ。随分水い口癖なので今の私にはい、歌かどうかわからなくなつてゐる。それは又どうでもいい、事だ。愛語の歌など皆そんなものだ。いつの間にか謙固の下に心理の幾何図とでもいふ様なものが出来上つてゐて、何かの景色を見た時など、大仰に言へば宿命的に、愛情みたいな孤独感がその歌をふいと思出すのだらう。こんな幾何図は一度散々ぶちこはすといふ、気持ちするだらうが、非常にむづかしい事なのだ

らう。

この文章を書くために文学辞典をみると、作者は拔群に有能な地方官生活を水くした後、太上天皇のために出家し、後太宰府の畔に、永く行き悩んでゐた観世音寺を勅名によつて建立した人ださうだ。なる程くくと私はその閨歴から、その人と歌とが幾分よくわかり得た気がした。私が国宝といふことのために初めて押し、それが国宝といふことのためにだけで言ひ難い歴史的感情を覚えたのは、物寂びたその寺で、中学二年の修学旅行の時であつた。そして菅公の有名な詩中の鐘を、自分の耳できいて大変に感動した。都府楼趾をめぐる風景は、京都の盆地に似たところであつたやうに覚えてゐる。

(昭和十三年「新日本」十二月号)

虎に騎る

天台国の

うらやまし
阿羅漢豊干
人類にはあらぬ尊さは
猛き獣の虎に騎り
詩を吟じて悠然たり

われもまた 五黄の寅の

女をこそ得たれ
無明凡下の是非なきに
獣にあらぬわが妻を
御し兼ねたるぞ哀れなる

(昭和十三年「むらさき」一月号)

書簡 (蓮田善明宛一通)

昭和十三年十二月九日

堺市北三国ヶ丘町四〇より熊歩兵第十三聯隊第二中隊蓮田善明宛(封書)

御手紙有難う。ご健康なのですね。母上様のこときいてゐました。わたしは何もかもわかる気がいたしてをります。思考からすべての暴力的なものがなくなつたと想像される今のあなたの御出征こそ、われわれの期待する随一のものであります。戦の美しさは、そこからのみ生れると思ひます。わたしは戦争に行けないから、日本に居て、在来の詩の否定的発想法をしんの髄から、ぶちこはさうと、それを仕事にしてをります。そして、絵を始めました。油絵は道具立てが一寸やつとはいけならしいので水彩画を始めました。色をみることは、肯定精神なしでは、出来難いことのやうに自己流には思はれて、(文学だつて肯定精神なしでは出来難いこと

は勿論でせうが、こゝで云ふのは表情の問題なのです。一つの色をみつけるのもうれしく骨折つてゐます。まあ、なむあみだぶ、といふ称名のやうなものですな。わたしの戦争なのですね。あなたが生きて帰られたら、すばらしい絵をみせますよ。

文芸文化もまあ調子がおちついたやうですな。あなたも居られんし、わたしも出来るだけ書いて枯木のにぎやかしの役目でもしたいと思つてます。

元気ではたらい下さい。そして時々手紙下さい。た、かひからの手紙は、兵士のも一つの立派な奉公と存じます。わたし共は切に待つてます。

九日 伊東静雄

蓮田善明様

伊東静雄

附記

今度人文書院から、五年前に刊行された「伊東静雄全集」の増補改訂版を刊行するという計画を聞いて、増補改訂の趣旨に添うべく広範囲に資料の探索と不明な点の究明を意図した。幸い拙誌の会員であり、拙研究の熱烈な協力者である玉川学園大学の国文科の学生・西岡武良君にねがって、上野の近代文学館、日比谷の国会図書館、さらに昭和女子大図書館

館での探索と調査をしていた。結果、作品年譜の整備という主目的のほかに、前掲の散文「日記」「沙弥満誓の歌」詩「虎に騎る」の新資料の発掘に成功した。一に西岡君の献身的な努力の賜物であつた。

又、全集所載の蓮田善明宛書簡中、発簡年月日に疑問のある一通に気附いて、改めて蓮田敏子未亡人から伊東書簡をお送りいた。

て照合をした。それがきっかけとなり、敏子未亡人は前掲の新たな一通を発見して送つてくださったのである。

その他、麦書房主の堀内達夫氏からは、新資料発見、所載が不明であつた作品の誌紙を発見のつどお教えをうけていたが、今度「第一日」「孔雀の悲しみ」のそれを送つてくださった。こゝに万腔の謝意を捧げる。

蓮田善明とその死(三)

小高根 二郎

明日いよいよ日本に向け乗船という日になつて、蓮田はリッツ映画館でドストエフスキイ原作の「罪と罰」(仏ジエナール作品。監督ピルチユール・オネガー、配役ビエール・ブランシヤール(ラスコルニコフ))を見たのである。

ドストエフスキイに関しては、蓮田はずでに大の馴染であつた。「鷗外の方法」において、「ドストエフスキイに著名な例をとつてみてもよい。彼の大作とモラルとを生成したものは、西歐人の絶望に面した知性の恣な帰納と演繹であると言つてよい。」と言つていた。又、「預言と回想」においてはさらに具体的に、「「カラマンゾフの兄弟」の最後にアリオシヤの祈りがある、あれなどを見るに少しも、真に神を見た安らかさめてきたを感じさせられないで、ああして結んでゐることにドストエフスキイを一層みじめに想ひ返させられたのである。一応の結びを神につないでゐるけれども、神は遂に、永遠に見えてゐないのである。祈つてゐるだけであり、祈ることによつて神を見たかの如く仮想してゐるのである。私は「罪と罰」のラスコリーニコ

故山

浅野 晃

崑崙の玉がいふ
故山へ帰りたいといふ
彼の故郷は
すつかり変つてゐる
すつかり荒れてゐる
それを彼は知らない
故山へ帰りたい
崑崙の玉はいふ
どんなに変れよう
どんなに荒れよう
故山は故山だ

そこには私を生んだ土がある
私を育てた空がある
日光があり樹木がある
崑崙の玉はさう思ふ

けれどそれはむなししい願ひ
君の身内はみな逝つて
残つてゐるのは冷たいだけの
冷たいだけの沈黙だけだ
けれど崑崙の玉は
やはり故山が恋ひしいといふ
そこには彼の過去があるから
過去はすべて想起されねばならないから

崑崙の玉は故山へ帰りたいといふ。

フが果して救はれたかと、も一度たづねたいのである」と言っていた。

兄達と違つて清池と善意の典型として描かれたアリオシヤ・カラマゾフ。彼は恩師ゾシマ長老の幻滅の屍臭をかいたが、星の夜の僧院の庭の大地を擁護して、「誰か僕の魂を訪れたような気がする」と霊感のようなものを感応したのである。そのアリオシヤがエビロークでは、屍臭がしなかつた勇敢な少年イリユーシヤの葬いがすんだ後で、もう一度会えるでしょうか？ という友達達の少年の問いに答えて、「きつとわれわれは蘇ります。きつとお互いにもう一度出会つて、昔のことを楽しく語りあうでしょう」と約束していた。

このアリオシヤの神への結びつけかたに蓮田は不満だったのである。神はついに永遠に見えていず、祈ることによって神を見たかのように仮想したので……と断論している。又、ドストエフスキイを一層みじめに回想したという蓮田の直感も正確である。というのは、アリオシヤを神にめぐり会わせる機会をドストエフスキイは書かれざりし第二部に予定しつゝ、この世を去つたらしいからである。

蓮田は「罪と罰」の主人公ラスコニコフははたして救われたらうか？ と問はれて

いる。一つの犯罪を犯しても、それが千の善事につながるのであれば道徳的に赦される。この人工された大義名分で元大学生の彼は貪婪な金貨婆イワノヴナを手斧で殺害し、腹違いの妹リザヴェエダまで死の道連れにしてしまう。凶行後は予期しなかつた恐怖と苦悶に追われて下宿に逃げて戻り、奪つた金品は或る門構えの石の下に隠匿する。やがて彼は聖なる娼婦ソーニヤの愛の教化によって自首して出るが、その日まで千の善事に通ずべかりし金品は、何人に施されることもなく、石の下に眠つたまま、だつたのである。この首尾一貫しないニヒリスト・ラスコニコフは八年の刑に処せられてシベリヤ送りとなる。そこで初めてソーニヤの不逞の聖愛に目覚め、福音書の差入れを彼女に頼むにいたるのである。彼は福音書を読まなかつたが、枕の下にひそめて眠つた。すると或る想念が彼の身内を閃きながらすぎるのを感じたという。すでに彼の信念や、感情や、憧憬は彼女のそれであり、二人でする新生活への仰望から、残る刑期の七年の歳月を七日の短かさに感ずる覚悟がすでにできたという……めでたしめでたしのエビロークに、蓮田は頭をかしげているのである。ラスコニコフは果して救われたのか？ と設問していたのである。

蓮田はビエール・ブランシャールが演ずるラスコニコフの凶行後の狼狽ぶりと苦悶を見ていて、どうしたことかクスリ……と笑つてしまつたのである。蓮田はこのクスリ……を分析して、「始終敵と目を光らし合つてゐた感覚」のせいになっているが、つい数日前まで、敵という死神と鼻と鼻とを衝き合せていたのだから当然であろう。敵を斃さねば自分が斃されるのである。斃すか斃されるかである。死神を斃さねば憑りつかれるまでである。つまり凶行が義務であり任務だつたのである。従つて凶行後に、狼狽や苦悶をすどころでなく、勝者としての昂揚に胸を張り方歳という快哉を叫ばねばならなかつたのである。しかも蓮田は「死は文化」だという複雑で深奥な信念を持っていた。斃し、或いは斃されるそのいずれの側から見た死も、勝敗という論理ではなく、結局は文化という論理であつた。死を下賜した皇太后（後の持統天皇）も、死を賜つた大津皇子も、共に文化であつたのである。この論理でゆけば、一の悪事を千の善事に転化しようとして敢行したラスコニコフの凶行も、貪欲婆イワノヴナの死も、共に文化であつて、はずである。蓮田がラスコニコフの狼狽と苦悶を嘔つたのは信念とは裏腹ないかにもひ弱な文化人らしい

肝っ魂の小ささを嘔つたのである。

蓮田は嘔つているうちに、「罪と罰」のやうなもの（その原作も）を以て仔細らしく厚味を作つてゐる、現代の文化生活といふやうなものへ、復讐したやうな気持」を起している。蓮田がざまアみやがれ！ と感じた

ヘリック詩抄(五十六)

森 亮

願掛けにとエレクトラへ

空の青みにちらばつた

柔らかなちぎれ雲にかけて、

昼間の世界をあざやかに描いて見せる

ありつたけの色どりにかけて、

穀粒を黄金いろにふくらませる

しとどの露や露雨にかけて、

花の庵室にかくされた蜜の

とりどりの匂ひと味はひとにかけて、

音無しの夜と黄泉の女神の

現するといふ三つの姿にかけて、

又はかのみめやかなをんな魔法使ひ

（それが髓を抜き、果汁をしぼり

娼薬づくりにいそむさまを想うてこらん）

のは、「口すぎのためといふことを通り越して「金」にすべてがある」仔細らしい厚味に對して反撥したのである。蓮田は（その原作も）といっている裏側には、金のためでもなんでもない、たゞ参議齋通に出会つた思い出を今生のかたみに書き残さんがために、著述その彼女に幸ひする星々の相にかけて、いや、なべての物をうながして完き物にと仕上げおほせる「時」といふものにかけて、そして最後に、なにもものにも増して願ひ叶へることはお手の物の貴女にかけて、さうよ、エレクトラ、お願ひ、そなたの恋する相手は誰であつてもいけない、わたしのほかは。

ヘリックには古典的な名前をもつ半ば架空の女性を歌ふ詩が多いが、彼がそれらの女性にそれぞれ性格を持たせてゐるとは思はれない。ただ、屢々姿を現はす数名の女性に就いては、その取り扱ひ方が一人一人多少違へてあるやうである。この「願掛け」（七六八）のエレクトラは、この詩ではさうでもないが、大概は官能的な恋愛の對象として歌はれてゐる。

されたのではないかと疑われるほどの「更級日記」の純粋性と、心裡で比較したから……と想当してはいけないであらうか？ そう想当でもしなければ、蓮田が嘔つた後で悪感のやうなものを覚えて映画館を跳びだし、そこで彼を雁字搦めにするえたいのしれぬ号泣の衝動を理解することはむづかしい。「非常に粘り強さで包み始めた或るもの」に對して、振り解かうとし、手向はうとすれば、その手自身が自分のものではなく見えて来る始末で、喚き泣きたいやうな気がして来た。しかももし泣き喚くとすれば、その泣き声までが、ざくざくと砂を嘔んででもゐるかのやうに感ぜられる気がしてくるのであつた。」

これは号泣、あるいは慟哭というより、泣き、やっくりの衝動である。

「それでも唯声を立てて喚き喚きたいといふそれだけの心に取り纏がる必死さで、骨ががたつくほどであつた。」

明らかに泣きやっくりの衝動である。この間歌的な衝動が鎮まつてから訪れる、あの痴呆のやうな空虚と静謐……。そこに蓮田は「胸の中を静かに滲らしつゝ溢れてくるもの」を感じている。それは眼からこぼれ残つた泪なのだ。その泪はやがて蓮田の胸から肉体の

中を、まるで血汐のようにさらさらと流れた
したのだ。いや、流れだした……という思い
は、期せずして「方丈記」を呼び、経文のよ
うになめらかな冒頭の句を、くちずさませて
いたのである。

「行く河の流れは、絶えずして、しかも、
元の水にあらず、淀みに浮ぶ、泡沫は、且
つ、消え、且つ、結びて、暫くも止まるこ
となし……」

蓮田はくちずさまされている自分を次のよ
うに分析している。

「何故その時「方丈記」などが思ひ出され
てきたのか、と思つたが、後で考へると、
それは漢口で本屋に立寄つて一二冊買った
時、同じ書棚にその本が確に目に触れてゐ
て、或る感慨がその時微かに自分にかかり
合ひ始めてゐたことが思ひ出された。しか
し初めはそんなことを思ひ出してゐたりす
る暇もなかつた。寧ろ、こんな仏教的観念
的な感慨などが今思ひ出されて来たりした
ことが改めて不審しく思はれて、さういふ
観念など全く自分ないことを確かめると、
一寸はぐらかされたやうな気がしたが、さ
ういふ観念的な意味でなしに、この言葉の
底に脈うつ歎きが観念をとびこえて近づい
てくる気がし、次には、この「方丈記」が他

に実は内容として何もなく唯歎きに歎いてゐ
るといふだけの本だつたといふことに、新
しい稀らしさで目を瞠らされるのであつ
た。そしてさう思うと、この冒頭の厭世的
な文章も少しもじめ／＼したものでなく、
しんに清らかな詩人の溜息が聞かれるやう
に思はれてきた。」

蓮田は漢口の本屋で「方丈記」を撰ばず
「更級日記」を購つたのである。今「罪と罰」
を否定的な媒体として「方丈記」に近づくこ
とになつたのである。蓮田は「この詩人の胸
に頭をこすりつけて行きたいやうなものを感じ
て、通りがかりの本屋を探し当てる、岩波
文庫の「方丈記」を求めると、矢も楯もたま
らず、道で包みをひきあけて冒頭やら、何処
やら此処やらめくりめくり拾い読み」しなが
ら歩きだしていたのである。

蓮田は輸送船の中でも「方丈記」を手離さ
なかつたのである。「船中で、船艙にしつら
へられた暗い板敷の上に屈まつて読み返し読
み返ししながら咽喉からこみ上つてくる涙を
抑へ得なかつた」ほど耽読するのである。耽
読というより憑かれたという姿である。蓮田
は漢口から揚子江上では孝標の女に魅された
が、上海から玄海灘を経て広島に上陸するま
で長明にとり憑かれたのである。蓮田は、か

ある。

蓮田は昭和十五年も押し詰つた十二月二十
一日、二年八月ぶりで日本に帰還した。「九
州の一角に帰国の第一歩を印した途端、精神
の平衡を失って波止場に昏倒した」とは、清

水文雄氏の伝えるところである。

しかし、蓮田が上陸した場所は、九州では
なく、中国の字品であつたようである。その
事實は、広島時代からの知己大山澄太氏（時
山頭火の研究者）の伝えるところで、広島
は牛田町の自宅に突然軍装をした蓮田の来訪

スカイライン

吉本青司

△タゴールの詩と言葉▽を

ポケットにいれて

詩を書きにいって

正蓮寺荘の支調は かたくとざされ

金いろの小さい花が黙っていた

石ころ道をのぼるうち

太陽が ぼくのコートをぬぎとつた

開店したばかりの茶店の

ムスメの名は トクコといった

ぼくが

△タゴールの詩と言葉▽を読んでいると

ムスメは これを読むようにと

△明星▽を出してくれた

年とつたばあさんの

ながいおしゃべりがつづいた

聞きてのちいさんは無口だった

話が 神経痛のことになった

ばあさんは

△死んだほうがましじゃ▽

といった

そばで 客らしい声が

△死んだら もどれんけのう▽

といった

ぼくは 窓ごしに

遠い海をみた

つて昭和十二・十三年の夏、基隆から神戸ま
で二往復したことのある馴染の潮路にゆきさぶ
られながら、台湾は台中に今もなお在る我と、
中国は大橋樑か晏家大山で雲海を想望する我
との二分身を、ありありと意識したのであろう。
「行く河の流れは、絶えずして、しかも、元
の水にあらず」。「行く潮のたぐたいは、絶
えずして、しかも元の水にあらず」。蓮田は
二分身の「我」から分離した我を意識したで
あろう。孝標の女がすでに老年の俊通に嫁し
たのは、いわけのない物語世界への憧憬や、理想
の人・資通の幻からの分離——つまり、一種
の遁世であるといえないであらうか？ 又、
長明が將軍実朝に拝謁した東下りの旅から戻
つた直後に成つた「方丈記」……。それは長
明のあくなき仕官の俗念を、「阿弥陀仏両三
遍申て、止みぬ」と、われとわが身に断絶を
申しわたす遁世の決心ではなかつたのか？

蓮田は玄海灘のま冬の波濤に捲られながら、
孝標の女に思いを走せ、或いは長明を思い、
己が二分身からの分離を意識したのである。
これは戦線で意識した、あの「花の若」のメ
タモーホーシスなのだ。蓮田が帰還を契機と
して、遁世の足がかりとしようとした事實は、
帰還直後に療養に赴いた阿蘇は垂玉温泉で取
材した小説「有心」がつぶさに語るところで

をうけた由……記憶しておられる。その日蓮
田は、小隊長として兵隊を一人も殺さぬよう
に腐心したこと、「奥の細道」や古典を読み
ながら戦線を疾駆したことなど話した由であ
るが、波止場で昏倒した話は記憶にない模様で
あるが、それは失念をされたものと推察され
る。その推察を成り立たす斎藤清衛先生の書
簡があるので、後に掲げる。

蓮田が波止場で精神の平衡を失って、昏倒
したか、しなかつたかは、重要な事である。
清水氏は重要な事だからして、特に明確に記
憶に留めたのであろう。これは、揚子江を下
り、上海にしばらく滞留し、黄海・玄海灘を
渡るに従つて、いよ／＼鮮明になつてきた、
分身の「我」と、今の「我」との分裂症状を
示すものではないだろうか？ 水上にある時
には、まだその分身達との膚接的な親近感が
あつた。隣でつながる連繫感があつた。その親
近感・連繫感が、船橋から内地の土を踏んだ
とたんによつたり！ と切断されたのである。
ばらばらになつた分身達と我。ばらばらにな
つたのでかえつて明確になつた分裂感……。
そこに、長い陣地の穴居生活で痛めつけられ、
その上、輸送船の窮屈な船艙の無理で悪化し
ていた座骨神経痛が作用したのである。この
精神的な分裂と肉体的な衝撃とで蓮田は昏倒

したのでとみることをえよう。
蓮田は宇品上陸とともに「文芸文化」の同志に逸早く無事の帰還を知らせたらしく、次の喜びの手紙が植木町の蓮田家に次々と舞いこんだのである。

昭和十五年十二月二十二日

封筒紛失……栗山理一より蓮田善明宛封書

「感無量である。日曜のコタツで皆と雑談をしてゐるとヒカルが文関からふいに持ってきたのが兄の葉書であつた。ハスタのオヂチャンがカヘッタ!! ワー!! と歓声をあげたのが家内で、もう泣いてゐた。僕もこみあげてくる感慨で臉がすぐ熱くなつてきた。全く嬉しい。」

先日池田の便りで兄が帰つてくるやうな気がして仕方がないとあつたので、僕もその言葉のうらにある意味を汲んで、兄の帰還を確信はしてゐたが、現実はこの報らせを手にするまでは安心は出来ずにゐた。しかしもうこれで安心だ。全く嬉しい。

家内は涙をふきながら、もう僕を責めてゐる。一度も慰問品を送らなかつたことを女心に自責してゐる。何度も家内に催促されながら不精な僕はそれを怠つてゐた訳だが、しかしもう兄が帰つてきてみると自分

の不精を責めるよりも、よかつたよかつたといふ心で一杯である。伊東さんにも今日知らせよう。

奥さんや子供たちの喜びが目に見えるやうだ。いつ上京になるか早く会ひたいが、必ず大阪で下車してくれ。池田も廿四日頃には帰阪するといつてゐたから、或は大坂で会合できるかもしれない。来る時は前以て時間を知らしてくれ。次に何かと近況一束。

×もう知つてゐるだらうが、子文書房の先日の手紙では叢書に出る兄の第二著は間もなく発刊の由。兄が帰るまでに是非と皆で急がせてゐたが、やつとこの頃になつた次第。

×兄の帰りを鶴首してゐた星野の主人が盲腸炎に腹膜炎を併発して入院中、僕も二三日中に見舞に行く積り。

×伊東さんの「十字略」目下福建省中。今朝は深い霜でよく晴れた縁先で宣長のことを調べるため、兄の文章を読んでゐた。何か偶然でないやうな気がした。兄の帰還の聲に接して気合を新しくこめられたやうな気がする。文芸文化には一月号から「詞書論」をのせることにした。約百枚の長文になつたが、これが兄の凱旋を迎へるもの

読売文学賞受賞

定本岩魚

¥ 1000

蔵原伸二郎詩集

「陽炎」発行所

埼玉県飯能市原町四三ノ三

になればよいが。冬の休みは、日本短歌、皇国文学、龍燈の三つの原稿を承諾してゐるので、ずつと家にゐるつもり。

とにかく、今日は一日楽しくすごせる。嬉しい便りだつた。

廿二日

栗山生

蓮田兄

堺に住んでいた栗山氏に一番早く帰還第一報が届けられ、この返事となつたわけである。が、翌日には東京の清水氏も次の祝歌を送っている。

コギトの思ひ出

田中克己

十二年の夏の東京のことでおぼえてゐるのは、小石川の三好達治氏の住ひを訪れたこと

である。どうやら思い出すと故薄井敏夫はその死病になつた結核で、茅ヶ崎の南湖院かに入院してゐて、それを見舞つたのかとも思うが、薄井のレットゲルの訳はつづいてゐるし、

寂しい並木で

大村直子

なんとという寂しい並木だらう
みんな黙って歩いていく
枯葉だけが時々声をたて
遠い海なりのような音がしのんでくる

暗い街路樹にもたれて
妹はやさしい窓を夢みる
赤いまりがひとつ みぞの中に忘れられ
よるべないつめたさが まよっている

その時 ひそかな生き物は
さまよひながらやってきて
自然に妹をいざなっていく
すると熟れた果実の追憶が 静かに
ほのじろい期待へと変容しながら

これを見舞つたのはたしか沼津の病院だつたと思ふので記憶にはない。彼の発病はもつとあとかもしれない。もとよりわたしより年長ながら彼の結婚は全快まで遅れたので、奥さ

妹のかかとを守っていく

丘にのほって

くたびれて
丘にのほった
うたおうとして
うたがなかった

すると空から
風が来て
遠いわが師の
ことを伝えた

野の花を
折って来なさい
それが詩である

それで私は 泣きながら
花ひとつ 摘んで
食べてしまった

んに問うても答は得られないにちがひない。ともかく四季でわたしを一等ひいきにしてくれてゐる(と思つた)三好さんを訪ふことは恥かしがりのわたしにとつてもさうつらくはなかつた。御都合をきいてだつたらうが、関口台町のお宅を訪れると、三好さんは気持ちよくこの後輩を迎へ入れて下さつた。何の話をしたかは忘れたが、庭前というより、庭一杯に大きな銀杏の木があつたのをふしぎがつて眺めたのをおぼえてゐる。一わたり話したあと、三好さんは奥さんのおおさまに当る(と承知してゐた)佐藤春夫先生のところへ案内して下さつた。「コギトの田中君です、詩を書く」といふのが、多分その紹介のことばだつたらう。佐藤先生もにこやかにお迎へ下さつた。この大詩人に初めて会つての感想ははつきりおぼえてゐない。ただ長まり、ほそほそとご挨拶に、先生の「女誠屬綺譚」や「霧社」にひかれて台湾まで参つたことを申し上げ、ついでにかねてから感心してゐたこれらの作品が書かれたのは、先生の御渡台のずるぶんあとなのに、よくおぼえておいででしたね、と先生の御記憶をおほめ申し上げるやうなひ方をすると、先生は御謙遜だつたかも知れぬが「書かうと思つてゐれば忘れないものだよ」と仰せになつた。このおこと

ばはその後も忘れないでゐて、何年かたつて軍属として南方にゆき、兵隊として華北に行つた時、もしも生還すれば書かうと決心し、帰還してから書いてみた。もとより先生のやうな抒情味あふれる小説は書けなかつたが、軍属としてのシンガポール生活(前半)と半年の二等兵生活との記録はほぼ記すことができた。残つてゐるのはスマトラの三か月間と、

夢のなかの

ゼバステイアン

トラークル
平井俊夫訳

カスパール・ハウザーの歌

ベッスィー・エ・ロースのために

真実かれは太陽を愛していた。紫となつて丘をおちた太陽を

森の小径や歌をうたう黒い鳥を

そうして緑の歓喜をかれは愛していた。

森の木蔭でかれは真摯に暮らしていた。

顔はきよらかに澄み

神がかれの心臓にむかつてやさしい炎の言

シンガポール生活の後半であるが、この雑誌がつづけば、そしてわたしの筆が折れなければ書けるかもしれない。先生は後々までわたしにはたいへん口の重い方のやうだつた。わたしはゐたたまれなくなつて、三好さんやながし、早々に引き下つた。しかしこのおかげでわたしは先生の「三千人の弟子」の一人にたしかにしていただけだ。そのことは後に

葉で

おお 人間よ と語つた。

静かに彼の足はたそがれの街をふんでいた。

暗い歎きがかれの口からもれる

ほくは騎手になろうと思つた。

だがかれにはいつも林や獣が

白い人びとの家とほの暗い庭が伴侶だつた。

そうしてかれを狙う殺人者がいた。

春と夏がすぎて この正しい人の秋は美しく

つた。

かれはひっそりと足をはこびつ

夢みる人たちの暗い部屋のかたわらをすぎ

夜 かれの星とふたりつきりていた。

たびたび証拠がある。それは後にまはして、三好さんは別れぎはに軽井沢へこ一緒することを約束された。四季の同人と会員とで、上野駅に集まつて、まづ追分にゐる堀辰雄さんを訪ねて、その泊つてゐる油屋にゆく。ここには部屋が予約してあるはずだといふのである。この二泊三日の旅行はわたしにとつてたいへんありがたく

雪が枯枝にふりつも

かすかに明るむ戸口に殺人者の影がうごめ

のをみた。

銀が閃いてこの生まれなかつた者の首がお

ちた。

孤独者の秋

呪われた人びと

1

夕闇が近づく。老婆らが泉へ出かけてゆく。

栗並木の暗がりて赤い笑いがあがる。

店先からはパンの匂いがただよい

ひまわりが垣根ごしにたおれかかる。

川べりの居酒屋はいまもけだるい音をひび

かせ

ギターが唸る。ちゃらちゃらと貨幣が鳴

る。

ガラス戸のままで白くしおらしく待ってい

るあの娘に

聖い光がふりかかっている。

おお ガラス戸にかの女のうつす青い光は

うっとりからみあつた黒い茨にかこまれて

いる。

気がふれたように背むしの書記がひとり

粗野な騒ぎにおどろく川面にうす笑いをお

とす。

2

夕暮 かの中の青い衣裳のすそに毒がにじ

み

暗い客が来てそと部屋の扉をときす。

楓の黒い葉がふりはらわれて窓に舞いこん

でくる。

少年はかの女の手を顔をうすめ

かの女はいくとも邪悪な重い臉を伏せる。少年の両手はかの女の髪をまさぐり流れて

涙は熱くきらきらとあふれ

かの女の黒いうつろな眼の窪にそそぎ込む。

緋色の蛇の巢がかの女の揺られた胎のなかで

力なく起きあがる。

やがて息絶えて両腕にもぎはなされ

敷物のへりをかなしみで隈どってゆく。

3

褐色の庭に鐘の音がひびいている。

栗並木の暗がりにただよう青

未知なる女のやさしいマントよ。

木犀草が匂い おお 身を灼く悪の心。

じっとり濡れた頬は蒼く冷えて

鼠がうごめく芥溜のなかにくすおれる。

生ぬるく星たちの緋色の光が注ぎかかる。

庭のりんごがにぶく音たてて落ちた。

黒い夜。山越えのむし暑い季節風が

夢遊する少年の白いねまきを亡霊のようにな

びかせ

静かに死者の手がかれの口へはいつてゆく。

ソーニャがやさしく美しくほおえんでいる。

ソーニャ

夕暮が古い庭にかえってくる。

ソーニャの生きる 青い静寂よ。

野の鳥はさすらいの旅に去り

秋のしじまのなかで枯れる木立。

ひまわりが優しくうつむいている

ソーニャの白いいのちのうえに。

赤い 見えない傷にすがりながら

暗い部屋で生きついでいる。

青い鐘が部屋のなかにひびく。

ソーニャの歩む 優しい静寂よ。

臨終のけものは訣れをつけて去り

秋のしじまのなかで枯れる木立。

きょうも変らず太陽がかがやいている

ソーニャの白い眉のうえに。

雪 ソーニャの頬にぬれ

荒れはた眉にふりつんでいる。

思へた。「萱草に寄せて」といふソネット集を最近出した堀さんの愛弟子立原道造君はゐるといふし、津村・神保など同年輩の同人諸君もゐるらしい。同人とは名ばかりで、この年、文部省留学生としてパリに赴かれた桑原武夫氏以外は、萩原朔太郎先生に前年六月御下阪の折の歓迎会で小高根二郎氏から紹介されただけ（先生はこの紹介に対していやな顔をして軽く会釈なさつただけであつた）のわたしにとつては、東京では同人や読者の会がすでに三回も開かれてゐるのに、一度も出られなかつた田舎者として、この会への招きがうれしく思へたのも当然であらう。

黄いろい絹や紗（わたしは和服の地について全然知識がない）の着物姿でもう来ておいでだつた。わたしがゆくとうれしきうな顔をして、「十人位来るかな」との話だつた。しかし時刻になつても誰も来ない。わたしは期待を半分ほど裏切られて三好さんとただ二人信越線に乗り込んだ。線路は埼玉県から群馬県に入る。三好さんはわたしに「きみ萩原さんの詩をどう思ふ」と訊ねられた。わたしは正直者なので「読んだことがない」とお答へした。三好さんは目を丸くして「朔太郎を読まないで詩を書き出した人間がゐるのか、ふんゐるのか」と二回くり返していふほど驚いたが、やがて高崎から榛名・赤城の見えるあたりからは、坐席によこになつて眠つてし

まはれた。このことは「上州展望」といふわたしの詩になつてゐるが、三好さんのおどろきは詩には書かなかつた。

楨貞介の断章（八）

青木敬磨

冬と夏と変りなかつた。狐色の枯草の上を私達は子犬のようにころび、ほんとの子犬も交つて遊び呆けた。邪魔になる茨のくさむらはわけもなく焼きはらつた。偶々北風の強い午後、その火は枯草に飛火してひろがり、子供らは胸をたぎらせ、顔の汗に草灰をこすりつけて消して走つた。私達の行動は川原に面した凡ての家から眺められ、かくして一団の

未知

美堂正義

突然砂地にささやかな河が生まれ
それらが相集り
一筋の大河となつたり
砂漠に吸ひ込まれていつしか消える
河筋も定めなくて
気まぐれに流れを変える

中国の西辺境新彊・青海・蒙古の砂漠地帯に原因不明な自然の営みが毎日やうに繰返へされてゐる

シルクロードは人煙不毛の地を草土と砂漠と礫土を雜ひながら中国から中央亞細亞を経てトルコへと古から東からは絹西からは金・銀・寶石・玻璃と共に仏教・回教やキリスト教や文化が東漸した

が その道は遠く瘴癘に悩み盗賊にもまた多くの血を流したが駱駝の脊にはたかの知れた物資である

西戎と呼ばれる異民族が住んでゐたが雜多な民族は互に相争ひ憎しみあひながら世界の秘境で生きて来た漢族でもなければ東洋人の種族でもない

瞳はその土地を覆つてゐる空よりも青く
馬乳の醗酵酒を呑み
獸脂を燃して灯として
海であつた地の上に生活してゐた

中国の王室は
辺境の民族との侵入や戦ひに興亡を賭け
天山の麓まで兵を進めたこともあつたし
また 塞外民族は揚子江を渡り
王室を亡ぼして建国した
秦の古から現在まで
互に角逐し 文化を吸収し
影響しあひながら進歩したが
漢族のほうがより強く受け
心服させて永く占領はできなかつた
異民族間の心の通ひは
言葉の相違と同じく困難であつた

一四九七年ヴァスコ・ダ・ガマは大西洋から

喜望峯を廻つて印度洋へ出た
アラビア人に独占された東方への海上権は
アルメダがサラセン人と戦つて勝ち
遂に西歐人へと渡つた
殖民地が亞細亞にでき
香料・インヂゴ・絹を求めて渡来が繁くなり
苦しい陸上の旅は終りを告げて
シルクロードは人々の頭から忘れられた

中国や中近東諸国からの貿易物資をめぐつて
地中海や大西洋に海賊が往行し
海上権の争奪が起り
交通路の覇権は國家の隆盛につながつて
海賊の首領をも國家が表賞した
殖民地は拡大され 占領され
未開地へと触手は拡げられて
産業の発達から資本主義に移行した
十字軍の戦ひや黒人の売買も
また原因の一端がそこにある

駱駝から自動車や飛行機へと陸行は昔の比ではない埋没した文化財は探検されたが文字の一部のみ解説されたまま西域の歴史は依然として謎であり現在は國家が大きな障害となつて世界史のアウト・サイドをなしてゐる

地上にふとわいた水の一滴が一筋の流れとなり 河となりまた砂漠に吸ひ込まれてしまふひとの知らないうちでも自然は運行し一つの法則に従がつてめぐつてゐる見捨てられたものが脚光を浴び新らしく驚異を持つて迎へられるが未知なるものが解明されるのはいつの日にか来る

百年河清を待つは中国の諺言であるが

成員は次第に増し、小学一年生から中学生、大学の保養休生にまで及んだ。焼け残つた河原のまん中で奇妙な一団が円座を組み、わけもわからぬ笑話に興じ、或は放歌合唱した。併し私はいつか、星のきれいな夜、ひと

り離れて草蔭にころぶし、何ごとか涙ぐむことがあつた。みんな、この睦まじき一団がゆくゆく離ればなれとなり、それからどうなつて行くのか。既にジャバへ飛んだ先輩もあつた。兵学校に入った者もあり、次の春には、

ハルビンの日露協会学校に入ると報告した友もある。しかしどこへ行つたとて地球の上ではないか。その光が届くにさえ何万年を要するものもあるという星の世界から、我等蟻のごとき存在は何と見えることであらう。生ま

れて死んで、それからどうなるのか。――昼間遊び疲れた妄念であろうか。しかし、私は時々ひとりぼっちの場所を願ひ、答えられぬ問をくり返しては涙をこぼすような時間が次第に多くなつた。

……亡き父の背丈よりも伸びた、と云つて見上げる母の小さい眼には、長い間かくれていた歎びと共に、全く別種な監視の眼があった。歎びと悲しみが共棲していた。これまでに育てあげた子が、生長と同時にその手から逃げ出してしまふ事を、既に母は知っていた。母と子と二人、天地に二人しかないという事は、実には和解の途なき闘争に似ていた。私は或年頃から後ただ母を通じている間だけ幸福であった。母の気持はみじめであり、それに行き当ることは尚更にみじめであった。

母は私の学校が進むことにその土地その土地へついて廻つた。

先輩の心づくしでやつと見つかった室町の裏屋に落つき、汚れない行平とかん詰と真白い二つの茶碗とをたみにおいて、母と二人向きあつて坐る。二間つづきの薄暗い部屋の中に何にもない。上り框に駅から着いたばかりの蒲団の菰包みがごろがっている。京の

町のまん中の怪しいまでに空しき真昼の静けさである。屋根と屋根と重なりあうあわさに下枝をきりこまれた櫓が一本悄然とつ立つている。死におくられた蟬が一しきりないて消えたあとへ、赤蜻蛉が迷いこんでくる。八つ手と來竹桃の茂りが主家との間を区切り、その葉がじつと動かず、残暑の光線をうけて蒼黒く光る。崩れかかった土塀のかけにはおもとがまっ赤な眼を見開いている。

「こうもりでも出そうな天井」
そう云つて母は仰むく。母はかすかに笑うのであるが、それは黙つていれば息がつまるような寂しさからで、併し、物云えは尚めいる空気である。眼には見えぬ深い底で渦が巻き、いつどんなところへ爆発するかもしれぬ気持悪さであった。

御所の広庭には朝霧が下り、赤松が幹が遠近をすかして並んでいた。行きかう男女の学生達が花のように小鳥に群れ歩く中を私はひとりうつつむいて急ぎ抜ける。葵橋、高野橋、古びた田中の一本街、清風荘の建仁寺垣、美術学校の松並木、そしてその次が二本松の下の私達の学校だった。青塗りのベンキははげられるだけはおち、五十年の間朴歯の下駄に傷めつけられた廊下の板が節目だっている。ここに天下の秀才達はあきれられるほど稚な

小久保実著

堀辰雄論

東京都世田谷区代田四ノ三ノ二

麦書房

く、唯小さい動物のように来る日来る日を楽しんでゐる。十分の休に日蔭の青草にねころんだら、傍へ来て恥しそに言葉かけたのは、横隣の机に坐る新という少年であつた。蒼白い顔をして、咽の奥の方でものをいっている。彼はむりやりに柔道部へ入れられたことを話し、それが重荷で、からだがかたくなつてしまつたと泣くように訴える。小さいからだに無理なことはわかり切つてゐるが、何故そんなむりを続けるのか、私にはわからなかつた。果して半年もせぬ間にチブスをわすらい、どうにか回復して、さしせまつた学年試験のために私の部屋に寝泊りし、試験だけは通つたものの、又柔道部に引きこまれ、やがて再発して死んでしまつた。鳥取から一人よりない母親が上京して、私の家も母一人子一人でした、と泣き、遺骨をかかえて帰つて行つた。

前の机の秋山は、殆んど私よりも背が高く、大きな腹で肩をゆりながら歩いた。併し声は女のようにやさしく、前歯の銀がそっくりその顔に似合つた。病院でした新のお通夜から

老年

浅田 二三男

わたしのは
かびくさい古土蔵の
片すみでみつけた
丸いおちよほ口の焼もの
妻のは
町の薬局で買った
目盛りつきのガラス製
どちらも
めつたなことに
たたみの上へ
粗相などないよう
ほどよい取手の傾き具合
おなじ用途の
これら二つの置物が
枕もとのスタンドあかりの

帰る途々、僕は印哲をやります、と云い、この世の生きたものには何の興味もわきませんと、微笑した。新の死んだあとは私の教室で誰秋山だけが話相手であり、彼に向うとき

光のとどきかねる暗がりである夜など
松松がとまつて
しばらくないた
夜ふけなど
妻のガラスの
何ともかとも味気ない音にくらべ
私のは
じつにやわらかいひびきを発し
まるで
溪川のせせらぎのようでもある
享保のころ
先祖の誰右エ門さんが
病床で使つていたと
割引して考えても
いまさら手ばなすこともできやしない
乳白色のうわぐすりのたっぷりかかった
これはたぶん信楽焼だ

私の内の狂暴な火は雪山を行く如く静まつた。伏眼がちな瞳の前に私は安々と横たわり、この年長者のもの静かな説法を聞き、時にはそのまま寝入ってしまう。吉田山の東麓の樹立の多い彼の下宿は私の唯一の慰安所であり、しとやかな女主人に香り高いコーヒーを頂いて、ともかく胸を撫で下ろす心でお宮の前の坂道を越えた。私達は夏の休暇に彼の故郷なる四国を訪ひ、彼が楽しんで語る朗らかな弟妹達と遊ぶ約束までとり交してゐたのに、夏の初め、わずか十日にも足りぬ思いで、秋山までが新のあとを追つてしまつた。

やがて殆んど母には無断のまま、寮に入り、仏法のピアニストに小唄を教わり、眼と眼の間に溜のついた信濃の男から猥談をきいた。その間々には図書室にとじこもつた。ある名月の夜、見知らぬ先輩に誘われて琵琶湖に行き、知らぬまにボート部に入れられていた。この弾猛野蠻な運動が私からだに似合ふぬことは承知しながら、精も根もしほりつくす猛練習は却つて暴々しい精神に打つてつけの鎮静剤となり、私は憑かれたように毎日バック台のぼつた。そこには自らの身心をやつつけることのほか何の目的もない。更に有り難いことに、ここには付物の酒乱がある。私は生まれて初めて味う琥珀色の液体

絶版 福地邦樹詩集 果樹園社 ¥300	田中克己 漢詩大系 白楽天 集英社 ¥1200	浅野 晃 天と海 英靈に捧げる七十二章 翼書院 ¥870	吉本青司 標的 金高堂 ¥500	小高根二郎 詩人、その生涯と運命 新潮社 ¥2400	森 亮 東洋文庫 白居易詩鈔 平凡社 ¥300
-------------------------------------	--	--	----------------------------------	--	--

を、唯先輩の命じるままに、湯豆腐の空鍋に受けて一気にのみ干した。私は唯自分のことを忘れてしまえ出来ればよかった。従って仕合には負けた。秋深き夕闇よ、負けたポイントの上で泣いていると、傍で号泣していたのが大木だった。知らぬ間に二人は肩を組み泣きじやくりながら、湖上の夜霧にゆらくかり火を見入った――

編集後記

十一月五日。「文学」十一月号に大岡信氏が「伊東静雄と三好達治」について論じていた。もともと大岡氏が伊東に関心や興味を寄せようなどとは想って見たこともなかったで、それを望外の喜びとするが、やはり東京の伊東観の根強い一面を示していると思つた。かつて北川冬彦氏も、伊東の初期作品の直訳的なまじりから起論して、「わがひとに与ふる哀歌」冒頭の「暗れた日に」の欠点を衝くことからは起筆しているから妙である。(もともと「暗れた日に」異常な誤謬を遂げた法政の竹内豊治氏のような例外もあるが……)もしも関西の評者が伊東を論ずるとすると、欠点から起筆せずに、長所から立論することになろうと思う。褒めるのも、くすすめ、それを前からしなうと、後からしなうが結論は同じようであるが、読者に与える印象は決して同じようには思われぬ。前号の後記で触れたが、伊東や蓮田の古本の評価が高いのは、一二の評者のあげつらいによるのではなく、一般読者のさかな購読意欲――つまり需要がしからしめたのであるから、もしも評者が後世から見かえされることを望まないなら、この相場の傾向をもつと率直に認める必要があらう。世代ぐらひはだましても、時代は絶対になましておせるものではないからである。

十一月八日。会員石川勝之氏から、伊東の散文詩「新の明り」八冬になるとよく思い出す詩がある。誰の作か忘れ

果樹園 一一九号 昭和四十一年一月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園 第一一九号 (毎月一回一日発行)
昭和四十一年一月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集者 **小高根二郎**
大坂市東住吉区桑津町五の八
印刷所 **元市印刷株式会社**
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 **果樹園社**
定価 **四十円** 送料 **十円**

果樹園

第120号

蓮田善明とその死	小高根二郎	ヘリック詩抄	森 亮
風の日のうた	大村直子	コギトの思ひ出	田中克己
反問	吉本青司	場物語	今井茂雄
トラークル詩抄	平井俊夫	詩想	山根忠雄
		雪	下田和子
		楨貞介の断章	青木敬磨
		書簡	伊東静雄

果樹園 一一〇号 昭和四十二年二月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

蓮田善明とその死(三)

小高根二郎

昭和十五年の歳晩、無事熊本は植木町の故郷へ生還した蓮田に、さっそく堺の栗山理一氏から祝状が舞い込んでいたが、それを追って東京の清水文雄氏からも、次の祝歌がとどいた。

昭和十五年十二月二十三日

「浄らけき大和の国のまなかひに見ゆとふ
君が眼ざしのみゆ
朝あけの瀬戸の島根にこだまして兵船

の汽笛鳴りいづ
いついつと待ちにし人の帰り来し大和の
国はたゞに明るし

この清水氏の祝歌がとどいた二日後、池田勉氏の次の祝状が舞い込んだのである。

昭和十五年十二月二十五日

「武歟蘇々たる御凱旋を祝し奉る
こんな電文を打たうと思つたのだがこの今の、君の凱旋の報を受けたときの大きな喜びは、こんな簡単な言葉では言ひ表はせぬ。君の奥さんや、子供さん達がどんなに悦んでおられることだらう。想ふに余るが、

その次に喜んでゐるのが、僕たちだと思つてくれ給へ。

三ヶ年に余る征戦の労苦、まことに御苦勞でした。戦つてくれている君のことを想ふことによつて、僕は皇軍の将士の身の上をしのび、君の戦によつて日本の戦ひを感じ続けてきた。今や君の凱旋の報を受けて、僕の心の中は何処か温く和むのを覚える。そして嬉しい。僕の会ふ人毎に君の凱旋を告げて廻ることで、このうれしさを人とともに表現しようとしてゐるらしかつた。もう大丈夫だ、と云つた気がする。君の身を誰かが守りおほせてくれた、感謝したい。大きなめぐみに生かされて命あるものが相会ふといふ神わざを、僕は今しみじみと感じてゐる。芭蕉にもそんな句があつたね。

戦は君の精神を高邁に鍛へあげた。国内にゐた懦弱の僕は、来春君とあふのが何だか一寸コワイみたいな気持だ。
しかし君が帰つてくれてうれしい。この前君が帰つてきた時の楽しいプランなど書いて送つたが、あの願望がはやくも叶へられる時が来たのだ。僕らの仕事も頑張られる。君帰りが百万の味方を得たるが如しだ。いや首將が帰つてきたのだ。唐国を討ちに行つてゐた神様が帰つてきたのだ。

久しぶりの故郷のお正月だね。ゆつくりと命ある喜びを感じてくれ給へ。

今日、清水・高藤氏と会し君の凱旋を祝して一ぱいやつた。一月号も出来上つた。日本一の誌を自讃してゐる。

これから僕も新年を迎へに故郷へ帰る。五月ぶりに家族の顔を見に帰るのだ。故郷は兵庫東多可郡中町安楽田といふ山家の春だ。

君はいつ頃上京してこられるだらうか。

蓮田兄 池田 勉

この池田氏の書簡で、「国内にゐた情弱の僕は、来春君とあふのが何だか一寸コワイみたいな気持だ」と書いている点は、偶然……分裂症状で悩む蓮田の恐ろしい心情の変化を予見している。しかし、「久しぶりの故郷のお正月だね、ゆつくりと命ある喜びを感じてくれ」は、蓮田の拮据した苦しい心情とはさすがに縁遠いようである。

「文芸文化」同人ではないが、同人なみに親しく遇せられた伊東静雄も、同日次のような祝状を送っている。

昭和二十五年十二月二十五日

堺市北三国ヶ丘町四〇伊東静雄より、熊本県鹿本郡植木町蓮田善明宛はがき

「御無事御帰還の由、長い間の戦地の御生活で、さぞお疲れのことでありませう、御大事に願ひます。御上京の折は一度お顔みせて下さい。つもるお話おうかがひし、又お話もしたく、楽しみにしてをります。」

「無事御帰還の由」とあるから、栗山氏から連絡を受けたのだらう。蓮田の出征を大阪駅頭に見送ったときと同じく、上京の途次また栗山氏と一緒に会おう心づもりをしているのである。

この日北京にある斎藤清衛先生も次の祝状を蓮田に送っておられる。

昭和十五年十二月二十五日

北京市王府大街七四黎明荘斎藤清衛より、熊本県鹿本郡植木町蓮田善明宛封書

「字品よりの御便り昨日落手しました。何んな感懐がするか一寸想像も致しかねます。上海からの便りを頂いた時、他人事でない小生の歡びは一寸表はしかねるほどでした。六師団宛に祝意の小信を送つておいたが御覧下さつたこと、存じます。奥様や坊つちやん方とは久しぶりの御対面であ

り、ゆつくり清養して東京に御出発しなさい。清水君池田君何れも首を長くして待つてゐませう。幸ひ、小生も一月廿日頃には東京に参ります。日本見学団三十名の団長を命ぜられてゐるが、多分団員の学生より二三日早く東京に帰ることとなりませう。旅行団は廿七日夜着京、一週間滞在の予定です。

一郎の疾患は快方に向つてゐるとはき、ますが、大事をとるに越したことが無いので、暫く静養させること、しました。御会ひ下さつたら自粛の様激励して下さい。御言葉の様、国文学界もある峠に差懸つた観が無いでもありません。やはり、史学や哲学やのやう、人件が無いといふことを痛感します。

現文壇人も手をのべ、社会一般も求めてゐるのに、彼等を満足さす学者が出てこないことはシンガイに堪へません。是非御自重あつて御活躍のこと遙に期待してゐます。

御新著「預言」ももう組上つてゐるので無いですが、何れ東京に於て大いに歓迎の集ひを致しませう。

十二月廿五日 斎藤清衛
蓮田善明君

この書簡によると、蓮田は上海からすでに北京なる先生に、帰還の途上にある由を便りし、字品上陸後あらためて日本帰還を電報で報告したものと想われる。先生は帰還後の蓮田が、昏迷している国文学界のため、文学界のため、縦横無礙の活躍をすることを期待しておられる。先生は半月後に約束のように北京から帰朝されるが、その時蓮田宛に出され

た書簡と照応するために、特にこの書簡を記憶に留めおかれたい。

この「文芸文化」の同志の祝福の便りを蓮田は久しぶりの田舎の家郷で貰つたが、分裂した蓮田の心境の亀裂は癒しえなかつたようである。又、渴仰という思いで彼を迎えた敏子夫人をはじめ、含羞から解きはぐされてお

風の日のうた

大村直子

風の強い川ぞいの道を
私たちは手をつないで走っていった
最後の花は吹き落されたけれど
ポケットには もう たくさんの種があつた

風は光る馬に傘をひかせて
次々に川の面をたがやしていった
私たちは水のそばによろうと
橋のたもと船着場におりていった
そこで川はふくらんで とても豊かに見え

たので
私たちは幾度も 水の上に種を播いた
いつか時が満ちたなら 遠い岸辺に咲くように

そうして高い橋の上から
不思議に私たちは愛でられていた
けれど ふと目をあげた時 そこには誰もいなかった

灰いろの窓から

この窓は私には重すぎて上げられない
またその必要もない（今は五月ではなく）
外は一面に都会のうそ寒い霧であるから

ずおす近寄ってくる晶一、太二君、力強すぎる抱擁に吃驚して泣きだした新夫ちゃん等の、家をあげての歓迎も、右腕の貫通銃創あとのひきつりや、陣地の穴居生活で悪化していた坐骨神経痛の疼きを、忘れさすこととはできなかつたようである。

「何か心の中で愚図つくものがあつて、一日延しに延して一月近くも家に引込んでゐる

まだ昼すぎなのに 水銀灯がともりはじめ
枝に残った根杏を つついては落し
つついては落ししていた二羽のコガラも
もうずっと遠くの木にわたっていつてしまつた

そしてむこうの工事場の高い鉄骨からは
時折蒼白の火花がすべり落ち……..
ああ また空がせまくなる

あなたよ 早く来て
窓を上げてください

その時五月はあらわになつて
小さい鳥をよびもどし
無限に空を奪い返すであらう

た。それは家の外に対する対決よりも家の内に、すぐ身近に、いや、自分の分身たちとしての家族、更に言ひ換へるならば結局又自分に帰ってくるのであつたが、さてさう身近な肉身たちに対すると、どう対決のしやうもなく、それかとて家庭に甘えきりも出来ず、又自分の斯う離れ過ぎた心をどう取り戻していいか、或は鴨長明が三十歳にしてまだ出離ではなかつたが別に小庵を営んでそこに住むといふことまでせずなられなかつたその厳しさが自分にも課せられるべきか、若しさうとすれば——、この銃後の生活のきびしい意味を益々生やさしいものでないと思ふのであつた。しかしこれは単に自分の意志や実行力不足の問題であらうか。

かういふ中で、何かまだ探らうとするかのやうに、「平家物語」を読みかけたりしてゐた。時代が決する、と思ふのであつた。しかし自分一人が一人でこんな苦しみであるためにか、も一つの言葉を以てさりげなく、寧ろ昔と違つたやさしさで家族を愛撫し、時々戦地で馴れた気軽さで妻の仕事を一部を手伝つてやつたり、子供の遊び相手になつてやつたりしているのに、妻は敏感に「何だか怖い」と口に出して言ふこと

があり、子供が、自分が帰つて以来何度か夜中に怖えたりするのまで、はたと胸に当る気持がした。」(有也)

つまり蓮田は、台湾や、中国の大橋嶺や晏家大山においてきた自分の分身だけでなしに、敏子さん・晶一君・太二君・新夫ちゃんにさえ、分身を感じているようである。「自分の分身たちとしての家族」。「家族であるがゆえの分身」。それを意識しだしているのである。家族としての一体感ではなしに分離感、なんといふことのないそらそらしさが、びん！ときたのである。「自分」であるべきはずの妻や愛子に、しらしらしい「他人」を感じだしているのである。

蓮田はこの分身たちに、真ッ向から対決しようと思つて、長明が出家の前提として試みた別居のような逃避を、頭の中に意図してしているのである。そういえば、蓮田は結婚生活十二年間のうち、広島文理大時代の三年と応召二年の計五年間の長年月、別居を余儀なくされた事実を思い出さなければならぬ。いわば同棲と同じぐらい別居が常態だったのである。この常態としての別居感から、素直に出家の前提としての別居の構想が、頭に浮び上つたのかもしれない。彼が「平家物語」などを読みかけたりしているのも、「諸

行無常」の響きを強いて喚起することによつて、別居の正当性を、情緒として自分になつとくさすための、てだての一つであつたのだらう。

しかし、この蓮田の冷徹な覚悟をゆさぶる「もう一つの言葉」があつた。それは人並みな人情だ。長い物には巻かれよ……という諦念だ。二年余の歲月、女手一つで三人の子供の養育に明け暮れたいじらしい妻をいたわつてやれ！父性愛に飢えている子供達を可愛いがつてやれ！それが久々に家に帰ってきた父親の務めであり、本分というもんだ。そう……尋常な人情が、ひそひそと蓮田に囁きかけたのだ。

蓮田は野戦生活で体得した日常的な身軽さで、敏子夫人の仕事の一部を手伝つた。ホウキは持たずとも、ハタキぐらゐは手に取つたらう。チャブ台の上の用済みの茶碗に、汁椀を重ねるぐらゐの手助けはしたかもしれない。そうした、今までに敏子夫人が見たこともなかつた蓮田の日常的な常識性が、とつてつめたやうに無気味に感じられて、「なんだかお父さん怖い……」という印象を、母子に与えたのだつた。

蓮田の行く先は、阿蘇五岳の一つである鳥

帽子岳(二三三七M)の中腹にある、標高六六七メートルの垂玉温泉であつた。泉質が神経痛やリウマチに特に効く由を、敏子夫人がどこかで聞いてきて、蓮田にすゝめたのだらう。いでたちは灰色のソフトに黒のトンビ

反問

吉本青司

たのしい旅をつづけてサチコの遺影がふるさとの駅に帰ってきた
遺影をだいた少女の鞆のなかには
サチコの母へのみやげもはいつていた
人員の点呼をおわり
引率の先生が出迎えるの父母に挨拶をしてい
るとき

思いがけないしらせがあつた
むすめを迎えにこようとしたサチコの母が
駅にむかう車中でたおれ
近くの病院で死んだというのだ
家路にいそぐ級友たちには わざと
知らされなかつたけれども
テレビや新聞はこのことを報じた

であつた。背広やオーバーは応召の時以来、東京に預けたまゝになつていたからだ。
「父ちゃん。そんなで行くの……」
と、小学生の晶一君(「有心」では幹ちゃん)が、からかい混りの非難をした。
むすめが修学旅行から帰るので
迎えにゆくのだというその客の話を
よくきいてみると
むすめは運動会の練習中死んでいて
帰ってくるのはその遺影だという
△どうぞ気を落さないで
元気に生きてください△と激励したとたん
気持がわるいといつて座席にたおれた
——そのときの運転手の談話である

あるひとは この母の死を
むすめのためしいが呼んだのだといひ
汽車の到着時間に遅れるからと
走つて出たのがいけなかつたのだといひ
親子とも心臓が弱かつたのだともいひ
どれも間違つてはいまい
しかしほくはその母の悲嘆を想つて
せつなく胸がいたかつた
早逝したサチコのいのちを惜しみつづけた

「いいんですよ。山ですから……」
と、敏子夫人は蓮田に代つて辯解した。蓮田はその夫人の言葉をすかさずひき取つて、「そうだ。隠遁にはまさに恰好ないでたちさ……」
と、自分に言いかけさせていたようである。
ひとりの母の愛の強さと
そしてそのもろさと……

あとから聞いたことだが、その母は
死ぬすこしまえ近所のひとに話したといひ
ゆうべサチコが夢にでて
△おかあさん あとが困らないよう
準備をしておきなさい
早くしておかないと間にあわないから△
せつかな死の声である
散りいそいだサチコのためしいが
しつように母のいのちを求めたのだ
△早くしておかないと……△

△いったい何をしておけというのか？△
との反問が 人生に
いろんないろんな明暗を生む
——翌日 級友たちは死者の前に
ささやかな旅のみやげものをそなえた

蓮田はその心境を、

「自分は隠遁するのだと言へば足りた、しかしさういふ説明ではどうにもならなくなつてゐる自分を知つてゐたので、斯うやつて出て行くといふことでしか妻にも語れなかつた。」(有心)

と、書いている。

蓮田は植木町から熊本までバスで出た。彼は見送つて出た夫人に別れて車中の人になると、「一人になつたという安らかさと、もの

孤独者の秋

トラークル
平井俊夫訳

周辺にいて

穀物と葡萄の採りいれの時もすぎて

秋の村は静かに休んでいる。

鐘音がおやみなく鉄床をひびかせ

案のあずまやで人びとの笑い声がする。

暗いまがきに咲いた紫苑を

この白い童のもとにたむけたまえ。

わたしが死んで幾年をへたろう。

を言はずに居れる気軽い愉しさを覚えて、立ちながらバスの外を後ろへ走るものをすかし

見つつ、何かきよろ／＼して目で迎へ目を送りしてゐたのである。筆者も数年前：植木町を訪れたさい、敏子未亡人にバス乗り場まで見送られて熊本行のその道を走つたが、遙か東北方の雲際に、噴煙をなびかす阿蘇を車窓で眺めやったことを、まざまざと思ひ出す。その日の蓮田が尋常であれば、バスの前後に現滅する利那の光景に眼をやらずに、噴煙を

黒い太陽がのほつてこようとしている。

池には小さな赤い魚が泳ぎ

つと映る顔に心ふるえて

窓辺に夕風がささやいてゆく。

たえまない青いオルガンの調べよ。

しめやかに瞬く星にいざなわれつつ

一度 いまいちど空を仰いでみれば

苦しくおそろしくも母の幻がうかぶ。

黒い木犀草が闇で匂っている。

孤独者の秋

なびかす山稜の：何処が垂玉か？ と、目標をま探つたに相違ない。
終点の花畑でバスを降ると、豊肥本線の汽車に乗るために、今度は水前寺駅行の市電に乗り換えねばならない。蓮田は市電の乗り場に向けて歩みだすと、先ほどバスで感じた「安らかさ」「気安さ」と打つて変つて、「身も世もない孤独の寂しさ」で胸がキリキリと締めあげられるのを感じた。この苦痛から逃がれるために、彼は通町に本屋を探してあわ

実りと充溢をたたえて暗い秋が訪れてくる。

美しい夏の日々は黄ばんだ輝きをのこしてこわれた雲の覆いからは清らかな青があらわれる。

鳥の飛翔が古い昔語りにつつまれて響きわたつてゆく。

葡萄しほりもすみ 和やかな静けさのなかには

暗い問のほのかな答えがあふれている。

荒れた丘のあなたに十字架がたた

ずみ

赤い森のなかを群なす獣の姿が薄れてゆく。

雲は池の鏡をこえてさすらい

農夫のしずかな仕草にも安らぎがみえる。

優しくそがれの青い翼が
枯れ葉の屋根や黒い地面をつつんでゆく。

疲れた者の眉にはいつしか星の光が宿り

しずかなつつましさが冷たい部屋に訪れて

くる。

苦しみを少しく和んだ恋人らの青い眼から

しずかに天使らの姿があらわれる。

葦の穂がさわぐ。死の怖れがおそい

黒い露が枯れた柳の枝からしたたつてくる。

秋の魂

狩人の呼び声。血に吹えたける声。

十字架と褐色の丘のむこうで

ふと 池の鏡が曇つてゆく。

かたく 鋭く 蒼鷹が叫ぶ。

刈り後の田や小径のうえには

もう黒い沈黙がおびえている。

枝のはざままで冴えかえる空。

しずかに小川のせせらぎばかり。

魚も獣もいつしか消えてしまふ。

青い魂になり さすらいは暗く
わたしらはやがて愛するものらに訣れた。
夕暮は意味とかたちをかえる。

まことの生命のパンと葡萄酒

神よ あなたの優しい御手のなかに

人間は暗い最後をおゆだねします

また すべての罪過と赤い痛みを。

アフラ

褐色の髪の娘。祈りとアーメンの声が

たそがれの冷気をしずかに暮れさせてゆく。

アフラの赤いほおえみがひまわりに黄いろく

縁どられて

不安と灰色の息苦しさにつつまれている。

昔 僧は青いマントをはおったかの女の

敬虔な絵姿を教会の窓のなかに見た。

かの女の星運が魔のようにかれの血にさわぐ

ときも

苦しみのなかでそれは友になつてくれる。

秋の没落のとき。にわたこの沈黙。

雪が窓辺に降りつみ

入相の鐘がながく響くころには

多くの人びとの晚餐がととのい

家のなかには心地よくしつらえられている。

いくたりもの旅の人らが

暗い小径を戸口へ訪ねてくる。

み恵みの樹が金いろにかがやいている

大地の冷たい液にうるおされて。

さすらい人が静かに歩み入ると

苦しみが敷居を石にかえてしまふ。

けれどときよらかな明るさのなかで

パンと葡萄酒が卓上に光っている。

冬の夕べ

雪が窓辺に降りつみ

入相の鐘がながく響くころには

多くの人びとの晚餐がととのい

家のなかには心地よくしつらえられている。

いくたりもの旅の人らが

暗い小径を戸口へ訪ねてくる。

み恵みの樹が金いろにかがやいている

大地の冷たい液にうるおされて。

さすらい人が静かに歩み入ると

苦しみが敷居を石にかえてしまふ。

けれどときよらかな明るさのなかで

パンと葡萄酒が卓上に光っている。

て、跳び込んだ。書棚に眼をさらしている
と、喘ぐような苦痛が、いくぶんやわらぐよう
に感じられた。この衝動はすでに上海で経験
済みであった。ラスコニコフの苦悶を喰っ
て映画館を跳びだした彼は、今度は慟哭の：
いや、泣きじやっくりの衝動に雁字がらめ
にされて、避難場所のように本屋に跳び込ん
だのだ。そして「方丈記」を求めると、
まるで苦痛から遁がれるための呪文のように
読みだしていた。あれである。あの衝動であ
る。蓮田は書棚から呪文を撰りだしているの
である。岩波文庫「平家物語」。ついで弘文
堂世界文庫・リルケ「ロダン」(石中象治訳)。
それに創元選書・金剛巖著「能と能面」が加
えられた。

先ず「平家物語」を撰んだのは、なんと
し「方丈記」に関連するものがあるという思
いから、家で大型の本で読んでいたのだが、
読みつぐために改めて携行版を購ったのであ
った。

次で「ロダン」を撰んだわけは、やはり鴨
長明に関連があるという思いからであった。
つまり長明の隠棲閑居は、「頹廃し果てた形
式の穢はしさ、不純さに対してこの上ない潔
癖を以て厳しく拒絶の姿勢を示しながら、そ
れは清らかな純粋な形式を想ひ描かうとする

詩人のとったその時代の最も高い技術」であ
って、その純粋な形式―最高の技術は、リル
ケが分析解明したロダンの造型の秘密に通じ
るものがあるに相違ない……という直感を、
蓮田は口絵のロダンの彫刻写真からしたから
である。

最後に「能と能面」を撰んだのは、前述し
た長明の処世の純粋な形式の延長線は、結局
能面のような形式に結ぶのではあるまいかと
いう偶感を、これまた口絵の古面の写真から
抱いたからであった。

この鴨長明の隠棲閑居に、中世の日の最高
の技術と純粋性―つまり文化を感応すると
いう蓮田の説は、奇しくも唐木順三氏の長明
観に符を一致している。

「長明の場合、出家も遁世も、彼独特の意味
における「教奇」にはかならなかつた。世
も人もあげてはかばかしく没落への急傾斜
を転んでゆくとき、世の人から離れた山中
や叢林のなかに隠れて、ひとりおのが教奇
に身を任せて身を養ふ生活、それが即ち「方
丈の栄華」であつた。」(『無情』昭和三十
九年筑摩書房刊)
それにしても、「身も世もない孤独の寂し
さ」にキリキリ胸を締めつけられていたはず
の蓮田が、なんと論理的な沈静と正確さで本
を撰択していることだろう。あたかも書店は

こよない隠棲の方丈、本はまた閑居の方丈で
でもあるかのように……。

コギトの思ひ出

田中克己

三好氏とわたしの同行三人が追分の油屋に
着いたのは、夏の日も暮れてからであつたら
うか。四季拾月号(三十号記念号)にのせた
わたしの「上州展望」といふ詩は前述のごと
く、朔太郎の生国上州の展望をうたつたが、
次には「上州横川」と題してゐるが

山々は小駅に倚すことのしかかり
その彼方に夕雲は際限なき蹴れに
自らが姿を犬猫牛馬に変じらぬ
忽ち山川の瀬音高まりて

夕咲く花を開き 駅長室に灯つき

汽車は吐息してのろろ動きを止めぬ

といふのが、実景を歌つてゐるとしたら、妙
義山を南に見る横川から、碓氷峠のアプト式
の線路といふの上つて、熊の平の駅をすぎ
て軽井沢に着いたのは晩である。わたしの胸
裏では明るい中に追分の油屋について、その
古風な構へを驚き喜んで見たやうになつてゐ
るが、たぶんそれは間ちがひで、暗くなつて

から着き、堀さんに出向ひを受けて、大名の
間の隣のまつくらな室が予約されてあつたの
で、そこへ入つて夕食でもとり、三好さんと
堀さんの話すのをきいたあと、まもなく寝て
しまったのだと思ふ。堀さんの初印象は、想
像通り知的でもおだやかな話しぶりの都

ヘリック詩抄(五十七)

森 亮

宴の終りに

心重たく立ち去りかねて、とは言へ、わたし
たち誰もか
今は各自の住まひに戻って行かねばならない
いったん別れてしまへばまた会ふ日があるか
どうか
それが分からないとあつては、ためらふのも
道理。

私は年とともににやら数へきれぬ心配と悲
しみで
銀白の髪の毛が白さを加へるばかり、
一年たつて又此処であなたがたにお会ひする
ことが

会人で、わたしを喜ばせたが、三好さんはな
んだか堀さんには遠慮してものをいつてゐた
やうに思ふ。今となつてみれば四季の総師は
堀さんだつたのだから、当然であるが、わた
しは永く三好さんがそれだと思つてゐたの
で、ちよつとこのことは意外であつた。二人

できるかできないか私には分からない。

若しわたしが死なねばならないなら、ちよつ

ぱり涙ながして

友達だつた嘗ての詩人を偲ぶだらうと

固く誓つてほしい。又若しかして三女神が

幸ひわたしの齡を延べ、今幾たびか新しい春

に遇はせ給ふなら

此処の野原が枯れても枯れても甦るにも似た

しんの強さで

ヘリック屹度、皆の衆にと囀の讃歌こしらへ
ませう。

ヘリックはイギリスの詩人にしては珍しくソネット
を書かなかつた人である。ここに訳した「宴の
終りに」(三五六)も十四行の詩ではあるが、押
韻した二行(カブリット)を七個重ねた脚韻の具
合からもソネットとは言へない。内容から見てデ
グオンの教区に移つてからの作品のやうではある
が、古典文学の影響が抜けてゐない。「三女神」
とは人間の運命を司る女神たちのことをいふ。

きりになつた部屋で、三好さんがふすまに書
かれた漢詩をわたしに読んでくれたのは、こ
の夜のことか翌日の朝か、「頤館ノ産モット
モ名有り」といふ「米の賦」で、がっかりし
たのは、この宿のことだからもつと古い物だ
らうとの予想が裏切られたからである。

追分の油屋のことは、この年十一月に焼け
たあとで「四季」(第三三号)にわたしが追
憶して「信州追分宿脇本陣油屋の記」といふ
題で記してゐる。

「追分宿は中仙道から北国街道のわかれる
ところゆゑその名が起つたのである。……こ
の二街道を行く旅人のための宿りの中、最も
格式の高い本陣に次ぐ脇本陣が油屋である。

本陣は既に古びてしまつて見られないが、油
屋のみは江戸時代の名残を留めて残つてゐた
のである。彫物のある桁柱、燕の出入りする
屋根、脇本陣の表札もそのままであれば、広
い板の間になつた入口の間へ、急に下りてゐ
る梯子段には昔の人のあしあとが凹んでか
しままのも嬉しい」

といふのがその一節である。「油屋の最も興
には御大名の間があつて一段と畳が高く」な
つてゐるのを見た。翌日には堀さんや立原道
造・野村英夫などみな結核でなくなる人人と
話しあふ。堀さんの間は大名の間のま上に当

る二階の小さい間であつたが、南の窓からは
蓼科や八ヶ岳が美しく見えた。それを指さし
て説明してくれた人は来年一月には天山やア
ラットの山（ノアの箱舟の止まつたとい
ふ）を見にゆく深田久弥氏で、こないだ堀さ
んの十三年忌とかの会で、二十何年ぶりに
再会したが、ちつともお变りなく若若しかつ
た。なにちつともお变りないのは堀さんの奥さ
んもさうで、この時は加藤姓でお母さんと弟
さんの大学生俊彦君も一緒だつた。俊彦君
は变つていまは東大教授である。加藤多恵子
さんの親友と見えたこれも美しいお嬢さんが
ゐて、恩地孝四郎画伯の令嬢三保子さんと教
はつたが、このひとつにもこの間お目にかかっ
て少しも变つておいででないのに驚いた（よ
くおどろく男だと思はれるだらうが）。变つ
たのは大学生で卒業論文を書くために泊つて
ゐた三輪福松君といふ青年がゐて、ドラクロ
アの画集を見せてくれたが、これまたいまは
大学教授の由である。

分名物の松原を見にゆくと、案内につい
て来てくれ、遊女の墓といふのへも案内し、
それから「藪に隠れて三好さんをおどろかし
ませうよ」とわたしに勧め、それを実行し
た。わたしはこの後輩の「無邪気さ、可愛さ」
にすつかり惚れこんだ。三好さんが鳥のこ
とをよく知つてゐて鳴き声で、「あれは何」
と教へてくれたのに対し、わたしは植物学の
知識を辿りだして立原の萱草が、わたしのく
にのカンゾウでないことも知つた。立原は
この両先輩にあまり感心した様子もなかつ
た。かれの詩論によれば、一切の固有名詞は
詩からとりのぞくべくであり、カンゾウもキ
ツツキも実際は「花」、「鳥」といふ形で示
せといふのであつて事実かれの詩にはその傾
向が顕著であるとわたしは思ふ。のちにわた
しはマラヤに行つて現住民と会話して、山の
名、草の名が一向に問題にされてゐないのを
知つたが、「詩」はこの「原始」の態度に近
いのではないかとこのごろ考へる。それにし
てはずいぶん遠まはりしたもので、わたしの
作品には地名、人名、鳥獸草木の名が多く、
いまの大学生にならずいぶんの注が必要であ
る。 (つづく)

詩 想

山根 忠雄

「これで詩を書いて下さい」

と出雲みやげにもらつた

八雲塗りのペン軸――

百合模様の入った

あずき色のやや太目のその軸に

新しいペンをさしこんで

軽く動かせば

ストーブの薪はほうほうと燃えあがり

私の詩想はパチパチと火花を散らす

が家の、台所の軒のトタン板にカタカタとや
さしい足音をたてたり、庭先の竹垣の上にき
て考えこんだりもしたらしい。
夜がくると、斜め隣りの家の軒下の、戸袋
のてっぺんに、じっとしゃがんで寝ていると
いう。

脚に鉛の輪をはめているから、伝書鳩にち
がいない。それなのに、どうしてこんなにい
く日も私の家のまわりに泊りこんでいるのだ
らう。それに、毎日いったい鳩は何をたべて
いるのかしら。

いつもの妻の癖で、鳩はこの四、五日かの
女の心の片隅に住みついていた。
鳩がかわいそう、春めいてはきたけれど、
夜はまだ冷えびえとして、風がやたらとひど
く吹き、鳩は夜通し、浅い眠りを妨げられる
だらう。それはかりじゃない、悪くすると、
野良猫やいたちが襲いかゝらないともいえな
い。

どうやら、そういうや、切迫した愛情を妻
が押し殺していたのは、夏樹がこのことに気
づいたら、必ず、握えて飼おうよ、とせがむ
にちがいないという、ますましがいのない予
感のせいであつた。

はやくおうちを想いだして帰ってくれと
い、妻はそうねがっていたのだが、それで

北住敏夫 著

近代日本の文芸理論

- 一、「文学」「文芸」とその理論
- 二、坪内逍遙の文芸理論
- 三、森鷗外の文芸理論
- 四、北村透谷の文芸理論
- 五、高山樗牛の文芸理論
- 六、島村抱月の文芸理論
- 七、夏目漱石の文芸理論

四六〇円

東京都文京区本郷三丁目六ノ一〇

鳩 書 房

鳩 物 語

今井茂雄

四、五日まえから、鳩が一羽、家のまわり
にいて、私の家や近所の二階家の屋根に、一
日のうち何度も見かける、と妻がいつていた。
鳩は、ひるま、私も夏樹も留守の静かなわ

夏樹にもわざと知らないそぶりをしつつづけて
いたのだが、六日目の今日の夕方、夏樹をは
げしく叱ることのあつたあとで、いき、か動
搖していた妻は、とうとう辛棒ができなくな
つたらしく、つい口にしてしまつていた。

△夏ちゃん。鳩がいるでしょ、あそこ。
もう六日もあゝして、寒そうにじっとし
ている▽

結果はもう明らかだつた。じつは妻も、は
やく鳩を何とかしてつかまえて、とにかく暖
いところで、おなかいっぱいいたべものをたべ
させてやりたかつたのである。

夏樹と妻は、鳩をつかまえるための網と、
鳩の餌とを買ってきた。

△つかまえるのはパパよ。だって、パパは
昔、中学の頃に伝書鳩を飼つていたこと
があるんでしょ▽

しかし、鳩は私の家の軒にいてのではない。
斜め隣の、一週間ばかりまえに埼玉から引越
してきたばかりのおうちの軒下にいるのだ。
結局、私は尻ごみをした。仕方なく、網を
手にした妻は夏樹を伴つて、そのおうちに出
かけていった。

しばらくして帰ってきた夏樹は、つまらな
そうに部屋に坐りこんだ。
△ダメだ。力がつよくて、網の下から逃げ

ちゃったよう。大屋根の上にあがっちゃった。

それでもよかったんだ、と私はなかがばかりし、なかがほっとした。夏樹はしかし、あきらめかねた。それから十分おきぐらいに、鳩を見に支関を出ていった。三度目に支関からかけこんできたとき、かれの目はかッやいていた。

「パパッ！鳩がまた戸袋の上に戻っているよ。パパなら手が届くよ」
私はやっとはらをきめてたちあがった。よくないことだが、私は、お隣りの家のプロック塀によじのぼって馬のりになった。戸袋は、意外に近く、私のすぐ目のまえにあった。月が冷たく冴えている晩で、軒の下が却っていつそう黒々としていた。風がひんやりと軒の下を流れていた。

鳩は、ほとんど眼が見えないようだった。月の光に照らされた私の顔が、ものの五センチ位のところにあるのに、鳩は、まるでり別の方を見つめているようだった。
私は、しばらく塀の上に馬のりになったまま、鳩と鼻をつきあわせて、さてどうしたらいいばんやさしく、鳩を驚ろかさないうで、かつ私自身も驚ろかないで、つかまえることができるかと考えた。

ひとまず網で押さえるのが確実な方法であるように思われた。しかしそれでは、鳩は網のなかではげしい恐怖に悶えるだろう。それよりは、私の手がすばやく、適確に、鳩の背中から腹を抱きとめるのが、はるかに良いことだ。なぜなら、鳩は、伝書鳩は、つねづねそのようにして飼いにつかまれているはずだからだ。私の手が不意にかれを押さえこんだ一瞬、かれは驚ろくにちがいないが、その次の瞬間には、かれはきつと、この突然のくらのやみの暴力が、未知のもでも、悪意のもでもない、とすばやく察知するにちがいない。

しかし、それは網よりはずっと不確かな方法であった。とりにがして、鳩がふたたび闇のなかに、その恐怖を力いっぱい投げつけるということになる不安も十分にある。

私は、何度か私の左腕を、ソッと戸袋を撫でるように下から持ちあげてみては、おろした。
何かが起っているナ、と鳩はようやく感じはじめていたようだった。注意ぶかく、しかし無力に、鳩は脚をかめて身を低くし、からだ中の神経を緊張させていた。
ついに私は決心した。そして、私自身もよく分らなかつたほどのすばやきで、私の左手

雪・花

下田 和子

ねむる蛭之内歴氏に
雪と花とを

雪が かおる
まいながら うたおうとする
地の果てはどこにもなく
雪は ことし
うまれたまんまで
町並の一隅にあたたかい
かきよせた その
ひとにぎりの雪の小花は
ねつっぽいてのひらに
みずみずしく息吹くのだ
小花は ことし
駅のホームの
硝子戸のなかに盛られて
ほの白く
なにかをまわびていた

気がついた。

鳩は、みんなの陽気な声にとりまかれて、暖かい茶の間に入った。明るいう電灯の下でみると、鳩はうつくしい羽根の色艶と、キレイな眼をしていた。しかし、こんなに軽かったカナ、と私はすぐその何とも頼りない軽さに気がついた。

私は、伝書鳩を飼ったことのある人なら知っている正しい抱き方で、左手で鳩を持ち、買ってきてあった餌を右の手のひらにのせて、鳩の鼻先にもっていった。

どうするかナ、と私が思うよりはやく、鳩は、そのように日頃から私に馴らされてもいたように、何の恐怖も不安も疑念もなく、私の手のなかの餌を、すばやいスピードでついでにみはじめた。

鳩は、もう五日以上も、この鳩の餌をたべてはいなかったのである。

鳩は、不幸な欠食児がそうするように、あとからあとから、私の手の上の餌をむさぼりたべた。あまりにせっかちにそうしたので、餌はかれののどにつかえてしまったのだらう。蛙をのみこんだ蛇のように、かれののどは大きくふくらみ、人間のやるように、ゲップをした。

山の樹叢書Ⅱ

詩集雁かえる

堀口 太平 著

峨々温泉／桃の花／冬至／中津川
溪谷／雁かえる／七夕／風光り／
心のあかり／誕生日／蘇州懐旧／
討伐部隊／ 四五〇円

黄 土 社

東京都新宿区山吹町十二

が鳩の上から襲いか、っていた。

首尾よく、鳩がほくの手のひらのなかにあるのに気づいた時、私の顔には思わす明るい微笑がわいた。

この手のなかの感触は、昔何年も馴染んで知っている、やわらかい、温いものだった。

鳩は、私の手のひらのなかで、もうすっかおとなしくなっていた。私は、少年の日のように、私の手が鳩の頭を撫で、ピー、ピー、ピーと口笛でよびかけているのに、あとで

鳩は今夜、とりあえず、藤の買物籠にビニールのカバーをかけて貰って、暖かい、静かな夜を、私たちと一緒に寝ている。

脚にはめられた鉛の輪にはナンバーがはいっているから、鳩の協会にでも連絡すれば、持ち主は見つかるところだ。もしこのま、うちで飼ったとしても、鳩は体力を快復したら、きつと飼いを想いだして、帰ってしまうだろうし、それがまたかれにとっていちばん自然なしあわせであるはずである。

しかし、夏樹はどういうだろう。それは明日になってから、みんな話してきめることにしよう。

しかし、この鳩が、六日もの間、私たちのまわりに滞留していたことを、妻や私たちのかれに対する友情とは何のか、わりもない偶然であったとは、どうも私には思えないところがある。

かれは不思議な帰巢本能をもっているように、私たちの心のなかを見透していたにちがいない、私は今夜のところ、そう信じることにしよう。

楨貞介の断章(九)

青木敬磨

「感情なんか誰だってもっている、」
と大木が云う。

「それを表わすことは誰にだって出来やしな
い、」

と私が云う。二人は図書室で落合い、肩を
押しあいながら吉田山を歩いた。同じ道を何
回も歩いた。同じ議論を何回も新しく繰返し
た。時々散歩姿の大学生に出会い、行過ぎる
と大木がその名を覚えてくれる。大木は京都
に生れ、有名な学者や書物のことを詳しく知
っていた。もし昼の休み時間ならば、ふとし
て大文字山に登り、議論に我を忘れて午後の
授業をさぼってしまふ。大の字のつべんに
ころ伏して初冬の空をながめていると、下界
からかすかに唸る如く放課の笛が鳴りひび
く。サイレンと云う無風流なしろものさえ、
山の空気にこだまして奥深き響を残した。

しかし私の家に戻りはなかった。その頃も
う私は寺町の借家に引き戻され、半年試験の
準備に忙しかった。運動の関係から普段にさ
ぼることが多く、試験前には徹夜を続けねば
ならなかった。京都の冬は冷たく、夜半すぎ

ると膝の骨が凍えそうになる。私の部屋に火
桶はなく、マントをかぶせて時々膝がしらを
なぐりつける。ノートする手は木の枝のよう
にしびれ、紙につける小指の側が紫色に霜や
けてしまふ。

そうした夜、従兄が訪ねて来た。何か京都
に所用があって、泊りに来たのであろう。と
ころが一夜眠る間からだが動かなくなつ
た。動かないばかりでなく関節が痛むと云つ
て呻き泣いた。従兄は私より十才の年長で、
仲伯父の家から大伯父の家に養子に来てい
た。生れた時から貰われ、その聡明を可愛が
られて、父の生前から私の家にも何度も来て
泊った。母には実の母のように甘え、私は彼
を兄とよんだ。田舎の古い家を嗣ぐというこ
とが不平で、小さい私にまでその不平をこぼ
し、或時私はそれに同情をよせ、時としては
又腹が立った。生きるということ、彼はた
だ遊びのように考え、絵、碁、尺八等々、何
にでも上達し、何物をも究めなかった。自分
を抑えることを知らなかった故に、今一步と
いう時の苦心を厭うて、他の安易な遊びに走
ってしまった。私は二階に坐り、彼は階下に
寝て、母が、介抱した。然し殆んど絶間もな
く彼の呻きと泣声が伝わった。二日三日は辛
棒もし、気の毒にも思つて、医者ささがつて

廻ったが、四日目にその妻が子をつれて介抱
に来、大伯父が来、続いて仲伯父も来た。私
の書齋は見舞客に占領せられ、まだ宵の口か
ら机の側には老人達がいきたくなく口を開き、
いびきをかいた。病人の呻吟は然し高まる一
方であり、病院につれこもうとしても、一寸
の動きをも痛いと云って承知しない。とうと
う私は我慢を通り越してしまつた。

「アキはえ、なあ、勉強が出来て。」
仲伯父が私の机をのぞきこみ、粘りをもつ
た声で云う。その昔、父の居間へ鞠躬如とし
てにじり入つたこの田圃焼けの老人が、私に
アキという言葉使ひをしたのである。

私は憤りにふるえる心をかみ殺し、ノート
をたたんで懐にもとと暴々しくきしむ階段を
降り、従兄の妻と子と及びわが母の物怖じた
瞳には返しもなく、下駄をならして露地を出
た。うしろに子の泣声がかきこえると、私の心
は一層に荒れ、唯唇を噛むことによつて涙を
抑えた。

「おれの学資は大伯父から出ている。」
「その通りだ。」
「誰が頼んだか？」
「伯父の勝手だ。」
「伯父の勝手だ！」
靴に踏みつぶされた青蛙のように、私は屈

辱ではしけそうな心を、両の手に抱きしめる
ようにして大木の家へかけつけた。
「おれはもう止めた！」
それだけ云つてしまうと、涙がとまらなく
なり、床の柱に頭をのせて、木のようにぶつ
たおれ、この腕で眼を蔽うた。友は闐然とし
て部屋のまん中につつ立ち痙攣する私のから
だを見下している。

「どうしたんだい！」
しかし何を云えばいいか。腐った塵塚の中
味をあばいてみせて、都の人に何がわかるう
か。

「おれはもういやだ。学校へ行くこと自体に
屈辱を感じる。」

併し恰も従兄が母に甘えるように、私は友
に甘えていたのである。一しきり泣いて起き
直ると、そこには詩と真実に充ちる友の書齋
であった。友は既に私の心情を見抜き、静か
にうなづきながら、別の話を始めた。
「春の休みに四国旅行を募集する掲示板見た
かい？」

「いや。」
「十五日の予定で四国を一周しよう、と云う
んだ。お米持参のこと、金三十円以上持たぬ
こと、というただし書きなんだ。」
「おもしろそうだな。」

現代の芸術叢書 XIV

ケストナー詩集

板倉輛 音訳

(村野四郎) ケストナーの、あのバラケ
ツ的な即物的詩精神は、現代詩の深刻露や
観念癖に今日でも充分利き目があると思う。
とにかく詩が、もうすこし新鮮で面白くな
るだろうと思う。ケストナーは今日でも鮮
烈に生きている。……このすばらしい即
物主義の先輩の詩が、こんど新しく板倉輛
音氏の名訳で出版されることは、何といっ
てもうれしい。

¥五〇〇

東京都文京区本郷一―五―一七
三洋ビル別館

思潮社

「主催者は理乙三年の西島と云うチビのオン
ケルだ。」

「知ってるのか！」

「一中で一年上だった。絵をやる先生だ。」

「行こうか。」

「もう君を誘うつもりで二人として申込んで
おいた。」

私はおかしくなって笑い出した。亡き秋山と
の約束の実行が半年おくれたわけである。そ
しては私はいつのまにかいわれなき苦悩を忘
れ、地図を開いてその道順を相談しあつた。
友は既に参謀本部の地図をまで準備してい
た。

この徒歩旅行を私は後々まで何度感謝した
かしのれない。南国の春は悠揚として明るく、
空の色が塗つたように濃かった。たんぼぼは
枝をなして開き、人情が美しい。雨に降られ
て歩いても、腹をこわして寝ても、何もかも
嬉しかった。私の眼はもはや母に向うことを
止め、大きな大きな自然の中にあつた。単に
造られた自然、永遠不変の自然ではなく、曾
て小さい私の存在をおどしつけたあの冷酷な
自然でなく、自ら造る自然、私自身その中で
働く自然、歴史を持って進展する自然を発見
した。さもしい肉親的な感傷は過ぎ、底から
湧く感激に推されて形も成さぬ歌をうたいつ

絶版 福地邦樹詩集 果樹園社 ¥3000	田中克己 漢詩大系 白楽天 集英社 ¥1200	浅野晃 天と海 英霊に捧げる七十二章 翼書院 ¥870	吉本青司 標的 金高堂 ¥500	小高根二郎 詩人、その生涯と運命 新潮社 ¥2400	森亮 東洋文庫 白居易詩鈔 平凡社 ¥300	増補改訂版 伊東静雄全集 人文書院 四月下旬刊
-------------------------------	-------------------------------------	---	---------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	----------------------------------

つけた。まことに私にとっては生涯の時期を劃するような一大発見だった。その後苦しくさえなれば旅に出た。からだがかわれるほど歩き疲れる中に、いつのまにか必ずこの健康な感激を見つけ出すことが出来た。……

書簡 (安田章生氏宛一通)

伊東静雄

昭和二十三年十一月十七日

大阪府黒山局区内南河内郡黒山村北余部より、奈良市法蓮北町、安田章生宛 (はがき)

御歌集「心象」いただきましたまことにありがたうございました。おだやかで平明な御歌風なつかしく拝見いたしました。十一月十七日

〔註〕

「心象」安田章生第三歌集。昭和三年一〇月一〇日さかの書房刊。昭和二一、二二年の作、長歌二首(反歌七首)短歌二九五首を収む。

編集後記

十二月七日。所用あって備中高梁に旅した。河畔の油屋という古風な旅館に泊ったが、床間の軸の書体にどこか見えがある。何ぞ夜のみかきや星は空にみちさんらんとして水にうつれり
と詠めた。署名は比庵、つまり清水比庵翁である。そういえばマツチのラベルにも
山々のかけをくたきて浅き瀬のひろき流れに鳴くかじかかも
いずれもあくせくとした当世風を超越したゆうゆうたる秀歌である。宿の女中に油屋と比庵翁を聞くと、翁は高梁中学の出身であるからたこのことだった。

十二月二十日。大毎の「関西詩界」の一年で、小野十三郎氏は「果樹園」がこしも強い存在であった。私などなにかから融けこめぬものがあるが、ここに拠る人たちの作品構遣はしっかりしている」とある。創刊以来本号で九十年・十巻を完結したことになる。そろそろ時代の方から融けこんでくてもいい時期である。(〇)

果樹園 第一二〇号 (毎月一回一日発行)
昭和四十一年二月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集者 小高根二郎
大坂市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料 十円

果樹園 一二〇号 昭和四十一年二月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園

第121号

蓮田善明とその死	小高根二郎	トラークル詩抄	平井俊夫
街角	浅野晃	摺岬	美堂正義
ヘリック詩抄	森亮	コギトの思ひ出	田中克己
晩秋 笛吹きのうた	大村直子	冬	萩本家義
		不思議な老婆	今井茂雄
		書簡	伊東静雄
		編集後記	

蓮田善明とその死(四)

小高根二郎

市電を降りて鉄道の水前寺駅へ歩きた。蓮田は、今度は不安に襲われたのであった。それは、初めて見る水前寺駅が、ひよっとすると姿を匿してみたりしそうな不安であった。ガードの下をくぐり、その左の広い道を軌道に沿ってゆけば駅だ……と、地形的に想定されながら、駅という事実がすぐ姿を見せないと、不安で歩調が乱れるのであった。五百メートルも進んでから、やっと運送店や飯屋がならんでいる界隈に達し、狭い広場から引っ込んだ奥に、小さな木造の駅——物を見つけてから、彼はやっと安堵をしたのであ

った。しかし、なにはさておき、切符を買っておかねばならない……という焦燥感に追いやられた。開札までにまだ一時間の余もあるのに、目的地「長陽」までの切符を求めると、それをズボンのポケットに納め、そこでやっと安心すると、ベンチに腰を下したのであった。

それでもまだ不安が、次から次へと、湧くように彼を襲ってきた。俺は今とんでもない所に腰を下しているのではあるまいか？ それとも、駅の方がどこか変な所に、飛び移っているのではないだろうか？ 或いは汽車は満員で乗れないのではあるまいか？ いや、満員ではないにしても、車体には怒も扉もなくて、俺がまごまごしている間に、ぼおっ！と発車してしまふんぢやなからうか？

また例の莫迦げた妄想だ。しようことのない神経だ。そう……蓮田は反省して、懸命に自己を取り戻そうとはかったが、「世間と自分との何としても密着しないずれ、又しても此処でずれ出した自分と駅との関係について、凝乎と目を据えるかのやうに、目の焦点を或る空間においた」のであった。

蓮田はここで、世間とずれだしていると感じているが、それは蓮田と世間との関連からではなく、蓮田と分身達との関係において、蓮田の方が彼等からずれ、結局、宙に迷い込んでいるのだ……といった方が適切かもしれない。

そうした彼にとって、やがてやってきた汽車は、「むくむくと汚らしく身をうちふるはして来た一匹のながい胴体をした虫けら」であった。しかも、「その速力や重量よりも過大に或はそれらには全く縁のない無用の大音響を起して人々の聴覚と全神経をかき乱し、それによって、自分を偉大なものと信じ込ませようとするかのやうに、全身を頭はせて喚いてゐた」怪物だったのである。蓮田にとっては、この怪物が発する大音響より、迫撃砲や擲弾銃のシユル、シユル、シユル、ドカーン！ という擦過・爆裂音の方が、聴覚や神経にまだ馴染んでいるのであ

る。彼は怖毛をふるって、なるべくそっと乗り込むと、手荷物を網棚に上げ、満員の腰掛の凭れに背を寄せると、ポケットからリルケの「ロダン」を取り出して、その方寸の閉居にさっそく遁入したのであった。

「そこには、うつて変つて救ひがあつた。神経は静まり、大へんに愉しい小ささといつたやうなものの中に自分が落ちつき、それから今までの硬ばつてゐた心の中に感情がいきを立てないやうにそつと湧き出で、しかし何ももの外から降げ得ないはげしさを脈うち出して行く……」(有心)

まさに蓮田は「ロダン」に閉居の所を得たのである。彼はそこに、リルケが奏でるロダンという楽器から、造型の秘曲を聞いたのである。

「斯うした手が自分を掴んで見る見る「変形させて、目の前に、一つの救はれた己が生れて行くやうな幻覚へひき入れられて行つた。非常に長い時間が、恰も永遠とでも言ふべきやうな長い時間が経つたやうな気がした。」(有心)

つまり、「却初の人」「鼻のつぶれた男」「考へる人」「エヴァ」等の傑作を、次々と造型していったロダンの指は、あちこちに分裂し分身している蓮田を一つに取つて煉り直

し、見る見るうちに救われた全い生命としての蓮田自身に、再生させてくれたやうな幻覚に引き入れられたのであった。まさに陶酔の境地に誘われたといつていい。

この陶酔を破つたのは軽機関銃であつた。豆をはじくやうな竹製の軽機関銃であつた。二人の兄弟らしい子達が、車窓にとりついて、窓外めがけて一斉射撃をしたからである。「こら、静かにせんか!」と、親らしい人が、近くの乗客の迷惑を顧慮して制止した。カタ!カタ!カタ!の、戦争ごっこは、明らかに近くの人々を睥睨させていた。蓮田自身ロダンの閉居の陶酔から覚めさせられたほ

どだからである。しかるに、蓮田は迷惑を感ずるところかこの光景に打たれたのである。「そしてあたりを見廻した。この感動を他の人々の顔にも見よう」とさえたのである。蓮田は幼い子等が模倣した戦争風景に率直に打たれたのである。閉居より戦闘の方がまだ馴染みのためか、それとも大橋嶺や晏家大山にいる分身たちの方が、今の彼より力が強いからである。その証拠に、この戦争ごっこに全く無関心に、たゞぼんやり窓外に目をやったり、又は無意味な会話に口をばくく動かしているだけの乗客に対し、蓮田は目をふさぎたいやうな嫌

悪感に陥つたのであつた。或いは、上海で直感した銃後の顔貌の深さの根源である無関心を、そこに見る思いがしたからかもしれない。

この玩具の機関銃乱射事件に続いて、すぐ眼の前に背を向けて立っている十三歳の女の子が、今度は泣きだしたのに蓮田は注目した。若い朝鮮人夫婦の子である。妻君は日本語で、「泣きやみなさい、泣きやみなさい」としきりになだめすかしている。すると、今まで手で顔を蔽うてす、りあげていた少女は、急に「おーおー……」と大声をはりあげて泣きだしたものである。ところが蓮田は、この理由のわからぬ少女の嗚咽と母親の慰撫に、読書を妨げられた迷惑どころか、異常な感銘と陶酔をすら感じたのである。つまり、そのおーおー、おーおーが、「何か絶対な響きを以て、うつくしいもの」に聞こえ、ロダンから目を外らした蓮田は、「その声を十分に聴き取るうとするかのやうに、耳を、心を、全身を、空ろにししようと身構へ」さえたのである。これは先ほどの機関銃乱射事件に感動した以上の不思議である。或いは、「泣きやみなさい」と日本語を使って少女を慰撫する母親の心づかいに、片言であれ日本語をあやつる中国人に親愛を感じたやうな、いかにも軍人ら

街角

浅野 晃

頭にターバンを巻いたインド人の男が
コブラのかごを前におき
笛を手にして坐つてゐる
ラッフルズの像が聳え立つ
シンガポールの海岸通り
晴れあがつた炎熱の空のもと
大東亜戦争の第二年目の夏たつた
ジョホール水道の水は再び眠りこんでも
プキテマ高地の風はなまぐさく
ジャングルには紅い花
海は無言の黒いうねり
雲はるか大陸では
若い勇士の血がながれ

り込んできた。まだ一年坊主ぐらゐの少年達である。まだ幼さの抜けない彼等の純真な目は、自分の目が向いた所にあるものだけが彼故国の母を求める声が
この空中を翔つてゆくこの時刻に

蛇使ひの笛が鳴り
コブラはゆつくりと鎌首をもたげる
私は立ちどまつて
ものうく踊る毒ある蛇の
渴いた眼に見入る

嘗ての征服者ラッフルズの街に
いま日章旗ひるがへり
足早に人ら行き交ひ
赤道直下の太陽が
万象の影を紫藍に匂はせるこの時刻に
汝一切の小知を忘れよと
インド人の吹き鳴らす笛の旋律は鳴り
私は我を忘れて
影だけをその路面に印してゐる。

の目を捉えているといった目つきをしている。その目について廻っているやうな鼻、口、上向いた頭、何かはら／＼させる心もとなない手足の道具に蓮田は惹きつけられ、この生き／＼とした可愛い少年達から何か言葉をはきだしたい強い衝動で身を揺られたのであつた。このとき乗客の中の老女が少年の一人に話しかけた。顔見知りだったのである。なにの変哲もない、あまりに常識的な老女の問いに、少年ははにかんで、「ハイ」「イエエ」とだけ返事をしてとまどっている。蓮田はこの少年のいじらしさに、次のやうな異常な感銘を味つたのである。

「こつつと突き当るものがあつた。外界との融合ひがたいずれが突然おしのけられてひとりの、ちひさなのぞみに、そつと、しかし確かに、こつつと触れてくるものがある。」「(有心)

つまり、外界とのずれが排除されて、蓮田の精神が外界とじかに密着しうる均衡の場をえたので、その少年の無垢な純粹さが、「ひとりの、ちひさなのぞみ」に触れたといふのである。こゝに蓮田がいう、ひとりの、ちひさなのぞみとは何のことか? 蓮田個人の閉居隠棲の希望をさしているのか? それとも何のことであろうか? 機関銃乱射事件の腕

白小僧への共感といふ、朝鮮少女の号泣への陶酔といふ、このはかみ屋の中学一年坊主への同情といふ、閉居隠棲とは直接なんの縁もゆかりもない事柄である。

こゝになにか蓮田の心裡における秘密——飛躍と屈折がありそうである。純真無垢な子供達の行動と心情を介しての異常な同情……それは閉居隠棲を決意するに際しての一種の辯明ではないのか？と想像される。つまり、二年ぶりに再会した愛児晶一君、太二ちゃん、初めて顔を見た新夫ちゃんに対する申訳ではないのだろうか？心裡にとりすがり再たと離れまい、離すまいとする煩惱……それに溺れようとする父性愛と、背き去ろうとする遁走欲との相克……。其処からずれて屈折し、愛児たちに与えなかつた愛撫や共感や同情やらを、無縁な車中の少年少女に振舞っているのではあるまいか？いわば代償感覚の一種である。人工栄養だけで育てられた幼児が、乳房の感触に似たビロードの枕や玩具を求めぬるあれである。弟妹ができたために、母親の乳房をとりあげられた子が、左指で耳朶をまさぐって乳房の感触を偲びながら、右手指をチウチウ……と吸う、あの代償感覚である。まさに蓮田は三人の愛児を愛撫しえない代償として、縁もゆかりもない

腕白小僧や朝鮮少女や中学一年坊主に、愛想をふんだんに振舞っているのである。

その証拠は、昨夜の湯治行の下相談のときに、蓮田は無意識にはあるが露呈していた。「ゆつくり、ほんとにゆつくり行つていらつしやい」という敏子夫人のすゝめに対して、「もし行つてみて、余り寒くないやうだったら、しらせるから晶ちゃんを寄越してもいい。学校へはお前が直接行つてお断りして」と提言していた。腺病質の晶一君には頑固な夜驚症があつたので、「行かうとする温泉がさうした病氣にも効目がありさうにあつたし、山の静かなところで少し休ませてやるのもいい」と、蓮田は判断したからであつた。そのくせ、晶一君を伴うべき敏子夫人に対しては、「お前は、とても赤ちゃんが、山の寒さでは駄目だらう。ま、それも行って見て、それから」と、いつか婉曲な断りの言葉になつていたのであつた。「私は駄目、赤ちゃん風邪でも引かしたらいけないわ」と、あまりに蓮田の言葉をもとに受けとっている敏子夫人に、蓮田はいさ、かうしろめたい反省を反芻したはずである。

蓮田は戦地から柳行李いっぱい原稿やら書簡やらを持って帰つて来た。その中には、病院や掩蓋壕で彼を慰めた清水嬢の絵や、晶

一君の手紙、太二ちゃんの絵も混つていた。特に晶一君の葉書の一枚は、神経質な、あまりに神経質な表現に満ちていて、蓮田は胸を衝かれる思いがしたはずである。

お父さん、僕がこの間草葉川にお魚を取りに行つたら水が、かかっている所にどくへびのやうな物があるので土のかたまりでうって見たら、へびのようでないのだからうぎれで上て見たらつれの物が「こりやうなぎだ蓮田君なもうけたね。」と言つたのでよく見たら一しやくばかりのうなぎでした。そしてかえりがけに「わけてかへらう。」と言つたら「うなぎは蓮田君がもらへ。」と言つたので家にもつてかえつて三人でたべました

昭和十五年七月十二日、熊本県鹿本郡植木町蓮田(品一より)中支隊連軍町尻部隊坪島部隊河野隊蓮田(善明宛はかき)

つまり、鰻は晶一君の鹵獲品でありながら、その品名を友達に判定してもらつた恩義に感じて、分前をやろうという神経質な氣のつかいかたである。この神経が夜驚症となつているのである。蓮田はこの鰻を思い出したはずである。

又、蓮田は、敏子夫人からの便りに書かれ

ていた、太二ちゃんの熱い父性思慕も思い出したはずである。夕方になって三ノ岳に陽が沈む頃になると、「お父ちゃん、どこ？」と太二ちゃんが訊ねるのが習わしになつてい

ヘリック詩抄(五十八)

森 亮

自作詩篇に告げる

どうして暮らすつもりだらう、わたしの哀れな詩篇よ、
おんみらを残してわたしがこの世から去つたあとは。
そのとき誰がおんみらに宿を貸してくれるだらうか。
誰が親身になつておんみらを見てくれるだらうか。

お返しには事欠かぬだけの知識、分別を
おんみらは銘々囊中に貯へてはゐるものの、
世間の誰が炉端に招いて坐らせてくれるだらうか。
わたしには分からないが、世の中は広いもので、

寛闊な心と大きな手のひらをもつた
昔気質の人情家ともいふべき方々、

例へば氣高くおはすウエスマランド伯、
又は凛々しいニューアーク卿など御存命の限りは、
好漢必ずや育ての親となつてくだされよう。
若しそれが叶はぬとなれば、哀れな孤兒たちよ、
引取り手無き非運に弄ばれる覚悟が大事也。

た。「遠い、遠い、お国ヨ……」と、敏子夫人が答えてやると、「おてんとさまぐらいつ」と、太二ちゃんは訊ね返した。「いえ、もっと、もっと、遠くの方ヨ」と、敏子夫人

おてんとさまのお家はお山ネ
おてんとさまに お飯……つて
カラスが言いにゆくノ

これは天来の言葉で成つたやうな童謡だつた。この童謡を敏子夫人の便りで知らされた蓮田は、そこに自分に似た稟質のかけらを発見した喜びを感じたはずである。

この子等を蓮田は愛しえないはずはない。愛しながら、愛しているとあらわに表現できないなにか？ それは肉身間のえたいのしれぬ含羞？ それとも父性愛に特質された武骨さ？ 或いは蓮田の資質に特質されている「花の紫」的な象徴性？ いや、臆良の子煩悩を囓つたあの公の精神？ それともこれらもろもろの資質と性向の結びつきがもたらした遁走性？ とまあ、その真相の追求は後に委ねて、一歩でも目的地——長陽まで辿りつかねばならない。

豊肥線を立野で下車すると支線(今の高森線)に乗換えねばならない。二車輛しか曳いてない汽車は、すぐ次の「長陽」駅までしか走っていない。その僅かな距離であるが、旧火口の縁が作っている雄大な輪山に沿って荒々しい白川を溯らねばならない。前方に大きな稜線を盛りあげながら、のおっ……と立ち塞がる黄褐色の山塊。それは木一本も生やさせぬ無器用さで、空を小馬鹿にしているように太々しく重なっていた。噴煙はその方角に見えるはずでありながら、近くになりすぎて死角に入ったためか、見えなかった。この荒涼とした南阿蘇の、しかも凍てついた狂風が吹きつの中を、二車輛の汽車は、山に体を擦りつけるようにして走っていた。

蓮田は四五人の客と一緒に長陽で下車をした。マッチ箱のような駅を出ると、黒い火山灰土の泥濘となっている不定形広場である。そこに二軒ばかり店があり、どちらにも垂玉・地獄温泉行のバス案内の看板が掲げられていた。その一軒の店先に古びたバスが停っているの、蓮田はその店の方へいった。ガラス戸を押しあけて内に入ると、菓子棚が忙しくならんで飲食店も兼ねている。バスの時間を訊ねると、近頃道路が悪くて自動車が行けないので、皆さんに歩いてもらっている……

とのおかみの返事であった。若い主人らしい男も出てきて、二三押問答してみたが、結局、二里半ばかりの道のりを、二時間がかりでくたく歩かねばならない……ということ、が、判明しただけだった。

昨昭和四十年の春垂玉温泉を訪れた筆者は、次の阿蘇下田から自動車があるので、この長陽を通過したが、車窓から覗きみたこの周辺は、蓮田が訪れた二十五年前より一層寂れている様子で、彼が自動車を交渉した茶店には看板もなく、赤錆びたトタン屋根のその

晩秋 笛吹きのおうた

大村直子

高い空に雲のない日
私は金いろの木の下で
貧しい横笛を吹いていた
すると背後の森かげで 赤い実は
ひと息ごとに 熟れていき
ふいに眠るように落ちてしまった
それから そちこちの葉裏で
たくさんいた蝶が みんな

はらはらと死んでいった

私は痛いものをかみながら ぶりかえつた

ああ 笛吹きの願いはいつ聞かれるのか
ひとつのうたよ 再び私に許されてあれ

その時 空には 鋭い鳥の声が
梢に弧をえがいて散っていき

地には 突然 風が立ち
木は金いろの葉をふらせはじめた

てゐる木の枝や枯葉が、非常な自然さで埋まり込みつつあったりした。」(有心)

蓮田は、日本の、故郷の……土と道とを再認識することによつて、帰還以来それこそ初めて、安心立命のきっかけを見いだしているように見受ける。泥濘に悩まされてはいるが、それにいままじさを感じず、生気や美しさを感じている。悩まされるころでは、ない、没我の恍惚をさえ感じだしているのである。木の枝や枯葉がそれに落ち、その泥んこに埋まり同化してゆく自然のなりゆきを、郷に帰れば郷に従え……と汚染を容認する心

店には、品数もとほしい駄菓子をならべているらしかった。

蓮田は時計を覗くと午後三時であった。日暮までに辿りつくためには急がねばならなかった。すぐ坂になった道路を抜けると、道は丸っこい山の瘤の根を次から次へとぐるぐるめぐって上っていた。彼は轍にえぐられた道の中央でなく両縁を選んて歩いた。筆者が過日検分したところでは、轍にえぐられた大地の傷痕からは、拳大、いやそれ以上の大きさの石塊が無数に露出していて、擦過する轍に弾ね飛ばされたそれは、まるで弾丸のようにドスン！と車体に命中をした。その道が雪や雨でぬかるみになっていたのである。踏み崩されていけない歩きたい所と思つてうっかり踏みつけると、火山灰土の柔かい泥がぶすぶす深く落ちこんだり、萱や木片や鋸屑などを撒いてあったりする上を踏むと、黒い泥水がじゅつと上ってきたりするのであった。そうして歩いているうちに、彼の靴の裏に又新しい感覚が段々意識されだしたのであった。それは中国と日本の土の異和感だった。中国は洞庭湖畔の大橋嶺や晏家大山の泥濘と日本は阿蘇・鳥帽子岳の南山麓の泥濘との相違だった。前者では一寸でも水気を含んだ道が執拗なばかりに粘りついて足を取り、油断すると

境のように、蓮田に安心に似た気安さを与えている。これはどうやら日本に生還した……という意識を彼に与えたからであろう、どうした拍子にかできた泥濘の中の偶然な水溜にさえ、生物の命のような光を感じている。又、蓮田は、見張人もなく積まれている伐木が、互いに身を寄せ合い、或いは喋り合つて自衛しているさまに注目している。これまた数軒づつ身を寄せ合つた部落の真中を、引き裂くように走っている自動車道路の心なさに感傷している。水が下鳴る谿谷や、濡れそぼった杉の林をすぎたりして、蓮田は羨望を感じると、

「柿色に熟れた唐黍が軒下に艶々光つて幔幕のやうにさげ並べられてゐるのは、あてやかな位の美しさであった。さういふ美しい家の中に人氣の感じられないほどの静かに住みなしてゐる人々の暮しも心を咬めるものがあつた。」(有心)

これはまだ隠棲の覚悟ではない。覚悟にまで固くない。隠棲の誘惑ぐらゐなものがある。ゆきすりの旅人がよく感ずる、あの好奇のシンパシイを出でまい。蓮田はこうして山道を緩かに登りながら、真白い二つの点景に眼と心を射られている。

つるりと靴を滑らせてそれこそ顛倒させられることがしばしばだった。その顛倒を防ぐコツとして、必要以上に一步一步を着実に上げ下げするより他に方法がなかった。泥濘の底にある母土を靴裏に確認できてから、他の足を進める方法である。この他の足が母土を確認してから、先の足を泥濘から抜く用心である。この努力の過剰は却って足自身に反拗して足を疲れさせていることに蓮田は気づいた。阿蘇の火山灰土を含んだ肥後一帯の土には、そんな粘着性はなく、さらり……としているのである。或いはこの彼我の勝ち負けも、蓮田が宇品上陸に際して顛倒した、その原因の一つになっているかもしれない。彼は故郷の土地の持味を思い出した。

「この土だつたのだと、ひとり微笑まされた。これはこの道を一層深く親しみを以て眺めさせ、微妙な足の安心は、歩みを落ちつかせた。さうして深く轍の音を刻み、泥濘んでゐるこの道路に一種の生気と美しさを覚えるやうになつてきた。その泥濘は悩ませはしたが、ちよつとも意地悪くはなかつた。そしてその面に時々うつとりするやうな無雑作さを堪へてゐた。どうかした拍子に小さな水溜が生きてゐるものの何かのやうに光つたり、泥濘の上に落ち散り重つ

死の七つの歌

トラークル
平井俊夫訳

悪の変容

秋。森のへりを黒い歩みがゆく。静かな破壊のとき。枯れた樹のしたで癩病みが額をあげて耳をそばだてている。苔むした石段の道に古い昔の夕暮れが沈みおろる。十一月。鐘の音がひびいて黒い馬や赤い馬を牧童が村へいそがせてゆく。はしばみの茂みで緑衣の獵人が獲物のほらわたを抜き両手は血の煙をあげて葉むらで獣の影が溜息をもらす。褐色に黙りこくった男の眼のうえをおおう葉むら。森。舞いたち散らばりゆく鴉。三羽。その飛翔はソナタのようだ。死んだ和音ときつい憂鬱があふれている。静かに金の雲がとけて消える。水車小屋に少年らが火を放ち。炎は土気色に蒼い者の仲間。そうしてそのかれは紫の髪に顔をうずめて笑う。あるいは石の道が通うかたわらに殺人現場があり。めぎは枯れはてて松林の下蔭が鉛色によどむところ。幾年

も夢がまどろんでいる。不安。緑の間。ごぼごぼと溺死者が喉をならす。池に星影がうつって漁師が大きな黒い魚を曳きあげている。恐ろしく狂いたった顔。いまかれは赤い小舟で葦の騒めきやあらそう男らの声を背に秋の凍てつく水面をゆられてゆく。かれの一族にまつわる暗い物語にひたり。夜と娘らの驚きの叫喚に石になった眼をみひらきつつ。悪。

祖先の古い家。朽ちた階のうえにおまえは何に強いられてたすむ。鉛のように黒が重く。銀の手をあげておまえは何をまなかいにかさす。まふたはなぜに罌粟に酔ったように沈んでゆく。けれどおまえの眼には石垣のむこうに星のひかる天が。銀河と土星の赤がみえる。荒れくるいつつ枯木が石垣をたたく。お前。朽ちた階に影をおとすもの。樹よ。星よ。石よ。小刻みにふるえる青い獣を。お前。黒い祭壇で屠る蒼白い祭司よ。闇のなかで。おまえはかなしく罪なうす笑いをうかべ。眠る嬰兒も顔色をかえる。おまえの手から赤い炎がわり。蛾が焼けて死んだ。お前。光の笛。お前。死の笛の音。祖先の家の朽ちた階におまえは何に強いられてたすんでいた。下の戸口を天使が水晶の指でたたく。

お前。眠りのなかの地獄——暗い路地。褐色の底。青い夕闇にかすかな音をたてて死者たちがあらわれる。緑の花々のまわりで踊りゆれてかれらに顔がなかった。あるいは顔は土色をして玄関のくらがりのなかで人殺しのつめたい顔にかぶさってゆく。お前。恋慕。情欲の紫の炎よ。眠れる者は死にむかひながら黒い階を闇へころけおちた。

十字路で誰かがおまえを捨てていった。おまえは振りかえり長いあいだ見やっていた。いじけた林檎の樹々のしたを銀の歩みがゆく。黒い枝のなかで実は紫色に光り草蔭で蛇が脱皮をしている。ああ。闇。こおる顔に汗がにじんでくる。村の居酒屋の黒くすすけた部屋で葡萄酒にかなしみのかずかずの夢をうつつ。お前。混沌よ。褐色のたばこの雲のなかにおまえはばら色の島をえがき。胸の底には怪鳥の狂おしい叫びを呼びさします。黒い岩礁をまわり。海と風と水のなかを怪鳥は駆けめぐってゆく。お前。緑の金風。内に火の顔を抱くものよ。死に臨んでおまえは罌粟が丘から暗闇の時代と。天使の燃える墜落を歌おうとしている。お前。絶望よ。沈黙の叫びをあげてく

ずおれるものよ。

一人の死者がおまえを訪ねてくる。胸にはみずから流した血がしたり。言葉もつくせぬ瞬間が黒い眉のなかに宿っている。ああ。暗い出会い。紫の月がのほり。いまかれはオリヅの緑の下蔭にあらわれる。やがて不滅の夜。

カール・クラウス

真理の白い大司祭
水晶の声に神の水の息がやどる。
怒る魔術師
火のマントのしたで戦士の青い胸甲が鳴る。

黙せる者らに

おお 大都會の狂気よ。夕暮がきて
黒い石垣のかたわらにいじけた立木がこわばっている。

銀色の仮面のおくからは悪の壺がみつめ

灯火が磁石の鞭で石のような夜を押しつけている。

おお 晩鐘のほろび沈んだ音。

冷たい塵埃のなかで死児を生む娼婦よ。
神の怒は荒れて魔に憑かれた者の額をうちすえる。

紫の疫病。緑の眼をおしつぶす飢餓。

おお 金貨の忌わしい笑い。

だが暗い洞穴にいてひとときわ黙した人びと
がしずかに血を流しつつ
かたい金風から救い主の顔を作りあげている。

アニフ

想い出—— 鳴がひらめいてゆく暗い空に
憂鬱が烈しい。

おまえは静かに秋のとねりこの木蔭で
丘の正しい節度に身をひたして暮している。

おまえがいつも緑の川をくだるときは

夕暮がきた。

愛が響き なごやかに出会う暗い獣

薔薇の人よ。ほの青い天候に酔いしれ
額は死んでゆく葉の群にふれて
母の酸腐な顔のことを思う。
お前。すべてのものの何と闇におちてゆくこと。

祖先の

いかめしい部屋や古い家具は
この異郷者の胸を震撼する。

お前。徴と星。

生まれた者の罪は大きい。ああ 金の戦慄
となる

死

魂が冷涼の花を夢にみる日。

月あかりの歩みにむかって
夜の鳥がいつも枯枝のなかで叫ぶ。
骨にしみる風が村の石垣にひびいている。

その一つは、「石垣の上の生垣の中に眩いばかりに白い羽の雛が綿の花を散らしたやうに餌をあさつてゐる」光景であり、も一つは、「庭先の小屋の前に寝てゐた小柄な白い犬がふと見馴れぬ者が通るのに気づいて、うわつと一口吠えて、それからのつこのつこと小走りに此方へ来た」場面とであつた。雄鶏は長く豊かな尾羽根を風になびかせながら「ここここ」と雌を呼んで扶養の義務を担つていた。白い犬は一口吠えた後、蓮田が二十メートルも過ぎてから思い出したように又一声吠え、振返るとそこで又一声吠え、その後は黙つてしまつた。が、蓮田が道を曲つて、その部落の上に乗ると、犬は吠えることを再た思い出したかのように、二声三声吠えるのが聞えた。

この白い鶏と白い犬がなぜ蓮田の関心をこのように捕えたのか？ くすんだ紫褐色の枯木と暗緑色の檜とが織りなす冬枯れの風物の中で、生動するこの白は彼の眼を捕えうる唯二つの点景であつたに相違ない。それは生還を初めて意識した彼に、洗滌とした、或いは物憂い命そのものとして映つたからかもしれない。しかし、蓮田の資質の内に潜んでいる白に寄せる異常な嗜好も考えのなかに入れてよいかもされない。昨年六月二十八日附清水

氏宛書簡で、本に挿入する紐の色に白か黒かのどちらかを要求したあれである。それは蓮田の潔癖さが撰りに撰つた、他の色に代えがたいきりきりの嗜好——云わば命が要求する色にほかならなかつたからである。

蓮田はゆっくり歩いてゆくと、今度は火の山が内蔵する地下水の奔騰に出会つた。

「突然道のすぐ右側の草の中で鳴り響く烈しく奔騰する水の音をきいた。近寄つてみると、そこは地下水の水が水沫を上げて物凄しい勢で流れて居り、そこだけ畑の土が陥ちてしまつてゐるのであつた。水は暗い空洞からわずかにその三米ばかりを姿を見せて又すぐ空洞へ隠れ去つてゐた。しかし少しのほととその水は又姿を現はした。それは僅かに一米余りの幅しかなかつたが恐ろしい量で、荒々しく、我儘に、奔放に土手を切り割いて通つたり、畑を突き崩し、岩を噛んで高く跳ね上り、或は平たい大きな黄色い岩磐に障へられながら、その上にさつと弾むやうに盛り上るやうにして広がつたかと思ふと、白い、壮麗な厚いうねりを描いて、そこに設けられでもした大噴水盤からゆつたりと溢れ落ちるかのやうに誇らかに、たしかに極まりない見事さで落ちてゐたりした。」(有心)

この命さながらに奔騰し溢れ流れる水は、云わば火の山の静脈を伝ひ流れる血だ。静脈を流れる青い奔流だ。動脈からは火や磐岩や煙を噴いているのだ。もはや命を自覚しえた蓮田に、火の山の生命は明晰に感ぜられていいといつていい。

「或る窪みの中では何としてもその中に人声ができるやうに聞えた。それはそこを通りすぎる背後から尚も聞えてくるので、薄気味わるい位であつた。」(有心)

蓮田が窪みの中で聞き、彼の背後を追つてきた声は誰の声だつたのか？ どこか近くの林で山仕事をしている人々の声が、風に流され稜線沿いに窪みに流んだとでもいうのだろうか？ それとも山に棲んでると「肥後民話集」(荒木一八、地事社刊)が伝えるおもふと呼ぶお化けで、もあろうか？ このお化けは山仕事をしている樵夫の前なぞにたにた笑いをして現われる。そして木の根っ株に腰を下すと

「やい人間！」と話しかける。木樵は鳥肌立って冷汗を流すと、
「おまえはおれをおそろしがつとるばいな」と、心の中をすばりと言ひ当てる。

「お前はおれが言ひあてたのでおどろいと

るばいな」

と、たにた笑いで追求してくる。樵夫はとつさに逃げようとする、

「やい人間、今度はお前はここから逃げようと思ひ出したな、逃げようとしても逃がしはせんぞ」

と、足を釘づけにする。樵夫は手に持った斧

足摺岬

美堂正義

ここで大地は終り
ここから海が始まる
ここから海が相別れてから
土と水との戦ひが
休む時なくつづいてゐる
海に突きささつた岬の
三方紺青の大洋のただなか
いつも風が吹き荒れ
浪は間断なく青い空をめざして
岩の裂目から駆け上らうとする

南の国足摺岬
いま椿は開き初め

で化物を撲り殺そうと決意すると、化物はおとどっこいと根っ株から立ち上り、
「ふん！ 今度は俺を殺そうと思つたな」と、七尺有余の身の丈を聳やかして、のっし…のし…と樵夫の周囲を威嚇して廻る。
「今度はおまえは憂鬱になつとるな」
「今度はおまえは心細がつとるな」

冬の日に紅きくちびるの蒼
雑木林の縁に鮮やかに色を放つてゐる
沖あひに珊瑚が採れるといふ
泡立つ海を見下しながら
海底深くに生息する原生虫の
美しく象形するさまを
いろいろと思ひめぐらせる

天と水とは相結び
茫茫と水煙に似た一筋が
杳に凹形を画いて傾いて
苔く光に融されてゐる
海にくづれ落ちる崖
地に這ふ磯削の松
きびしい気象のなかに
孤独な姿で
岬は運命に抗つてゐる

「今度は泣出したくなつとるな」
「今度はおまえはおれがよくいいあてるの
で閉口しとるな」
「今度は何も考えまいと考へとるな」
「今度は家にのこした子供のことを思つとるな」
と、次々に胸に思つてゐることを、すばり…言ひ当てるというおもふと呼ぶお化け！ せのおもふが蓮田に話しかけたのかもしれないなかつた。
「やい、人間。あんまり路を急ぐな。おまえはまだ人間臭がブンブンして行くせに、まだ妻子から通げられないかと足摺いておるな……」
蓮田はぞつとして窪みから急いで身を脱すると、その怪しい声を、或いは火口に身を投げた亡者たちの呼び声だと聞いたやらしれない。

コギトの思ひ出

田中克己

この日か翌日か、三好さんとわたしとは軽井沢へ、これも立原君の案内で行つた。前後がはつきりしないが、三好さんは礼儀正しく案内を乞うて室生厚星先生を訪れた。朔太郎

をよまなかつたわたしは、反対に室生さん
読んでいて、「鳥雀集」といふのを大切に
読んでいたから同じく恐る／＼その別荘に参つた
のである。庭一面の苔をふまないやう気をつ
けながら縁側にゆくと、先生はこれも紺系統
の着物で気軽にお出になつた。どんな話が
はされたかはおぼえてゐない。川端さんも
時の中堅の作家であつたが、わたしは「伊豆
の踊子」さへよんでゐなかつた。つる屋とい
ふ旅館の意外に狭い部屋に、先生はわれわれ
を迎へ入れられ、三好さんに俳句を示して訳
をさかれた。三好さんが答へあぐむと、わ
たしの方にも問を発せられた。わたしは顔あ
らめてわからないことを申し上げた。

軽井沢での思ひ出はこれくらゐであるが、
わたしは追分ならびに軽井沢に表はれてゐる
東京の文壇にたいへん感激した。その証拠は
今もその時のことをこれだけ覚えてゐるほ
か、いよいよ東京へ出る決心をした様子である。
コギトの第六十三号と第六十四号は私も校
正に参加した。前者は「校了の前日に上京
した」と保田が編輯後記でしてゐる。中
島の「アンナ・カレニナ」に就いてが巻頭
で、中島はこのころからトルストイを読んで
をり、彼の死後のこされた原稿ではこの一連
のみが体系をなしてゐる。増田晃氏が六十

三、六十四と二つづけて書いてゐるのもふ
しぎである。主計将校として昭和十八年？
に中支で戦死したこの早熟の天才は、出征前
に「白鳥」といふ完成した詩集を出し、その
出版記念会には高村光太郎先生が出られた。
これがこの大詩人にお目にかつたわたしの
ただ一度の機会であつた。

九月号である第六十四号には三浦常夫の
「遣唐大使藤原清河」といふエッセーが巻頭
にのつてゐる。唐にわたつたまま帰れずにか
の地で没した清河に正二位の贈位があり、同
日、同じ運命の阿倍仲麻呂にも同じ位を贈ら
れたとの記載で、このエッセーは終つてゐる
が、七月の蘆溝橋での衝突につづき、八月上
海に戦火の拡大したことが、このエッセーと
は関係あるはずである。三浦は南画をもよく
し、中国との戦争を歴史的に見て、決して快
感を抱いてゐないのである。

しかしその次にのつた倉田百三先生の「く
にへの愛」は、先生のただ一度だけのコギト
執筆であるが、愛国を説きながら、ダンテを
説き、ジョットーやバツハ、ヘンデルなどを
説いておいてなのは、先づ我々のく、にを愛し
と説くと同時に世界人類の協和をこひねがつ
ておいてなのは、矛盾のやうだが、「日本浪
漫派」と同じくいたづらに戦争のみを喜んで

おいででないのは、のちの右翼便乗乃至神が
かり派とは、ちがうものを感じさせる。しか
も我らの祖先の文化的祖国だつた中国と日本
とは現実には戦つてゐるのである。「戦果」の
ニュース映画をわたしは肥下恒夫、三浦常夫
と三人で列を作つて待つてから見たと肥下の
編輯後記に記してゐるが、この「戦果」
にあまり喜んだおぼへはない。

ともかくわたしは九月にはじまる新学期の
ため、また帰阪したが、帰つてしたことは、
日記によると、九月八日登校して学校内のい
はゆる「青年将校」の一人、饗庭源吾氏の転
任の公表に目を丸くしたのがはじまりの様で
ある。同氏は大阪商大を出て英語と商業を担
当してゐるが、頭脳明晰でしかも言動キビキ
ビしてゐる私とはちがつて生徒に好かれた。
その送別会だつたかどうか、私は生れては
じめて堺の乳守の芸者家に招かれて、夜半ま
でかかつて「お伊勢参りの石部の茶屋で：
：」といふお半長右衛門を歌つた小唄を習つ
た。これが私のただ一つだけうたへる日本の
唄である。

この好い教師を見送つて私もいよいよ辞意
をかためたのであらう、次には履歴書がしる
されてゐる。普通のものとは異り、文学的履歴
書であるので、今まで記したことと重複する

所があるが、写しておかう。

一、明治四十四年八月三十一日、大阪府人
西島喜代之助、兵庫県人田中これんを両親と
して生る、母の家を継ぐ。

一、明治四十五年、(二才)明治天皇崩

御、妹千草生る。

一、大正四年(五才)、母死す。

一、大正七年(八才)、嗣母京都府人今井
しづえ来る。大阪府泉北郡高石尋常高等小学
校に入学。

冬

萩本家義

夜明け、不意に鳴りひびく

銃声に、目をさます

ことがある

わたしが宿直している

公舎から、程遠からぬ林の中で

誰かが野場を撃っているのだ

村の人たちの話だと、

その林の中には

いまだに野うさぎも棲んでいるらしい

いったん、開いた両の目を

ふたたび静かにとしながら

わたしは宿直室の片隅の

うすいふとんの中で

撃たれた野場を

想っていることがある

あのやさしい胸のふくらみや

小さな頭を、非情の弾に撃ち抜かれ

朱に染って、苦しみもがきながら

まっ逆さまに枯草の茂みへ転落する

あわれな野場を

耳をすますと、銃声は

別の方角の、遠い林の

方からも聞えてくる

このころの武蔵野の夜明けは

毎日のように、きびしい霜

きびしい寒さ――

武蔵野の冬の可憐な鳥たちの

夢や命をおひやかす銃声が

ようやく絶える、と、

わたしは何かしら

ほっとした気持になり

そのまま、枕もとの障子が

白くなるまで

また、ねむる

一、大正十二年(十三才)、転居の為、大
阪市浪速区惠美第三小学校に転校。

一、大正十四年(十四才)、大阪府立今宮中
学校に入学、伊原宇三郎・淡徳三郎・藤沢恒
夫・武田麟太郎を出したる学校也。時に三年
上級に石山直一(野上吉郎)、船越章あり。

一、昭和三年(十八才)、大阪高等学校文
科乙類に入学す。同級に保田與重郎、中島栄
次郎・服部正己・松下武雄・松浦悦郎・松田
明らあり。ロマン的学級と称せらる。文甲に
杉浦正一郎、相野忠雄(若山隆)、竹内好ら、
理甲に伊藤佐喜雄、理丙に福永英右衛門(英
二)、一年上に小高根太郎、石山直一らあり。
教授佐々木青葉村(歴史)、財津愛象(漢文)
を崇拜す。

一、昭和四年(十九才)、以後二年間、野球部
マネージャーとして学業を抛擲して顧みず。
雑誌「璞人」の編輯を野田又夫、奥野義兼よ
り譲られ、松下、中島とこれに当りしも、一
月にして保田と代る。

一、昭和五年(二十才)、短歌誌「かきろ
ひ」を保田と創刊編輯に当る。このころ利玄、
順に私淑す。肥下恒夫病氣休学中なりしを癒
りて同級に来る。この秋、同盟休校あり。

一、昭和六年(二十一才)、茂吉・千櫻を
愛読し中野重治をも好んでよむ、みな保田の

感化に依る。「かぎろひ」十号を以て編輯を
中田英一に譲り、三月卒業、四月東京帝大文
学部東洋史学科に入学、上京して柏井家に寄
寓す。このころ盛にマルクス主義書籍をよ
む。満洲事変起る。

一、昭和七年（二十二才）、三月「コギト」
を肥下・保田とともに創刊、前掲諸友ならび
に薄井敏夫これが同人たり。このころ春夫、
直哉を耽読、ハイネ、シュトルムの詩を愛し
て訳につとむ。伊東静雄と識る。

一、昭和八年（二十三才）、松浦悦郎死す。
北園克衛・近藤東の「マダム・ブランシュ」
の会員となる。酒井正平、川村欽吾、饒正太
郎と親しむ。卒業論文のためや東洋史を学
ばんとして台湾にゆく。

一、昭和九年（二十四才）、学成り畢つて
帰郷、職なし。清徳保男の推輓にて大阪市浪
速中学に勤む。ノヴァーリスをコギトに訳載。
一、昭和十年（二十五才）、五月、柏井悠
紀子と結婚。

一、昭和十一年（二十六才）「歴史学研究」
一、三月号に卒業論文の概略を載す。「青い
花」第一書房より発行。七月長男史生る。「四
季」同人となる。

一、昭和十二年（二十七才）、正月石浜純
太郎先生に就く。四月清徳保男死す。夏上京、

佐藤春夫先生に就く。史学、文学ともに師を
得たり。支那事変大いに起る。（つづく）

不思議な老婆

今井茂雄

浅春のある朝のことである。
電車は短いトンネルをぬけて、代官山の駅
についたらしかった。

座席に腰かけていた私は、読みふけてい
た本のなかに引きこまれていたのだが、その
私の小さくほんやりとした視野のなかを、そ
のとき、小柄な、軽々とした人間の影が走っ
た。敏捷なうごきで、ころがような姿勢にそ
れがなったのは、ちょうどそのとき電車がう
ごきだしたからだだった。

そのまゝ私はまた活字のなかに入ってい
たのだが、しばらくして私は何かが鳴ってい
るような音に気がついた。車輪のあたりでた
えずしている音かナと思つたが、そうではな
かった。虫がまよいこんでいてシートのどこ
かで鳴いているのだろうか。次第に私は落ち
つかなくなって、本を閉じた。

虫の鳴き声のようなその音は、たつたいま
私の視野をよぎつた小柄な人物が小声で口ず
さんでいる歌声だったのである。

もの自分にかえり、急ぎ足にフォームを歩き
だしていた。

たまたま、駅が大がかりな改修工事をして
いて、フォームから改札口までの間に長い廊
下ができていた。

その廊下を半分ばかりきたところで、私は
またしても彼女のすさまじい歌声が私の背中
の方からわきあがってくるのを耳にした。

廊下は板敷きのうえに天井が低かつたか
ら、たくさんの人々の無数の靴音で充満して
いたが、そのなかを彼女の調子はすれな歌声
は急に大きくなつたり、にわかにならなくなった
りしながら、まるでビョンビョンと人々の頭
のうえをはねるように、どんどん私に近づい
てき、私とならび、そして私を追いこしてい
った。

彼女は、小さなからだに似合わず、勢いよ
くゲタを鳴らし、小走りに走るように歩き、
すこしうつき加減になって、左手で風呂敷
包みを力いっぱい振り廻していた。

それで、人々は驚ろいて彼女のために道を
ゆすり、彼女はあたりを払うように、小さな小
さなからだ全体に力をみなぎらせて、悠然と
改札を通りぬけると、はるかに私から遠く、
その歌声と一緒にまわりのなかに消えてしまっ
た。

老婆であった。

彼女は、私の三つばかり左の席があいてい
たので、そこへ自分の小さな黒皮のハンドバ
ッグとうす紫いろのシボリの風呂敷包みとを
キチンと並べて置き、自分自身は素足につ、
かけたままあたらしいゲタでつま先立ち、両
手をいっぱい伸ばして、それぞれの手に一つ
ずつ吊り皮を握っていた。異常なほど背が低
いので彼女の腕は両の耳をかくすようにまっ
すく上に伸ばされていたから、着物の袖は肘
よりもいっそう肩の近くまでズリさがってし
まい、あらわになつた彼女の細い骨ばつた白
い腕が、彼女の上品な着物のかもしだす雰
気とひどくチグハグな印象をあたえた。そう
いえば、タビをはいていない素足というのも
妙であった。

おまけに彼女は、その二つの腕でしっかり
と吊り皮を握りしめながら、ちょうど女の子
がブランコを楽しんでいるように、足と腰で
調子をとりながら、からだを前のめりにした
かと思うと今度はうんと背中をそらせたりし
はじめた。そうしながら彼女はうたいつづ
けた。

はじめは、電車の走る響きで、かすかに止
絶えとだえしながらそれは聞こえていたのだ
が、やがて段々大きくなり、力づくになり、

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 編
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新た
に詩八篇、散文五篇、雑二篇、
書簡三十二通の多くを加え、作
品年譜その他の不明に属した部
分を解明、誤謬を訂正した豪華
決定版。四月下旬刊行予定。

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉四
報替 京都 一〇三

絶版 福地邦樹詩集 果樹園社 ¥300	田中克己 ¥1200 漢詩大系 白楽天 集英社	浅野 晃 ¥870 天と海 英靈に捧げる七十二章 翼書院	吉本青司 ¥500 標的 金高堂	小高根二郎 ¥2400 詩人、その生涯と運命 新潮社	森 亮 ¥300 東洋文庫 白居易詩鈔 平凡社
------------------------------	-------------------------------------	--	---------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------

果樹園 一二号 昭和四十一年三月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

何もかもが、私にはまるで分らずじまいだ。その日一日、私にはだ、っぴろい東京のまちがいっそう広漠として目につり、すべての道々には黒々といっぱいの人々の流れがふくれ、ゆれうごめいてやめなかった。

書簡 (蓮田善明宛はがき一通)

伊東 静雄

昭和十七年十一月一日

堺市北三国ヶ丘町一丁目四〇より、東京市世田谷区宇奈根八四連田善明宛(はがき)

先日はお葉書有難うございました。御無沙汰のみしてゐます、御活躍の御模様は新聞雑誌を通じて拝見し、意を強うしてゐます。池田さんはその後どんな塩梅でせう、心配してゐます。このごろ私は大へん健康にて、ひそかに詩も書き、書も読んでゐるといつた生活をしてゐますから乍他事御安心下さい。詩必ずお送りしたいと思います。締切近くも一度御催促下さいませんか、(その前にお送りしたいと思ひますが)。弟はこんどラングーンに参ります。

編集後記

一月十六日。集英社の出版部長金沢一氏から、この五月より刊行される「日本文学全集」全八巻の中の一巻が、

果樹園 第二二二号(毎月一回一日発行)
昭和四十一年三月一日発行
編集者 小高根二郎
池田市石橋二丁目六ノ五
印刷所 元市印刷株式会社
大阪府東住吉区桑津町五ノ八
発行所 果樹園社
池田市石橋二丁目六ノ五
定価 四十円 送料 十円

果樹園

第122号

蓮田善明とその死	小高根二郎	朝	田中克己
ヘリック詩抄	森 亮	黒と青	大村直子
菜たねの花を	吉本青司	トラククル詩抄	平井俊夫
武 藏 野	萩本家義	桐のはな	堀口太平
		帰りの来	服部三樹子
		伊東静雄研究文献考	小川和佑

果樹園 一二号 昭和四十一年四月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

蓮田善明とその死(二五)

小高根二郎

難所を逃れた蓮田はついに高原の上に出た。なだらかに登っているその果てに、黄色い休軀をした山容は豊かに波打ちながら、青空と太古の会話を交していた。幾つかの峯は薄く雪を刷いているのもあった。振り返ると真側を見せた外輪山が日のかげった豁谷を穿ってつらなっていた。しばらく行くと道が、右手の尖った峯と、その左手奥に丸く聳えた峯との間あたりへ辿らしかつた。やがて深く窪んだ溪の奥に、丸い大きな峯の蔭になって、それらしい屋根が幾つか疲れた蓮田の視野に入ってきた。

コギトの思ひ出 田中克己
朝 大村直子
黒と青 浅野 晃
トラククル詩抄 平井俊夫
桐のはな 堀口太平
帰りの来 服部三樹子
伊東静雄研究文献考 小川和佑

た。本館の客は宿つきといつて賄付きたが、別棟は自炊寮の形式で、県下や山越えに宮崎県からくる農家の湯治客に当てられていた。この事情は蓮田が訪れた二十五年前も今も変っていない。本館には都会風な新館が最近増築されてはいたが、自炊寮の方も増築されたりしく、湯元ちかくの庭隅に渡廊下もないバラックの別棟があった。開けっぴろげのそこには、土褐色に焦げた農家の爺さん婆さんが一杯に詰って、景気づけらしい何かいか、わしい唄を唄んに合唱していた。垂玉温泉では数少ない宿つきより、圧倒的な多数であるこれら自炊組の方が、主賓のように幅を

垂玉温泉の山口旅館は、衝き当りの山の懸崖と、その懸崖にかゝる金竜・白糸の両滝が切り開いた豁谷とが目こぼれをくれた山麓の余地に建てられていた。二階建ての本館は、豁谷から城石のように組み上げられた石垣の上にもちよこなんと置かれていた。その本館から檜の生えた南の山麓沿いに、渡廊下で連絡がつけられている粗末なトタン屋根の別棟——二階屋と幾つかの平屋とがあっ



南阿蘇の垂玉温泉山口旅館

かせている。

蓮田が案内された部屋は二階南側の端であった。粗製の四枚障子で縁と区切られた六畳には、青いが安手の畳が敷かれていた。床の間にはありふれた山水の軸が、斜めに傾きながら床板についてたるんでいた。床の上にはさらにペンキ絵の富士山と水に松原の横額がか、つていた。間にあわせの焼物の火鉢。変に凝った茶道具。この物憂く貧しい過剰な空間に蓮田は案内されたのである。

浴場は三ヶ所にある。蓮田の「有心」によると、本館の玄関を出て広い廊下に導かれたところに脳や胃腸に利くという本湯がある。蓮田の部屋の真下の石垣は一部トンネルになっていて、それを潜ってゆくと溪の途中に皮膚病に効く硫黄泉がある。さらに庭の南隅には神経痛によいという白い湯の石膏泉があることになっている。この三泉は今にあるが、蓮田の解説するところとは少し違っている。

本湯は本館の玄関の真向いになるが、玄関がその後には拡張されたりしく、位置が蓮田の記述するところより近くなっている。トンネルをくぐってゆく硫黄泉は、今は油湯又は新湯と呼ばれている。思いなしか硫黄泉らしくない。庭の南隅にあるという石膏泉は、これもまた全く反対の北隅にあって、橋を渡って路

を戻ったところにある白米の滝の真下、滝壺に当る浅い岩間である。蓮田の記述する白い湯ではなく透明の湯で、岩風呂と今呼ばれている。本湯を除き、後の二泉は露天である。

この相違は「有心」が小説であるがための若干の修正修飾かと想像した。が、昭和二十八年六月末の九州大洪水の際、この三泉もことごとく岩石土砂に埋没するところとなりその復旧に改めて泉源が開きくされたそうであるから、この相違も或いは当然であるかもしれない。

蓮田は当初本湯しか知らなかった。本湯の入口には半円筒の衝立様の仕切りがあって、男湯女湯を区別している。その衝立の上部の縁には、垂玉を型った半円の水筒模様が横につらなっている。又、衝立の胴真ん中には、垂玉の二字を一つの田型の図案に抽象して浮き出させている。今は風化してみすぼらしいが、恐らく風水害前……いや蓮田が訪れた頃には、いさ、か毒々しい華やかな化粧仕立てに磨きあげてあったに相違ない。「混泥土とタイルのあくどい装置の浴場」と蓮田は評していることで、それと察しがつく。

蓮田は本館前の本湯で「目差の和やかさ懐しさは、思はず……一寸会釈させずにおおなかつた」一老人と一緒にあったのであった。

小池 玲子 詩集

赤い木馬

東京都新宿区山吹町一

黄 土 社

¥ 600

みると一本の額の皺にも、実正な働きの間歴が年数をかけて美しく刻まれてゐるのが見えた。それは生き生きしてゐた。唯手拭を扱ってゐる手の指が太くずんぐりして、

ヘリック 詩抄(五十九)

森 亮

眼

ぼくのために天空をつくってほしい。

そこに大小さまざまの球をはめるのだ。

まともに流れ込む直線を幾すぢも引け。それ

に斜線の流し目も。

昼夜を舎かぬ運行と牽引親和の力を与へ、羊

や蟹や天秤を並べよ。

軽装馬車とそれを走らせる太陽神がほしい。

かれに黄道十二宮を駆けめぐらせるのだ。

お次は寒帯や温帯を敷き、回帰線二本で熱帯

をかこめ。

そこには一年中の季節季節を取りそろへても

らほう。

日没と、それから夜も頼みませ。

それが纏うた悦びの毛織ものを轟立てた

明るい顔の朝のひかりもよこしておくれ。

その全く技巧のない形には中では畸形なほど

のものがあつた。しかし卑しはなかつた」

差らいながら浴槽の隅からしている蓮田の

この凝視には、まだ意識的ではないが、汽車

それらに加へて雨を降らせる雲をよびよせ、

降っての後はどうでも晴天が見せてほしい。

さて素晴らしい工匠よ、このやうに

あなたが品を尽くして天空を荘厳した暁は

ああそのとき、この手の込んだ天空は

ほかでもない、ぼくの好きなコリイナが眼に

そっくり。

ヘリックが文学の師と仰いだのはベン・ジョン

ンであつたが、そのジョンソンと同年輩の人にテ

ヨン・ダンがゐた。ダンは譬喩な比喩と着想に富

む詩を書いた偉材で、やがて亞流が生じてメタフ

イジカル・ポウエツツと呼ばれる。ヘリックは

このメタフイジカルの傾向は殆ど見られないが、

ここに紹介する「眼」(一三三)などは数少ない

例外と言へようか。それも紛ひもの程度で木式と

太陽や月や遊星が通ると考へられてゐた天球上の

球帯で、白羊宮、巨蟹宮、天秤宮などの十二宮に

等分されてゐた。

の中から読み継いでいるあのロダンのまなび

がある。いや、ロダンに学んだリルケへのま

ねびがある。

ほどよく温もつた蓮田はほとほりを冷まし

に石廊下に出た。岩風呂のある竜電・白米の

滝の方から雪交りの頃合いな風がくるからで

ある。しばらく涼んでみると、そこに下駄の

音がして、振り返ると二十前の娘がやってき

た。見馴れぬ印象的な顔である。少年の頃、

故郷で見たことのある、そんな顔である。

「ひつつめ髪にした木綿衣にくるんだ体は

丸々し、目はちぎれるほど肥えた頬の肉

におしよせられて細くなりながら、その中

で黒く澄んで光り、頬や耳は、もう湯に温

まりでもした後のやうに血の色が皮膚の裏

に赤く透いて艶々してゐた。」

そんな娘である。蓮田はこの娘に、「美し

いといふより何か他のもの」「別な力で圧倒

してくるやうな何か」を強く印象づけられた

のである。それはさきほどの浴場の老年の男

女達にも感じた「何か或る意外なもの、分つ

てはゐるが今までの自分の世界に遠ざかつた

もので、目が見ながら、その形に視線が直接

に焦点を与へないもの」であることに気がつ

いたのである。それが何であるか？ 蓮田は

暗い部屋に戻ってからも考えた。炭を火鉢に

ついたり、茶をのんだり、炭のはぜる音や鉄瓶のたぎる音を聞きながら、障子を鳴らして外部から押し寄せようとするものに身構えるようにして考えつづけていたのである。それはロダンとか、わりがありそうな気がしてきた。

「ロダン」にも、否、「ロダン」は唯一つの自分へのつながりであった。自分は活潑に「ロダン」に、或る場所では反撻さへしつつ、反応して行つた。しかし「ロダン」の、純粹な生の光り溢れる像が、生き／＼して生を呼吸してゐるといふよりも、それが余りに生々しいものがあるのに、時々追いつけなくなつてしまつた。」

「ロダン」は、先づ人間の身体の間違ひのない認識が肝要だといふことを知つてゐた。徐々に探求しながら、彼は人間の面 Oberflache へまで進んで来てゐた。そして今や外から一つの手が伸びてきて、その手がこの面を、別の側面から、それが内部からさ

うされたと全く同様に精確に決定し、限定した。彼がその遠隔な道をゆけばゆくほど、益々偶然は後にとり残された。そして一つの法則は他の法則へと彼を導いて行つた。結局彼の研究の向つて行つたのがこの面なのであつた。面は、光と物との無限に多くの出会から出来てゐた。そして、この出会いの何れも異つたものであつたこと、またそれぞれ注意すべきものであつたことが分つた。この箇所では光と物とは互ひに迎へ合ふやうに見えた。あの箇所では躊躇しながら挨拶し合ふやうに見えた。第三の箇所ではよそよそしく互ひに通る過ぎるやうに見えた。そしてかうした場所が果しなくあつた。そして何事が起つてゐない場所はない。空所といふものはなかつたのだ。」

(世界文庫リルケ「ロダン」石中象詩歌 昭和十五年弘文堂刊 現新潮文庫)

つまり、蓮田が老年の男女の湯治者や娘に強く印象づけられた「目が見ながら、その形に視線が直接に焦点を与へないもの」とは、このロダンの面であつたのである。ロダンの芸術の根本要素—細胞としての面、生命としての面だつたのだ。

その時である。蓮田の目の前の安手の四枚障子が、突然：蓮田に「何か思ひ出させはじめてゐること」を意識させたのは……。

「それは、障子に、いきなり日光が、太陽からの直接の光線が刺すやうに流れてきて、熱いやうな強さでさつと照らした時であつた。それは一抱へ位の大きさでしかなかつたがその銀のやうに耀やく光が障子にさすと、部屋の空気は一瞬にして戦慄して、破裂するやうに明るくなり、胸が揉み込まれるやうな痛さで反応した時であつた。障子は外側からその強い光を受けとめて、紙といふよりもその光そのもののやうに澄んで、素直に耀きながら、その直接光線を室の中にはそのままに透さずに、異つた明るさの色をいぢめんに室の中に放つて、恰度或る印象が人の心の中に熱い何かのやうに一杯に充ちるやうに、一つの世界と仕出すのであつた。それはガラスの為すこととはひどく違つたものであつた。内からは外の光りも、又障子に吹きつけてガタ／＼鳴らしてゐる風も、カサカサと、風に交つてくる

凍つた雪片も、見ることも触れることも出来ず、而も表に感受したものをすぐその裏に、生々しくない何ものかとして伝へてゐた。中に居て、障子が受けた光や風や雪は悉く取り集められてその消息を内に伝へら

菜たねの花を

吉本青司

ある朝 あなたは
わたしの本に はばいた
光の銀をまきながら

あなたは ためらいがちに
本のページをめくつた
その白いうすぎぬの羽で

かつて あなたの歌は
きびしく かなしみにみち
そのため むしろ
傷つていなければならなかつた

あなたの目の真珠は
くろい空の玄関のように沈黙し

れ、外の生々しさと離れてゐながら、却つてその全部を雰囲気として単純化して身に感じさせるものであつた。それは気づいてみると不思議な珍しいものであつた。殆どそれ自身厚身のない紙一重のうす手の道具

それをくぐるとき わたしは
はげしい 光にやかれた

ひとりの日の プシケのように
あなたは いつも
白い羽を背おっているがいい
わたしは 読みさしの
本のページに 菜たねの花を
忘れないうでおう

輻射

空の上から しきりに
巣箱をさがす鳩のきもちが
こんな風ではないだろうか

天上の花を読みたくて ぼくは
きょうS誌を購つた

でそれはあつた。無いといつてもいい位のものであつた。もし外からそれを見る時は、唯外界を単調に反射してゐるだけのもので、外から障子の中を覗き見ることは出来なかつた。しかしその裏には非常に鋭敏で

それは
A賞の作品よりも ずっと
ぼくには哀感を与えた

ぼくは改めて
△文学とは何だろう▽
と考へた

執着にも似たあなたの愛が
ぼくの眼をまったく いっつきに
ことばの向こうに誘導した

△換言すれば著者は、すべての芸術的
意図と芸術的野心を廃棄し、単に「心
のまま」に……▽

氷島のことばを引いて
手紙を書いた

静かなものを息つかせつつ抱いてゐた。それは多少外界よりも内側を暗くした。しかしそのために内側のものは硬化することを避けて柔かい深い陰翳を生じ、みだりがましい外界の侵入を防ぎとめ、又内側のものの溢りな逸脱をも制止した。否、それは外から之を見る時も奥深さと平和な内なるものの眼差を外界の者に与へ、それが細い木で小さな目を組んで支へられてゐる僅か紙一重のうす手のものなどといふ印象でなく、その内部のはかり難い深味そのもの面として印象づけられる。しかしそれは決して建築の全部面に於いて広すぎる程に空間を独占したりするものではない。ほんの一部分、その建築のために光を採り入れる一部分に直線的に平面をとつてゐるにすぎない。それは取り外したり、あけられて自分を更にその空間からそつと謙虚に引き退いてゐる時もある。無理な抵抗などはしない、むしろ破れ易くさへある。それは緑の端の雨戸の位置まで出張らうとはしない、軒の下に少し陰になつた所に、しかし内なる部屋を早屈に押し狭めたりしない位置に立つてゐる。」

感応したのである。しかし、彼が感応したについては、障子も光も、彼の感応の本質的な素質ともいふべき、白色であつたことに理由があるかもしれない。

「それはあつと声を立てさせる突然さで、その暗い室に、前触れのない、白く、明るさが不意に音もなく室内に充ちこんで来た。この侵入は何の抵抗の暇も与へなかつた。思はず壁から室の奥へ呆然と視線を走らせてその白光の滲透を追ひかけようとした。と間髪を入れぬ素早さで又さつと障子が一段と明るんだ。見る見るうちにその透つた大理石のやうな明るさは先ず障子を眩いほど染め、それから室内の淀んだ暗を濾過して、隅々まで明るい朝の光に変へてしまつた。日が崖の上を上り出たのであろう。」

この白い光と白い障子の照応は、蓮田の嗜好という心の隙から内部に滲透して、思考の場をつくつたのである。

「時々室内は不意に花が萎まるやうに暗くなつたり、又緊縛を解かれたやうに明るさをとり返したりしたが、この光線の変転はその度毎に、吸ひつけるやうに、自分を動かし、その都度何か探るやうに周囲を見廻し、同時にその自分の目が自分の中に差し向けられてもゐることを意識しだしてゐた。」

伊東静雄全集

(全一卷)

増補・改訂・決定版

桑原 武夫
小高根 二郎
富士 正晴
共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文五篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華決定版。四月下旬刊行予定。

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一〇〇三

武蔵野

萩本家義

村外れの祠の、色あせた朱塗りの鳥居はどこに

幹が赤い松の木

林があつて

松の枯葉が、こぼれていた

その林の片隅に、ささやかな墓地があつて

苔むした小さな石たちが

ひっそりと並んでいた

翡翠妙織禪女――

どこの家の、誰のお墓か知らないが

そんな美しい戒名の

彫られた石もあつた

松林から抜けると、細い道は

こんどは、葉の落ちつくした

雑木林の中を

思い出のようにくねり曲つて
遠く部落の方へ続いていた

この意識がリルケの文章の中を彷徨し、挿入されたロダンの彫刻の写真――「劫初の人」「鼻のつぶれた男」「考える人」「バルザック」「エヴァ」等の上に留つて、その核心に喰ひ込もうとしつ、ついに上滑りしたのであつた。その上滑りした蓮田の眼が、前述した浴場での男女裸体の対比観に焦点を結び、結論として面におけるロダン・障子相似論に展開したのではないかと想われる。

こゝに、いさゝか煩わしいまでに私の筆が低回をよぎなくしているわけは、なんとなく書かれたこの蓮田の障子論の中に、彼に遁世を思い立たすまで蠢感している「無」の正体が、潜んでいると想われるからである。

「何か苦しいばかり自分の思念の比喩を試みてゐることに気づいた。そして此の比喩が、遂に、障子の「無」に観念的に陥ちかけて、哲学者めいた、乾いた思念が目につけてきた時、ふつと我に返ると共に、その安易な「無」の観念から自分をもぎ取らうとして苦しんだ。」

つまり、こゝで蓮田が障子に「無」を見てゐるのは、建築の道具だてのなかの微妙さの極致一言わば「教奇」を感応しかけてゐるからなのである。唐木順三氏は、長明の出家遁

世を論じて「世も人もあけてはかばかしく没落への急傾斜を転んでゆくとき、世の人から離れた山中や叢林のなかに隠れて、ひとりおのが教奇に身を任せて身を養ふ生活、それが即ち「方丈の榮華」であつた」(「無情」昭和三九年、筑摩書房刊)と言っているが、その遁世の原動力である「教奇」を蓮田は感応しかけ、その感応の呪縛から、われとわが身をふりほどこうとしているように見受けける。華奢な障子の升目は網となつて蓮田を包もうとし、「これがもぎ取れなければ、この室を出まい」と決心して、「無」と「教奇」とに格闘しているのである。

コギトの思ひ出

中克己

前掲の履歴書をかいたのは、秋季皇霊祭と呼ばれたいまの秋分の日休みである。この日、妻子は住吉区にゐたわたしの父母のところへゆき、留守番のたいくつまぎれに書いたのであらう。この夜は近くゐて、京大の哲学(西田哲学、田辺哲学の優秀だつたことは前代未聞であつた)を中島、松下に一年おくられて卒業したが、同じく職なく、東大の法科に入りなほしてゐた沢田直也君である(この

人はいまも健在で大阪で有数の弁護士になつてゐる。

翌日、登校すると好きだつた饗庭君の後任に温和な吉野さんといふ青年が赴任して挨拶された。わたしはこの人ともすぐ仲好しになつたが、今はどうしてゐるか、最近もらつた同窓会名簿の旧職員の欄にも名さへ挙つてゐない。この日の午後は天理高女につとめながら、旧制大阪高校の東側に引越して来てゐた杉浦正一郎を訪ねてゐる。用もなければ話も文学関係ではなかつたらう。旧知の奥さんも挨拶に出られたが、わたしとちがつてまだお子さんはないので、若々しく気楽さうであつた。たぶんわたしは東京の「良かった」ことを話したのであらう。わたしが翌年、上京すると、彼も上京して千代田女専に転任し、翌年やつと長女藍子さんをまうけるのだが、彼ののこしたのは更に莫大な冊数をもつ天理図書館の国文学関係図書（綿屋文庫と呼ばれる）であつたことは二十年後にその図書館につとめて、はじめてわたしは目を見つけたのである。天下の秘本そと曾良の「奥の細道随日記」を見つけたことなどは、死ぬまでわたしには話さなかつた。よほど国文学のわからぬ男とも思つてゐたのであらう。

この年七月七日に華北で戦争がはじまつた

ことは前述した。八月には上海でも戦争がはじまつて、同僚松根実君の崇拜してゐた文学座の俳優友田恭助が出征したことは新聞で承知してゐたが、帰ると召集が相次いで剣道の教師（当時は正課だつたのである）富樫氏といふ六段の人も出征してゐた。教育も新体制といふのが叫ばれて盛んにその意味の会議がある。十月一日、雨の降る日だつたが、会議をおへて教員室にもどると、隣席の数学教師牧（仮名）氏が質問した。氏は数十校を歴任したあとこの中学の講師となつて来てゐる人で、もとより会議には出られないのである。

「田中君、けふの職員会議は何の事だつたのかね」

「国民精神総動員といふことのためです」

「総動員つて何かね。わしや金もらへればやがるが、くれなけりや出来んぞ」

「金と関係ありませんよ。職務を熱心にやつたら国民精神が揚るんだとのことです」

「わしは出来ん。わしのこの講師といふ地位を見る。それに月給が安いことつたら何だ」

「わたしはここで怒を發した。この人は数学の先生だからかしのれないが、非常にケチだつたのである。月末のツケにうどん屋と口論することがある。当時一杯六錢だつたすう、どんしか食へないでその回数が多くつけてあつた

三枝 康 高 著

国学の運動

¥ 3,200

文学的運動としての国学―生きた全体としての国学を再検討しようとする新しい試み

東京都千代田区神田神保町一之三

風間書房

というのでうどん屋をどなりつけたのである。数十回の転任もこれでいやがられたか、もしくは一円でも高い方へと動いたためか、いづれかであつたらう。月給はわたしが八十五円だつたのに対し三、四十円位だつたらしいが恩給はあり、それに生徒にきつい点をつけ、落第しさうになると自宅の塾に通はせて点を与へるのである。今はしらず、当時の教育者は自分の学校の生徒はアルバイトの対象になつたのである。この人が金のことをいひだしたら聞かないのが利口だが、わたしは二、三六以来愛国者になつてゐたので、喧嘩の相手になつてやつた。

「金の問題を教育者がいふのはをかしいですよ（「日教組よ、よくきけよ」）。」

「いやもうこれ以上はごめんだ、わしの地

位は低いし、月給は安い」

「あなたはいつともそればかり仰しやつてますが、わたしの前ではもう止めて下さい。聞くに耐へません。わたしが校長ならあなたクビになりますよ。」

かういつてわたしが教員室を出ようとする

と、牧氏（まだ生きてゐて八十以上だから、もう翁といふべきだが）は前に立ちふさがつて、

「たのむから校長になつてくれ」

といふ。わたしは

朝

大村直子

この都会では

太陽は知られずに昇る

いつのまにか痛々しい光が

いりくんだ屋根に落ちてゐる

はりだした窓のてすりに

朝顔の鉢は枯れはて

遠い過失が

今朝も胸にたぎる

ああ 灰いろの場所に隠れ住み

長いみなしこの夜をすこしながら

幾度となく 私

ありありとした太陽を夢みた

いつか再び みずいろの花咲く日

透徹のあなたの炎よ 燃えさかれ

そうして私を抱きとって

ついに私を無にしてほしい！

な。ともかくいつもの御不平だけはもうききたくありません」

といつて、教室へ掃除の監督にいつてしまつた。これも当時、常勤で担任クラスのある教員の仕事だつたのである。

さて教員室に帰つて来ると、牧氏はまだゐた。待つてゐたと見える。

「わしら二人は退職しよう」

「何をいふですか、わたしは退職する理由なんかありませんよ」

「喧嘩両成敗といふぢやないか」

「何をおつしやる。あなたが喧嘩なかつたの

な。ともかくいつもの御不平だけはもうききたくありません」

といつて、教室へ掃除の監督にいつてしまつた。これも当時、常勤で担任クラスのある教員の仕事だつたのである。

さて教員室に帰つて来ると、牧氏はまだゐた。待つてゐたと見える。

「わしら二人は退職しよう」

「何をいふですか、わたしは退職する理由なんかありませんよ」

「喧嘩両成敗といふぢやないか」

「何をおつしやる。あなたが喧嘩なかつたの

な。ともかくいつもの御不平だけはもうききたくありません」

といつて、教室へ掃除の監督にいつてしまつた。これも当時、常勤で担任クラスのある教員の仕事だつたのである。

さて教員室に帰つて来ると、牧氏はまだゐた。待つてゐたと見える。

「わしら二人は退職しよう」

「何をいふですか、わたしは退職する理由なんかありませんよ」

「喧嘩両成敗といふぢやないか」

「何をおつしやる。あなたが喧嘩なかつたの

な。ともかくいつもの御不平だけはもうききたくありません」

伊東静雄研究文献考(一)

小川和佑

はじめに

従来、伊東静雄に関する研究文献には小高根二郎氏の労作「伊東静雄全集ノート」〔伊東静雄全集〕所収、昭三六・二人文書院〕及

び「伊東静雄参考文獻」(「詩人、その生涯と運命」所収、昭四〇・五新潮社)があるが、これに補足を加えて昭和四一年一月までに約一三〇余点の参考文獻がある。勿論この中には少数数発行の同人誌やサークル誌など掲載されたものでまだ未見のもの多数あるに違いない、また学習参考書、受験雑誌、実用(婦人)雑誌、文学辞典類などに所載された文獻は敢えて除外してある。

この中で、恐らく伊東静雄について論評された公刊物の中で最も古いものは、例の大札記念の脚本募集の入選発表に付された「美しい朋輩」の選評(昭三・一一「大阪の三越」四巻一―号)であろう。そして、またその詩を論じた最初のものは保田与重郎氏の「二人の詩人―田中克己への手紙」(昭九・一一「コギト」)であろうし、輝かしい「わがひとに与ふる哀歌」の評価を「コギト」を中心にした彼の詩友以外に支持したものは萩原朔太郎氏の「わがひとに与ふる哀歌―伊東静雄君の詩について」(昭二一・一一「コギト」)であった。

研究史の上から見ればこれらの地点から、鈴木享氏の「春のいそぎ」(昭一九・六「四季」八一号)の書評まで、即ち昭和二〇年八月以前を第一期とし、第二期は大山定一氏の

「歌詩の問題をめぐって―伊東静雄氏への手紙」(昭二二・二「文学ノート」)から、その死をめぐって「祖国」(昭二八・七)「伊東静雄追悼号」前後まで、そして、以後小高根二郎氏の大著「詩人、その生涯と運命」(昭四〇・五新潮社)を頂点とするこの詩人に対する再検討、再評価を含めて、様々な諸問題が新たな角度から提起される第三期に分けられると思う。

以下、これらを項目別にその中の主要なものについて触れながら研究の展望と課題のあらましを述べて行きたい。なお、近く刊行される「伊東静雄全集」再版には三たび小高根二郎氏によって新たに補筆を加えたものが付される予定と仄聞している。これらによって今後、伊東静雄研究は更に一步前進を加えることになるであろう。

① 単行本・雑誌特集号

〔単行本〕単行本では、前出の小高根二郎氏の「詩人、その生涯と運命」が詩人に関する現在までの唯一のものである。この論考は昭和三年一月より昭和三九年八月までの「果樹園」(③の項で詳述)に連載された論を収めたものであり、氏の詩人に対する愛惜と友情の厚さと情熱に支えられたものであり、こ

萩原葉子随筆集
うぬぼれ鏡
¥ 420
これらの文章の奥に光っている眼は、ただの女の目ではない。……やはり父子相伝の資質というものには、動かしがたいところがある。
(吉行淳之介)
東京都文京区関口町一
大和書房

の一冊によって伊東静雄という詩人の人と作品が評述され尽くしている。その後記の次の一節はこの一冊の著者の意図のすべてが語られていよう。

「……伊東静雄の青春から晩年に及ぶ――その精神の歷程と肉体の足跡を克明に書きしるすことになった。併せて、その間に純粹すぎたために亡びねばならなかった辻野久憲、中原中也、立原道造……剛毅であったが故に死んでゆかねばならなかった蓮田善明等との交渉を時代の鎮魂として書き留めておく義務を感じたからである。」(後記)

この大著は以後、長く伊東静雄研究上、欠くことのできない一冊となるであろうし、また以後、これを上廻る詳細な伝記的研究は望めないであろう。

〔雑誌特集号〕次いで、雑誌特集号は一四冊、その中戦前のものは三冊。他一冊は伊東の四冊の追悼号を含めて皆詩人の死後に発行されたものである。

て置く。(その内容については③に詳述)最も古いものは「コギト」(わがひとに与ふる哀歌出版記念号)〔昭一一・一一〕で、この号には前出朔太郎の評が掲載されている外、保田与重郎氏のものがあり、これは後述の「本

黒と青

浅野 晃

黒の覆面の一団はあらゆるものを
黒い手で黒く塗りつぶした
暑さも寒さも地震も台風も
黒い手で飼ひならされた
黒の支配は甘い香気と愛撫とで
心情を眠りこませた
黒い世界では雪も黒とされた
黒い王国には平和のみがあつた

しかし彼等にも夜を黒く塗りつぶすことは
できない

太陽を追放し月や星を封じこめても
そこには青い宙が残る
燐のやうにそれは光る
闇の底は青く

黒い手も燐に染まつた
すべての鐘が相触れて鳴り出すと
波は青い震動を伝へた

青は光であつた
無数の天休は輝くことをやめなかつた
木の芽も草の芽も黒いままに
青く光る
黒の手先が青く光るのだ
海は黒のなかで青く動いた
黒は青い夜明けの誕生を妨げることができ
ない

青い闇よ
原始の闇よ
すべてを忍んでゐるものよ
そこからすべてが出て来た母胎よ
黒の手がどんなに黒い頭脳を働かさうと
青い闇を塗りつぶすことはできない。

第八号に再掲されている。「文芸文化」には
△夏花出版記念号V(昭一五・六)△透谷賞
記念号V(昭一七・八)の以上三冊であるが
伊東の戦前に刊行された三冊の詩集研究の上
に欠かすことのできない資料である。

戦後のものは先ず、第二期に当る追悼号の
四冊。―即ち「河」(昭二八・六)「詩学」
(昭二八・六)「祖国」(昭二八・七)「果
樹園」第三号(昭三一・三)で、これらの執
筆者は詩人に親しいものたちの執筆になるも
のであるが、その中では旧師酒井小太郎氏の
「伊東静雄君に就て」(「河」)や大村中学
時代以来の詩友蒲池敏一氏の「旧友伊東静雄」
(「詩学」)、住吉中学勤務時代の教え子西
垣脩氏の「朝顔」(「祖国」)「本」八号)
「教室における伊東先生」(「果樹園」)、
伊東花子の「病床記」(「祖国」)等は伝記
研究者にとっては一説を要するエッセイであ
る。

この追悼号を読むとき伊東ほどの詩人であ
りながら、その追悼号は四冊、その中三冊ま
でが関西方面の雑誌で、東京方面の雑誌では
僅かに「詩学」一冊のみである。伊東よりも
「四季」では遙かに後輩であった野村英夫な
どは「人間」「高原」「文明」「詩学」等の
有力誌に追悼号のあったことと比較すると、

西側でのと東側のそれとの伊東静雄という詩人に対する認識の落差を思わせるものがあるさて、その後 七冊中、四冊までは小高根氏編集の「果樹園」で、即ち八伊東静雄七周忌記念号V(昭三四・三)八伊東静雄全集上梓記念号V(昭三五・一〇)八伊東静雄特輯V(昭三九・六)八伊東静雄特輯V(昭四

〇・三)等である。ここにも小高根氏の並々ならぬ詩人への愛惜がうかがわれる。これら特集には主として詩人に対する追憶が語られているが、その中で飛鷹節の「伊東静雄とリルケ」は「反響」以後の詩風、特にリルケの撰取といった角度から注目してよい論考である。その他には、これも関西の雑誌「人

間」(昭三六・七一同・一二)の二回に涉つて八伊東静雄研究特集Vを発行している。ここで特に挙げられるのは小高根二郎氏の「哀歌の傍証」(その二)と、富士正晴氏を中心とした「座談会・伊東静雄の断面」(その一)である。また「その一」に付された詩人たちのアンケートも詩人に対する今日的な

死の七つの歌

トラークル
平井俊夫訳

幼くて死んだ人に

おお 黒い天使が樹木のなかからひそやかに歩みでてきた

ほの青い泉水のふちで

夕暮 わたしらが優しい遊び友だちでいた

とき。

静かにわたしらは歩いてきた。秋の冷涼な

褐色のなかで腫はまるくひらき

おお 星たちは紫の甘美だった。

けれどそのかれはメンヒスベルクの石段を降りていった。

青いほおえみが顔にうかび そうして珍しい蘭のように

ひとときわ静かなかれの幼年にひきこもって死んだ。

庭にはこの友の銀の顔がのこり

葉むらや古い石のなかで耳をすましていた。

魂は死の歌をうたった。肉の緑の死滅をうた

い

そうしてそれは森のさわぐ音や

獣のいぢずな敷きの声になった。

暮れゆく塔のうえから青い晩鐘がいつまでも響いていた。

時がきた。太陽のなかに影がやどり

枯れた枝のはざまに腐敗の影がみえた。

暮れおちる石垣のそばでつぐみが啼いた夕べ

幼くて死んだ人の霊が部屋にそつと姿をみせ

霊の黄昏

静かに森の緑にあらわれる

一匹の暗い獣。

丘に夕風のそよぎがやむ。

つぐみの啼き声がたえて

この秋の優しい笛のおとは

葎のなかで沈黙する。

黒い雲にうかび

罌粟に酔っておまえはとおつてゆく

夜の池を

星の空を。

妹の月になった声がひびいてくる

この霊の夜に。

おお 人間の出生。夜

青い水が岩の谷底でざわめき

墮天使が姿を映して歎息する。

重苦しい部屋で蒼白のものが目ざめ

二つの月か

石となった老婆の両眼が光っている。

ああ 産婦の叫び。黒い翼で

夜が嬰兒のこめかみに触れる。

雪 音もなく紫の雲から沈みおちる。

西欧の歌

出生

おお 魂が夜に羽搏たく――

昔 わたしら羊飼は暮れなすむ森のそばをと

おつた。

赤い獣 緑の花 わらう泉がつつましい伴侶

だった。

おお こおろぎが太古の歌をすたく。

生贄の石に血の花がひらき

池の緑のしじまを裂いた孤独な鳥の叫び。

おお 十字軍と肉を灼く殉教の痛みよ。

間」(昭三六・七一同・一二)の二回に涉つて八伊東静雄研究特集Vを発行している。

ここで特に挙げられるのは小高根二郎氏の「哀歌の傍証」(その二)と、富士正晴氏を中心とした「座談会・伊東静雄の断面」(その一)である。また「その一」に付された詩人たちのアンケートも詩人に対する今日的な

おお 鳴りひびく者の喉をあふれる血汐
青い花 おお 燃える涙
夜にむかって泣いた炎の涙よ。

金いろの雲と移る時よ。人けのない部屋の

なかで

おまえはいくどもこの死者を客に招く。

親密に語りつつ椀の下蔭をあてもなく緑

の川をくだってゆく。

紫の果実がおち

敬虔な使徒らが昔とおつた夕暮の庭を

傷と星の夢から眼ざめつつ兵士らが歩む。

おお 夜はやさしくも矢車草の花束。

おお 静寂と金いろの秋の時代よ。

わたしら修道士は心もはずかに紫の葡萄を

しぼり

まわりの丘と森が光にかがやいていた。

おお 狩猟と館。平安な夕べのときに

部屋のなかで人間は正しいことを思った。

沈黙の祈りにおち 神の生ける顔をせつに

求めていた。

おお 没落のこの苦い時間よ。

いま わたしらは黒い水のなかに石の顔を

みつめる。

だが愛に生きる人びとは光につつまれて銀

のまぶたをあけ

おお こうして一つの種族。燻香がばらの

褥から流れ

復活した人らの甘美な歌。

関心がうかがわれて面白かった。

麦書房発行の「本」第八号(伊東静雄・特集V(昭三九・九)は既刊の雑誌論文の再録と小高根二郎・鈴木亨・那珂太郎の諸氏の新稿を併せ、編集室編の「伊東静雄書誌」がある。これは伊東静雄詩集一覽であり、伊東静雄研究を卒業論文のテーマに選ぶ国文科の学生にとつては基本文献の一つである。

この右の書誌の中で未詳とされている「現代詩人集・第五卷」(山雅房)は昭一五・一〇刊で収録詩人は尾崎喜八・小熊秀雄・滝口武士・伊東静雄・蔵原伸二郎・北川冬彦の六人で、一巻より四巻までの収録メンバーに比較するとこの巻は拾遺という感じがしないでもない。なお、田中克己・神保光太郎等は第二巻に三好達治・津村信夫らと収められている。

またこの書誌記載以外のものは奥野健男解説の「昭和戦争文学全集・第四卷」に「春のいそぎ」の抄録が収められている。(これについては⑤に詳述)以上、一四冊いずれも一読の要があろう。殊に「コギト」「芸芸文化」「祖国」「果樹園」「本」の伊東関係論文掲載号は伊東の研究家には備えて置きたい基本文献である。なお、これら特集号文献目録一覽は「詩人、その生涯と運命」巻末に付されているので、同書を参照されたい。

桐のはな

堀口 太平

はながおちていたのでおおむいてみた
気がつかなかった桐の木だ
曇ったそらに白い日がかかっていた
妻が小走りにいそいできて
「眼鏡よ」とわたしてくれた
桐の木は

襟ふきのベンジンのようにかわいていた
バスを待たないで
雑木林をぬけていった

(四一、二、一七)

桐のはなのむらさきが朝の出がけにしみていた

medium だから
小企業主の胸もおどるのだ
林のなかに

まっしろなえこのはながさいていた
人間は人間というできごとにすぎないとい
ったのは
くるしまぎれにいったのだ
麦畑にでた

やりすぎたバスが
襷並木をはしっていった

(四一、二、一七)

② 単行本一部所載の論文エッセイ

この項に該当する関係図書は現在までに判明したものは二〇冊。この中に本格的な詩人論・作品論は収録されていない。ということでは伊東静雄研究は、むしろ今後にあるもので現在はその着手の段階であるといえようか。

【作品鑑賞】

この項目に該当するものは、最も古いものに蔵原伸二郎の「現代詩の解説と味い方」(昭二六・七瑞穂出版)で、以下、北川冬彦

精細なものに江頭氏のものがある。

「詩人論・エッセイ」これには大山定一氏の「文学ノート」江藤淳氏の「奴隷の思想を排す」(昭三三・一一文芸春秋新社)及び三好達治氏の「草上記」(昭三八・八新潮社)にはそれぞれ詩人について一文を草したエッセイが収められている。

「詩史・日本浪漫派・四季に関するもの」

帰り来て

服部 三樹子

帰り来て家並のうしろ山見ゆる古き都の寒しぐれかな

たらちねの母はいませど老いたまひひねもす火にぞあたりますなる

はらからのわが帰りしを喜こへば再び家を出でかねて思ふ

荒廃の都東京と言ひたまふ人の便りは謹しみて見つ

古き友ら電話たまへば故山の京に住むべく帰り来しわが

ゆくりなくバスに乗り来し友の顔の我がこゝろより老いてゐたまふ

詩史では吉田精一の「近代詩」(昭二五・一〇至文堂)に一項を設けてある外、三好達治氏が毎日ライブラリーの一冊「日本の詩歌」の一項として執筆した「現代詩概観」に取りあげられ、また同じく「詩を読む人のために」(昭三七・六至文堂)にも伊東に関する項がある。なお前者は後に平凡社の「世界教養全集」(昭三七・四平凡社)の一冊にも

いつときの寂しさゆえに帰り来て甘えむ母に甘えらるゝなり
新しき部屋をしつらへ迎へくるゝはらからはあれど我が居たらざり
旅人のごと東京を思い居り置きて我が来しものもあらぬを
東の間の落差に似たり東京と京の都のこゝろめぐり
たゞ思ふ天皇陛下無私にしておわしますなり日本東京

冷えきびしき京の寒気に怖じつゝ、ぞ女童の日の童話読みつぐ
迎へくるゝ人のみませば晩くして嫁しゆくことへの不思議にも似て
四十にして惑はずと云ふに似て雅な思ひに家出づるなり

再録されているが、三好氏のものも全部その全集に石原八束氏の解説で収録されている。

さて、「日本浪漫派」「四季」については、亀井勝一郎氏の「現代史の中のひとり」(昭三〇・一〇文芸春秋新社)、高見順氏の「昭和文壇盛衰史・下」(昭三三・一一文芸春秋新社)は文壇よりの発言。日本浪漫派に関する研究は三枝康高氏の「日本浪漫派の運動」(昭三四・二現代社)があり、その一項に「伊東静雄の抒情について」が収められ、橋川文三氏の「日本浪漫派批判」(昭三五・二未來社)昭四〇再刊)直接詩人について一項を設けてはいないがその思想を語るについては一読すべき図書である。その他に寺田透氏の「近代日本のことばと詩」(昭四〇・一一思潮社)には「四季側面観」「伊東静雄全集」の二項を含んでいる。

これらを詩史・思潮の上から扱えたものが「ユリイカ」に連載された大岡信氏の「昭和十年代の詩」であり、併せて「保田与重郎論ノート」も一読すべきである。これらは「抒情の批判」(昭三六・四晶文社)に収められ、その後「超現実と抒情」(昭四〇・一二晶文叢書)に再録されている。なお、日本浪漫派の解説には和泉あき氏が「近代文学研究必携」(昭三六・八学灯社)の中で一項

絶版
福地邦樹詩集

果樹園社

¥3000

田中克己 白楽天

集英社

¥12000

浅野 晃 天と海

翼書院

¥870

吉本青司 標的

金高堂

¥500

小高根二郎 詩人、その生涯と運命

新潮社

¥2400

森 亮 東洋文庫 白居易詩鈔

平凡社

¥3000

を設けて執筆している。

〔国語教科書関係のもの〕これを研究文献に加えることは当を得ないものであるが、現在の地点で国語教育から見た伊東静雄の詩という意味で敢えて一項を設けて見た。

昭和三七年度までの高等学校「国語、甲」に於ては伊東の詩は「羨望」（東京書籍版「国語甲」二）と「小さい手帳から」（大修館版「国語甲」一）の二社に採録されていたのみであった。（小中学校のものには採録なし。これも伊東の詩風からいって児童向きでないという点で首肯できる。）

その後の改訂指導要領による「現代国語」では次の四篇、即ち「有明海の思い出」（大修館版「現代国語」一）「夢からさめて」（大原出版「現代国語」一）「自然に、充分に自然に」（尚学図書版「現代国語」二）「夏の終り」（角川書店版「現代国語」二）「わがひとと与ふる哀歌」（三省堂版「現代国語」三）が採録されている。これら四書にはそれぞれ無署名ながら「教授指導書」があり、それには略業績、出典解題を付し、詳細な語釈・鑑賞及び参考文・主要参考文献が掲げられているので、伊東の作品別鑑賞に当って、鑑賞書の少ない今日、これらも研究資料の一つとして充分に活用できる書物である。

編集後記

二月二日。小池珍子さんの詩集「赤い木馬」をお父さんの松平氏からお送りいただいた。彼女は都立国立高校生であったが、昨年十七才の若さで自殺したのである。「明度」という作品に「私は何をしたらいいのだ？」と自然に食われてしまえVという句がある。自らの若死を運命づけた言葉のような気がしてならない。

二月四日。会員斎藤美穂氏から、昨年末の明治古書展で、伊東の「わがひとと与ふる哀歌」が四万五千円で落札されたとのことで、いさ、か拙論があふりすぎたのではなからうか？と、お小言をいたされた。その後新聞の伝えるところによると、透谷の「梵因之詩」が七十万円であったからだ、あなたが高すぎたともいえない。

二月十六日。「新潮」三月号の萩原葉子さんの「天上の花」三好達治抄を読んで感銘が深かった。三好さんが亡くなったとき拙誌に発表したが、すでに「新潮」に約束済みであった因縁の作品である。明太郎先生の妹の慶子さんは、先生の葬式当日にお目にか、ってその美しさに吃驚した記憶がある。一緒だった中河与一氏も「あの人是谁ですか？」と私に訊ねたことを覚えている。ご自分の「天の夕顔」の主人公でも見る思いをされたのだから、慶子さんがお岩に見るほど乱暴を加えた三好さんの狂気に、私はやっぱりそうだったのか……という感を新たにされた。伊東が生前に与えられた三好さんの精神的な乱暴を思い出したからである。

果樹園 第一二二号（毎月一回一日発行）

昭和四十一年四月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五
編集者 小高根二郎
発行者 元市印刷株式会社
大阪市東区桑津町五ノ八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料 十円

果樹園 第一二二号 昭和四十一年四月一日発行（毎月一回一日発行）
池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園 第123号

蓮田善明とその死 小高根二郎
夕 起 子 福地邦樹
流 し び な 大村直子
コギトの思ひ出 田中克己

拾 遺 道 吉本青司
車 夫 今井茂助
こぶし花咲く 浅野晃
トラークル詩抄 平井俊夫
伊東静雄研究文献考 小川和佑
ヘリック詩抄 森 亮
黄 塵 来 る 美堂正義
修 道 女 丸山 透

蓮田善明とその死(二六)

小高根二郎

蓮田は通走二日目で、もう敏子夫人に電話している。実家の師井医院に電話をかけ、すぐ稟の道を距てたところの留守宅から夫人を呼びだしたのである。

電話口に出たのは義妹の富代さんだった。風呂と水とは実家で貰っていたので、そのどちらかの用で折よく来合せていたのである。三十秒もた、ぬまに電話口に出た敏子さんに、蓮田はいぶかっている。

「どうしたんだ、大へん早かったじゃないか」

「え、」

「晶一はいいか、風邪の工合は」

「いいんですの。今日は起きてますわ。」

「熱は、もう熱はないか」

「もうありません。心配いりません——」

「昨日夕方着いたよ。おそくさ。こちらの駅に着いたらね」

「え？」

「こちらの停車場に着いたら自動車が出ない、道がとて悪いつてんで、バスが出ないんだよ。それでね、——分る？」

「え、分ります」

「歩いて来た。二時間ばかりかかる。晶一が来るといつてもこの道では、とても靴

があれではね、難しいよ。それに寒くて、とても退屈で。今日は雪が降っている。お

前達も一寸来れないよ。自動車が——。：

……湯は、いい湯だ。熱すぎもしないし、ぬるくもないし。」

「そう。……双眼鏡をお忘れになったのぢやないの。」

「双眼鏡？」

「お机の上に出してありましたわ。吃度お忘れになったのだから、晶一が言っていましたわ。貴方がよく忘れものをなさるので——」

「……………」

「双眼鏡、送りましょうか。」

「いいよ、送らなくても。晶一が一緒ならと思っ出て置いてください。」

「では送らなくてもいいですね。——それだけですわ。御用は。」

「……………」

「ほかに御用ありませんの。」

「うん」

「では、さようなら。又ね——」

無事に着いたことを知らせる意味のほかに、なんとという目的もない……たゞ衝動だけが掛けてしまったようなこの電話は、結局「彼等は来てしまつてはならない」という拒絶の心の姿勢を、必死になって自分に言い聞かせたような結果に終っている。結局、未練なのである。

こゝに敏子夫人は、蓮田が双眼鏡を忘れたのではないかと注意しているが、「貴方がよく忘れものをなさるので——」というほど、習性となつてゐる遺失癖が、確かに蓮田にはあつたのである。そのよい例は、昭和十二年の夏の台湾から内地へ向う旅で「昨年のやうにうつかり、物を忘れたりほしないから御安心下されたし」と敏子夫人に旅信を出したはい、が、その後便ですぐ「心配かけた。これでは忘れものが二つ。一つは船中風呂から帰つたらパンツを忘れてゐたこと……」と訂正しなければならなかつたことでもそれと判る。蓮田の頭脳はいつも何か重大な一つことで占有されていて、その充盈・震幅の余波を喰つた些事は脳外に推し出されて忘れ物となるのである。この習癖も、白色や小球体に寄せる嗜好と共に、記憶すべき蓮田の一資質のように思われる。

蓮田は電話室を出ると宿の杉下駄をつっかけて白糸の滝下の岩風呂に向つた。雪が渦を巻いて煙のように風に吹き散らされた。その風は蓮田さえ揉み倒しそうな烈しさでドテラの背を叩いた。その煽りを喰つたように、蓮田は昨夜積つた雪がカチカチに凍つた道を五六十メートル……、橋を戻つて断崖の下へ向つた。「その浴場は幾分古ぼけてゐた。入

口の扉もガラスが壊れたままで、雪と風は容赦なく真向から乱入して、土間も下駄箱も白く雪であつた。真中から仕切りになつて二つに分れてゐるが、左の方の男湯に当る方は落ち湯は止まり……」とあるが、この男湯に当る方は水害の折に断崖からの落岩に埋まり、現存しているのは女湯の方だけのようである。もちろん、古ぼけた浴場は溢れた滝の奔流に押し流されて、その後の建造にかゝる現存の浴場は御堂のような格好で、内部は簡単な男女の脱衣場に仕切られ、入口には目かくしにムシロが垂れている。下駄箱は通り抜けになつてゐる土間の側面にしつらえられ、そこから自然石の階段を三間ばかり降りたところに、岩床の露天風呂が鷹揚に展けてゐる。

先客は中年の男三人と年とつた女一人だつた。「はは、寒いですナ」と先客の一人が笑いながら挨拶し、蓮田も「なかなか」(いかに)と苦笑で応えて湯に沈んだ。「こちらが温いですよ。そこはぬるくて——」と、老女が落ち湯のそばが温い由を案内してくれたのをしおに、「しかしまあいつまで入つても居れん。」と、席を譲るようになつて皆上つて了つた。蓮田は次第に温もつてくると、立つて半身を出したり、縁に一寸腰かけてみたりした。そうした彼に雪がチラチラ……と降りか、

たが、その冷たさもかえつて気持ちい、ほど温さに飽和した。あまり長湯をすると、かえつて身体毒になり、ときに卒倒する者もある……と、今朝がた老人に注意されたことを思い出して、蓮田は半身を湯から出して体を拭きにかゝつた。その時である。がたん！と戸が開いて、風雪と一緒に若い女が一人入つてきた。

「茶の堅縮の細いのが五六本つつ集まつてそれが一つの太編となつてゐる緑地の質素な固織の袷せに、無地に近い鉄色の羽織を無雑作に着た若い、今朝見た娘と同じ位の、しつかりした体の娘であつた。」

蓮田はとつさに肩まで湯に沈んだ。風の寒さと驚ろきのためである。娘は戸をしめると湯槽を視た。と、そこに蓮田を認めると明らかに躊躇の色を示した。しかし、いまさらとつてもどすもおかしい。と、いった風に思ひきつて下駄を脱ぐと、隣の湯の方へ隠れた。ところで隣の湯は、湯気こそ立っているが入れる温度ではない。そう思うと、蓮田は温もつた体を急いで拭くと脱衣場の上つた。娘は隣の脱衣場に向うむきに佇んで、帯だけ解くには解いたが、思い感つている様子であつた。蓮田は下駄をつっかける時、

「こちらに這入りなさい。そちらは駄目で

すよ。皆こちらに入っていますよ。」と、声をかけた。

「はい」
娘は顔だけふり向けてそう答えたが、蓮田が出てゆくのを待つ様子だつた。「血色のいい、目の黒い、元氣さうな娘で、その恥らつてゐる風に似ず、どこかあどけない遠慮ない表情」

夕起子

福地邦樹

試験の採点に邪魔にならぬようにと

朝早くから洗濯をしたあと

妻は娘をつれて友人の家へ遊びに行った

ひとりではしゃぎまわる

おしゃまな夕起子がいないので

狭い家もしんとしてよその家のようにだ

夕起子から逃げまわりながら採点するの

も困るが

こう静かでも気がぬけて

あまり能率もあがらない

この家に越してきてから

ふた冬を過して もう春がきている

をしてゐるのを、蓮田は見逃がしてゐない。

今朝見た娘は「ひつつめ髪、目ははちきれほど肥えた頬の肉におしよせられて細くなりながら、その中で黒く澄んで光り、頬や耳は、もう湯に温まりでもした後のやうに血の色が皮膚の裏に赤く透いて艶々」していた。共に皮膚には血が透いて血色がよいことと、目を

ここで生まれた夕起子も一年と二か月

この冬は三度も四十度の熱を出し

一度は夜中にひきつたりした

しかしもう春だ

成育は順調で 近所の子より

足も口も早いような気がする

にぎやかに片言をしゃべり

走りまわるので

ふた間の家はすっかり狭くなった

部屋のあちこちに

大の縫いぐるみや

ふくらんだ象のおもちゃ

小さな赤電話やらがころがっている

背に負われて勇んで出掛けた

二人の事を想像すると

ついあれこれと気が散ってしまうのだ

黒く光っていることが特長である。つまり、

これは蓮田が抱いていた美人の基礎条件だつたやうである。この健康美が彼の審美基準だつたと言えさうである。

そういえば、学校時代にテニスや陸上の選手をしてゐた敏子夫人は、頬に陽の色が匂い、眼はつづらで黒かつたに相違ない。その基準に注目して、蓮田が求婚したところであつたに違いない。昭和十二年の夏、その敏子夫人を台湾に留守させて、自分一人内地に遊んだ蓮田は、「こちらでも頬べたの赤い人を見ると美しいが仲々それが見当らない。子供の頃は、女の人などは所謂化粧ですつかり血色をかくしてゐる。白粉がとれると白粉やけをしてゐるといふ工合だ。」と、旅信を書きやつてゐた。これは貞淑に留守を守つてゐる敏子さんに、お前みたいな美人はあまり内地でも見かけない……という一種の愛想であると同時に、彼の審美基準、美人観を物語つてゐるとも言えよう。

少し私は岩風呂の脱衣室で蓮田が見掛けた娘にか、ずらわりすぎたようだが、彼女は実は今朝がた蓮田に温泉案内を語つたあの老人の娘であり、蓮田の「有心」形成に重要な人物となるからである。そういえば、蓮田は垂玉滞在中この親子としかまともな会話を交し

ていないのである。

「い、時機に湯を上った」。蓮田は安心したように自分に言いかけながら、水った道を本館までとつてもどすと、昨日からの疲れがどつ……と出てきたようで、床をとるとその中にもぐりこんだ。そうしてじっとしていると、体は温さに自足して、「もうここに来てから何日も経つたかのやうな気遣い感じがし」「戦地以来硬ばつてゐた体がもうすつかり柔くもみほぐされたやうなのかさ」が感じられてくるのであった。かつて彼の身を守つてくれた掩蓋壕の代りに、「無」と「数奇」の象徴であるはかない「障子が―破れ易い、紙一重の障子が外界に対して守つてゐてくれる」安心を感じたのであった。つまり、蓮田はこゝで改めて生還が意識されたのだろう。生きて母国日本に帰ってきた……という安堵は、入浴者たちの裸体が相互に感応し合う「好色」を蓮田が意識しえたことで、それと判断される。

「彼等の体は露骨である。あらはに好色でさへある。しかし厭らしさはない。一緒に異性が一つの温槽に浸つてゐる時、その年齢々々であらには好色に見える。あつかましいばかりに好色である時もある。」
「そいえば女中をからかうことを趣味にし

ている隣部屋の四十がらみの陽気な男が、「今頃は好か双達が入つてゐるだらう、俺も出かけよう」と汐どきをみて入湯にでかける好色さにも、蓮田は眉をひそめるところか、悪どさがない……と辯明さえしているのである。さきほど娘に湯槽を譲つて、「いい時機に湯を上つた」と安心したように自分に言いかけた蓮田の心理の底にあるものは、実は「好色」と裏腹な心情のようである。「好色」そのものに基いた安心だったのである。生にたつらなる思いであつたのである。

しかし蓮田にはすぐ反省が襲つてきた。好色を感応してよいのは、現実には肉体を使つてゐる彼等農夫だけではないのか？ 俺は肉体や、好色ではなく、思想にこそ感応しなればならない人間ではないのか？ その思想が湯の中から求められるともいふのか？ 思想といへば「現代文化」とか「新文化」とか鳴物入りで横行しているあれは一体なものか？ お題目だけの形式・形骸ではないのか？ 身を安全な所に退避させて、唱えている空念仏ではないのか？ 真の思想や形式は、絶望という反語的方法の中のみそつと訪れてくるものなんだ。それは現実には執して見ようとしても、見えぬものなんだ。西行が「まだ見ぬ山の花をもとめん」と和歌の外に

花を求めようという反語的方法にして、初めて見得る花なんだ。長明が「閑居の気味は、住まずして誰か知らん」と嘯いている真意は、身も世も捨てるといふ反語的方法の中に、「最少限度ながら衣食住をもち」「不逞々々しい位に長命を養つてゐる」あの「長生の方法」をさしているのではないか？ 芭蕉だって「この一筋につながる」と世を狭めたふりをしておきながら、「思ふ所花に非ずといふことなし、見る所月に非ずといふことなし」と、花鳥風月のいつこもこれが棲居……と逆に世を拡めている。これはみな詩人たちにだけ約束された反語的思想なのだ。アイロニカルな生の形式なのだ。

そう……なるほど生の形式だ。しかし形式であるからには亡びるときが必ずあるのだ。さっきの娘だってそうだ。あんなに生き生きと若く美しい。しかし亡びるものだ。ロダンの彫像だって、和歌俳諧だって、建築だって、いかなる芸術形式だって、文化だって、それが何らかの形である限り亡びるものだ。しかし、亡びるものが、どうしてあんなに生き生きとして美しいのか？ どうして亡びるものに生や美をこんなに切なく人間に求めさせるのか。これは人間にのみ課せられたまどわしだ。まるで亡びるから、仮のものであるから

こそ、美しく、生々としているのだ……とでもいうように。

蓮田は自分でもわからぬ力で半身起き上がりそうになった。爛々と光る目でうす暗い障子を凝視めた。そして「無」と「数奇」の象徴

である障子に自問自答しながら、激動する脳を鎮静させようと努めていた。

「―障子の四角―素材を脱し、(木は、そしてすべて自然なものは円みを帯びる)変形した、細い、角材、薄い紙、書くため

流しびな

大村直子

春の雪のくすおれながら降る日

私は大きいかさをさし

顔のやさしいひいなをつれて

たどたと 川に行った

ぬれさびれた岸辺に

冬枯れをこばまれた草がうつむき

長い鉄橋の上を 暗いひびきをたてなが

ら

銀いろの列車は走りすぎた

ああ そうして―私はある

そのことが 私の魂の痛みとなる

ひいなよ あるいは このかなしみを

負つて流れてくださるか……

いいえ ひいな 私たちはいっしょに

空の晴れるのを待っていてよ

同じかなしいものとして

私はあなたを抱きながら

春のはじめのうた

はりつめた空の青さが

ふとぬるみ ほがらかに

白い風は湧きおこる

ああ 無邪気な傲慢さよ

吹きわたれ

世界はおまに許される

そして はじめての花よ

うつむいてはいけない

子供をつれた母親が

うつくしく

光の中に立つ日には

を、その放浪の底の悲しみや愉しみ、やさしさやげしさを、自分ではつきりと、障子の上に見るだらう。障子は外界をそんなに純真に映して見せようとするためかのやうに白くピンと張り切つてゐる、——そのため自分自身で自分の身を張り破れんばかりな迄。いやそれは日光や埃にうすく色染み、風化し破れさへもする。」

蓮田はまたまたこゝに障子に立ち向つてゐる。木と紙から変形した、この形式の極致としての障子に、立ち帰つてゐる。いや、障子ばかりでなく、身辺の火鉢や、きゆう子や、茶碗や、盆にまで想到してゐる。いずれも、土と木から変形した有用な形式である。これらの形式は純粹であればあるだけ有用で美しいのだ。

蓮田はこの論理の構想のために、「ロダン」のリラケの言葉を援用してゐる。

「——すべてのものは自らを変形し、けれども彼等は生命を些しも失つてゐなかつた。反対に、彼等は一層強く、げげしく生きてゐた。」

つまり、この自らを変形した形式——その仮の姿にこそ、蓮田は存在の意味と美をみつげようと焦つてゐる。「人間自ら仮のものである故に、人間は自分を何もにもまして大

切にし美しくしようとする」。「「仮」とは、絶えず形式を、美しく、有用で、単純の中に最大を含むものを見極めてゐること」。蓮田は觀念の追求と空転を繰り返しながら、ついに思いあまつて、蒲団の中で「蓮田善明！」と自分の姓名を呼んでみて、ぼろぼろ……と涙をこぼしている。仮の世界から、空転を繰り返している自分を呼び戻して、正気に返つたなつかしさからであらう。「蓮田善明！」。

蓮田は自分の姓名を呼んでみて、ゆくりなく官氏名を名乗る軍隊の申告を思い出していた。命令を受けるや直ちに受令の報告をする申告。靴のカットを鳴らして直立不動の姿勢をとると同時に挙手の敬礼をし、申告し上げますと前置きをするや、「陸軍歩兵少尉蓮田善明は〇年〇月〇日付を以て、〇〇を命じられました。こゝに謹んで申告申し上げます」という、命令と受令との寸分隙のない、あの申告。その形式を「潔癖な程……立派にする癖」を蓮田は持っていたのだ。このことは蓮田の例の白に寄せる嗜好に通じるものがある。完全軍装でなされる将校の申告には、必ず手に白の手套がはめられるからである。そういえば、蓮田が障子に「無」や「教奇」や「形式」の極致を感応したのは、この白に寄せる嗜好が作用したからであつたかもしれな

い。

コギトの思ひ出

田中克己

コギトは十月号には保田の「木曾冠者」を巻頭におき、中島の「トルストイの転向について」を次に置き、いづれも名文で結構である。わたしは「虎」といふエッセーを書き、「人虎伝」や「水滸伝」の武松の虎退治をかいてゐる。十一月号はやはり「今上陛下幸手紀伊国御製一首」といふ保田の文章をはじめに置いてゐる。昭和四年南紀に巡幸された天皇の「きの国のしほのみさきに立ちよりて沖にたなびく雲を見るかな」といふお歌のことははじめにおき、懸泉堂に佐藤春夫先生を訪ねたことなどをしてゐる。保田が春夫先生の門弟三千人の随一であることは、このうち明らかになるが、わたしは先生への渴仰に伴つてうらやましくてたまらない。次は三浦常夫（小高根太郎）の「高市皇子」で、保田と期せずして日本古典への復帰が見られる。コギトの方向は定まつたのである。わたしは「仏蘭西にゐる友に」といふ詩を書いてゐる。この四月で任期のされるバリの日本会館長羽田明が留学中であり、桑原武夫博士も同

じくバリにある。日本では友田恭助が上海で戦死し華北では山西省に日本軍が入つたことをしらせた詩である。日記を見ると、清徳保男氏が可愛がつた田村金之助氏の五七日が十月六日で、列席の大谷某翁が、四十年前の思

拾遺

吉本青司

見知らぬ少女から手紙がきた
ほくが新聞に発表した
へ美しい朝のうたVを読んで
感動した というのである

目にはふかい知恵
口には萌えてることば
悲しみを抱いてほほえむ
マハトマ・モハンダスのように
蘇生を信じていのりに殉じた
聖セバスチヤンのように

背にふるく新しい時間と
手にむなしく満ちあふれる空間と

ひ出を語つて芸妓の花代が四十銭、うどんが一杯五厘、麦一升が一銭五厘、米一升が四銭五厘だといつたのを興味ぶかくきいてゐる。銭厘といつても、今の人にはなじみがないであらう。百銭が一円なので、物価は七十年前

そんなところが好きという
少女は 昨年
ある大学の薬学部にはいったが
文学をやりたくて中退し
ことし京都の大学を受験
発表を待っているのだという

ほくは 牛乳色の波が
いちんち岸辺を洗い
菜種の花が咲きみだれる村の その
少女のことを想つた

新聞に合格者が発表されたとき
いのるような気持で
少女の名をさがしたが
見当てることはできなかった

日よ かぜよ 駅舎の柵に
倚るひとよ

に米で一万倍近くなつたのである。十月七日が工兵伍長友田恭助の築地座主宰の葬儀である。いまの芥川比呂志さんほど人気のある人と思へばよい。翌日は中島と碁を打ち、五番のうち三番勝つた。彼とへボ碁をも一度うちたいものである。十一日は皇典研究所主催の講演会でわたしは学校の命令で出なければならぬ。河野省三といふ博士の愚論のあと陸軍中佐の話があり、わたしは「かなはないな」と嘆息しながらきいてゐた。十月廿三日にはまた上京する。妹の結婚式だといふのである。わたしはおかげで川久保佛郎（いま弘前大学教授）松下善海（いま東大助教授）などと会談できた。みな大学院にがんばつて勉強してゐるのである。廿五日には肥下、保田、薄井、小高根太郎、長尾良（新しくコギト同人となつた）と印刷所で会ひ、中原中島の死を保田から聞いた。廿六日には帰阪するが、同席の茨城県筑波郡の出の応召兵と話して、浜名湖のあたりで、「この辺は土地が肥えてゐますね」といふのを聞き、嘆息した。三十五、六歳の人で五人の子があるといふ。「早く戦争がすめばいいですね」といふのがこの兵士の願ひであつた。「四季」にのせた「秋の湖」といふ詩はこの話をかいたので、まだわたしは戦争讃美者になつてゐない。

「四季」の同人辻野久憲氏が亡くなったのは、これに先だつ九月のことで、「四季」は特輯号を出した。萩原朔太郎先生は彼を「若き日の秀才森林太郎を、さながら目前に見る思ひがした」と評された。享年二十九才で、この年モリアツクの「イエヌ伝」を訳し、その前からは洗礼を受けてカソリックになつてゐた。わたしは昭和九年以来、会つてゐず、訪ねた高田寺の宅で見た奥さん子供のことと思ひ出したが、その奥さんとは「故ありて離別」と三好達治氏が年譜に記してゐられる。わたしのところへは死亡通知がおくれ、間にあつた伊東静雄ただ一人が葬儀に出たむねを保田が記してゐる。

中原中也が「四季」の同人として追悼文を書き、交際の浅かつたことと、「からだの弱さうな、気の弱さうな人」と評してゐるのはその通りだが、「多分三十才前後といふ頃に、人は余り死なないもの」だから訃報を受取つてハッと思つたと記してゐるのは、人間が自分のことを知らないよい証拠となる。「四季」の次号(第三号)は中原中也追悼号だからである。病氣は全身結核に脳膜炎を併発したといふのであるから、辻野氏の死ぬころにはもはや重態に近かつた筈なのである。この人もランボオを愛し放蕩無頼の詩人と思

つてゐたがわたしはきらひでなかつた。会へば酔つてからんできらひになるといふことだつたが、幸ひにして会はなかつたのである。関口隆克氏の追悼文には、中原は教会に行つたことはなかつたが、自らではカソリックの真実の教徒と思つてゐたといふことである。ただし子供を失つてからは仏教に近づいた由である。昭和十八年に子供を亡くしたとき、わたしははじめてこの変つた詩人を真から好きになつた。

車夫

今井茂助

並木通りから銀座の表通りにでる道は、その日の午後もいつものように騒々しく人や看板やショーウィンドーやらがやたらと無秩序に充満してゐた。陽ざしがようやく春めいて、それだけ余計に埃っぽい感じだつた。井詰はズボンのポケットに両手をつっこみ猫背の背を一層丸くして、とりとめもない

すると、その彼の視野をほとんど遮つてしまふように、彼のすぐ目のまえに、蝙蝠色をした異様な、色褪せてヨレヨレにくたびれてゐる垂れ幕のようなものがあつた。

こぶし花咲く

浅野 晃

小鳥は朝から歌つてゐる
森の深くでこぶしが花をつけた
花は光の中に自分を捧げながら
ときにゆらゆらゆらぐ
たのしい森の一日の始まりだ
老木の梢にも新芽が萌え
どろやならや白樺などの
深い呼吸つかひがきこえてゐる
小鳥はいよいよ元氣に歌ひ
急にぱつと飛び立ち
遠くの梢に移つてゆく
するとあたりはひっそりするが
こぶしはべつに淋しさうにも見えない
小鳥は春へ近づかうと行つたのだ
しかし春はここにも来て居り

それは、古ぼけた一台の人力車であつた。なぜそんなものが、だしぬけに俺の目のまえに、しかも歩道のまんなかにあるのだ？ 井詰が、この突然の出来事のすべてをのみ

十分に春はここにある
もしこぶしの花が自在に飛行したら
それこそ森は淋しくなるだらうし
小鳥たちはねぐらを見失ふことだらう
下草をわけてゆくと
もうすみれの花が咲いてゐる
この埋もれた小さな花を見つけて人は
おおうつくしいと叫ぶ
本当にあどけなくうつくしい
自分であることに生きてゐるうつくしさ
小鳥は歌ひ翔けるがよいし
花はじつと咲いてゐるのがよいし
透きとほる日の筋 ただよう香気
どこかあちらで雷の音がし
地は熱つぽくうるみ黙し
はやくも這ひ出した虫たち
青い空は深くかすみ
森ぜんたいがかなでる葉のしらべの移り
そのなかで主題をうたふ
こぶしの花のうひうひしさ

原田憲雄著
詩集 南の風
京都市上京区下長者町通千木西入福島
町三七四妙徳寺
方向社
¥ 300

想いにふけりながらゆっくり歩いてゐた。いや、より正確にいえば、彼はこのところ毎日のように食欲のなさをもちあまし気味で、ともかくもどこかたべもの屋の看板にぶつかったら、無理にもとびこんで昼食をすませてしまおうと、たわいもないことを考えながら歩いてゐたのである。

すると、そのとき不意に、彼のすぐうしろの足元で、ポタッという実に厭な音のするのを耳にした。ひどく重たい、しかし固くはない何か大きなものが道に投げつけられた音だつた。たとえば、砂利のつめこまれたドンゴロスの袋が投げ落された音に似ていて、しかしそれよりももっと熱っぽい、粘っこい、もっと手ごたえのある音だつた。

まったく、こんな路上では考えようもないそれは音だつた。井詰は驚ろいて立ちどまり、その音のしたあたりをふりかえつた。

こむのにはちよつとした時間がかかつた。前のめりに傾いて、誰も乗っていない人力車の縄棒の先のところに、小さな、黒い装束の男が犬のようにころがってゐたのである。勢いよく銀座の表通りから曲りこんできた小型トラックが、力あまって暴れ馬のように道路の右脇に食い込んで、そのスペースと光った固い胃先でこの男を人力車もろとも力いっぱい歩道に突き飛ばしたのであつた。

これはヒドイことになつたナ、と井詰は思わず叫んでいた。倒れている男は身動きしない。股引きを穿いた短い二つの脚が妙な形に折り重なつていて、無気味であつた。

どうしたらいいんだ？ ポタッという音の重たく厭だつたことつたらない！ この男は死んでゐるのではないか？ しかし、どこから血が噴き出ているようにはない。それにしても、なんだつて俺はこのヒドイ瞬間に、この出来事の一つ近くに居合わせたのだ。いや、居合わせたのは俺だけではなかつたはずだ……。

井詰はどういうわけか、そのときすぐこの無残に叩きのめされた男のそばにしゃがみこんで助けようという気にならなかつた。それは、とまどいのせいだったのか？ いや、そればかりではない、俺は怖かつたのだ。

やつと彼は、彼のまわりに、ではなく、この倒れている男のまわりに、二十人ばかりの人だかりがしているのに気づいた。そして奇妙にホッとした。

死の七つの歌

トラークル

平井俊夫訳

死の七つの歌

薄青く春がたそがれてゆく。息づいている樹々のしたを

暗い姿が夕闇と没落のなかへさまよってゆく

つぐみの優しい啼き声に聞き入りながら森閑とあらわれる夜。獣が血汐にそまり丘のそばでしだいにくすおれてゆく。

湿った空気の中でりんごの花の枝が揺れる。

ひしとからみあった姿が銀色にとけて夜の眼をのがれて死にむかってゆく。墮ちてゆく星。

幼時の優しい歌。

そのとき、この人垣をかきわけるようにして、一人の若い男がなかに入ってきた。野球帽のようなものを被り、紺色のジャンパーをきた背の高いその男は、青白い怒ったような

眠れる者が輪郭をあらわしながら黒い森をおりていった。

深い奥で青い泉水がせせらぎ

あのかれが蒼ざめたまぶたをひそもたげた水にうつるその雪のような顔に。

そうして月が赤い獣を狩り

ねぐらの洞穴から誘いだした。

女らの暗い敷きが大きい吐息のなかで死んだ。

ひときわ輝きを増してかれの星にむかい

両手をさしのべた白い異郷者。

こわれた住処を死者が無言で立ちさってゆく。

おお 人間の腐敗に帰した形——冷たい金属

風で組みあわされ

それは夜と 闇のなかに沈んだ森の恐怖

そうしてまた獣の飢えに燃える荒地。

顔をしていた。彼は人々の肩をつきのけるようにして入ってき、荒々しい、と人々が思うような動作で倒れている男の肩の下に手を入れて抱き起こした。抱き起こしながら、倒れてい

おお 魂の風。

ほの黒い小舟に乗り あのかれはきらめく

川を流れおりにいった

紫の星にみちて。

そうして萌えでた枝がかれのうえに優しく沈んできた。

銀の雲からこぼれおちる罌粟。

さすらい人

白い夜がいつも丘によりそっている。

そうしてポプラが銀の音をひびかせて聳えている。

星と石がある。

小橋が溪流のうえに弧をえがいて眠り

死んだ顔が少年のあとをたててゆく。

ばらいろの山峡に新月。

讃め歌をうたう羊飼が遠くにきこえ

古い岩間でひきがえるの水晶の眼がみつめている。

匂やかな風がめざめる。死者のようなあの

少年は鳥の声をして

森のなかで歩みがほのかに緑になる。

こうしてはるかに想い出は樹木と獣にかえる。

ゆるやかな苔の坂道。月。

悲しみの水に月がきらきらと沈んでゆく。

あのかれは戻ってきて緑の岸にさまよひ小さい黒いゴンドラにゆられて廃墟の街を流れてゆく。

光明

夕暮になると

青い顔がそっとおまえを見すててゆく。

タマリンドの木蔭で一羽の小鳥がうたう。

た男の顔をのぞきこむと早口で呼びかけた。

「どうですか？大丈夫ですか！」

その声は、彼の動作の荒々しさとはチグハグに、意外に細く高く、弱々しい声であった。

柔和な僧の

組みあわす両手は死んだようにしずまっていた。

白い天使がマリアを訪問する。

夜 花環が

童と穀物とむらさきの葡萄で編まれ

見つめ生きる者の一年となる。

おまえの足のそばに

死者たちの墓穴がひらく

おまえが額を銀の両手に伏せるときに。

牙えた

秋の月がおまえの口もとに宿っている。

罌粟の液に酔った暗い歌よ。

青い花

薄黄いろい石のなかでその花がかすかにうたっている。

すると、抱き起こされた、血の気のひいた顔

がシヨボシヨボと目を開くと、うす笑いを浮かべた。そして案外に楽々と、支えられていた

手から逃がれるような恰好で、一人で立った。

太陽

日ごとに黄いろい太陽が丘にのぼってくる。

森も 暗い獣も

人も美しい—— 獵人や羊飼。

緑の池には魚がほの赤くあらわれ

まるい空のしたで

漁師が青い小舟をひっそりとあやつってゆく。

葡萄と穀物がしずかに実りにむかう。

昼が森閑とかたむいてゆくと

善いこと悪いことがととのえられる。

こうして夜が来て

さすらい人はそっと重いまぶたをあげる。

暗やみの谷から太陽がさしのぼる。

背の低い、いかにも軽そうな、瘦せた老人の車夫であった。

若者は、なおも何やら老人に小声で話しか

けながら、老人の土埃のついた胸や膝を手で

払いつけた。それは、老人が思ったよりもずっと軽傷だったということを知った若者の、ほとんど歓喜に近い、はずんだ動作であった。

老人はそうされながら、ずっとうす笑いを浮かべたまま、自分のまわりに沢山の人のだかりがしているのに気付くと、一層気恥かしくなったのであろう。泣き顔とも笑い顔ともつかない、たよりない表情になり、とうとうひと言もものをいわなかった。

そのとき井詰は、老人のこの微笑はまちがいないのではないか、という思いが、急に痛みのように胸を打った。老人は実は、身体と心の全力をふりしほって、けんめいにこのショックを耐え、けんめいにうす笑いをつくっているにちがいない。

井詰は、不意に、このまゝではいけないのだ、と思った。といって、この際彼がどうしたらよいかか？……そうだ、ともかくも交番に届けよう。この老人のためにそうしなくてはならない。

井詰はそっと人垣をぬけて歩きだしていった。しばらく歩いてから、たまたま彼は、ある小綺麗なガラス戸のしまっている暗い店の中から、ガラス戸に鼻をくっつけるようにしてこの事件を眺めている男の目にぶつかっ

た。骨董屋らしかった。彼はつかつかとその男の方に近づいて、戸をあけると、交番はどこか、とたずねた。男は複雑な顔になって、教えてくれた。

松坂屋のまえに、古風なセメント造りの小さな交番があった。着物をきた中年の女が、巡査に長々と道をきいているのを待ってから、彼は事態を巡査に話した。

巡査は、ハア、やりましたか、とゆっくりした口調でいうと、直にとって返して、机の上の書類をゴンゴンと探しはじめた。

そのとき、井詰には、巡査が出てくるまで待っているべきかどうか、という迷いが生じた。そして、結局巡査があまりにもグズグズとしていたので彼は一人で先に現場に引返えそうと表に出た。早く現場に戻らないと、もうそこには誰もいなくなっているような気がしたからだった。

ところが、ものの二十メートルも雑沓をとって返したところで、今度は井詰は急に止そう、これでもう良いじゃないか、とひとり言をいうと、たまたまそこが辻になっていたの、その辻を早足に曲ってしまった。

老人の打ち身はきつと想像よりずっとひどいにちがいない。木当の痛みは、明日になってやってくるのだ。そして老人には、なぜ昨

青木敬磨著

善導和尚

¥ 700

東京都千代田区神田神保町二丁目
二〇番地

南窓社

日あるとき自分はいくらも笑いを浮かべつづけていたのか、とはじめてはげしい後悔と怒りと不安が襲うだろう。いや、それは、あの青年にしたって同じことなのだ。それにまた、まわりにたかっていた野次馬たちはどうだ。彼らはたぶん巡査の検証を興味深々と眺めたあと、さも満足そうにどこかに散ってしまうだけのことだ。そして、この俺にしたところで……

井詰はまたも両手をポケットにつまむと、唇が自然にへの字に曲ってくるのが分り、ガサガサとして落ちつかないそば屋にとびこむと、片隅の椅子で、実に味気ないそばをかきこんだ。

伊東静雄研究文献考(二)

小川和佑

③雑誌・紀要所載のエッセイ論文

③に該当するものは単行本に収録されているものを含めて六七点。(但し、小高根氏の「詩人、その生涯と運命」の連載はこれを一点と数えてある)ここでは「はじめに」で述べたように、その時期を三区分して検討して見ると、第一期が九点で意外に少ない。伊東の文芸汎論賞受賞の昭和十一年三月の「文芸

汎論」には必ず選評のような形で伊東論があるはずで、同誌三月号を以前から捜し求めているのだが残念ながら未見である。恐らく受賞を機会に他の詩誌でも論評もあつたらうとは充分に考えてよい。「四季」にはもっと詩人に関する論があつて当然と考えられたが、萩原朔太郎氏の短評「時々片々」(昭一一・六「四季」一八号)と後述の鈴木亨氏の「春の

色めくがよい。筆とする者の栄光は死後に来るから己は急がぬ。

ヘリック詩抄(六十)

森 亮

四つの柱

——幸福のための四つの条件——

丈夫なからだをもち
ところ根やさしく
真つ当な利益で富み
友として我が世を楽しむ。

★

暢気者

ほかの連中は活字にしようよ

知命

わがいのち遠からず死ぬる日あらむ、
年どしに散らしたる木の葉に後れ
おのれ地に就く巨木のごとく。

ヘリックに多いたたごと歌のたぐひを更に三篇紹介しよう。「四つの柱」(一一二)はヘリックの独創ではなく、この発想はシモニダスのものとも言はれるギリシア語で書かれた四行詩までさかのぼることができる。「暢気者」(一〇三)と「知命」(一〇五九)はヘリックの原作ではどちらも二行詩であった。

いそぎ」評の二点。これはやはり詩人の「四季」に於ける位置が、堀辰雄・立原道造・津村信夫といった詩人たちより迂遠なところにあつたのであろう。伊東の場合「四季派」という形容つきでその詩を論ずるのは「四季」に於ける位置、発表回数から見て概念的、図式的につきすぎるくらいがある。若し敢えて形容をつけるならば「コギト派の」とするべきである。

また、透谷賞受賞に關してのものも同様あるに違ひなく、これらについては更に雑誌の収集を継続して行きたい。「夏花」に關して「四季」にその書評のないのは他意のあつてのことではなく、この時期「四季」は五〇号で一年休刊。その紹介の時期を失つたためであらう。「四季」が右傾しつつあつた伊東を忌避したという推論は——確かに「四季」誌上に発表された戦争詩(愛国詩)は当時の雑誌の中では非常に少なかったという事は堀辰雄の見識の高さといわれているけれども、他の同人たちの愛国詩への参加といった状態から考えてこれは当を得ない。やはりこれは彼の位置と時期の二点によるものであろう。

第二期は五点と非常に少ないようだが、これは四冊の追悼号の論文の数と合せれば僅少とはいえない数であらう。戦後の時代転換期

の思潮を考えると、昭和一〇年代の抒情が戦争協力という点で、民主主義文学派（これは大変抵抗を感ずる呼称だが）社会派の詩人たちの批判を浴びて否定された時期である。しかし、この時期に於ても伊東の支持者もまた少くなかった。それはむしろこの頃、青春を迎えた年少の層に意外な支持者もあったのである。例えば昭和二〇年代、全銀連を背景にサークル出身の詩人として活躍した千早耿一郎氏にもその詩集を積極的に肯定した「伊東静雄論」（昭二四・三「道程」一二号）がある。とはいえこの期に於ては中央詩壇の主流は伊東に対して否定的であり、冷淡であったと回想的にいえるであろう。この時期うたかたのように消えた雑誌の中にまだそれも西側の雑誌に未見の文献があるやに思う。

第三期も同様な傾向が続くが、伊東の死を転機に再評価の気運が動きはじめ多くの論が次々に発表されるが、その発言者は依然、かつて詩人の周辺にいた人々と関西方面の雑誌に集中していた。日本浪漫派の再評価のはじまる昭和三五年前後になると、この様相は少しずつ変化し、戦後反動的に無視されようとした詩業を再評価する動きが表面化し、これには詩論家よりの発言よりも近代文学研究家によって推進されたかの観がある。伊東静雄

伊東静雄全集

（全一卷）

桑原武夫
小高根二郎
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文五篇、雑二篇、書簡三十一通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華決定版。五月下旬刊行予定。

人文書院

京都市下京区弘光寺通高倉四
振替 京都 一一〇三

渉って連載された「伊東静雄論序説」（昭一四・九一五・二「三人」）があり、これは同氏の静雄論のアプローチ的位置を占めるもの。戦後には先ず「伊東静雄論」（昭二二・五「午前」）が書かれ、また「伊東静雄について」（昭二八・一二「近代文学」）がある。これらもはや閲覧し難い文献となっているので、改めて一書にまとめられることが

黄塵 来る

美堂正義

西風の吹きしきるゆふがた
春の驟雨に曇つた眼鏡をはづせば
法くむらとなつてゐる 黄色い埃り
向ひの山も霞んで
黄塵は風に乗つてやつて来た

既に中国の奥地の雪は消えたのか
春の嵐に舞ひ立つ微粒子を
渤海・黄海を越え
朝鮮の山を包み
はては対馬海峡をひとまたぎして
黄塵はやってくる

の人と作品といった研究テーマはこの頃から本格的に着手されたといつてよいであろう。以上で研究史の概観を述べたが、左に現在までに判明したものの中、主要なものを項目別に挙げて置く。

「詩人論・詩人研究」詩人論で先ず第一に挙げねばならぬものは小高根二郎氏、富士正晴氏のものである。これらは基本文献として欠かすことはできないであろう。

小高根氏のものの中、判明している中で最も古いものは昭和一五年六月「コギト」に寄せた「伊東静雄」があり、これが氏の研究の出発点である。①の項で挙げた「詩人、その生涯と運命」は「果樹園」創刊号（昭三一・一）より「書簡から見た伊東静雄」の標題で連載され、三五回より「凝視と陶酔——作品から見た伊東静雄」と改題、更に五三回より「詩人、その生涯と運命——書簡と作品から見た伊東静雄」と改題、第一〇二号（昭三九・八）をもって完結、前述の一書にまとめられた。これらは実証的伝記的詩人論といふべきものである。その他に目に触れたもの一篇があるがこれは「伝記的研究」その他の項で後に触れる。

富士氏のもものは戦前の「伊東静雄」（昭一五・五「三人」）にはじまり、次いで六回に

望しい。伊東静雄研究には富士氏の言もまた耳を傾けねばならぬものが多いであろう。

この他、詩人の周辺の人々によって書かれたものには前述の保田与重郎氏の「二人の詩人」（昭九・一一「コギト」）「伊東静雄を哭す」（昭二八・七「祖国」）、田中克己氏の「その一言」（昭三四・三「果樹園」）は「コギト」以来の詩友の詩人論として必須。

大河のやうに日本の空を覆つて

内陸のわき起つた巨大な自然の力が
日本の国の冬の大きを
はね除け はね除け

春の息吹きをもちたらし
山の雪をゆすつて
木々の芽の眼りを覚まして
細水い島国の冬は
いま去らうとして激しく動いてゐる

春はなかなか来ない
耐へ忍びながら待つ心のうへに
尖兵となつて遠い国からの先触れ
幾千里のみちのりを一気に
黄塵は群れ飛ぶ花粉のやうに
この国土の上に生命力を運んでくる

また檀一雄氏の「伊東さんのこと」（昭二五・一一「舞踏」）、島尾敏雄氏の「林富士馬氏への返事」（昭二八・五「ブシケ」）、三島由紀夫氏の「伊東静雄氏のこと」（昭二八・七「ブシケ」）辻野久憲氏の「虚無の人」（昭一一・三「コギト」）等の諸論も忘れてはならないであろう。

これらに対して、もう少し若い世代からの詩人論・詩人研究を見てみると、——これらは研究展望から見ると第三期、再評価、研究着手と重なり、詩人の周辺の人々以外の執筆者によって行われている。——竹内豊治氏の「伊東静雄試論」（昭和三七・九一三七・一二「果樹園」）、唐川富夫氏の「四季派批判——津村信夫と伊東静雄」（昭三七・一〇「地球」三六号）これはネオ・リリズムを標榜する戦後派から発言。河野仁昭氏の「伊東静雄論」（昭三八・一二「新京都文学」二二号）、中村光行氏の「伊東静雄研究ノート」（昭三六・七一「二」人間）これらの発想は西側の諸論の傾向に沿っているもの。これに対して菅野昭正氏の「曠野の歌——伊東静雄論」（昭三九・一「二」現代詩手帖）東側の論といえようか。研究者のもものでは桶谷秀昭氏の「伊東静雄論——その自我と抒情の変貌」（昭三九・四「文学」）桜井好郎氏の「伊東

修道女

丸山 透

堅固な

鏡戸の内側に立つ

蒼白い自負心

傷ついた銃身のように

光をおそれ

身を反らせて

ただ 黄昏を待つ

静雄における抒情の構成——伝統的美意識の現代的形態に関する断章（昭三九・一〇）日本文協「日本文学」、那珂太郎氏の「朔太郎と静雄」（昭三九・九「本」八号）等は特に注目すべきであり、詩壇側からでは菅野氏のもの、研究者側からは桶谷氏のものの方が力作といえよう。

最近の主なるものでは江藤淳氏の「文学随想——伊東静雄の詩業について」（昭四〇・八）「現代詩手帳」や、大岡信氏の「抒情の行方——伊東静雄と三好達治」（昭四〇・一一）「文学」がある。大岡氏のもとは同氏の「抒情の批判」の続稿というべきもの。また小川和佑の「抒情の系譜——戦争詩、その発想と構造①②」（昭四〇・七一）「春秋」四・五号の中「その一」は昭和一〇年代後半の戦争詩の諸問題をとりあげたもので、昭四〇の全国大学国語国文学会春季大会に研究発表をしたものをまとめたもの。「その二」は立原道造と伊東静雄の戦争下の文学的・日本主義に対する態度を論じたものである。

編集後記

三月三日。拙研究の熱烈な協力者である会員の西岡武良君が帰省の途立ち寄ってくれた。日本ロマン派の作家中で最も悲運であった作家緒方隆士の研究のために、中谷孝

雄氏を訪れた時の模様を知らせてくれた。丁度ロマン派の女流としてはなかなか存在であった横田文子さんも来合わせた。話を聞いているうちに、文学の深奥の深奥のほどや、生涯文学としてつらがりうる感じがいかにか困難であるかということを感じ知らされた。

三月十四日。羽田で遭難したカナダ航空機に、たまたま助先の同僚Kが乗合せていて悲運な最後を告げた。彼に遭難の道を選ばせたのは、かつての人事担当であった僕であったので、なんとも助かぬ思いで数日悩まされた。三月十四日。関西在住の詩人の集いがあって、ご無沙汰お詫びかたがた出席した。竹中郁・小野十三郎・杉山平一・井上多喜三郎・山村順・横田喜久子諸氏に久々でお目にかかった。なにか詩のフェスティバルでもしようではないかということであった。女流の堀野さんの熱っぽくかん高い熱弁を聞いていて、彼女の揚揚とは反対に、次第に沈滞していく自分を意識した。と、いうのは、毎日が興行の連続である日常に取り巻かれている僕にとっては、あまりに平凡な企画すぎると思われたからである。そういえば最近小説や詩が大人の世界から見離されているのは、あまりに制作意図の興行性が鼻につくからではないかであるか？この日久しぶりに出会った井上多喜三さんが四月一日交通事故で昇天した。なんともかわんことである。（一〇）

果樹園 第一二三号（毎月一回一日発行）

昭和四十一年五月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根 二郎

発行所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

發行所 果樹園 社

定価 四十円 送料 十円

元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園 一三四号 昭和四十一年六月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

果樹園

第124号

蓮田善明とその死 小高根 二郎
コギトの思ひ出 田中克己
ヘリックク詩抄 森 亮
さようなら、ダリ 今井茂助

小鳥の墓 浅野 晃
柳の芽吹く朝のうた 大村直子
伊東静雄研究文献考 小川和佑
湯西川温泉 萩本家義
トラークル詩抄 平井俊夫
小鳥たちと 吉本青司
編集後記

蓮田善明とその死(三七)

小高根 二郎

旧正月後には雪荒れの日が続いたが浴客は増える一方であった。例年くることになって

いる家族の者が交替でやってくるのだ。その順番のために、雪でも延期できないからである。目につくものはほんの二十人ぐらいたが、実際は百名を下るまい……という女中の話であった。彼等は宮崎や大分の方から遙々県境を越えて、味噌、醤油、乾大根、漬物などの自炊材料と一緒に、寒さも担いでやってきたのだ。

「昨夜から寒うて眠れん。下の村あたりの後家どもでも来てくれんかのオ」

「女子の不自由が一番辛かなア」
「他家のよめ御は来とらずが、こらア一寸相談出来まいが。はっはっは」

二人の年寄が交わすこんな気易げな冗談も耳に馴染むほど、いつか蓮田も湯治場の雰囲気氣に馴れてきた。
女中をからかうことで特技のある隣室の客からかいかい応援した。ときには女中を捉えて大騒ぎをし、ついには女中が悲鳴をあげたり、膳をそっと障子の外から差し出したりした。が、それがまた原因となって、からかいを誘発した。それは一種の熱を出す運動なんだ。そう観念して蓮田は笑いながら飯を食った。ふと廊下で、このからかいかい名人に顔を合わ

せたことがあったが、案外背の低い三十五六の若い男で、田舎町の商人風だった。

蓮田は湯治の指南をしてくれた例の老人ともすっかり馴染みになった。頭は薄く禿げ、頬から口の周りに胡麻塩鬚を生やした長顔で、横顔がなんとなくギリシヤあたりの何とか二世といった古びた帝王に似ていて、品もあり、眼は子供のように深く穏やかであった。会えば時々向うから話しかけるのであった。しかし、その話は例の自炊の話や、阿蘇登山の話や、訊くのにまかせて語る故郷の話にすぎなかった。阿蘇の噴火口のことを、いつも擬人的に神様らしく話した。火口は今西の方の一番活潑であるのを、「あちらへ移らした」と敬語つきで話した。昔は「阿蘇さんは」緑川の上に居られたが、谷の数が百に一つ足りないというので今の中岳に来てしまわれたが、このあたりもこんなに湯が出たりするのを見ると、こちらにも「居らしたか知れんなア」といった工合であった。

年寄は娘と二人で来ているのであった。間もなく年寄は帰って、今度は娘が代ってくることになるが、それまで娘はおいておくとのことであった。彼女は二番目の娘で、もう嫁入り先が決まっているが、婿になるのが召集されて出征しているとのことであった。彼女の

上の長女はすでに嫁ぎ、兄は嫁を取り(彼等もそのうちに代って来る)、下はまだ学校に行く子があると云った。

その娘は?と蓮田は聞くと、年寄は「休の太か、俺に似た顔ぢやが……」と、簡単に答えた。

「あ、あの、縞の袴の……」

蓮田は滝下の岩風呂で浴槽を譲ったとき、縞の袴の……帯を解いて向うむき、彼が出てゆく気配を待つ彼女の後姿を思い浮べた。年寄は怪くうなずくと

「もう二十一になるが……」
と、そんなことまでしゃべった。

蓮田は年寄に娘婿の部隊名を聞いてみたが南支へ廻っているというだけで、ウロ覚えしかしていなかった。蓮田はそれ以上聞かなかった。又、彼はついせんだってまで、同じ中国の野戦にいたことも話さなかった。たゞその人が、武運長久であるように、心の中で蓮田は祈った。

その娘と蓮田がたまさかに真夜の湯槽で出会ったのは、それから間なであった。その夜、風の音に交って、庭越しの棟からも、南西の崖下の棟からも、珍らしく歌声が聞こえ始めた。次の室でも、知り合いのおかみさんたちでもあるのか二人三人一緒に来て、「で

思い切って起きると、足音をしのばせて本湯へ下りていった。薄暗い緑の上には降り込んだ雪がキラ／＼と光る粉を撒いたように見えて、スリッパはつるつると滑った。石廊下の電燈の光の及ぶ所は、吹き荒む雪煙で白い暈をつくっていた。この石廊下にさしか、るとき、浴場の中へ消える人影が見えたような気がした。雪の中を三段跳のようにして廊下を渡り、中に入ると、はたして女下駄が一足揃えてあり、女湯の脱衣場に着物を脱ぎかけている若い女の後姿が、たちこめた白い湯気の中に確認できた。岩風呂でためらった縞の袴の……あの娘である。父親の老人は今朝あの娘だけを残して帰ったはずであった。蓮田はそっと男湯に入った。

脱衣棚は蒸発できなかった湯気で濡れていた。場所によると奥の板は凍りついていた。やっとその一つを選んで着物を押し込むと、冷えきった体を静かに湯の中に沈めた。人の出入りがと絶えたので一層熱くなった湯が、小止みなく後から／＼滔々と落ちて溢れるさまは、何か生物のような異様な感じがあった。湯気が濃くて隅の方は見透せないくらいであった。物の姿はおぼろに陰影を含み、奥の方の中央の男湯と女湯の通路にもなっている洗場に設けてある上り湯の湯口——壁から人の

は一杯御馳走になります」と言い、高い声で笑い話をしたり、女中がなにか言いつけられたり、冷やかされたりしている声があった。隣の客も負けていずに、「今夜は向うでも景気が好いぞ。こつちも歌おうかい」と景気つけをしたが、音痴かして、しきりに相手の女に歌へ……と注文つけるが、女はまだ若い田舎々々した女で、とてもそんな所で声が出せそうにない風であった。どういう種類の女かわからなかった。下の村あたりからでも呼ばれてくるのであろうか、何かそんな話も一寸あったようであった。蓮田は夕食をすますと、しようこともなく、床を敷いてもらって横になったが、あたりは、からぬ隣室の話は、聞くまいとしても情抜けに聞こえてくるのであった。そして今夜のこの人々のざわめきは何か溢れるものを感じさせて、このざわめきを蓮田はじっと心に聴き取ろうともしていた。ふと三味をしらべる音が本館の方から聞こえた。おや、そんなものまであったか……と、自分だけがうかつであったようでおかしかった。ほろん、ほろんとたどたどしい音色だった。蓮田は幼い頃門付けにきた肥後琵琶を思い出した。強弱のないその音色は、やがて「父よあなたは強かった」を奏でていた。が、それも途中でうろうろと立ち消えて、いつか

頭ほどの大きさに作りつけてある——が、ふと見ると、そこから首を出して覗いて、もいるような不気味な錯覚を起こさせた。深夜の静かな浴場は何処となし不気味な殺気だったものが感じられた。蓮田はふとさっきの縞の袴の娘の後姿を目の中に浮べていた。隣の女湯の方も落ち湯のほかは静かで、そこに人がいる気配は聞きとれなかった。一人で浸っているにはもったいない位の湯を、蓮田は肩で切り分けるようにぐっと切りながら、落ち湯の方へ一蹴り平泳ぎの仕方泳いでいった。

「その時隣の浴槽で何か烈しい音がした。立ち止つて聴耳を立てた。落ち湯の音がハタと止り、その代りにばしや、ばしや、ばしやと落ち湯が強く跳ね返る音であった。それは隣の客——あの娘が体のどこかを湯に打たせてゐるのにちがひなかった。湯はどうかすると外れて湯槽の中へどつと落ち込んだが、又ばしや、ばしや、ばしやと跳ねた。思はず息を呑んだ。目の前に、白い豊かな体を、烈しい勢で落ちる湯に強く打たせてゐる光景がちらりと浮んだ。しかしあの娘が何処か神経痛でもあるのだらうかと考へたが、すぐそんな想像を自分で否定した。あの若い健康体でそんな筈なし、又老人も何らそんなことを話したこともな

「でかんしょ」に変わっていた。と、思っていると小原節になっていた。それが思い出したように、ものの二十三分も繰返された後は止んでしまった。この寒気ではとても弾けるものではない。そのうち向うの部屋の人たちも「大変ご馳走さんでした」と帰って行き、女中が後片付けをしていると、さつき二人で出て行った隣の男も、一人になって湯から帰ったらしく、一寸女中をからかい始めたが、彼女が忙がしくしているのので、「俺には構いもしてくれんから、冷えないうちに寝よう」などと言って、案外素直にやすむらしかった。よその棟の歌声だけはそれからますます賑やかになり、女達の腹を抱えて笑いこける声もひとしきり、風の音を圧するほどになった。しかし本館つゞきの棟が静かになると、手が冷えて本を読み煩っていた蓮田は、いつかところろ……とまどろんでいた。

寒さがぞつと身に沁みわたる思いがしてつい目が覚めると、風はいつか落ち、滝の音だけが雨のように聞こえていた。深夜の万象がひとと凍結した感じは、なにかひしめくような気配で忍び寄ってきて、蓮田を再び寝つかせなかった。時計をみるとまだ一時を廻ったばかりだった。こんな寒さでは、もう二度ぐらい目が覚めることだろう……と観念して、

かつた。恐らく唯一人の心易さで、人前ではしたくないことを、一寸してみたくなつたのではあるまいか。そんなことを考へて更に何か想像を進めさうになつた瞬間、落ち湯がどどどと湯槽にたがり落ちる音に変わってしまった。はつと我に帰つて、想像を打ち切られると共に、自分もさつき湯に打たれようとして近づいてきたことを思い出したが、娘が恐らく自分一人であると信じてそんなことをこつそりやつてみたのであるかもしれないとすれば、なるべくそのまゝ彼女に気づかれぬやうにしてゐてやらうと考へて、又退いてじつと屈んでゐた。一寸窮屈なものを感じて、体をもて扱ひかねるやうな気がした。しかし落ち湯の高い音と、湯槽を溢れる音とに粉れて起ち居まで気をつける必要はなかつた。

と、又何か音がした。又湯に打たれてゐるのかしら、と思つて耳を傾けると、今度は落ち湯の音はそのまゝで、別に湯を掻きまぜる音か何かであった。それに続いて確かに彼女の咽喉からの声で「あつぷ」といふやうな湯を銜んで吐き出すやうな声、ドブンといふ音が続いて起つた。そして音ならず湯槽の湯が煽られてゐるやうなけはひ。何か不吉な直感が電光のやうに襲つて

くるのを意識した。しかし一寸思ひ返して自分を抑へた。又も「あつぷ」といふ声とはつきり聞きとれない低い声のやうなものがした。それから湯の重いざはめき。思はず急いで湯の中を女湯との仕切の壁の方へ一蹴りして進み、湯槽の縁に手をかけて半身を乗り出して通路になつてゐる所から覗いてみた。

と、すぐ目の前から白いものが躍るやうに湯の中に突き入つたかと思ふと、一寸妙な恰好の抜手を切つて深い湯気のこめた中を回ふの方へ鮮かに消えて行くのであつた。」

の日記（昭和九年）に、遊女をひやかにしようとする誘いに来た友人の誘惑に応じて、威勢よく出かけるときの句がある。

友だちの灯影がふくれてきて障子開かれる

女を見ようと三人まらふって出る

蓮田はこの句の、あまりにまっとうな健康さが気になったかして、原典である中助助の歌を次に引用していた。

伊豆の崎蜜柑なる山路をあまのぶち

こままらふりてくる

まらの歌といへば、平賀元義の歌に

五番町石橋の上でわが魔羅をたぐきにとりし吾妹子あはれ

がある。こ、にいう「たぐき」とは、つまり「手草」、天の宇受売の命が天岩戸の前で乱舞したとき手にされた「手草」の意であろう。宇受売の命よろしく、酔狂な芸妓の酔余の愛情を歌つたらしい元義のこの歌には、いさ、か風狂な熟柿のにおいがする。

又、神風連の首領の一人加屋雲堅の「陰壑のかたかきたる贄」という兩贄の歌に

成りて成りあまりたる久方の天津まうらの神ぞたふとき

がある。神洲の正気を感じずる愛国者は、みなまうらの歌をものする性向があるようであ

る。しかし、元義の歌を除いては、いずれの歌も男性の正気であつて好色ではない。好色としての心緒が成り立つためには、やはり異性間の交感に欠くべからざるものようである。蓮田が本湯で抜手をきる娘を見るまでの「有心」の記述には、この好色の解説が精細になされている。

コギトの思ひ出

田中克己

四月六日から十四日まで修学旅行で、奈良京都と歩き倉敷で解散した。わたしはこの修学旅行が苦手で、はじめの勤め先は、これを遂行したあと、辞職の決心がついた（後述）ほどであるが、今度は名古屋で孫に会つて写真をとりに（よくとれてゐる）機嫌よく帰宅した。

旅行中で復活祭の礼拝には参加できず、京都御所開放の最後の日ということで、これを参観、夜はみずから女子学生たちに課した禁足で宿ですごしたが、親しくした樂文堂の前を通ると店をしめてゐる。日曜で休みかと思つたが、近所の古本屋でできくと、主人は長い病氣だといふ。昨日（二十四日）の新聞には、

二十三日、筋肉まひのため自宅で死去、六十四歳だつたと出てゐる。東洋学に貢献したこ

ヘリック詩抄（六十二）

森 亮

死者のねがひ

年に一度、ひと晩だけ、好きでたまらない美しい女性たちよ、わたしの墓に露のささげ物を持って来てください。さうすれば浄まつたわたしの亡き影が立ち現はれて

墓石にそそがれたその食べものをくちにするでせう。

わたしの着けた衣がひえびえとした白さであつても、

こはいと真つさをになつてふるへなくてよろしい。

このわたしがどうしてあなたがたを傷つけませう。

恐ろしい顔は素より淡面ひとつしすまい。蠟燭の細く燃える火が急に青色に変わるとも思

王維の註釈を半ば書いて、枕頭においたまま亡くなられたのが一昨年だつたか、わたしもこの年まで生きれば、停年の一年前である。

わが身にひきくらべて、まあまあとと思ふ。コギトには書かなかつたが、詩の友だちとして古い井上多喜三郎氏の声を録音をきいて涙したのは、この日の夕方、同氏の親友依田義賢氏宅においてである。宿のなめ向うなので、夕食までの時間にたづね、予期せぬその死にざまを聞き、予期せぬ最後の録音を聞いたわけである。静かな近江なまりの若若い声であつた。そのあと追悼のわたしのことばが録音されたが、七十九歳で死んだ父の死にぎはの声をそっくりで、わたしは自らの老いを知つた。

翌翌日の十二日は京都最後の日なので、学生の昼間の自由行動をゆるし、わたしは古本屋をあるく。前日は故友服部正己が昭和二十三年に出して贈つてくれた「言語と文化史」を見つけたが、この日は今年のゼミに必要な天文学の本一、二冊だけで、宿に一度帰り、天気は久しぶりによいし、電話もないと知つて（桑原武夫博士にたづねると、大学で聞くと云はれた）、まっすぐに上つて野田又夫博士を訪ねる。着くとはたして不在で、出て来られたのは、少女で談つてゐた長嬢、「上れ」

といはれ、甘いお茶をいただきながら話すと既婚であることを知って、おめでたいながら時間の経過をつくづくと感じる。クリスチャンときき、「復活祭の礼拝で何をお歌ひになつたか」と問ふと、六六番「聖なる、聖なる、聖なるかな」ではじまる三一の神をたたえた歌であつた。とのお答へで、わたくしが御所で黙唱してゐた歌であつたので、ありがたく思ふ。「博士にはまた」といつて宿に帰つた。しかし夕刻、思ひがけず博士の来訪を受けて喜び、その一番の親友小高根太郎（コギトの三浦常夫）の話をし肥下、服部などの話をしてゐる中、このデカルト哲学の權威が、コギトに書いて下さつたことを知つた。これは博士みずから告げられたからわかつたので、わたしは全く記憶を喪失してゐた。

博士のペンネームは日高次郎、その文は昭和九年六月号にのつた「雑考」（コギト第二五号）にはじまる。次に三浦常夫の「文案」といふのがつてゐるから、あるひはそのすすめかも知れないが、この年はわたくしが大阪に帰つてつとめた年であるから、中島とわたくしが書くことをすすめたのかもしれない。田辺博士？ の講義のことからはじまり、デカルトが商人やエズイタ教団とは無関係に、神へまはりみちをしてゆく一生を名文で書いて

ゐる。野田博士はこの前うつしたわたしの履歴書にある通り、高校の一年先輩（高校はじまつて以来の秀才と聞いたが、このあと入つた阪井正夫といふのが、全学科満点に近くこれを凌駕したが、阪井君はわたしと寮の二人一室に半年くらしたあと、結核になり、まもなく祈りながら死んでわたしを慟哭させた）で「僕人」といふ詩の雑誌を編輯し、ついで保田とわたしにその編輯をゆづつたのであるから、中島、松下と同じく、哲学だけの人ではなかつたのである。九月号にも「二三の友に」といふエッセーをのせ、小林秀雄論からはじまつて批評の精神を説く。二三の友は松下、中島らを指すのであらう。

コギト第三〇号はドイツ浪漫派特輯であるが（同年十一月号）、これにも日高次郎氏は「島々」と題して、若くして狂つたヘルデルリンを説いてゐる。夜の讃歌をうたつたノヴァリスより、光り輝くヘラス（ギリシア）びとの精神で作つた

母なるアテネよ、御身が美はしき丘は
悲哀よりして更に高まり、花さいた
といふ詩の方がよい、といふこのエッセーをわたしは読みながらノヴァリスを訳してへて本にして出したのである。「青い花（ハイシリヒ・フォン・オフテルディンゲン）」は

小鳥の墓

浅野 晃

小鳥が死んだ 子供は悲しんだ
泣く泣く庭の隅に葬つた
長雨の日がつづき
野口英世の胸像にかびがはえた
そして炎暑が来た
蟬が鳴きだした
学校は休みになつた
子供は朝から蟬とりに飛び出した
か、この中では
残された雛が成人して
百合の香の立つ縁先で歌つてゐる
そして先代の墓は
夏草に埋もれてしまつた
夜になるとひきがその上を
のつしのつしと踏んでゆく

夜の讃歌のやうではないと思つてゐたのかも
しれない。

野田博士はかうして桑原武夫博士や故五十嵐達六郎教授とともに、コギトの最上の同志であり、また批判者であつた。わたしはなつかしく、うれしく、宿の女関まで博士を送り「永遠に」と思はず口をついた別れのことはをのべた。博士はこれに答へずに去られたが永遠は神なくしてはあり得ぬものである。わたしは野田博士といはず、すべての人が永遠にわが友たらんことを願ふ食欲者である。この食欲からいろいろの悲しみも生まれるのであらうが、その悲しみはもう救はれた。下賀茂の三日間はわたしには一瞬や偶然とは思へない楽しい日々であつた。野田博士父嬢に会はしめたまうた主に感謝し奉つて、早々にしす。（四月廿六日曜）

さようなら、ダリ

今井茂助

その朝、私は妻の涙ぐんだ声にゆり起こされた。

△ダリちゃん、死んでるワノ▽
ガタンと目が醒め、ともかくフトンをはねのけると私はバジャマのまゝ、玄関から下駄を

つっかけて表の庭にでた。シマッタナ、シマッタナ、とひとりで言葉がわいていた。

早い朝に特有の、あのシーンとした冷気が襟首からしのびこんできた。雨は止んでいたが、黒い土がいっぱい水をふくんでいて、下駄の足元がたよりなかつた。

ダリは庭隅の大小舎のなかに長々と寝そべり、顔だけが小舎の入口からずり落ちたやうになつて死んでいた。目をつむっている白い狐のような顔が雨と泥によごれて、撫でると固くて、冷たかつた。

尿意をもよおして私はトイレにいった。落ちつこうと思ふのだが、動悸が昂まってくるのがわかつた。そして、不意に涙が熱くわいた。

そういえば、あれはまだ宵の八時ごろのことだつた。雨の音のさわがしいなかで、ダリが二、三度鳴くの私たちは聞いた。いつもとちがつてカン高い、澄んだキレイな声で鳴いたので、私も妻もハッとしたり。

△元気が出てきたのかしら▽
と妻がいった。

私にはどうもそうとは信じがたかつたけれど、結局、衰弱しきつてゐる犬があんなに大きな良い声を出せるわけがないワ、という妻の意見に加担した。

△大丈夫らしいね▽
今おもえば、その声は、ダリが力尽きる最後の私たちへの訴えであつたのに、ゆうべに限つてなぜそれが妻にも私にも通じなかつたのか。

ゆうべ、私は夜中に鼻血をだして目をさました。夕方から降りだしていた雨がよいよよく降りつづけていて、縁側のトタン屋根がはげしく鳴っていた。バジャマの襟が脂汗でねっとりとしていて、ひどく重たい、ズシンとした夜ふけであつた。ふと、死んじやつたのではないかな、と不吉な予感があつた。

が、いつかまた私はそのまゝ、眠ってしまったらしい。

ダリが妙な咳をしはじめたのは四月ごろからであつた。そのときダリのなかに、死の影が落ちはじめたのだ。ちょうどそれは、夏樹が小学校からの帰り道に十四で買ってきつたというヒヨコの若いひのちが私たちの家族に加わつて、力づくで成長しはじめたころである。

△フィリアアですれ▽
と診察にきた若い獣医は、べつに特別の感

動もなしにいった。心臓のなかに虫が住みついて、犬は次第に衰弱し、貧血を起こしてやがて死ぬ、治療には砒素という劇薬をつかうほかない、危険だけれども、ともいった。

ともかく、まず肝臓をつよくすることだというので、グロンサンを飲ませたり、体力をつけるために牛肉をたくさんたべさせたりして、半月ばかり待つことにした。その間も、ダリの妙な、乾いた咳は止まなかった。

六月のはじめ、若い獣医は二、三日置きにやってきて、ダリのお尻に砒素を注射した。毎日何となく胸さわがしてハラハラしたのだが、そのわりにダリは平静で、何という変化もなかった。

一週間ほどたつて、これはうまくいったナ、と私たちが思ったころになって、急にダリから力が抜けてゆくのがありありとわかった。まったく急にだった。

ダリはほとんど動かなくなった。一日中じっと小舎のなかにうずくまって、からだ全体で一心に息をしていた。ひかりのにぶってしまった目がけんめいに妻の目をもとめてやめなかった。

それでも、ときたま立ちあがろうとするのだが、自分の力ではもうどうしようもなかった。うしろ足が立たないのだ。妻が手をか

てやってやっと立ちあがれたけれども、すっかりたよりがなくて、フラフラした。長い、白い舌がいっばいに垂れさがり、口をあけたま、荒く早い息をすると、からだ中がゆれろく感じだった。

カーキー色の細いズボンをはいた獣医は、一日置きにやってくるアドック糖や強心剤を注射して、何にもいわずに帰っていった。

梅雨の長雨が、ダリにいじわるをするように毎日止まなかった。

一日、思いがけず、サッパリと霽れあがった日があった。その日ダリには何となく力が戻ってきた感じで、やっと重たい腰をあげることにできた。背中を妙な、丸い形にそらせてアクビをした。

△何だか元気が出てきたようだワ。助かりそうだワ▽

と妻は救われたような明るい声になった。その日の夕ぐれから、またしても梅雨が降りつゞけはじめた。その夜、私たちがダリの症状をあまくみみたのがまちがいったのである。

仁川にがわの家に仔犬で貰ってきてから五年ばかりの、短い生涯であった。

柳の芽吹く朝のうた

大村直子

あたたかく はげしく 春の雨は過ぎ
土のおいのひろがる朝
ほうやりと 息するように
私たちの柳はみどりになる

なだらかな丘の上では
死者たちがなつかしいまどいをし
すきとおる陽の光と
うつくしい雲がある

そして まだ陽の来ない柳の下に
ひそかな生きものは
かしこく きき耳をたて

生れていないものたちの青いかけが
やさしい枝にすがって
哀願するように身をふるわせている

庭で

没落した旧家の庭に
古い梅の木は

枯れおくれて花ひらき
忘れられた庭石にもたれて 妹は
単調なひとり遊びをする

しげりすぎた植え込みの中から
オレンジ色の小蛇が

それはそれはかなしげに首をもたげ
その時ふいに飛びたつ
やまばとの羽音におどろく

すると暗い杉木立ちのいただきが
いっせいに 否定の身ぶりでゆれさわぎ
静かな花びらは
雪よりも白く

妹の上にふりはじめ

甲陽園のある大きなお邸にダリを貰いうけにゆくとき、まだ幼稚園に通っていた夏樹が、どうしても一緒にゆくんだと妻にダダをこねた。それで妻は夏樹に、
△もし訊かれたら、親類の子供って答えるのよ▽

とい、ふくめて連れていった。
というのは、その家の奥さんというのが、大へんな犬のマニアで、大きなその家の部屋という部屋にはスピッツだのスパニエルだのマルチースだのが二十匹ばかりも駆けずりまわっていて、何ともいえない匂いがする家だと近所でも評判なのだが、その奥さんが、子供のいる家には絶対に仔犬を預けてはくれない、ということであったからだ。

ダリはしかし夏樹ともすっかり仲好しになり、庭や近所の松林と一緒に遊びまわり、一緒に逞しく成長した。
それから、突然私の仕事の都合で、東京への引越。ダリは小さな木箱のなかに入って、私たちとは別れわかれになってはこぼれた。大根がたよりであった。

東京の家に私たちが着いたとき、私たちが指定しておいた駅にそのダリの木箱はみつからなかった。日通の係員がどうまちがえたのか、阿佐ヶ谷駅に送り届けられていたのであ

ダリのこと口あらそいがはじまった。しかし、東京にはまったく不案内な妻は一人阿佐ヶ谷まで出かけてはゆけなかった。結局私もかなり重たい気持ちでついてゆくほかなかったが、阿佐ヶ谷駅の、ほの暗く湿っぽい貨物置場の隅にダリの木箱を見つけたときには、やってきてよかったナ、と何ともあたたかい感動があった。

ほとんど木箱を毀してしまいうる勢いで、ダリは妻の胸にとびこんだ。仁川の家で別れてからまる三日目だった。ダリは激情のあまり、妻の膝の上に小水を洩らした。

☆
夜、勤めから帰ってきた私をいちばんはじめに迎えるのがダリだったので、ダリが死んでから、門の戸をあける音が妙にウツロに耳にひびいた。外にいても、半月ばかり、私はひとりになると涙がわいてきて困った。

伊東静雄研究文献考(三)

小川和佑

〔作品論・鑑賞等〕先ず「わがひとに与ふる哀歌」に關しては前述の萩原朔太郎のものがあつたが、これらは創元社版「萩原朔太郎全集」の第七巻に収録されている。また①の項

で挙げた「コギト」の特集号も忘れてはならない。戦後のものでは小高根二郎氏の「わがひとと与ふる哀歌」のわがひと（昭三三・一〇「詩学」）、「哀歌の傍証」（昭三六・七「人間」）、「伊東静雄の悲恋と実証」（昭三九・九「本」八号）等は、この「哀歌」の注釈、鑑賞には欠くことのできない基本文献の一つである。

次に「夏花」に関しては「芸文文化」に特集号があり、保田与重郎、山岸外史、田中克己、池田勉の諸氏が執筆。その他に富士正晴氏の「詩集「夏花」をめぐって」（昭一五・一〇三）、「芸文文化」や恩師頼原退蔵氏の「伊東静雄君と詩集「夏花」」（昭一五・七「コギト」）がある。

「春のいそぎ」に対しては、現在までに判明しているものは鈴木亨氏の「春のいそぎ・評」（昭一九・六「四季」八一号）と篠原茂氏の「春のいそぎ」（昭三八・四「現実と文学」）の二点。これは戦争下の雑誌統廃合令によって雑誌の数が少くなったことと、この時代の雑誌が殆ど散逸してしまっただけで、発見困難なためであろう。因みに鈴木氏の書評の出た「四季」八一号はこの雑誌の終刊号である。戦後の自選に新稿を加えた「反響」については同詩集の刊行に先立って、京都の矢代書

店から長江道太郎氏編集の詩誌「詩人」の三号（昭二二・三）で「伊東静雄詩抄」の小特集が行われている。これに関しては長江氏の「いまは遠い反響からも選んでこない——伊東静雄の思い出に」（昭二八・六「詩学」）の追悼文がある。また最近のものでは鈴木亨氏の「伊東静雄三題」（昭三九・九「本」八号）がある。「反響」の刊行された昭二二年一月前後はようやく主知派・社会派を含めた戦後詩が詩壇の主流に立った時期であり、一種の革新の時期であり、戦争下に於ける文学の批判に主力を注がれていた時代であったことは伊東の抒情が正当に評価され得る時代ではなかったといえる。しかし、その後この詩集が創元社の百花文庫の一冊として再刊されている事実は、伊東の詩を受するものと詩壇の思潮との間に自ずと別個の評価があったことを意味するのではないだろうか。

「反響」の作品そのものを対象にしたものには三枝康高氏の「伊東静雄「夏の終り」」（昭四〇・九「国文学」）がある。「回想・伝記的研究」伝記的研究の分野ではやはり小高根氏の諸論が挙げられるが、詩人の年譜的にたどって行けば、諫早時代に関しては蒲池徹一氏の「旧友伊東静雄」（昭二八・六「詩学」）、「中学時代の思い出」（昭三

島尾敏雄 著

私の文学遍歴

緊密な文体をもって日常にひそむ人間の内部世界を描ききったユニークな作品を戦後一貫して発表しつづけてきた著者の文学的自叙伝と最新のエッセイ・随想・紀行文等を収録した評論集

¥580

東京都文京区小石川三二七
振替東京八七三八五

未来社

四・四「果樹園」三九号）や、川副国基氏の「伊東静雄のこと」（昭二九・一「河」）、「小高根二郎氏の静雄論」（昭三九・九「本」八号）、「伊東静雄の故郷」（三九・一〇「芸文論叢」創刊号）、福田清人氏の「伊東静雄君の思い出」（昭二九・三「河」）がある。佐賀高校・京大時代のものについては酒井小太郎氏の「伊東静雄君に就いて」（昭二八・六「河」）と倉本平治氏の「下宿時代の伊東さん」（昭三七・五「果樹園」七五・六

号）等を挙げる事ができる。住吉中学勤務時代に関しては「祖国」や「果樹園」の特集の特集号所収のエッセイに詳しいが、（これに

湯西川温泉

萩 本家 義

なにしろ川路から
曲りくねった山道を
バスに揺られて一時間半の
山奥なので
国際観光ホテルといっても
木造二階建て——

小学校の昇降口のような
玄関から、帳場のある広間へ
通るや否や
剝製の大きな黒熊に
おどろかされた
ホテルの者の話だと
こんな奴が、年に六、七回は
近くの山でとれるという
広間には、片隅に

関しては①の項参照）この中の中川邦夫氏の「乞食のノボリ」はおかしく哀しく印象深いものである。雑誌特集号についてはその目録一

大きな囲炉裡もあって
でっかいヤカンに
お湯がたぎっていた
夕食をすまして、一風呂
浴びたら、この炉ばたで
熱いお茶など飲みながら
ゆっくり、山の話でも
聞きたいと思う

降りしきる雨のように
絶えずきこえているのは
ホテルの裏の谷底を流れる
湯西川の水の音
窓へ寄って、那須火山帯
海拔一六〇〇米の裏山を
仰ぐと、四月だというのに
木々の梢は、まだ寒く
烏帽子のような恰好に尖った
山頂に、残んの雪が
さくらの花より白かった

覧を参照することに譲るとして、その他に小高根二郎氏の「伊東静雄の好みとしての盛場」（昭二八・七「ブシケ」）、「伊東静雄と枇杷」（昭三六・七「大阪文化」）、「阿呆陀羅庵と寒批庵」（昭三七・三「果樹園」七三号）があり、詩人の日常の佛がウィットに浮かびあがっている。特筆したいのは林富士馬氏の「かの旅」（昭三七・四「日本医事新報」）、「全集付録」である。三好達治氏のものには既に①の項で触れた。なお教え子庄野潤三氏には「伊東先生の手紙」（昭二八・六「ブシケ」）の他「詩学」追悼号にも一文がある。

阿部野高校・療養時代に関しては、若山登美子氏の「伊東先生の思い出」（昭三七・八「果樹園」七八号）や特集号中の港野喜代子氏の「記憶の詩片から」（昭三六・七「人間」）織田喜久子氏の「倦んだ病人」（昭三九・六「果樹園」一〇〇号）、原田良祐氏の「同病相憐むの記」（昭四〇・三「果樹園」一〇九号）などを拾いあげることができる。この中では①の項で挙げた伊東花子氏・西垣脩氏のものとは前述の如く逸することはできない。

「日本浪曼派・周辺資料に関連するもの」この項に関するものは流石に多くある。以下にそれを発表年月順に列挙する。

小高根二郎氏の「伊東静雄と日本浪曼派」

死の七つの歌

トラークル
平井俊夫訳

受難

夕ぐれの庭園で死者を歎きつつ
 オルフォイスが竖琴を銀色に奏するとき
 高い木立のしたで憩うものよ おまえはた
 れ。
 かなしみは秋の葦に
 青い池にそよぎ揺られて
 緑の下蔭で死にゆきつつ
 妹の影のあとを慕う。
 荒々しい一族の
 暗い愛。
 太陽が金輪をめぐらして沈んでゆく。
 静夜。

トリートンの池のほとり
 ヒヤシンスの髪につつまれてまどろんでい
 る。
 おお 冷たい頭のついに砕かれてほしいもの
 を。

いつも青い獣となり
 瞳をたそがれの木蔭で光らせつつ
 あのかれがおぐらい小径をとおってゆく
 夜もすがらこころよい響きに
 優しい狂気に胸をふるわせ。
 あるいは暗い陶酔にひたつて
 弦の音がひびいていた
 贖罪女のつめたい足下に
 石の街に。

南風

歎きは風に旨いで 月影が冬の昼に懸ってい
 る。
 幼時よ 微かな足音が黒い生垣ぞいに遠のい
 てゆく。
 晩鐘の音もながく

魂の春

眠りのなかの叫び。黒い露地をいっせいに
 風が走りすぎる。
 折れかかる枝のむこうからは春の音が招い
 ている。

紫の夜露よ。こうしてあたりに星が消えて
 川がほのかに緑にしらみはじめ。銀色に
 うかが古い並木道や
 街の塔。おお やさしい陶酔のなかにつつ
 まれ
 小舟をすべらせてゆけばつぐみの暗い啼き
 声がする
 あの幼い頃の庭に。ばら色の霏がいつしか
 ヴェニールのように明るんでいる。

おお 日光のあふれる淵。

暗がりのなか

妹よ わたしがおまえを林間のさびしい場所
 にみたとき
 真昼 獣の沈黙が大きかった。
 おまえはただけしい柏のしたに白くたたず
 み 銀色に野茨が花を咲かせていた。
 烈しい死。胸のおくで炎が歌をうたった。
 くらい水が魚のうつくしい戯れにもつれてゆ
 く。
 かなしみの時よ。太陽は沈黙の景色となり
 地のくにに魂は異邦者。雲の青がほのかに
 荒らされた森のうえて光っている。
 暗い鐘がながく村にひびいている。安らかな
 道づれの音よ。
 死者の白いまぶたに静かにミルテの花がひら
 く。

魂はこの青い春を沈黙している。
 夕暮のしめった木蔭で
 恋人らの顔がおののきにつつまれて伏した。
 おお 緑にそびえる十字架。
 語らいもくらく男女はたがいを知った。
 さむざむしい石垣にそい
 孤独者がかれの星たちとともにさすううて
 ゆく。

おごそかに水がせせらいでいる。おお 沃
 野の影はしめつつ
 歩みをはこぶ獣よ。緑にめぐむ枝は花をひ
 らき
 この水晶の額にふれる。きらきらと揺れる
 小舟。
 太陽はばら色の雲につつまれてかすかに丘
 のそばでひびいている。
 縦の林にしずけさが大きい。川べりの葎葉
 な影。

午後はしだいに沈んで水の音もひくく
 川べりの荒野にひとしお緑の色がくらい。ば
 らの風のなかの歎び。
 夕暮の丘に兄の優しい歌。

月にてらされた森の径のむこうへ
 狩の日も遠く忘れられて
 荒野が沈んでいった。
 朽ちた岩のあいだから青の視線がこぼれて
 くる。

清い おお 清い時。死のおそろしい径は
 どこなのだろう。
 灰色に黙す石の小径 夜の岩
 そうして安らぎのないあの影たちはどこ。

増補・改訂・決定版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 編
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文五篇、雑二篇、書簡三十一通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華決定版。近刊。

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
板替 京都 一〇三

果樹園 一二四号 昭和四十一年六月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所

元市印刷株式会社 定価四十円 送料十円

編集後記

四月三日、知人の結婚式で福岡へ飛んだ。雨中を太宰府に参った後で、開式までの寸暇を利用して大濠公園近くの喫茶店で蓮田品一さんに出会った。彼は今九州中央病院で小児外科を担当している博士である。話の中で判明したところだが、彼が九大時代に師事したことのある山村教授は、阪大で助教授をしている僕の義弟が属する第三内科の主任教授である。もともと伊東はこの第三内科で肺結核と診断されたのである。因縁はめぐるようである。

四月十日、所用あって米子に行く特急まつかぜで偶然桑雅子さんと同車した。同じ米子へ婦人会の講演にゆかれるのだった。意外に桜を出迎え見送りながら十年ぶりに文字の話をした。

四月十四日、公正取引委員会の用務で東上した。寸暇をえて東京商工会議所にあるクラウン・エジエンシイに酒井百合子さんをお尋ねした。元気であった。おもえば伊東は入らぬいろのことと思いだす桜かなVという芭蕉の句が好きだった。

転居・高知県幡多郡土佐村政木 吉本青司

果樹園 第二四号 (毎月一回一日発行)

昭和四十一年六月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根二郎

印刷所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 十円

果樹園 一二五号 昭和四十一年七月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所

元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園

第125号

蓮田善明とその死 小高根二郎
春風と蝶 大村直子
えにしだの港町 美堂正義
貧乏うた 浅田二三男

春の枯葉 萩本家義
オトナセ部落で 吉本青司
コギトの思ひ出 田中克己
ヘリック詩抄 森亮
トラークル詩抄 平井俊夫
成田れん子の詩 浅野晃
編集後記

蓮田善明とその死(二六)

小高根二郎

一番湯が賑合うのは夜八時から十時すぎまでだった。若い女達は元湯に近い女湯を熱すぎるので嫌って、二三人の集団で男湯に侵入していることがよくあった。彼女等の発散する好色について、蓮田は次のように語っている。

「彼女等はさすがになるべく湯槽の隅の方に、余り体を動かし廻らないやうにしてゐるが、彼女等が一人でも湯槽に入ると、全く華麗な白牡丹を浮べてゐるやうなあでやかさを浴室に与へるのであつた。華麗といつても、か弱い優しいものではなくて花の

れらは逸してはならないであろう。異色は奥野氏解説の「昭和戦争文学全集」でここには「春のいそぎ」の抄録があり、その戦争下に於ける意義が説かれてある。

結び

以上で、従来までに判明した一三〇余点のあらましを俯瞰的に述べたものであるが、これは勿論、今後に書かれるべき「伊東静雄研究文献総覧解題」の一アプローチであり、またいわゆる単なる実証的研究の一資料でもなく、これらを踏まえて書くべき「伊東静雄研究」のための基本的作業と考えている。もとより一三〇余点は完全なものではなく、この外の文献を発見整理して補筆を重ねて行く作業は今後も長く続けるつもりである。それによつてより完全な総目録を作ること、青春の入口で邂逅し、詩の美しさを教えられた詩人に対する義務だと考えている。

既に「四季」「日本浪漫派」の総目録は成田孝昭氏、三枝康高氏によつて作られているが「呂」「コギト」「文芸文化」にはそれがない。これらも今後の課題であろう。

この拙論の中で、見落したものの、割愛したものもある。これらを諒として、御叱正・御教示を賜われば幸いである。

もつ野性さがあつて、それが咲き誇つた大輪の豊かさに艶めいてゐるのであつた。そしてその簡単に束ねた髪からも、円く盛り上つた白い肩の一部分からでも、桃色をした耳朶からでも、人間の若さそのものの匂ひが発する或るはげしいものがあつて、男達の皮膚にそれはびりびりするほどひびくのであつた。」

この男達の皮膚にびりびりと感応させる、若さそのものが発する或るはげしい何か……それを感応し、感応させる交感を、意識することがいわゆる好色なのである。蓮田はその好色を、老・壮・青年の区分でさらに精細に分析している。

「気さく、老人達でもその傍には居たたまれなくてそつと離れて反対側に行つて長く

なつてみたり、洗場の上つてみたり入つてみたりしたが、女達の一挙手一投足から離れることができなかった。しかし老人達が一等これが楽しみらしく見えた。確かにさうして浴場を共にするといふことが彼等の老までが老そのものながらにがやくやうにつやめいてくるのであつた。」

つまり、この男の老人達でさえ艶めかすものが好色なのである。ところで、「壮年者達は何か余裕を示さうとしつつ最もはつきりとその影響を受けとめて味はつてゐた。」

と、実力者である壮年者は、好色においても一番の享受者であるゆえんを説いている。しかるに、「青年達はまるで生気がなかつた。唯力弱げに時々横目を使つたりしてゐた。彼等は敏感すぎるのと同じ年輩でも早く成熟してしまつてゐる女といふものに圧倒されて頭が上らないのであつた。」

と、好色における青年男子の不甲斐なきに同情している。ところで、年長の女達にはどんな影響を与えるか?

「年長の女達にはもつと複雑なものがあつた。無表情で示す嫉妬もあり、まだ自分の中にも残つてゐる名残を嗅いでみようとする

分をいとはしんでゐるのもあり、溜息ついでゐるのもあつた。しかし結局若い女達の若さと美しさに我を忘れておどろき見惚れる瞬間を隠し得なかつた。」

と、蓮田は同性間の好色の反応までいいねいに分析してみせている。

この好色の分析は、「有心」十二章でるる記述されていて、「有心」十三章におけるさいぜんの娘の水泳を覗き見る事件に先行させているのは、覗き見にいたる彼の心緒の起伏は、生のあかしとしての健康な好色であるゆえんを説くための、用心深い解説の設定であつたと想像される。さらに披手をきる娘の裸を、のぼせた牡丹や桜色にでなく、蓮田好みの白に表現している点の配慮なぞ、彼の好色の気配を猥らに取り崩させぬための、作家的な用心であると思考される。

しかし、蓮田が好色より一步突き進んで、肉感とでもいう衝動を感じさせる妙な女に出会つたのは、客達が続々と引揚げていった、立春後のさびれた浴場においてであつた。日が暮れて少し早目に浴場に行つた蓮田は、初めて病人らしい中年の女に出会つたのだ。彼女の顔色には生氣がなかつた。額は少し青んで広く、カン骨が太く光って妙に肉を残しているが、頬は削げて鋭く顎へついで

いた。その頬には深く衰えが漂つていながら、横鬢から顎にかけて不似合なほど濃い髪が横顔を隠していた。それに著しい特徴は高く細い眉で、描いたように瘦せた眼窩の端に弓形についていて、切れ長の目、鼻、唇も、すべて眉に似て薄手であつた。

彼女は石の縁に頭をもたせるように少し仰向きながら身動きしなかつた。しかしそれにも特徴があつた。普通の女達なら、たとえ身動きをしなくても、内面の生氣が静かな表面にも現われているものだが、彼女は違つていた。しん底冷えきつた何か、じつと息を止めているような静けさを保つていた。彼女の連れらしい六十がらみの老人が、ふと近付こうとした際、その気配に彼女はすつくと立ち上ると、手拭を腰、落ち湯の方へ遠ざかつた。

湯の深さは腰ほどでもなかつた。波一つ立てず浴槽を斜めによぎる彼女を見上げて、蓮田は、彼女も病人なんかでなかつた……と、最初の印象と違つた感慨を抱かされた。首も、肩も、筋が見えるように肉付がなかつたが、背から腰……、それから脚にかけては、まだ生々しい肉が残つていた。しかし、それは、あだな前身を隠ばす、放縱に荒んだ肉体であつた。子供を生んだことがなく、また将来も生むことがないであろう体であつた。その或る部分

増補・改訂・決定版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 共
富士正晴

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文五篇、雑二篇、書簡三十一通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華決定版。近刊。

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一一〇三

人文書院

春風と蝶

大村直子

春風が花びらを車にしたてて

にぎやかに

青い坂道をのぼっていく

うまれたばかりの白い蝶が

いっしんに

そのあとについていく

そして いつのまにか

高く 高く

空の上までのぼっていく

光の記憶に

まぼられてしまふ

は哀れなほど冷やかに老耗していた。たとえば乳房なんかそれで、用をなさぬま、萎んでいた。しかし、その老いと若さが交錯した複雑な体の中には、彼女自身でさえ意識しない怨恨や、悲しみや、怒りや、執拗な生の慾求が、燐光のように燃えているのが感じられた。彼女の肉体は力なく屈しつ、あるように見えながら、まだ案外に若い。感いやすい男の体を欲しがっている。そしてその最後の食欲な閱歴を終えたら、ぼっこり崩れるように委び果てるかもしれないと思われた。

彼女は蓮田の前で落ち湯に体を打たせていたが、やがて静かに元の位置に戻り、石の縁に頭をもたせ、男のように両脚を水面から斜め上にもたげて、それも石の縁にそろえて載せたのであつた。つ、しみのないそんな姿勢で、彼女は冬眠した蛇のように何分も動かなかった。新入りの男達の目にも、さすが驚きの色があつた。蓮田は上ろうとしていたと、彼女の連れの老人が、今まで何処に置いていたのか薬缶をぶら下げていて、女に差し出した。女は仰向いた姿勢のまま、黙つてそれを受取り、薬缶の口から水を飲むと老人に返した。老人は「もういいか？」という風に女の耳元に顔を寄せて聞き、女は唇から下でうなずいた。彼女は老人の後妻で、もあるのだ

ろう。それも前身のあるたゞでない身を、小金をもった老人のたつても……という強い希望が連れこんだ後妻に相違ない。老人はどうかすると濡れた石畳に足元をよろめかしそうになるほど老衰してはいるが、どうしてまだ、詰い皮膚の下には強い力を内蔵しているようであつた。

ところがその夜、別のことから事件が起つたのである。蓮田が浴場から戻つて火鉢にもたれてもの思いに耽つていと、ひいー……という若い女の嗚咽の音が耳に入った。滝の音や風の音に紛れることがあるが、確かに声をあげて泣く娘の声であつた。ときに声を押えようとしながらも、噛みしめる歯や唇を吹き破るように慄え奔るかと思つと、ついに大口を開けてわア……わア……とあたりは……からず泣きわめくのであつた。その泣声は蓮田の耳を傾かせた。いや、瞬間、温泉宿の人も物も、すべてその声に吸いつけられたようであつた。蓮田は火鉢にもたれて金剛巖氏の「能と能面」を手に取り取つていたのだが、さきほど見た中年女の肉体が惘々として迫ってくる不思議な印象を整理しようとしていた。

「その印象は一言にいへば、荒しいものであつた。己と己が肉体の肉と血を噛み吸ひ、

萎れ荒んだ己が肉体を嘲つてゐるやうな、
怨念に青白んでゐる女体の、おのづからに
放つてゐるもの狂ほしいみだらさが、冷静
であらうとする意識に、ひつたりと貼りつ
き、次第に自らの血管の中へ、寄生木の白
い根のやうに、糸のやうな根をしづかに執
念く喰ひこんでくるやうな気がしてくるの
であつた。」

まさにあの中年女は好色の精ともいうべき
存在である。浴場の中では岩乗な古木に似た
老人の障壁を透して感応していたものが、今
やいきなり蓮田の内に妖しい白い根を下し絡
み付きだしているのである。蓮田が感応させ
られているのは、好色から一歩突き進んで、
青白い情欲ですらあるようである。女はもほ
や精の妖しさから幽鬼の容装をしていた。

「こんな女こそ、能楽の幽鬼のやうな狂体
となるものではあるまいか、否すでに狂体
そのものではないであらうか。それは単に
この女が己一人で頽廃させた体ではなく、
女といふものへかかはりをもつ男の、否人
生そのものの命の「好き」ともいふべき好
色の、その好きのすすみのままに魂と肉体
とを崩壊させつつ、さういふ「好き」自ら
が自らを悔い、怨み、狂うてゐるやうな感
じであつた。」

蓮田は「能と能面」の口絵の写真——「定
家」や「求女塚」のノチがつける木見作の
「瘦女」や、鬼と化した女の狂体がつける「般
若」の面に、この女の面影を探つたに相違な
い。この仮面を内蔵した女は、ちらり……と
蓮田に、見るともなく眼をくれ、老人を避け
て落ち湯に身体をうたせると見せて蓮田の近
くに寄り、瘦せた背を見せながら元の位置に
戻つてから、湯槽の縁に脚をもたせて男のよ
うに長々と湯に浸つてみせた狂体……。蓮田
はその場面を反芻してみても、「いのちの苦し
い呻きが、びりびりと魂の底にひびくやうな
気がし」「生気の復活を待たうといふ心」
——つまり、生の復活をおもむろながら感応
したのであつた。

こんな妄想に耽つてみると、中年女の悔い
や怨みや執念深い慾求が、ふと、深夜の浴槽
でつゝしみを忘れて酔つたように泳ぎ廻つた
り、それかと思つと人前に固く己を包んで躊
躇したあの娘へ、何か係わりをもつてくるの
を感じるのであつた。結局、それは同じもの
ではないのか？ 同じ「女」の本性ではない
のか？ 「あの中年の女の見つめてゐたのは、
男の肉体——況や自分の肉体などではなく
て、女自らを、それも朽ちかけてゐるそのも
のとしての「生」、生として溢れる程に豊麗

三枝康高著

現代史のなかの作家たち

——人間疎外と文学——

現代史における疎外状況と、
文学者はいかに対決したか。
戦前・戦中・戦後の各時期に、
それぞれ指導的役割を演じた
運動とその主体とを、新しい
視点から分析した本書は、と
くにプロ文学・前衛文学・ロ
マン派・無頼派・西田哲学・
アプレゲールなどを対象とし、
林房雄・中野重治・三好達治
・織田作之助・石川淳・保田
与重郎・太宰治・伊東静雄・
井上靖・安部公房らを追及す
る問題の書となつた。

¥ 680

東京都文京区本郷五丁目三〇ノ二〇

有信堂

えにしだの港町

美堂正義

疲れ 疲れ果て

海に見える駅に降り立つた

道々えにしだの花が咲き続け

光溢れる初夏の空

風は緑のしたたりを運んで来た

磯の匂ひのする茶店の少女の

土瓶をのせた盆の上にも

えにしだの花弁がこぼれ落ちてゐた

あれから三十年

その港町もすっかり変つて

ときにその駅を過ぎて

えにしだの花を見ることはないが

けふ坐つて呆けてゐると

その風物が不意に生々しく浮んで

少女の姿もいきいきと目の前にある

に生ききつた若い乙女のいのちといつたやう
なものを、崩れ、曇りゆく己の肉体を以て見
つめてゐた」と思われてくるのであつた。そ
の時であつた。庭越しに、滝と風の音の中に、
ひいーッという、あの若い女の泣声が聞こえ
たのは……。蓮田ははッとした。瞬間、今ま
での自分の想念が闇の中を走つていって、あ
の可哀そうな娘を打ちた、いたと錯覚したほ
どだからである。娘は声をあげて嗚咽してい
た。波が引き、又、打ち寄せるやうな泣声の
震幅。蓮田はその震幅をじかに耳で受け止め
ようとでもするように障子を開けた。そこに、
「火はこさいますか？ どうぞ沢山に……」と、
女中が階段を昇つてきた。蓮田は「あの泣声
はどうしたの？」と、なんとなく聞いていた。
女中は声を落すと、「あの娘さんの婿さんに
なる人が戦死したといつて、今しがた叔父さ
んが宮崎の方から山越えて、迎えにおいでた
のでございませう」と説明した。瞬間、蓮田は
顔から血が下つていくのを感じた。あわて、
床をとると蒲団をすっぽり……と頭からかぶ
った。唇がふる／＼と慄え、嗚咽が咽喉を衝
いて出た。歯がきりきりと軋んだ。すると一
層熱い涙がほとほと音をたて、敷蒲団の上へ
落ちた。全身がかあーッとして熱くなって火が出
るやうな気がした。その意識を失つたやうな

烈しい嗚咽の中に、悲鳴のやうなあの娘の甲
高い泣声が聞こえるやうな気がした。そして
深夜の浴場に若い体を漣転させて泳がせてい
た姿が、現れたり隠れたりした。突拍子もな
く、植木町で留守を守つてゐる敏子夫人や、
愛子である晶一、太一、新夫ちゃん顔が点滅
した。一かと思つと、耳を掠めて飛びすぎた
銃弾の音や、砲弾のシュル、シュル、シュツ
……ドカン！という炸裂音と爆風とが、まぎ
まぎと肌身に感じられたりした。すべてが体
にこたえて、命がきりきり絞めあげられる苦
しさで慄え止まず、わわわ……声を上げて
泣いているのであつた。これは異常なほど強
烈な蓮田の感情移入だ。蓮田は悲しみと同情
から、躊躇することなくあの娘へ投入したの
だ。いや、娘の死んだ婿がいまわに反転し苦
悶した痛苦と絶望とを、己が戦場体験から共
感したので。泣いて泣いて、泣きあげたあげ
く、やがて何もない、己もない、ただ荒涼索
漠とした空間におぼり出された。もはや何
も求めない。思いもしない。悲しみだつてし
まい。恨みだつてするもんか。蓮田は嗚咽の
止んだ後も震幅を反芻する胸から溢れでる涙
を拭いた。そして

「断絶した！」
と、心に叫んでいた。叫び終ると、ふッ……

と大きな軽やかさを覚えた。しかし頬はまだ涙だらけであった。

翌朝目が覚めると蓮田は火口に登る決心をした。とても温泉などにぬくぬく浸っている心境にはなれなかった。火口へ登るんだ。そう……全身が咬るのを蓮田はどうもできなかった。女中に朝飯を早くするように命じた。やがて運ばれた食膳に向いながら、火口へ登る道を聞いてみた。女中はよく知らなかったが、なんでも庭の右から登る坂道があるらしいゆうございませ……と教えてくれた。三時間近くか、りましよう……とのことであった。

登山路はあるにはあるが、はっきりした道ではないらしかった。昼食は火口の下に開かれている茶店でとる段取りにして、身一つで出かけることにした。出かけようとするとところを、硝子戸ばりの帳場から跳びだしてきた女中に呼び止められた。「火口へ登るお客様からは、失礼ですけど、お宿泊料をいたゞくことになっております」と、勅定書をさし出した。「なるほどね……」と、蓮田は財布を出しつ、ふ……と胸が白むのを覚えた。

蓮田は庭を横切つて、滝が懸っている崖の裏手へ廻る坂道の厚く凍つた土を、踏みしめ、踏みしめ登つていった。丁度、崖の裏

貧乏うた

浅田 二三男

吹く風に
ギチギチ家がゆられてる
ガタガタ雨戸もなっている
手おり木綿のきりもんも
とうの昔にポロになり
タンポポの花も枯れて
どこへやらとんでいってしもうた
お母んは古びてかさかさになり
白髪頭だけ生きている
白髪頭はつぶせない
唐臼などではもちろん
つくこともでけん
くわらつと割れた頭から
とびだすのは

それはおれにきまっている

おれは一日中おれであったり
かと思ふと

ボクにもなったりする
木々の根っこや土くれどもが
ひがな一日よびたてるが
そうしては
食つてはいけん

罌で蠅がものうく動き
薬しべばかりがやわらかく
小鳥の声も水の音も
ききなれたまま身にしみこんで
時計はとつくにとまったまま
クモの巢にまみれ
鎌の柄はゆるんで
じとじと雨にぬれている

た。氣附いてみると、道がT字形に左右に分かれていた。道標の文字は古びてほとんど読めなかったが、左右とも火口道に導く路であるらしかった。

いまために陸地測量部の五万分の一の地

図で、この道を進んでみる。蓮田は垂玉温泉の庭を右に過つたのであるから、兜を伏せた形の夜峰山中腹の地獄温泉へ抜ける切通しを通過して、崖の東裏に出たことになる。そこで路は明らかに二つに岐れている。左の路は標高三三三七米の烏帽子嶽の西裾を通過して千里

春の枯葉

萩本家義

曇すぎから
急に降りだした
春にしては大粒の
冷たい雨は
日ぐれになつても
なかなかやまなかつた
たぶん、手持無沙汰だった
せいなのだろう
いつになく夕刊が
読みたくなり
傘をさして
路次に面した木戸のそばまで
行つてみた

浜に抜けている。右の路は烏帽子嶽の南裾を通過して、いきなり噴火口下の山上神社に通つている。蓮田が進つたのは、この右路の方であったのだ。

蓮田は路をゆきつ、道も方向もわからぬ戦地での索敵行動を思い出していた。いつど新聞受けの箱の口には夕刊は、まだ

きていなかったが念のために、その箱の横につくった蓋をあけ中をのぞくと雨に追われた
檜の枯葉が二つ三つ
身を寄せ合つて
かくれていた

路次をたたく雨脚がまた、烈しさを増してきた
家の中へ戻つてくると
いっそう氣持が暗くなり
テレビドラマを見ているうちに
不覚にも涙をこぼした

こで袋の風になるやもしれない。いつどこから撃つてくるやもはかりしれぬ。ところが今はどこからも弾丸が飛んでこない。なんだか氣抜けしたような氣持で蓮田は歩いていった。いや、晏家大山や大橋嶺の陣地では今頃どうしているだろうか？ ひよつとすると、あの娘の婿が遭遇したような不幸が起つているかもしれない。蓮田の足は止るともなく止つていた。無事を念すると再び歩きだしたのであった。

ふいに全く広い所にた。木立というものは何もなく、大きな円い空と、大きな黄色い土の塊が眼前にあった。牛の背のような曠野の果てに、右と左に大きな草山の隆起が空にめりこんでいた。それは庭先の築山のような単純さにも見えたが、あまりに人間的なものを超えた凄さにも感じられた。その西北面にあたるこちらの斜面は雪に蔽われていて、その下の磐岩の尖った形が内在する威厳を示していた。しかし、その左斜面は目路はるか幾里か彼方の溪谷にまでなだれていて、その溪谷の一角に豊肥線と高森線とを分岐する立野を中心とする阿蘇一郡の聚落が沈んでいるはずであった。そしてその深い溪が、さらに周囲二十里の外輪山に屏風のようにとりめぐらされているのであった。

原田慶詩集

野の饗宴

京都市上京区長者町通千本西入福島町三七四妙徳寺

方 向 社

¥ 350

見境いのつかない形であった。見てみると、それは間断なく湧き出る雲であった。その雲とも煙ともつかぬものを目標に歩いた。路は一層ひどく、大小の谷のような所を上り下りしたり、岩の上を通らされたりして戸惑った。時にとりすましたような立派な小径を辿ったりした。咽喉が渇いて雪を掬って口にふくんだ。齒の間にシャリシャリさわるものがあつた。氣をつけてみると、真白い雪の上には目にもとまらぬほど微細なヨナが点々と交っていた。

突然行く手に、音ともつかず、空気の震動ともつかず、地鳴りともつかぬ或る大きな響きのようなものが、空と地とから感じられた。やがてそれは、はっきり途方もなく巨大な地洞から、大地が荒々しい息を吐いた音として聞きとれた。目を上げた。丘陵の果てに湧いて吹き流れてゆく雲から、それが起っていることがわかつた。蓮田は胸にかッ!と熱いものが湧き上ってくるのを感じた。石ころの多

っていた。そこを通る細路を二つの岩山の門柱が厳しく守っているような圧迫を全身に感じた。ふと路が消えて水のない広い河床が現われた。雨が降れば一時に黒い奔流となって南郷谷に溢れ、白川となって肥後平野から有明海に流れるに相違ない。ときに大洪水を起すこともある。蓮田は河岸に沿って登ってみたが、岩に乗り上げて了って、行く手に窮してしまつた。あるはずもない橋を探していた。そのつかつさに思わず失笑した。戦場であれば、兵隊は早速そこらを駆け廻つてみて、敵感に路をさぐりあてるところである。思い切って河床に下りてみた。熔岩礫を避け、上流へ上つてみた。が、進めば進むほど岸が高くなつていたので、一寸後戻りをして、やうと向う岸に攀じ上つたのであつた。雪の下には思いがけなく平たい岩が潜んでいた。危く足を滑らして河床に転落しそうになつたりした。杵島嶽の今まで隠れていた面に太陽の光がとりついて、匂うほど輝やいてるのが望見された。そこからや、低く往生嶽(一二三八米)が右手につらなり、正面の丘陵めかしい起伏——中嶽(一二三二米)からは、雲にしては少し形の変つた動くものが、東に向つて吹き流れるのが望見された。しかし、噴煙というには余りに穏かな、一見雲と

とにかく眼前の二峰が烏帽子と杵島嶽とに相違なかつた。太陽はようやく右の烏帽子の彼方にあつた。あつげらんとしてたゞ広く明るい風景……。あまりのあつげなさに蓮田は思わず息を呑んだ。植樹しても植樹しても、その成育を許さない、自然みずからが放心したような山と空とが、人界を見下して楽しんでた。だいが歩いて右の烏帽子が迫り上つて蓮田のそばで真右に近寄つた頃、うしろを振り返つてみた。誰一人の影もなかつた。たゞ途中に、兎の足跡がひと所に小ちんまりと集まりつゝ、飛びくゝに雪の上を通つてたことを思い出した。蓮田はふとあの娘も思ひ出した。彼と前後して宿を発つて、違った方向へ、やはり山を越そうと歩いている姿を想い浮かべていた。彼女の頬を伝う滂沱とした涙は、点々と雪の上に滴り落ちて、兎の足跡のような痕跡を点々と銘していることだろう。健康でなにつ曇りのなかつた彼女の青春に受けた癒しがたいこの傷。この傷の痛みと疼きとを生涯彼女はどうか受けとめ堪えつづけねばならぬことだろう。彼女のこの痛みと疼きとを、蓮田は当然自分にも課せらるべき負目として、それに堪えるように、うんうん呻吟しながらすさまじい勢いで歩いた。道は烏帽子と杵島の両嶽をつらねる山あいに向

つているのが眺めやられた。正面には又もや凸凹の起伏があり、その彼方に草原が伸びて迫り上つており、うち見たところ草もなく唯雪を点々と置いた灰黒色の盛り上つた傾斜面が、ざっくり……向うに落ち込んでいて、その中から、うす気味悪いほどゆっくりと何気

い窪路を進んでゆくと、両側の荒々しく尖つた枯草の中に這いつくばっている河柳に似た木の枯枝に、うす赤らんだ芽が角のように並んでついているのが目に沁みた。丘陵帯を越えきると、左手に皿の底のように浅く凹んだ平つたい美しい草原——千里浜が、広々と拡が

オトナセ部落で

吉本青司

門出めしが出される
 ▲一杯でもかまんけ食べとうせ
 ▲縁がわのめしびつから めいめいがたべたいだけのめしをつぐ
 ▲寿福妙寛信女位
 ▲青竹の門をくぐつて
 ▲ばあさんの棺は出発する
 ▲たいまつが先導し
 ▲わらぞうりをゆわえた杖があとにつづく
 ▲山の入口に 人形をつけたらうそくが立てられ

そこをばあさんは通つていく
 ノボルもジュン子も まことの顔で行列にまじつていく
 ▲是生滅法
 ▲寂滅為衆
 ▲白いほりが風にふかれる
 こうして 厳しい生と死を隔てる儀式はおわり
 ひとびとは ダスタをまたぎミのさきから塩をつかんで帰ってくるが
 このさびしい二軒家の部落の名を
 ▲オトナセと知るひとはもういない

なげに雲のやうな煙のかたまりが後からく、湧き上つては、風に崩れて東手の山を蔽うて流れているのであつた。それは一見ひどくゆっくりとのどかに、まるで静止しているのではないかと思わせるくらいで動いているのだが、見つめてみると一瞬にして動いている速度と変化には、何か激しいものがあつた。

このとき蓮田は、ざっくりと向うへ落ち込んでいるその中に、目と直身に焼きついた、たゞならぬものを目撃したのである。それがなんであつたか? 「有心」の結びは解き明かしてはいない。それは当時として、解き明かすことを許されなかつた何かである。その描写を許されぬたゞならぬ物、ないし事件であつたことに間違はない。それは、その日から、「十年経ち、数十年の上も経て、昔ものがたりとして書ける日が来ようか?」と、危ぶまれるほど、軍政下では記事差止め、禁断の事件だつたのだ。

それが何であつたか? 想定する冒瀆をしばし許されたい。それは雪の点々とした灰黒色の急斜面に転がっていた自殺体だ。緑地に茶の縞の袴の……あ、あの娘だ。許嫁の職死も知らず深夜の浴槽を泳ぎ廻つた彼女が、その無常を再現するためにした跳躍の果てであつたのだ。

それにしても彼女は どうしてこゝまで辿りつけたのか？ 蓮田は途中でちらり……、彼女が違った方向へ山越えしている悲しみの姿を想い浮べていた。その彼女が、意外にも同じ方向へ歩いてきたことになる。だが先行する彼女の影は見えなかった。しかし現に彼女の屍は眼下に突っ伏しているではないか……。彼女は目付け役の叔父を何処でどう巻いて、どんな近道をして、蓮田より先に死の火口に辿りついたのか？

蓮田は失心したように湧き上る雲のような煙のかたまりを眺めていた。「世のつねのけむりならぬとはのけむり」という片歌みたいな一句が、ふと口に浮んだ。不思議と娘の死に哀悼の気持が湧かなかつた。彼女は許嫁と同じように山野に斃れ伏したままで。いや、彼女は深夜の浴槽でひとり愉しんだ遊泳を、断崖から火口の空間に試みた、その果てだ。そう思っているうちにも噴煙は絶えず湧きあがり、次々に雲のかたまりとなって流れていった。その噴出と遊泳の誘惑……。もしも、俺の眼と直身にいきなり彼女の自殺体が焼きつかなくかつたら、俺もひらり！ とこゝから身を投げていたかもしれない。そう……蓮田は思うと、背に木柱が貫き通った。このとき蓮田は宿を出て十五分、道がT字形にわ

かれていた分岐点を思い出した。あそこに道標があった。左右いずれもたしか火口道とされるしてあった。俺は右を選んだ。彼女は左を選んだのだ。それが生と死の別れ道になったのだ。俺はそこから烏帽子嶽の南麓を通ったのだが、彼女は西麓を抜けて千里浜に出、バスの通る道で山上神社へ向ったのだ。最後はこの方がはるかに道がよい。もしも俺が左の道を選び、彼女が右の道を通ったとしたら、俺の方が一足先に、ひらり！ と断崖から跳んでいたかもしれない。それとも、二人が偶然同じ道を選んでいたとしたら？

こゝで蓮田は、虚空中で噴煙が雲に化成する瞬間を凝視していたが、その捕捉できない変容に、ふとおもふのお化けを連想していた。背に貫き通っていた木柱が背中いっぱい融けると、得体のしれぬ恐怖に変化していた。蓮田は蝙蝠のように二重マワシの翼を拡げて岩から跳びおると、茶店に向けて駆けだしていた。新堀河の渡河戦の時のようにいっさんに……。

コギトの思ひ出

田中克己

コギト第六八号は昭和十三年一月の発行で

あるが、原稿はみな去年の十一月ごろのものである。戦争はますますはげしく、日軍は杭州湾に「皇軍百万上陸」の旗じるしをかがけて上陸し、南京にせまつた。コギトは保田の「雲中供養伝」、三浦の「天の鶴むら」、白畑よし女史の「天平の花々」など一連の日本を愛するエッセーをかゝりてゐるが、次には松下の「天野貞裕博士道徳の感覚」といふ書評がのつてゐる。内村鑑三の日露戦争当時の非戦論をひいて、「この時われらの進退を誤つて百年の悔ひを残さざらんがためには、先づ道徳の感覚を充分に澄ましてかからねばならぬであらう」といふのが松下の結語である。次はわたしの「歳晚即事」といふ四篇があつて、その三は

宵に睡覺めて天甕を聞く
海より来つて山に向つて走る
今し三国ヶ丘なる伊東静雄が宅も
睡驚かされて物語りたまふや
微かに聞ゆるは病犬か白狐か

九州民俗点描

熊本県保田産本町
かっぱらんど

¥ 400

長く啼いて遠近し彷徨せるが如し
といふので、小高根二郎氏の伊東静雄伝には
ひいてもらへなかつた。その四は

戦大いに発つて将士奮励す
電影中に見る、將軍黒貂喪するを
湖中の荷枯尽して一望遠く
江南柳葉散つて日影長からん

ヘリック詩抄(六十二)

森 亮

グレース(艶子)といふ名の人に

あなたのお名前がさうであるやうに
きれいなお顔にあまねくひろがる艶やかさ。
まん丸い円の図形がさうであるやうに
いささかの瑕も狂ひもないその面差し。

からだ
体つき全体もこれに負けじと一筋一筋の線が
古今の妙なる姿に相似・対応をもとめてる。

兵をしかかる日に死なむるに禁へず
といふ反戦の詩である。
山岸外史といふコギトのシンバの第一人
わたしを太宰治にむすびつけた一人は「人間
キリスト記」のつゞきを書いてゐる。太宰は
この大先輩をわたしが「山岸、山岸」と呼び
すてにするといつてわたしを叱つた。「おれ

絹の蛇

好きでたまらないチュウリアが
銀糸と絹との組み紐を
戯れにわたしの顔めがけて投げつけた。
絹の糸目は蒼白くて
まるで蛇のやうに見えた。
咄嗟のことに驚いたが、
おびやかしたものの、咬みはせなんだ。

ヘリックに多い女人詩からまた二篇を選んでみた。
「グレースといふ名の人に」(九九三)は彼の前任
牧師の令嬢を取つたもので、グレースは我が国の艶
子、雅子などと同じやうな感じの女性名。当時の形
而上流の手法を試みた作品と言つてよからう。最後
の二行は少し自由な訳し方をした。次の「絹の蛇」
(二八五)はチュウリア物の一つで、非常に気楽に歌
はれてゐる。

でも山岸さん」といふのが太宰の理屈であつた。その中には太宰みづからが、わたしより
大学で一年先輩だといふ理論があつたので、
わたしはびつくりしたが、北日本では年齢の
高下によつて地位がきまるといふ民俗のある
のは、このごろわたしの識つたことである。
三位一体の子なる神を人間と見るところに山
岸のあはれさがあつて、彼は戦後共産党にな
り、そのあとわたしに会ふとなつたかしさうな
顔をした。いい人だが、何をたのみに生きて
ゐるのかと心配でならない。

第六十九号は保田の「饗宴の芸術と雑遊の
芸術」といふエッセーが巻頭で、先月号の松
下やその師天野博士の鑑三理解を徹底的に弾
劾してゐる。「天野京都帝国大学教授は古い
ああいふ文章を引いて今の世のことをのべ、
我らが己の憤懣を展く代とすることを嫌はれ
るであらう」といつてゐる。松下をやつつけ
たあと、保田は芳賀檀のニイチエ、ナポレオ
ンを「今日の日本の正気の形なしたものの一
つ」とほめてゐる。今から思へばぞつとする
文章である。保田のこの弾劾が戦後どんな形
で報はれたかは天下周知のことである。もう
すぐ死ぬ松下はたぶん肝を昂ぶらせたことと
思ふ。わたしは傍観者としてこの間にゐたこ
とを、今やつと気がついたのである。

死の七つの歌

トラークル
平井俊夫訳

冬の夜

雪が降った。真夜中すぎにおまえは紫の葡萄酒に酔って見すててゆく。人間の暗い領域。かれらの炬の赤い炎を。おお開。

黒い寒気。土はかたく大気の味がにがい。おまえの星たちが集って悪い徴をつくる。

おまえは石になった歩みをふみしめて鉄路の土手にそって進んでゆく。両眼をみひらき。黒い堡壘をおそう兵士のように。進め。

にがい雪。月よ。

赤い狼が天使に絞殺され。おまえの両足は行進しつづき青い氷のような音をたてる。かなしみを湛えた不敵な笑みがおまえの顔を石に変えた。額は貪婪な寒気に蒼ざめている。

あるいはその額は丸太小屋でつぶつぶして眠る警手のうえに無言でかしげられる。

寒気と煙。白い星の下着が両肩を焼き。神の禿鷹がおまえの金属の心臓を噛みやぶる。おお。石の丘。冷たい躰はしずかに銀の雪のなかで融けて忘れてしまふ。

黒い眠り。耳がいつまでも星の降る水の小径をさまよっている。

眼ざめてみれば村で鐘の音がひびき。東の門からばらの日が銀色に歩みでてきた。

夢と狂気

夕暮。父は白髪となった。暗い部屋のなかで母の顔が石になった。そうして少年のうえには墮ちた一族の呪いが重くのしかかっていた。いくども幼い日の想い出がかれにもどってくる。病いと怖れと闇にみちた幼時。星の光る庭でひっそりと遊んだことがあった。宵やみがせまる中庭で鼠らに餌をやったこともある。青い鏡のなかから妹のほっそりとした姿があらわれ。かれは死人のようになって闇

へ顧落した。夜。かれの口は赤い果実のように裂け。星たちがかれの無言のかなしみのうえて輝いていた。祖先の古い屋敷にかれのさまざまな夢がみちた。またかれは日暮れがたに荒れた墓地をよく通ってみたりした。あるいはうす暗い霊安所で死体をみたこともある。僧院の門前でパンを乞いのしみがあつた。黒馬の影が闇から跳りでてかれをおどした。冷たい寝床に横たわるたびになぜか涙が頬をつたうのだった。だがかれの額に手をおいてくれる人はなかった。秋がくると。かれは千里眼者になって褐色の沃野を行つたものだ。おお。荒々しい歓びの時。緑の川べりの夕暮よ。狩猟よ。おお。魂はすがれた葦の歌をひくく歌つた。熱い敬虔にあふれて。静かにかれはひきがえるの星の眼をあかず見つめていた。古い石の冷たさにふれて両手はかすかにふるえ。そうして青い湧き水の鼓動な物語をかれは語つた。おお。銀の魚。ゆがんだ樹々からおちた果実よ。歩みはころよ。い響きをたて。かれを誇りと人間の蔑視でいっぱいにした。帰途にかれは人住まぬ館にゆき。神々の像が庭園の夕もやにたたず

んでいた。かなしみにうち沈みつづ。だがかれは忘られた遠い昔。ここで暮したことがあるように思った。オルガンの奏でる聖歌はかれを神の懼れでみした。しかしかれは暗い洞穴で日々をすごし。嘘をつき。盗み。燃える狼であったから母の白い顔を怖れてかくれた。おお。石の口になって星の光る庭に倒れふしたとき。人殺しの影がかれにおそいかかった。額は紫になり。かれは沼へはいっていった。神の怒がかれの金属の両肩を打つた。おお。嵐にもまれる白樺。闇におちたかれの徑をさけていった暗い獣よ。憎しみがかれの心をやき。緑にむせる夏の庭でおしだまった子に無法なことを強い。輝くその子のなかにおのれの狂乱の顔を見るとき。おお。欲情が突きあがった。ああ。窓辺の日ぐれがた。紫の花々のあいだから死が灰色の骸骨の姿で歩みでてきた。おお。夢よ。鐘の音よ。夜の影がかれのうえにかぶさり落ちて石になった。

かれを愛する者はなかった。うすぐらい部屋のなかで偽りと淫行がかれの脳を灼いた。女の衣裳の青い衣すれの音がかれを凍る柱にした。戸口に母の夜の姿があつた。枕

辺に悪の影があらわれ。おお。夜と星よ。暮れがたにかれは片輪者となつた。山のそばをとおつた。凍りついた室のうえにばら色の残照があつた。かれの心臓はたそがれのなかで微かな音をたてた。嵐にゆれる樞が重くたそがれのうえにかぶさり。赤い狼人が森から歩みでてきた。夜。かれの心臓は水晶となつて砕けた。闇がかれの額をうつ。枯れた柏の下蔭でこごえる手でかれは山猫を絞殺した。悲しみの叫びをあげて天使が右手に白い姿をみせ。片輪者の影が闇のなかで大きくふくれあがつた。だがかれは石をあげてそやつに投げつけ。奴はわめきながら逃げていった。天使のやさしい顔が溜息をついて樹の影のなかで消えた。かれは長いあいだ石だらけの畑にねそべて星たちの金の天幕を歎賞した。こもりもりの群に追われ。闇へころげ走つた。ほとんど絶息して荒れた家につき。かれは野獣となつて噴泉の青い水をのんで凍つた。冷えきつた階段に熱にふるえながら坐り。かれは神にむかつて狂乱した。おお。死にたいものと。一羽の喉を裂かれた鳩の姿にかれは眼をまるくひらき。おお。恐怖の土の顔であつた。どこか見もしらぬ階段をかけぬけつつかれは一人のユダヤ娘に出会い。かの女の黒い髪をひつつかんで唇をうばつた。なにやら敵

意をたぎらせたものがまっくらな路地まで追いかけてきて。鉄の戸のきしる音がかれの耳を破つた。かれは教会の侍童となり。黙々と歩む司祭のあとにすかに従つてゆく。枯れた樹々のしたでかれはあの尊い衣の緋の色に酔つた。おお。太陽の衰えはけた姿よ。あまく痛く肉がうずく。荒れきつた建物のなかで汚物にまみれた血だらけのかれの姿が。かれの眼のまえにあらわれ出た。石でできたあの敵かなものをかれはひとしおいとおしく思った。ゆがんだ地獄の顔で星のみちる青い空に夜ごと荒れる塔や。人間のあつた心臓をいだいたひんやりとする墓石が。おお。ああ。そうしてその心臓は言葉の言えぬ罪過を語つていく。だがかれが白く光るものを思いつつ秋の川を。枯れた樹々のしたをくだりゆく。と毛のマントにくるまって妹が燃える魔神になつて現われてきた。眼をさますとかれらの枕辺で星の光が消えた。

おお。呪われた一族よ。汚れた部屋のかでみな運命が終つてしまふと。死が微のにおう足で家へはいってくる。おお。戸外に春があつて花咲く樹でかわい小鳥が歌つていてほしいものを。だが乏しい緑は

夜のものらの窓辺で灰色にひからび 血を流す心臓がおも悪をおもっている。おお物思いに沈んで歩む者のたそがれの春の道よ。花咲いたまがきや農夫の蒔くあたらしい種子が あるいは歌う鳥や神のやさしい生き物がかれに正しい歎びをあたえ 入相の鐘がひびきわたる。人々の美しい村落。おおわが運命といばらの棘を忘れたいものを。かれは小川がはればれと緑に芽ぐむあたりを銀の足でさまよってゆく。樹木がかれの間に墜ちた頭のうえでざわめき語りかける。ふとかれはやせた手で蛇を持ちあげ 火の涙のなかでかれの胸は融けていった。おおそかに沈黙する森。緑の闇。昔におおわれた獣ら。夜ともなればかれらはひらひらとい舞あがってゆく。おお 畏怖にふるえものみなはおのが罪過を知って茨の茂みで花婿の庇護をさがして血を流す子の白い姿をみた。だがかれは鋼のようにかたい髪に顔をうずめ おし黙ってかの女のまえに立ちつくしていた 苦しみに引き裂かれつつ。おお 紫の風に吹きはらわれてゆく光る天使たち。夜もすがらかれは水晶の洞穴ですごし 願のしみが銀色にかれの額にうかびあがった。かれは影法師になって秋

の星のしたを 細い山径をくだった。雪が降り 青い闇が家をつつんでいた。父の敵しい声の旨のひびきをたて おそろしい戦慄を呼びました。ああ 女らの打ちひしがれた姿よ。一族のものらは怖れにおのき こわばった手のしたで果実も家具もくずれおちた。初子は狼に裂かれ 妹らは庭の老いざらばえた者らのもとへ逃げていった。狂気の見者となつてあのかれは崩れた石垣のそばで歌い 神の風がその声をのんでしまった。おお 欲情をもやす死。おお 暗い種族の子らよ。血の汚濁の花があのかれのこめかみに銀色にきらめき つぶれた両眼のなかには冷たい月が光る。おお 夜の者ら おお 呪われた者らよ。暗い毒のなかのまどろみは深い。星にみちる母の石になった白い顔がみつめている。罪過を背負うものの糧の死はにがい。樹の褐色の枝のなかで土器の顔らがうすわらいながら砕けおちた。だがかの人がにわたこの緑の葉蔭でひくくうたい かれは悪い夢から眼醒めた。ばらの天使がかわいい遊び友達の姿でかれに近づき かれはやさしい獣になって夜のまどろみにおちた。そうして清らかな星たちの顔をみた。ひまわりが庭の垣根ごしに金いろに沈みかかり 夏であった。おお 熱心に

はたらく蜜蜂。くるみの緑にしげる葉むら。通りすぎる嵐。銀色にけしき花も咲いてわたしらの夜の星の夢を緑の茨につつんでいた。おお 父が開へ去ったとき 家はなんと静かであったことか。樹には果実が紫にみのり 庭師がかたい手をうごかしていた。おお 輝く太陽のなかにあらわれた毛の微よ。夕暮にしかし死者の影はしずかに家族のかなしみの集いのもとへいった。森のむこうの緑の牧場をこえてその歩みは水晶の音をたてた。みなは黙々と食卓のまわりに集まり 死にゆくかれらは蠟の手でパンをちぎっていた。血がしたたるパンであった。ああ かなしくも妹の石の両眼よ。かの女の狂気がこの晩餐のときに兄の夜の額をおそい 母の苦しむ両手のなかでパンは石になった。おお 腐敗に墮ちた者らよ。かれらは銀の舌で地獄をおし黙っていた。だから冷たい部屋の灯は消え 苦しみにひしがれた人間が紫の仮面のむこうから互いをみつめあっている。夜もすがら両の音がして沃野に生気がもどった。茨の荒地のなかを暗い男が穀物畑の黄いろい小径や びばりの歌や緑の枝葉のやさしい静けさをしたっていった 安息をえたいと思ひながら。おお 村よ 昔むす石段の道よ 燃えたつ

景色よ。だが歩みは白骨のように森のへりに眠る蛇をまたいでよろめいてゆく。耳はひたすらに秃鷹の狂おしい叫びを追いかけている。夕暮 かれは石の荒地をみつめた。

松下はこの保田の弾効をよまないで、田辺元先生の本の評をこの号もかいてゐる。

「オメガぶみ」といふ平がなの多い文章は立原道造だが、ペンネームは「風信子」となつてゐる。本当にヒヤシンスのやうな少年であつたとおもふ。

第七十号（十三年三月）に「石見路の春浅けれど」といふ歌を寄せてゐる牛尾三千夫氏は今なほ健在で、日本に名を知られた民俗学者である。

たかひは はつべくもなし。つきゝゝに 我が知る人の 戦死を伝へ来といふ一首がその中にある。十二月、中国の首都南京が陥落し、蒋介石政府は漢口に遷都した。広島師団はこの戦ひに参加して戦死者を出したのである。（南京の日軍の大虐殺はわれわれにはしらせられず、欧米にはたちまち写真となつて送られた。）ただソヴェートの反共主義者の虐殺のみが伝へられ、保田は「かういふ日に十万の未開人を虐殺する如きことは、すでに何らの反倫理でもない」とス

死者の伴になつて父の暗い家へはいった。紫の雲に頭をつつまれてかれは無言でおのれの血と似姿のうえに倒れかかり 月にぬれる顔であった。石となつてうつろなもの底へ頭

ターリンを弁明してゐる（「ロツテの弁明」）。おそろしい時代となつたものである。これが四月号で、わたしは、一年の時から受持たされた生徒を五年生として受けもち、数年後にせまつた皇紀二千六百年にそなへて大和橿原に出来る運動場の整理にモッコをかつがされるのであるが、それより先に、この無意味な生活に終止符を打たす事件がおこつた。

文学的でなくて恐縮だがわたしは月給九十五円を支給されてゐる教師として、担任のクラスを引率して修学旅行を行はねばならぬ。五月一行二百人は大阪を出発して日光東京江之島をまはる。江之島の宿で食事をしてゐると、あけはなした廊下を通りすがつた一生徒が大声で「教師らはわしらより一皿多いぞ」とふれた。他の老教師には聞えなかつたらう。耳ざといわたしはその生徒を眼で追つて、新聞配達をしながら登学してゐる某であることを認めた。わたしは恥じ怒り、同時にこの賤しい生活をすてることを決意した。この貧乏生徒は、わたしたちの一皿のために新

落した。おお その時 こわれた鏡のなかから妹が死にゆく青年となつて現われてきた。夜が呪われた一族を呑んだ。

聞配達をしてゐると怒りにたへなかつたのであらう。わたしは早々に箸を置いた。（戦後わたしは奈良県で底ぬけの貧乏暮らしをしてゐる時、この生徒は「戦争にいつて肺病になつた」と病院からハガキをよこした。このころ発行された校友会名簿を検すると、その名は見えない。肺病で死んだかと思ふ。わたしにとつては大恩人である。死んだとしたら冥福を心より祈るものである。）（聖霊降臨の日 基督者としてしるす）

成田れん子の詩（一）

浅野 晃

成田れん子（本名和子）。昭和二年北海道苫小牧の北郊沼の端に生まれ、三四年苫小牧市立病院で昇天した。享年三十三。「笛を吹く魚」「哀郷のうた」の二歌集がある。ここにのせる詩は、夫君松本博之君が浄書した詩稿からの私抄である。

絶版 福地邦樹詩集 果樹園社 ¥300	田中克己 漢詩大系 白楽天 集英社 ¥1200	浅野晃 天と海 英霊に捧げる七十二章 翼書院 ¥870	吉本青司 標的 金高堂 ¥500	小高根二郎 詩人、その生涯と運命 新潮社 ¥2400	森亮 東洋文庫 白居易詩鈔 平凡社 ¥300
-------------------------------------	-------------------------------------	--	----------------------------------	--	---

死んだ木の葉たちが
この道を作ってくれたのでせうか
こんなにも幽かな
三日月の銀が煙りたつ
山の小路を……
寒々と鱗形のしわを寄せる

果樹園 二二五号 昭和四十一年七月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

山の彼方の一片の虹色の空は
もう薄明の序曲なのでせうか
こんなにも真直に素裸になつた樹々も
二人肩を寄せてゆく
わたしらの姿を
世界の何もの眼からも
かくさうとしない

波のやうに寒さが
寂として動かないこの沈黙の樹林の
小路に吹き通ると
二人肩を抱きあうまま
裸形の聖者の樹々のやうに
かうして凍死の魂が出来るかと
顔と顔 胸と胸とを寄せあう位置に
最後の恋のあかしのやうに
ああ感動に唇をひらけば
音もなく寂滅の幽暗の彼方へと
誘はれゆく
あなたの声よ
わたしの眼よ

いのちがいのちを相呼ぶ日に
やさしいうたがゆるさされた日は
もう老いたこの地上には無いと……
おお その嘆きこそ
世々の幼ない魂たちの
最後の凍死の墓標の言葉
わたしらの出発は此処にある
しづかに輝く顔を抱いて
冬の背烈な白い手に

果樹園 第二二五号 (毎月一回一日発行)
昭和四十一年七月一日発行
編集者 小高根二郎
大坂市東住吉区桑津町五ノ八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価四十円 送料二十円

ものなべて埋みはて
今日の山の孤道も昏かに見えぬ日の
極地の涯の太陽のごとき
ただひとつなる愛の発端……

編集後記
五月六日、本号に「春風と蝶」を発表しての會員大村直子さんが、同じく會員である中山弘正氏と結婚した。そういえばこの詩はお二人のための讃歌のようだ。彼女の作品はすでにあちこちで好評であるが、杉山平一氏もよい関係だと折紙をつけてくださった。生活の深まりによって今後さらによい作品を生むことだろう。ちなみに彼女は都立大で哲学を講じている大村晴雄教授の令嬢である。
五月二十三日、日本能率協会主催の講演会で藤川秀樹博士の「創造的人間」の話をうかがった。これは個人的な創造性の開発であるが、糸川英夫博士の組織による創造開発と思ひあわせ興味を深かった。その夕酒井ゆり子さんに再びお目にかゝる機会に恵まれ、拙研究のいらぬ点に教示をいただいた。
六月一日、四電ホールで第一回「詩のフェスティバル」が開かれた。おかげで無精者の僕が初めて草野心平・伊藤稻吉・萩原葉子・矢内原伊作・山本太郎・田木繁諸氏にお目にかゝられた。(1)

身枯屋

第126号

蓮田善明とその死	小高根二郎
遅刻者	杉山平一
石の動物園	吉本青司
コギトの思ひ出	田中克己
うつくしい朝	大村直子

成田れん子の詩	浅野晃
五ヶ月	萩本家義亮
ヘリック詩抄	森亮
トラキクル詩抄	平井俊夫
堆肥	浅田二三男
緒方隆士について	西岡武良
腹の赤い燕	緒方隆士
編集後記	

果樹園 二二六号 昭和四十二年八月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

蓮田善明とその死(三十九)

小高根二郎

蓮田が単身上京して池田勉氏の下宿先に身を寄せたのは二月になってからである。二月中旬蓮田は次のように、東京の様子を植木町なる敏子夫人に知らせている。

昭和十六年二月十七日

東京市世田谷区祖師谷二ノ九八梅村方蓮田善明より照本県鹿本郡植木町蓮田敏子宛(はがき)

こちらについてから、割合ひにあた、かく、例のひろくした武蔵野の青空から、一杯に日光をうけて、とても明るい。宿も殆ど一日中日が当たつてゐる。

様子を知らせている。二月一日には清水氏のところへ次男伸二郎ちゃんが生れていて、祝状を出すことを夫人に命じている。特に諸家庭の子供を主体に筆を運んでいるのは、植木町に残している晶一君、太二君、新夫ちゃんが必要な思ひ出されるからであろう。靴の寸法を末尾で照会しているのは、上京の準備のためであろう。

蓮田は「文芸文化」三月号の後記に、生還の第一筆として、次の文章をのべている。

「久しぶりに、生きて、編輯後記を書く。先づ述べたいことは、どうか、日本人が、自重自愛して欲しいといふことである。日本人のいのちを大事にして欲しいといふことである。たぐひ無い日本人のいのちをばたらかすために、希くは自重自愛し、天壤とともに窮りないいのちを愛惜し、そこから気宇を大にして欲しい。

光は東方よりといふことを信じて欲しい。そして「日を負ふ」大国民として、おほらかにかりごとし、強く勝ち、めぐみの波を以て世界をうるほしたい。(めぐみといふことが唯の慈善的な恵与であるか、「芽ぐみ」せしめるおほらかにして正しい太陽のひかりのごときものであるか、又「目ぐし」と見る愛ぐみの目ざしてあるか

蓮田は斎藤清衛、鈴木敏也(広島文理大国語科主任教授)両先生や、清水文雄、高藤武馬氏等の家族の

は語義的には知らない。しかし日本人の本心であるには違ひない。」

ともかくも、自重自愛せよ、私は先づ斯く折念する。……後略……

これは、野戦の第一線から、生還した……生還できた……という思いが、初めて蓮田のものとして休得されて、この言葉となったのであろう。いや、これは、「有心」最後の「いまは似た登攀」から、はからずも生還したという思いが、この自重自愛の祈りになったのだともいえよう。

蓮田は三月中旬、次の便りを敏子夫人に送っている。

昭和十六年三月十九日

東京市世田谷区祖師谷二ノ九八梅村方蓮田善明より、熊本県鹿本郡植木町蓮田敏子宛(はがき)

二三日雨が降つたが、何といつてもあたたかい。今日は日本晴の快晴。

昨夜池田文雄君(池田勉ではない、台湾で一緒だった。今、大蔵町にゐる)が来て、家があつたとしらせてくれた。それはこの町の通りの、駅の方からくると左側に佃煮屋があるその裏の通りで、つまり僕たちの前にゐた家の裏手にもなる。そこにある、新しいが小さい、家だが、六畳、四半、三、二の四間と

いふから小さいものだ。家賃は二十五円といふ。買物に近いし、大体今月中には空くらしいので、きめてもらつておいた。前に知らせた家は来月の半ばころまでかゝららしいのだ。狭いから支関を僕の書斎にして、そこからは人を一歩も内に入れぬつもりである。戦地の穴暮しのやうなもの一度やるよりほかない。それで帰るのは、その家が空いて、準備が出来てからにする。

今日はこれから上野へ調べものに行く。今いい本を書いてゐる。

植木から家族をひきとる小さい借家が見つかったのである。その二畳の間であらう：狭い支関に陣取って、そこを書斎兼応接間にして、そこから「人は一歩も内に入れぬ」というのである。この防禦的な位置と姿勢は、晏家大山の掩蓋壕とまったく同じである。いや心友・伊東静雄をつくりである。伊東も支関の二畳を書斎兼応接間にして、そこで詩友を迎え、そこがいかにもアト・ホームらしく自作の朗吟を振舞つたからである。

末尾で蓮田は上野図書館で調べものをしてゐる由述べているが、それは翌四月から十二月まで、九号にわたって「文芸文化」に連載される「鴨長明」に関してであらう。又、「今

いい本を書いてゐる」というのは、その「鴨長明」をさすのか、それとも垂玉温泉への逃避行に取材した小説「有心」をさすのであるか明らかではないが、この「鴨長明」「有心」の二作は、当時の蓮田の心象の表裏ともいふ作品であるから、そう想定をしても、あながち過誤はないであらう。

事実、「鴨長明」の序である四月号所載の(一)は、長明そのものに触れるより、すでに「有心」において述べられた、長明を触媒としての時局の空念仏や形式主義に対する糾弾の繰り返えしてである。

「帰還の途次より鴨長明を読みだして以来、私には、長明を想うてゐるに非ずばこの世にあり得ぬ思ひがしてゐる。この頃ではいくらか他を想ふ暇も生じたやうにも感じるが、しかしそれも結局は長明から生ずる波紋の如きものである。そして長明に思ひ返る時、波紋の中心に投げつけられて波泡立つ激越の情に私は身を苦しめられるのである。そして此の激越の情に身を委してゐる時こそ私は自分の生命に落ちついて居られるのである。」

つまり、激越者・鴨長明に寄せる激越者・蓮田善明の共感！ 蓮田はこの共感から、京の三条の橋の上に、これまた激越者の高山彦

遅刻者

杉山平一

飛行機や超特急で、ずいぶん時間が短縮されたのに、出発前一時間も前から出発点にきて待っている人があります。

また、発進の合図が終つたころ、カタカタカタ音をさせて、いきせき切つて走つて乗り込む人があります。

それからまた、出発したあとのガラんとしたホームにとび込んできて、つっ立ち、ぼんやり時間表などを見あげて、ひとり言をいつている人があります。それが私です。

九郎を呼びだしているのである。「草莽の臣高山彦九郎」という唯一の一言を述べるだけで、後は遙か皇居を伏し拜むだけしか芸のなかつた武者・彦九郎を呼び出すことによつて、「非常時」とか「粉骨碎身滅私奉公」とか「超非常時」「超々非常時」なぞという口芸だけでぬけぬけと渡世している政界やジャーナリズムを糾断しているのである。これらの軽薄な空念仏や流行語ではなく、「草莽の臣・誰の誰兵衛」とだけ名乗って、後はたゞ涙を流して跪拝することしか芸のない武者・激越な現代の彦九郎が、一人として銀座街頭に現われぬことを蓮田は不審とし、それを慷慨しているのである。

この激越の情に、蓮田の肉体がついてゆけなかつたのであろうか？ 四月中旬彼は異常な高熱に突然見舞われている。

「四月十二日昨日。突然発熱三十九度なにかし、病に馴染める身といへども呼吸苦しくなれり。Iと宿の刀自と夜更けに氷もて冷すなど手を尽し呉れし。今朝より三十七度余に下り、昼すぎに更に気分すがし。床上に体を起して見るに、縁先の乙女櫓、一文に足らぬ倭木なれども、そのつけし花幾百なるを知らず。つれづれなるまま試みに算ふるに容易く千を越えつ。蓄も殆どはや

残りなく花となり、秀つ枝より、地面に擦るばかりなる下枝迄、宛然薄紅の汗をかきたる如く、溢れ、かさなり、くぐり、押し合ひ競ひたる、寧ろ見るに陋きばかりの壮さなり。しかして又蒼暗く冷き地に落ちこぼれし花の影しきこと、或は一瓣毎に散乱せる花びら、或はまるのまま見事なる、或は匂ふばかり鮮しき、或は錆び鉄の色に結く変じ腐せる、相寄り相堆み、茲にも爛漫たる景色を画き出でたり。たまたま樹の下かげに、早咲きの雛菊の白き、之しげに花を持ち出でであるに、椿の花一二輪落ちて、のしかかり、雛菊を押し歪めぬるもをかし

……さかりなるかな花のいろ
同じくわれも身に余り
あふれて熱きものあれど
そは養ひを忘れたる
つかれぞ身よりたぎり出し
九度なにかしの高熱と
我さへ臭き汗なりき

蓮田は池田勉氏や梅村さんの手厚い看護でやつと高熱が下がると、真昼の庭に無言で咲いている乙女櫓をしみじみ鑑賞している。体熱が去ると共に激越の情からも久しぶりに冷めて、ものを鑑賞する客観的な理性を取り戻

(「文芸文化」昭和十六年五月号後記)

したからである。その事実は前文末尾の詩が物語っている。盛んな花の色のように肉体内から溢れ出した情熱が、養生をうとんじてきた肉体を凌駕したので、九度の高熱を出すにいたったんだ……と歌っている。

蓮田は自分が病気をしてみても、ことさらにとしく故郷で病んでいる愛児が思い出されたのであろう、三日後次の見舞状を送っている。

昭和十六年四月十五日

東京市世田谷区祖師谷二ノ九八梅村方より、熊本眞鹿木郡植木町蓮田敏子宛（はがき）

手紙うけとった。晶一よくなってきた由、うれし。太二も早くよくなればならぬが。おまへはどうだ。実は僕も十一日に突然三十九度余りの熱を出して、それから翌日から引いたが、大事をとつて休んでゐる。学校も都合よく休みがついてくれてゐるし。池田に大へん世話かけた。念のためのみたいだから、こづかん湯の発売所をしらせてくれ。又、お父さんにきいて、増血剤のやうなものがあったらきいてくれ、のんでみたい。心配しなくてもよい。みんな大事にしてくれ

書簡の末尾で蓮田は「こづかん湯」の発売所を訊ねている。「こづかん」というのは熊本

弁で「咳をする」こと。「こづかん」つまり「咳をしない」。「こづかん湯」は咳止めの漢方薬のことである。蓮田は中学時代からこの「こづかん湯」の愛用者であった。中学二年の時に肋膜炎を患って胸に水が溜ったことがあった。主治医は敏子さんのお父さんの淳吾氏であったが、蓮田はこっそり漢方薬の「こづかん湯」を常用して肋膜炎の水を引かしたことがある。この体験から、蓮田は結婚後も結核を警戒して、「こづかん湯」をちよくちよくとりよせては吞んでいたのである。蓮田は今度の突発的な発熱で「こづかん湯」を思い出して、所が変わった発売所の照会となつたのである。又、敏子さんのお父さんには新薬の増血剤の商品名の教示をねがっている。蓮田は衰弱の自覚症状を意識したからである。

この日頃蓮田は能面の図録をもとめたらしく、乙女椿の見えるれいの書齋で、しきりと清水・池田両氏に披露しようである。「文芸文化」四月号の清水文雄氏の後記は、その事実を伝えている。

「姫椿の咲く庭にうらかな春陽が溢れてゐる。久しぶりに落ちついた心で能面の写真を部屋一杯に掛けて蓮田と二人でみてゐる。

た。赤鶴や龍右衛門やの作を次々とみてゆく内にいつの間にか胸にかすかな動悸を覚え心の昂ぶりを感して来た。神作「白尉」などみてゐると全く神韻縹渺として奥行のしれぬものの中にずうつと引き入れられてゆく。そこへ疲れた顔して帰つて来た池田も加つて一緒に見入つてゐる。頻りに感嘆のこゑを放つ。急に元気づいて来た。そして三人交互に感嘆の声をあげ合つて暫し我を忘れてゐた。芸術の神品は批評など我々に許しはしない。只そのまへに頷づくことを強ひるのみである。巷々に吹き荒ぶ俗風に磨りへらされてゆく精神の傷手は高貴な芸術しか、もはや我々を救つてくれないだらう。」

この能面鑑賞に、川崎市木月にある法政二中から帰つて来た池田氏も加わつてゐるが、「文芸文化」五月号後記に、池田氏は改めて次の文章をしるしている。

「此頃私は能面の美のすばらしさにすつかり魅了されてしまつてゐる。一寸おほげさな言ひ方だが、自分の生涯を賭けてうちこんでよい素晴らしきである。人生の何ものにも換へがたいとまでも美への執心を抱かせるこの能面は、美の信奉者である私にとつて、たいへん信念を強めてくれる実証だ。

龍右衛門の「雪の小面」を視てみると、こんなに清らかで豊かで艶な美しさがよくも一面に宿り得たものだと思ひ、ながめるごとに眼のさめる思いがする。赤鶴の「ベシミ」のあふれるやうな力量感のすばらしさそれは天地を動かすに足りる。和歌に於け

る人磨といふところであらうか。「翁」の面の老の安らかな微笑は、微笑そのものが老いて浮かび出たといふ感じ、みんなみんなよい。人生を賭けるとさきに言つたが、もう人生のことなど忘れさせてしまふ美しさである。その美しさだけで心の救はれた

石の動物園

吉本青司

放課後

黒尊川へ降りていった

爽快な瀬音に 光があふれていた

夏うぐいすが

優雅な声で歌っていた

かもしかのように ほくは
透明な足どりで石の上を歩いた

川原には いろんな石の
動物たちが睡っていた

ほくがそれを呼び起こすと
石たちは元氣よくほくの掌にとび移り
新鮮な笑顔で語りかけた

——こうして ほくは
たくさんの石の動物を
児童たちのいる校庭につれかえり
白い石にマジックで
川が歌い
小鳥が歌い
石も歌う

△石の動物園▽

と書きしるした
そしてあとに書き添えた
みなさん この動物に
名前を付けてください

さまざまなる形
さまざまなる衣装をつけた動物たちは
明るくいっせいに歌いはじめた

法悦に生きてをられる。美の幸福をわけてもらへる芸術だ。」

つまり、清水氏も池田氏も、言い合せでもしたように、能面の作者として龍右衛門と赤鶴をあげている。おそらく蓮田もこの二人を推したに相違ない。龍右衛門の「雪の小面」の清艶さ、赤鶴の「悪尉ベシミ」「般若」「山姥」の力量に、清水氏は批評など許されずたゞ頷づくだけの神品として手離しに讃仰しているし、池田氏はこの美に人生を賭けてもよい素晴らしきだと讃歌をしている。この讃仰・讃歌が昂じて、「能と能面」の著者金剛巖師がたまたま上京した機を捕えて、蓮田は能楽堂に面会に行ったことがあった。その蓮田に池田氏は随行した。その時の池田氏の記憶は今日さだかではないが、巖師は先祖の金剛孫次郎が亡妻の面影をのんで打つたという愛用の「孫次郎」を二人に見せたようである。先に述べた「雪の小面」は解脱の美しさであるとすれば、この「孫次郎」には煩惱の美しさがある。巖師はそう……持論を二人に聞かせたはずである。私はこの煩惱の美しさが好きで、「孫次郎」を愛用しているのです。

そうやって巖師は、「孫次郎」をちよつと顔につけて見せたであらう。さらに巖師は、若いこの二人が国文学者である由を知ると、西

行や宗祇のような中世の放浪詩人の面影には、どこか能に出てくる狂女に似たところがありませんか？ と訊ねたはずである。これまた彼の持論の一つだったからである。出離を念じ、長明を思っている蓮田は、はッ！と胸を衝かれる思いがしたに相違ない。出離とは結局狂女のような物狂いの一種なのか？蓮田はゆくりなく阿蘇に身を投じたあの娘を思い出していた。彼女は悲しみのあまり物狂いになったんだ。物狂いの果てに、庭の乙女椿のように、生々しく散ったのだ。物狂いが昂じると鬼になるのです。その象徴が「般若」なのです。「般若」とは知恵のことです。知恵に働かすぎると、あんな顔になるんですね……と巖師は語を結んだ。この巖師の知恵・般若論だけは、池田氏は今にしかと覚えて

いる。
話は余談に属すが、蓮田を金剛巖師に引き逢わす手引きとなったのは、垂玉温泉で読んだ「能と能面」であったのだが、その編者・梶浦正蔵氏と蓮田は、その後同じ運命の道を辿ったのだから、奇縁といえれば奇縁である。梶浦氏と京大国文で同期であった京大助教授阪倉篤義氏の記憶によると、梶浦氏は蓮田の除隊と入れ違いに昭和十五年に現役入営、昭和十八年にいったん除隊となるが、昭和十九

年夏に応召、昭和二十年フィリピンか？で戦死をしたらしいという。一説にはビルマの土に骨を埋めたともいわれている。蓮田と同じく、戦後日本の土を踏むことなく、異域にその魂は迷ったまゝなのである。

コギトの思ひ出

田中克己

わたしの大阪脱出の計画はもともとありはしなかつたが、決心だけは十三年の四月ごろすでにできかけてゐたやうである。このころの編輯になるコギト第七二号は、松下武雄の「文学と言語」といふ論文を巻頭にのせ、「文学は本来遊戯である」、「経国の大業ではない」、「文学に対して最初からかゝる真面目を欲する人は文学などやる必要はない」「文学などに迷はずに政治家や教育家になればよい」との論をいしめてゐる。わたしは教育家がいやで、遊戯の文学がいやで、もう仕方がなくなつてゐたのである。わたしは担任したクラスは四月に五年生になつた。これらを卒業させる責任をもとりわたしは負ふ気もなかつた。今から思へば、なかなか出来の良かったクラスだが（現に戦争から帰つて来た連中はみな社会人として立派に一家を構

田中秀央・前田敬作訳

オウイデウス

転身物語

人文書院

¥ 1,700

へてゐる）、わたしの理想とした教育は施せなかつた。

この号の松下の論文の次には、高校の教師をやめて、映画監督となつた萩原耐教授のことを保田が書いてゐる。保田は習つたことのない「顔をもはつきりしない」この先生に「尊敬すべき芸術の気質者」を感じ、その退職を讃美してゐる。萩原先生はしかし小津安二郎など同時の監督とちがつて、到頭、名を成さずに終られたやうである（ただし亡くなられたとは聞いてゐない）。わたしはこの文章にも刺激を受けたのだと思ふ。

この号にはまた岡本かの子女史の保田の「日本の橋」の批評がのつてゐる。松下と同じくこの年の中に亡くなるのだが、しつかりした文章である。他人のことはわかるが、自分のことはわからない。計画など立つものか、立てる方がまちがつてゐるのである。

山岸外史の「人間キリスト記」は次の第七

うつくしい朝げ

大村直子

みなしごの貧しい食卓に

小鳥らが

輪になって訪れる

すると光が明るくなる

子供らは

金いろのパンを天にかえし

そのとき 白いコップに

青菜のかけがおどる

そこに あなたの

おもかけをうかべて

彼らは

うつくしい朝げをする

十三号で終り、すぐ本になり、よく売れた（と思ふ）。ユダの存在も神の摂理と見ず、主の十字架をも認めないこのキリスト観が日本のインテリにはいちばんわかり易いのであらう。保田は蒙藏まで旅行をする。佐藤春夫先生のおともだつたと思ふ。北京には遊学中の竹内好がゐる、この師弟を親切に案内した。

このころから山田新之輔、長尾良、小高根二郎の諸氏が同人となつたやうで盛んに書きだす。山田、長尾の二君は高校でわれわれの後輩、当時、東大に在学中であつた。小高根氏は前年、大阪に就職して伊東静雄に就きはじめたのである。

わたしは既に六月の終りには校長に辞意を表明した。校長はわたしの辞意を聞くと「誰と衝突されたか」とたづねた。「衝突したとすればあなたをはじめとする本校の教育方針である」とわたしは内心思つたが「いいえ」と答へただけで、この辞意は承認された。

わたしは紀元二千六百年を記念するため、大和の橿原に造られてゐる運動場のモッコはこのびをやつたあと、夏休みになるとすぐ家をとたんで上京した。そのまへに在阪、在京の諸友には別れを告げた。コギト第七五号（八月号）にのせる「虹霓」といふ詩は伊東静雄を訪ねて、ともに堺の大寺餅をたべた記念で

ある。石橋の病院に入院中の松下武雄は、上京の直前に訪ねて、上京の理由を「大阪はあまりつまらんからな」といひ、「ほんまにつまらん」といふ同感を聞いて、傘を病室に置き忘れて帰つた。もう一、二ヶ月で松下が死ぬことは敏感なわたしも気がついてなかつたやうである。

コギト第七五号には編輯後記を肥下とわたしと書いて、肥下はわたしの無茶な上京をいたはり（自分コギトの同人費を免除してくれた）、わたしは上京の理由を書いてゐるが、いつも今ゐる場所をわたしのつひの住家と思はないのが、最大の理由だといふことを、わたしは気がついてゐないやうである。これをロマンチックと他人はいふだらうが、わたしにとつて、またわたしの家族にとつて、どんなに負担になるかは、なかなかかわからず、退職手当百五十円をもらつて東京の妻の実家に入りこんだ数日後、これからの生活を心細いといつて妻が泣いたのを、わたしはポカんとして見てゐた。この女はわたしの見てゐるところでは三十年間に数回しか泣かないのだから、この時はよほどつらかつたのだらうが、わたしはこの珍らしい涙をおどろいて見てゐただけである。後でも彼女が泣くまでは何でもやる気になつて、まだ泣かないかと待つて

ゐる様子だった。悪い夫だと思ふ。

故服部正己は大阪にのこして来た友の一人であるが、わたしが上京すると、とたんにニールベルグの歌を訳してのせはじめた。ドイツの最古典であつて、自分以外は訳せないとの自信をもつてゐた。伊東静雄は「田中に先を越された」といふ顔をして、そろそろ上京の決心を堅めはじめたやうであるが、これはあとで判明する。杉浦正一郎はわたしを見ならつて、着実に上京の用意をし（この点ではわたしを見ならはなかつた）、転任の場所を見つけた。大阪の杉浦の家での俳句の研究会で知合になつたのが今の同僚である伊東静雄の親友池田勉博士であるが、そのほかに国立言語研究所長岩淵悦太郎博士がおいでだったことをありありとおぼえてゐる。岩淵さんは当時、わたしの母校の教授だったが、今のお仕事は歴史的なお仕事だから、ゆつくりとやつていただければと思ふ。

成田れん子の詩(その二)

浅野 晃

私の生命の環の内がわで外がわでなんと多くの生命がもえあがりそして数奇な運命の冠を負ひつつ

滅びつつあることでせうか

私の生命は重いのです
私の生命の体験はほろびつつしかもなほ生きつつあるものの生命の無数の小みちで巨大なばらのしげみにおちた環をかむつた土星のやうに幽かにもえていたみながら愛のひとつよ！ あなたを呼んでひとりめぐつてゐるばかりなのです

私はいつか あなたの魂の頂点で 星のごとく彼の天上の星をみつめて 花と静かにまたきそめてゐたのです

魂をうばはれてもかまはない うばはれるために私はあるとすら云へる

そこには あまりにも深い 美しい眠りがあつて そのため私は 地上でむしろかうして眠れぬ眼をみはつて 互いにひしとその魂を抱きあつて 夜々の星を過すのでせうか

花はその花の内部に無数の千の透明な薔薇をしつめてゐた

薔薇たちは 薄明の紫炎の霧をしづかにかむつて もう何も想ふまいと 約東の紺青の環をわれとわが胸の内部にひつそりと重ねてゐた

わたしは歩いてゐた
燃えたいむ薔薇を胸に――

長い赤い夕日が すでに昼から谷間の空のまんなかにあつた

緒方隆士について

西岡 武良

昭和十三年四月十八日、東京・世田谷のある病院で一人の小説かき、緒方隆士は短い生涯を閉じた。死因は肺結核による病死である。死後「日本浪漫派」の同人は「緒方隆士追悼号」を発行したがそれは同時に「日本浪漫派」終刊号でもあつた。生前、死後を通じて彼は不幸にも一冊の作品集をも持たなかつた。彼は同人誌「雄鶏」「麒麟」「世紀」「日本浪漫派」等にもみ作品を遺した。

古い作品である。

腹の赤い燕

緒方隆士

なお、作品の収録にあたっては、中谷孝雄氏、小田巖夫氏、小高根二郎氏と相談した結果、現代かなづかいに改めた。文責は、若輩ながらぼくが負うことになっている。
これは、余談になるが、小高根二郎氏の話によれば、伊東静雄は緒方隆士を太宰治より高く評価していたとの由。緒方隆士も伊東有縁の「果樹園」に転載されることをきつと喜んでくれると思う。
「腹の赤い燕」は、彼の作品の中では最も

初夏、僕は青い布団に包まれているような気がするのだった。僕は久しぶりの故郷の風景を小型のセダンで突き切った。花畑が眼にしまった。病上りの体が自動車はずむ度によ

五月

萩本家義

白い、白い、雲の上へ
思い出の階段をのぼっていったら
遠い、遠いふるさとと村が見えた
村の外れのれんげ田が見えた
れんげの花のむしろの上で
たまたま、おべんとうをたべている
遠足の子どもたちの一行が見えた
その子どもたちの中には、私もいた
おべんとうは、みんな
麦ご飯のおにぎり

おにぎりのまん中に入れられた
梅ぼしの赤さが目にしみた
(あの時、わたしは確かに
小学一年生――)

風かおる五月のま昼だというのに
心の空の雲行きが
急にあやしくなってきたので
私は、あわてて階段をおりると
野から町へ帰り初めた
どんな悲しいことでも
すぐに忘れられそうなの
青い、青い、穂麦の波の中を

ろけた。

家につくとつつじ、すおう、かきつばたの花が咲いていた。煤けた軒では腹の赤い燕が舞っていた。疲れた体を自動車から下すと小雨が降っていた。ひでり雨だ。気がつかなくなつたのに。

二三日は寝たまゝでいた。誰もまるで自分には関係のないような顔ばかり見せた。寧ろ東京の友人達の顔の方が近いところにあるようだった。
四日目から起きた。すぐ散歩だ。そして段々長い散歩になった。十町余もある千年河の岸まで遊びに行けるようになった。毎日、風速七八メートル位の風が吹いた。それでも僕は出かけて行つた。ここにも腹の赤い燕が舞っていた。

そこである日、僕は一人の女と知り会つた。その時、僕は河縁の草に腰かけていたと思う。するとその女がやって来たのだった。女が僕の後に佇んだまゝ、(おう、ひどい風ですここ)と言つたのだ。諸君はこんな平凡なきつかけでよく恋人を見つけたりする経験をもたれるだろう。つまりそいつなのだ。その時、僕は何気なくふり向いてその女の顔の美しさに驚いてしまった。しかしその日はそれで済んでしまった。

翌日、その日は珍しく風のない朗かな天気だった。それで僕もつい浮々して小さなボートに乗ってみた。櫂を持つ手に力はなかったがそれでも舟は気持よく滑った。僕は三十分程も漕ぐとすぐ疲れてしまつて夏樹の生い繁った岸に舟をつないで休んだ。紅椿の花が浮き溜った淀みであった。

すると僕はまた昨日の女に遭つてしまったのだ。夏樹の丘の小路をその女は紅い傘をさして近づいて来た。僕は何故か変に胸がときめいた。しかしまるで気つかぬ風をよそおつた。女は僕の舟のつないである岩に腰を下したまゝ、じつと水尾山脈を眼で追っていた。僕は煙草に火をつけてそれに対抗した。腹の赤い燕が羽で水面を打ちながら飛んだ。僕はそれを眼で追いつながら女の顔をちらと見た。女は傘をくるくる廻しながらニーツと笑つた。僕はその為にカーッと血の顔に上るのを感じた。そしてあわて、岸に飛び上った。舟がひどくゆれた。しかし女は岩の上にあるボートの綱の上に腰かけたまゝ、動こうとしなかつた。で仕方なしに僕は舟のゆれ止むのをじつと見つめた。

(あら)
しばらくして女は軽い叫びを上げて立ち上つた。手にボートの綱をつかんでいた。そし

て(失礼しました)と言つた。僕は(い、え)と言つて綱を受けとろうとしたがその前に何故か手がふるえそうな気がしてならないので出しかけたまゝ、ひっこめた。すると女はほんとお綱を舟の中に投げこんだ。僕はあわて、舟に飛びのつた。(のせてよ)次の瞬間、女はもう私のボートにいた。

僕は不思議な気がするのだった。僕らは青い水の上に浮いている二茎の花のような気がするのだった。宮殿の階段が僕らの眼の前で白く刻まれているような氣もした。この夢の果てで白い帆が止まっているのだった。青い空気の底で咲いているこの花の名を僕は一体誰に問うべきであらう。僕は彼女の名を聞く代りに(あの燕の腹は何故赤いのでしょうか)と聞いてみた。しかし女の答えは赤い洋傘をくるくると廻すことであつた。

やがて僕らは舟から岸に上つた。夏草は小さな草花をその中に包んで蜜蜂を遊ばせていた。女はその中にかゝみこんで花を摘み始めた。少女時代の夢がほのかに彼女を包んでいた。僕は立ったまゝ、しばらくそれを見守っていた。そして足音を盗んで彼女から離れて行つた。僕はすぐ近く、丘の頂に上ると顧みて女の姿を見た。女は相変わらず無心に花を摘

みとつていた。僕は女が急に自分から遠く飛びのいたような気がするのだった。しかしそれは捨て去つた女の姿ではなかった。又捨てられた女でもなかった。単にそれは汽車の窓からちらりと見た風景の中の女なのだ。あるいはゆきずりに魂を奪つて逃げたようにも。黄昏の庭で僕は夕食をとらせてもらつた。

奥の座敷では家族達がいかにも楽しそうに話し合つていた。高い爆笑が孤独の僕の心を愈々孤独にした。僕は夕食を半分も摂らずに立ち上ると紅椿の樹の下で頬杖をついて寝ころんだ。つい鼻の先の泉水では緋鯉が一、二尺も水から跳ね上つた。その時、僕は赤木の来訪を受けたのだった。彼は僕の中学時代の友人だった。彼は今年、大学を出ると直ちに帰郷したのである。東京では僕らは一週も出遭つたことがなかった。東京在住のクラス会の案内状が来て僕も一度もそれを有効にしたことはなかったのだ。

赤木と僕はその夜、枕を並べて寝た。しかし、二人は永い間会わなかつたにもかゝらず何も話し合うことがなかつた。二人は間もなくねむつてしまつた。

翌朝、僕は早く起きた。病後の体の為の散歩をかゝなかつたのだ。樹間に溜つた黎明が最早逃げかゝつていた。腹の赤い燕が今日

も翼を軽く飛んだ。彼の土蔵の軒の巢は大分完成しかけていた。

帰つて赤木と共に朝食をとると僕は赤木を千年河までひっぱつて来た。赤木はこれが僕の毎日の習慣と思わず僕が彼の為の特別の思いつきのようにと喜んでくれた。

僕はいつものように今日も舟に乗りとう思つてボートを探した。しかしどうしたのか今日は例のボートが岸にないのだ。僕はひどく

失望した。

仕方なしに僕らは河岸の夏草の上に腰を下してほんやりとなつた。

すると河の上から赤い洋傘をのせたボートが流れて来るのだった。僕は一眼でそれが例の女であることを知るのだった。僕は手を上げて女を呼ぼうかと思つた。しかし赤木の手前何故か気おくれがした。しかし僕も赤木も青い水の上の赤い花に期せずして眼が集まる

ヘリック詩抄(六十三)

森 亮

手間のかかる恋人

むかしはこれでも若かつたが、今はこの通り年寄りだ。

でもわたしの体が冷たくなつたわけではないこれではたはむれることもできる。葡萄の蔓み

するすると乙女に巻き付くことだつてできる解け入るやうに彼女のひぎにわたしを横たへそのままうっとり死んでしまふことさへできる。

でもこの頬をびしゃりと彼女の平手が打つた

ら、それとも
唇がわたしに吸ひ寄つたなら、死んだわたし

が目をひらく。
それだけの手間をかければわたしの色恋も
老いらくの齡を越えて息づかうといふもの。

ヘリックにはアナクレオン風の逸楽詩が多い。「アナクレオンテア」として知られるそれらの詩群に属するものの翻訳もしてあるが、その一部を利用した作品は更に多い。ここに紹介する「手間のかかる恋人」(四三)も後者で、「アナクレオンテア」三十九番が使はれてゐる。今まで紹介しなかつたが、この程度の官能的な詩はヘリック詩集では珍しくない。

のだった。ボートは段々近づいて来た。するといきなり赤木が立ち上つた。

(やあ、参子さん!)赤木はそう叫ぶのだった。僕は思わぬこの赤木の態度に驚いて果然となつた。参子のボートが岸につくと赤木は走るようにして駆けよるのだった。しかし参子は青ざめた顔をしているだけであつた。

僕ら三人は老楓の下に坐つた。いきいきとした夏草が褥のように僕らを包んだ。しかし三個の置物のような僕らだった。参子は豊んだ洋傘で草花の頸を飛ばした。赤木は沈黙を破ろうと思つてか二人の顔を時々盗み見た。そして僕は疲労の中に逃げこんでしまつて各々違う三人の心理の動きを波のように感ずるだけであつた。のろのろと遅い帆船が二隻、視野にあらわれ通り過ぎそして喪失してしまつた時間が過ぎた。僕は段々疲労を追い払つて行つた。そして参子と赤木の間に淀んだ空気が僕の知らない場所まで昔から戦つて来たであらうことを察するのだ。

(船らう)僕はだれにもなく言つた。耳をすまます。淀に投げた石の反響を見つめるよ

うな気持であつた。
(うむ)と赤木は言つた。だが参子は青空を仰いだだけだつた。お、空には雲の影た

にないのだ。

僕は立ち上った。それから自分の邑の方へ歩き出した。すぐ赤木が立ち上って後に続いた。参子だけが取り残されていた。しかし果してそうであろうか。僕も赤木も参子の匂を身につけていた。寧ろ彼女は僕らの先を歩いているようにさえ思えるのだ。

(君はいつ頃から知っているのだ) 赤木はとうとう僕を睨みつけた。

訣れを告げた者の歌

トラークル

平井俊夫訳

ヴェニスにて

夜の部屋の静けさ。
燭台が銀いろにゆらいで
孤独なひとの
息つかいがうたっている。
ふしぎなばら色の雲。

うす黒い蠅の群が
石の部屋をかげらせている。
そうして金いろの昼の
苦しみが顔にはりついている

(僕の方が寧ろ意外だったよ) 僕はこう答えた。これで僕と赤木の平行線は僕の家まで引かれなければならなかった。

家についてとうとう僕は赤木の告白にぶつかった。しかし彼はあくまでも彼自身の踏台から降りようとはしなかった。寧ろ彼自身の位置が僕の踏台よりも高いことを示す為にはなされたのだ。彼によると赤木は既に参

故里のないひと。

波もなく海が暮れる。
星とほの黒い舟のゆきかいが
運河のあたりで消えた。
おまえの病んだ微笑が
そっとわたしの眠りを訪ねてきた。

夏

夕暮に声もたえた
森の郭公。
重くうなだれる穀物
赤い罌粟。

子の手の届くところにいるし、僕はそれより遙か下のにいるのだ。赤木の告白は言わばこうした自覚を僕に促す為になされたのだ。

★

赤木の告白はこうであった。

僕はもう七年と云う長い間、参子にはまいてるのだ。彼女が女学校の生徒で僕が中

黒い嵐がいろめいている
丘のうえに。
古いおろぎの歌が
野原で死ぬ。

わずかに戦ぐこともない
栗の葉むら。
螺線階段のうえを
おまえの衣すれがとおる。

静かに蠟燭がともっている
暗い部屋に。
銀の手が
そのあかりを消した。

風も 星もない夜。

夏の終り

緑の夏はこんなにも微かになった。
おまえの顔は水晶のようだ。
夕暮の池のほとりで野の花が死んだ。
ふと たかく啼いたつぐみ。
生のはかない望みよ。仕度もおえ
軒のつばめが旅に出ようとしている。
丘のほとりを夕日が沈みおちる。
もう星たちの目ざめを知らせる夜。

静かな村々のまわりで

学生でいた頃から。僕は彼女のつい隣村にすんでいた。しかし君も知っているように僕らは同じ町の学校に通うためにはいつも同じ電車に乗らなければならなかったのだ。そしてとうとう世間によくあるように僕と参子はいつの間にか子供らしい恋をする仲になってしまったのだ。僕はまるで夢中であった。君も知っていたよう、級中で首席を争っていた僕がひどく成績が悪くなった頃を。つまりその頃

荒れた森のおとが響いている。心よ
愛をふかめて寄りそってゆけ
静かに眠るあの女のもとへ。

緑の夏はこんなにも微かになった。
足音をのこしながら
銀の夜を異郷者がとおってゆく。
青い獣があの小径を憶えていますように
霊の年月のきよらかな音も。

年

幼時の暗い静けさ。緑に萌えるとねりこの木
蔭で

なのだ。僕らは毎日ランデブウをやった。僕は日暮でなければ家へ帰るようなことはなかった。その頃は天国に僕らはいるようなものだった。まるで彼女は女神のようであった。しかし間もなく僕は二人とも学校を卒業してしまった。僕は一高の試験を受けて上京したが落ちた。しかし別後悔するようなことはなかった。僕は国へ帰ると直ちに彼女に会いに行った。ところがどうだ。いつのまにか

ほの青い視線がやさしく楽しんでいる。金の安らぎ。

暗いものを酔わすすみれの花の香り。揺れる穂波は
夕暮につつまれ 太陽 憂鬱の金の影。
大工が角材を削っている。暮れおちる谷には

水車がまわっている。はしはみの葉蔭で紫の口がふくれあがり
黙す水に赤い暴れるものが傾いていった。
秋はひそやかな森の精になり 金の雲が
孤独な者のあとに従ってゆく。孫の黒い影。
石の部屋のなかの死。古い糸杉のしたで
涙のえがく夜の像があつまって湧き水になつた。
太初の金の眼。終末の暗い忍従。

彼女は家族の為に蓋をされてしまっていて、まるで僕の前に現れようとはしなくなったのだ。恥ずかしい話だが僕は気狂いのようになって、参子の家の周囲を歩き廻った。彼女の家は森のように広い庭を抱えているので随分大きな屋敷であった。僕は彼女の家の周囲をぐるぐる廻りながら塀に登っては石を庭樹の間から参子の居間と覚しきところに投げたものだ。しかし一度も彼女は出て来るようなこと

運命

「天の夕顔」の作者が、人間を支配する運命という不可解・深遠な存在を追求する力作。

中ノ国境の山岳地帯を背景に、雪原を走る美女の幻影ノ 新鮮な活力と夢に満ちた浪漫主義の新しい出発ノ

¥ 400

東京都千代田区神田神保町一ノ三
振替 東京七二二七五番

審美社

はなかった。いや、たった一度彼女が庭を歩いて来て（駄目ですわ）と言ってそのまゝ、死霊のようにひっこんだのを見たきりだった。その為には日に日に瘦せ細って行った。まるで宮殿の入口で扉を閉められた男のように僕の夢は消え失せてしまったのだ。僕は殆ど半年と云うのも一度も欠かさず参子の家の周りを廻った。ところが或る日、僕の家へ彼女の父親がやって来たのだ。僕は彼の顔を見た時、自分の熱心が神に聞かれたような気がしたものだ。ところが結果はどうだ。彼はあまり熱心に僕が彼女の周囲をつけ廻すのでおびえきって僕の親爺へ抗議を申し込みに来たのだった。その時、僕は最早完全に失望の果てまで墮落された。僕はもう生きていとは思えないような顔をしていた。或る日などなげもなく桑畑を歩いていたら桑を摘んでいた女が声を立て、逃げた。その女達の残した驚きの叫びは僕に気狂いと云う名前をあたることであった。僕は家へ帰ってしみじみと鏡を見た。そしてなるほど寂しく笑ったものだ。あゝ、その顔の恐怖、僕はいきなり鏡を庭に投げ出してしまった。

この傷手は段々腰をもって行くばかりであった。（馬鹿らしい）と君なら一言で言ってしまうだろうが全く僕の参子に対する気持は年を経ると共に僕を瘦せ衰えさせて行くのだ。その夏、帰郷した時も僕は内密で参子の消息を探ってみた。僕の問題があつてから参子の父親は彼女の消息が世間へ知れることを怖れていたのでも中々困難なことであつたが。しかし僕は参子が市のある親類の家へあずけられていることを聞き知った。僕は矢も楯もなく飛んで行った。そしてその高等学校へ行っている友人を介して実に巧妙に彼女と遭つた。僕はその日を今も忘れることが出来ない。友達の下宿に静かに坐つたまゝ、僕は彼女が近づいて来るのを待った。参子は僕がそこにいるとは夢にも知らずにいると思うと僕は彼女の驚きがどんなであらうかと想像するのだった。

やがて階段を上って来る足音がして襖がするすると開いた。僕はじつと彼女の顔を見つめた。（あっ！）彼女はいきなり襖をしめた。僕は素早く立ち上って襖をひきあげた。すると参子はそこで両手で顔を覆って泣いているのだった。僕は彼女をひきずり込むようにして部屋へ入れるとまるで激しい運動の後のように息がはずむのだった。

堆肥きり

浅田 二三男

堆肥をきる
押し切りで
小気味よく
堆肥をぶっ切る
ギロチンみたいな押し切りは
なじみの金具屋に
千五百円も出して買った
ホヤホヤの新品
薬にまじった
みみずもまっつ
棒きりもまっつ
汗を落しながら
ぐじぐじとはきつかない
わたしもまっつ
足の泥をおとす恰好で
早植田にばらまく
堆肥きりだ

僕はまるで何を言ったかわからない程泣いている彼女を前にして話した。一ぱい溜っていた僕の不平にせめてられて彼女は益々泣くばかりであった。

そのうち僕は変に始めからのプログラムを急に立て替えたくなった。僕はいきなり彼女の袂をとらえてどうすることも出来ない男の意地を彼女に伝えてやろうとした。参子の処女がその前で毅然と急激に頭を持ち上げた。争闘は死の神聖の前まで持ち運ばれた。

僕はいつの間にか鉛筆ナイフを手にしていった。次の瞬間、鮮血が僕の手を彩るのを見た。参子の悲鳴が部屋を逃げまどって往來まで飛んだ。友人が駆けつけ僕は二人によってしっかりと柱に縛られた。参子は直ちに病院に運ばれて行った。それでも僕はどなることを止めなかった。

★

赤木はこゝで話を切った。そして僕の顔をじつと覗んだ。僕は黙っていた。何か答えようとしたが喉がかすれた。

（あれから今日、遭うまで僕は一度も参子に会ったことはなかった）やがて赤木はそう言つて深い溜息をついた。

（聞くところによると未だ一度も嫁に行かずにいるそうだ。そしてあんなに美しくなっている）赤木は又こうも言った。

（今一度参子に親爺にかけあいに行くか）赤木は呟いて眼をつぶった。僕は赤木の最後の言葉を聞いてもう寝たふりをしようと思つた。そして僕はいつの間にか夢の中に包まれて行つた。

眼が覚めたのは夕方であった。赤木はもう帰つてしまつて夕飯の仕度が出来ていた。それをひとり淋しくすると僕は何か再び千年河に遊びに行きたくなつた。僕は菜種の花咲いた路を歩いて行つた。僕は千年河の岸に未だ参子がいるとは思わなかつた。たゞ何だかそうする方が自分の気持を慰めることが出来るだけの話だった。

着いてみるともうすっかり暮れてしまつて初夏とは言えうすら寒い河風が吹いていた。河につながれた例のボートは廃墟の一つの装飾品でもあるように揺れていた。僕はぶらぶら河縁を歩いた。夜釣をする人が銀色の空気の底で魚の匂をさせていた。向こう岸の邑がうすぼんやりと明るかつた。僕はぼんやりと立つてそれを眺めているうちに真赤な洋傘をさした参子の笑顔をみたように思つた。

増補・改訂・決定版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 編
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文六篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華決定版。 定価 一八〇〇円

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一〇〇三

果樹園 二二七号 昭和四十二年九月一日発行 (毎月一回一日発行)

果樹園

第127号

蓮田善明とその死 小高根二郎
コギトの思ひ出 田中克己
ヘリック詩抄 森 亮
トラークル詩抄 平井俊夫

蓮田善明とその死 (三)

小高根二郎

蓮田の「鴨長明」論の筆が定まったのは第二回目の「芸文文化」五月号からであった。第一回の四月号掲載の分は、浮ついた世相を撃つ蓮田の激越の情ばかり先走っていて、立論に論理性を欠いていた。高山彦九郎が土下坐したり、聖徳太子が十七条の憲法を持って跳びだしてきたり、長明の黙契者として文壇の看宿・後鳥羽院が意味ありげに姿をちらつかせたりするが、なにか論旨に明快性を欠いていた。激越した蓮田の荒い息づかいばかりが聞こえるようであった。或いはそれは、敵に臨む掩蓋塚に敷いてあったアンペラと、乙

しかしそれは河岸で何か生き物がばちばちや音を立て、いるのだった。僕は腰をかめめてそいつを促してみた。そして星の光にすかしてみるとそれが腹の赤い燕のように思えて来るのだった。

(「蓮園」昭和六年創刊六月号)

編集後記

六月九日。拙誌に伊東静雄研究を発表して心ある士々の注目を呼んだ小川和佑氏から、「古典と現代」第十四号をお送りいただいた。氏は同誌に「四季派・その詩と詩人」の主題の下で、伊東の「わがひとに与ふる哀歌」を取り上げていた。「本文校異」「語釈」など良心的に精微で、いづかこの難解な詩を教科書に起用することの可否を中石孝氏であったか論じていたが、学校の先生方によく理解できるほど充分に親切であった。僕は近頃中学生になった息子の家庭教師役をやって気がついたことだが、教科書に収録する現在の作者の作品は、その難易さ以上に、その作品が作者死後に幾年の余命を保ちうるか、換言すればはたして伝統にかならうるかどうかの判定に基くことが大事だと思ふのである。死後にすぐかき消える類の作者や作品も時代の青少年に強いほど無益なことはあるまい。

六月十九日。鹿児島の名瀬市に帰省している西岡武良君から、本号に掲載した緒方隆士の名作「腹の赤い燕」の原稿が届いた。浪漫派の作家中もっとも感されることと少なかった彼の作品を再録できることは誠にうれし。近く刊行される伊東静雄全集の改訂増補にか、わる新資料の発見に、献身的な協力をしてくれた同君の情熱と誠実を信じて、隆士発題を提案したところ、実に素直な共感を全面的な文壇を下させた中谷孝雄、小田欽夫両氏に、から改めて感謝申し上げる。

六月二十六日。久々に広島の水本文雄氏にお目にか、

浅野晃編 フランス詩集

青春の詩集/外国編 ⑧

¥ 400

東京都千代田区神田神保町一ノ二〇
白鳳社

た。新社社の催しで入浴されたその帰り、大阪で発車前の時間を削っていたためである。話はいつも同じ伊東・蓮田をめぐる小世界に限定されているが、この二人にとっては、まるで宇宙のように広く、話題は盡きることがなかった。

七月一日。広島在住の民家松坂義孝氏より伊東全集未収録の散文——「詩人」所載「伊東静雄作品抄・小さい手帖から・はしがき」をお教えいただいた。折よく全集のゲラを校正中だったので収録することができた篤くお礼を申し上げます。

果樹園 第二二六号 (毎月一回一日発行)

昭和四十一年八月一日発行

編集者 小高根二郎
発行所 果樹園社
池田市石橋二丁目六ノ五
定価 四十円 送料 二十円

元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円
元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

散	庭	成	通	自	惨	植
髪	で	田	然	雨	物	人
今	大	れ	喪	(一)	間	間
井	村	ん	失	緒	福	福
茂	直	子	美	方	地	地
助	子	の	堂	隆	邦	邦
	晃	詩	正	士	樹	樹
		(三)	義			
			司			

を思ふ道は 哀なりけり
ものおもひ侍るころおきなをみて
述懐のころを
おく山のまさきのかづらくりかへしゆ
ふともたえじ 絶えぬなげきは
ともに「おきなき子」に別れようとするときの述懐である。又、この哀別を時を経て思ひ出し

蓮田の時子といふことを

おもひ出でて恋ぶもうしや いにしへを
今つかのまに 忘るべき身は
とも歌っている。

長明は愛する子と別れ、なぜに出離せればならなかったのか? その間の複雑な事情を暗示する「方丈記」の一節がある。

「わが身父方の祖母の家を伝へて久しく彼所に住む。其後緑かけ身おとろへて、しのぶかたしげかりしかば、つゝに跡とむることを得ずして三十余にして更に我心と一の庵を結ぶ」

つまり、次男坊であった長明は、父長継の

母方の家を継いだが、その後になつて縁にキズが入つて落ちぶれ、あれこれと心にかゝることが多かつたので、ついに家を継ぐことができなくなつて三十才あまりで意を決して一の草庵を結んだ……ということになる。

この文章末尾の「更に」という言葉で、一庵を結ぶ以前にすでに一族との別離があつたのではあるまいか？ と、蓮田は推理している。この別離とは、前掲の歌が示す子との別れを含む一連の事情ではなかつたかと、容易に想像される。

長明はこれらの懊悩からいっそ自殺した方がましだ……と、同族で同年輩の心友・鴨輔光に哀訴している。

住みわびぬ いざさは越えむ死出の山
さてだに 親のあとをふむべく

この長明の身も世もあらぬ歎きを見るに見かねた輔光は、「あの世に親の後なぞを追つてなんになる。この世で辛苦して親の歩いた道を進るのこそ人生なのだ」と励ました。が、この折角の励ましに対し、長明はたゞ長嘆息を繰り返すだけだったのである。

情あらば われまどはすな 君のみそ

秋の夕に女のもとへつかはす

忍ばむと思ひしものを 夕ぐれの風のけしきに つひにまけぬる

この歌に見る「女」は妻ではあるまい……と蓮田は想像する。妻だとも考えれば考えられようが、女であるとも結構うけとれるからである。冒頭「忍ばむ」とあるが、その言葉は前掲「方丈記」の「其後縁かけ、身おとろへて、忍ぶ方、いしげかりしかば、つひに跡とむることを得ず」と照応する。「女」説を正当づける氣息充分である。

そういえば長明は「忍ぶ」という言葉を他の歌でもよく起用している。「梅花誰家」と題し「われも今しのばむやどに梅植ゑじまだ見ぬ家の面影に立つ、又「忍恋」と題し「しのぶれば音にこそたてね云々」或いは「対泉恋人」に入おもひ出でて忍ぶ涙や、先掲の「懐旧の時子といふことを」に入おもひ出でて忍ぶも愛しやと歌っている。百五首という数少ない長明の歌の中でかなり目立つ言葉である。この事実も、「一方では熱い恋をしその裏では住み化びた孤独を空想してゐる青年長明」像を、蓮田に抱かせているのである。

又、三十才前後のこと、考証されている伊

おやのあとふむ道は しるらむ

蓮田は、この長明の、自殺でもしかねまじきほど常軌を逸している取り乱し方から推理して、彼は養子先でなにやら失策をやらかして、親子の間を裂かれるような事情にたぢいたつたのではあるまいか？ と想像している。

「大体子も妻もありながら之を捨てたやうな、世間一般の目からは非難され嘸はれるやうなことを仕つづけた放蕩の果てとでもいふやうなことはないか。しかも彼は決してそれを知つて分別はありながら妻子を殺す欺いたりしてゐるといふのではなく「世のならひ」と自分とのけちめを分別を知らないデカダン（変な言ひ方だが）ではなかつたか。例へば太宰治のやうな若者ではなかつたか。それでいざ家を離れねばならなく迫られると子を愛して「おく山のまききの暮くりかへしゆふとも絶えじ」と歎いたりしてゐるがこれも傍から見てもたつたかはや痴呆めいたくだいたはごとであつたかもしれない。」

こゝで蓮田が長明を太宰治にたぐえている

勢旅行の時の歌に、次のような恋の歌がある。

伊勢の国に侍りける時、今よりは契るべき申しける人に、みつの浦にて
我もさぞ たのみはかくる いせ島や
こひしき君を みつの浦なみ

恋の歌といつてもどうやら放蕩の氣息に通じている。蓮田は放蕩の原因を、次のように想定までしている。

「この時代の彼は自分の姿も世間の姿も分らない何か自分と世間との間に隙間があり符合してゐないことに気づき或時はそれを「人にかはりて」己れの「心を問ふ」てみ或時は反対に「哀ともあだにいふべきなげきかとおもふか人のしらず顔なる」と己れの解釈理解を人に問はうとしてその不可能さにひとりもだえたり悲しんだりしてゐる。併し彼が老後世情に対して世人が名利に己を完つて「必ずしも情あると直はなる」とをば愛せず」と峻評する時老後まで尚ほ融和しないまま対決してゐることが分るが彼は強ひて自ら世情に馴れたり分つたりしようとはせずたすら直率に問ふところは彼自身全く「情あると直はなる」といふ反

種田山頭火句集

自画像

大山澄太編

¥250
¥150

目次

落穂集

行乞道草
其中庵便り
四国へんろ
一草庵風景

層雲集

椋鳥のうた

父と子

附録・山頭火の作品と生涯

松山市久米橋ノ子町二八九
振替 広島三一一一六番

大耕舎

のはなんととも妙で面白い。卓見である。長明は太宰のように、なんということもなしに、妻の他に女をつくつてしまつて、それが彼綻の原因になつたと想像している。蓮田はこの推理を正当づけるために、長明の次の歌を援用している。

語に他ならないしそこに彼自身一寸一分の偽りはないのであつて斯ういふしんの烈しい清らかな直情さが若さの時にとるところの無分別な論理のない放蕩といふものを私はここに想像するのである。直情が身内で湧きたぎつてゐるその青春がこの肉体といふ慾身を持って扱ひかねて狂ひ廻つてゐる苦悩である。」

蓮田はこのように息せききつて、読点も打たず、むきに昂奮をしながら、かけひきのない長明の直情に同情をしている。直情のゆえに身を破り、家を破滅した無分別な放蕩を空想している。もともとその放蕩も、長明と世間との符合しない隙間、直情のゆえに繕いえなかつたズレのせいだと蓮田は長明の生身になつて同情をしている。先ほどなぞは、自分だけの応援では手が足りないと思つたのか、太宰治まで助太刀に駆りだしていた。……というも、蓮田が帰還以來生身に徹して痛感させられてゐる戦時体制下の世情との隙間とズレに想当をしたからだ。現に蓮田は、この長明の真率さの前に、似非愛国者流は恥ずべきだと論じている。

「隠遁者などといふと皇室を思ひ奉る日本

人の心魂に徹し得ない往々の世間人は、利己主義者と取り違へたり、現実を迴避して協力を厭ふ無気力な生活無能力者のやうに一概にこれを排しようとするが、先づ汝自身を大いなる命の前につゝしむべきである(昭和十六年「文芸文化」四月号) (運田善明「婦道」)

つまり、長明は若い日たとえ放蕩に身を破ったとはいえ、それは純粹すぎたがゆえの墜跌であつて、この純粹さと墜跌があつてこそ、後年の大きな悟りに到達しえたのだと、蓮田はわがごとくのように情熱的に弁護している。あたかも常識者流の批評や判断を越える存在であるかのように……。

コギトの思ひ出

田中克己

前号の原稿をそらで書いて、日記を引き出してみたら、校長への辞意表明は六月末ではなくて、七月十一日のことだつた。この日の夜、俳句を十ほど作り

祭をちこち生徒らこの日ごろ遅刻がち
桐の花高く咲く道ありしかな(憶阿佐谷)
といふのがある。杉浦宅の会は俳句の会ではなくて西鶴輪講会で、会者の中には池田博士は

見えない。栗山、蓮田、清水三氏とともに「文芸文化」といふ、所謂「右翼的な」雑誌の発刊はこの年のことと承知してゐるが、何月のことかしらべても「ない」。ものぐさになつたものである。

わたしが勤め先をやめることがきまつたあと、ただ一人だけ引きとめた人がある。今の御霊神社司宮の園克己氏で、高校の一年先輩であると同時に、理事者側のひとだつた。「残つてゐたら校長になりますよ」といふのが引き留めの理由であつたが、わたしは長になるのはもとより御免だといつてことわつた。いまから考へても当然のことだつたと思ふ。

わたしは東京行を決意したころから、文章が書きたくなり、コギトには「始皇帝の末裔」といふ題で、父の家が秦氏だといふことを証した。これはのちに「楊貴妃とクレオパトラ」に収めたが、恩師和田清博士は「この本の中で一等おもしろい」文章だつたとおほめ下さつた。安西冬衛氏を訪うたのは、伊東氏とともに七月二十日のことである。その翌日が一学期の終了式、わたしの辞職は校長が「惜しいことだが東京へ御勉強にお出でになるので」とうまくとりなしてくれた。

二十二日は在阪コギトの送別会で、伊東・中島・杉浦の三人みな故人、ただ一人生きて

ゐる坪井(天王寺高校長)は奈良からわざわざ来てくれた。同じく大阪にゐながら出てくれないかつた故服部正己を翌日訪ふと、「カカアが妊娠中で」出られなかつた由であつた。

池田博士との初対面はこの日のことで、博士の従弟で、同僚として仲好くした金川春三氏を訪ねて、そこで挨拶を受けたのである。文芸文化同人で、わたしの母校今宮中学におつとめの趣はこの時までに承知してゐた様子であるが、話題はしるされてゐない。

翌二十四日が前述の松下の見舞で、そのあと京都にゆき、在パリの羽田明君の見舞を母君(享博士夫人)に申しあげ、京都駅で長男とともに待つてゐた妻とあひ、一路東上したのである。

二十五日午前七時半東京着、十時に肥下を訪ひ、そのあとで妻の家に入つた。翌日はコギトの校正を手伝ふ。申しおくれたが、印刷所はすでに四谷駅近くの杉田屋といふのへかはつてゐた。肥下に会つて云つたことは「詩集を出す」といふことだつたらう。詩をうちきつて学問をする気になつてゐたやうに思ふ。今はどうかしらないが、わたしの若いころには「三十までに詩人でないのはバカ、三十過ぎて詩を作るのはバカ」といふ格言があつてわたしはそろそろ三十に近くなつてゐた

のである。

和田先生に会つて、あとの勤め先も見つけないで学問をしに東京へ来たのを叱られたのはコギトの校了になつた翌日の七月二十八日である。友だちはありがたいもので、学問のはなむけにと川久保悌郎氏(いま弘前大学教授)に「清鑑易知録」をこの日たまはつた。中国から内緒でわたつて来た康熙の清実録の

抄本で、これは今でも役に立ててゐる。

先生に叱られぬたる暑さかな
がこの日の句である。

七月二十九日も東洋文庫(東洋学の世界一の図書館)に通ひ、帰途の駒込駅で出征兵士をのせた特別列車(ここは貨車以外は通らなはずなのである)を見て、手をふつたのは自分だけとしるしてゐるから、もうわたしは

ヘリック詩抄(六十四)

森 亮

桜

取つて付けたやうに笑ひ頬を赤らめ又ほほゑむ花々は
暫くのあひだほのかな匂ひをただよはせる。
でも可愛い花々よ、あなたたちの終りの時はもう近い。

花の下から実がふくらむ用意を始めてゐるから。
そのさくらんぼが幅を利かしはしめれば
あなたたち花々の昔の光はどこに偲ばれよう

わが願ひ

意のままに与へ、又奪はれるゼウスの大神に
これだけをお祈りすればもう言ふことはない
土地と生きるよすがをわたくしにさづけ、
己が心をゆかせるはわたくしめにお任せあれ
ヘリックの短詩にはギリシア・ローマ文学のエピ
グラムの系統に属するものが多いが、随分イギリ
ス化されたエピグラムもある。「桜」(一一八九)
はさういふイギリス化(風土化)の最も進んだもの
の一つであるが、万物流転の思想に貫かれてゐ
るところなど、流石に大陸文化とのつながりを感じ
させせる。一方「わが願ひ」(一五三)はホラチ
ウスの「書簡詩」巻十八の末節からの翻案で、
それを独立した四行詩に仕立てたところにヘリック
クの手柄が認められよう。

戦争を肯定してゐる様子である。戦史をくりかへすのはいやだが、前年七月七日に火ぶたを切つた日支事変は上海に飛火し、国都南京を十二月十七日に落して(前述のごとく大虐殺をせし)、遷都した蔣介石を伐つたため漢口に進撃してゐたのである。

前述の家の落涙は七月三十一日のことであるが、翌八月一日には三好達治氏から「勇まし」との激励のハガキをもらつて、わたしはあまり気にしてゐない。それより驚いたのは七月三十日、出来上つたコギト八月号を取りに肥下宅にゆくと、薄井敏夫が来あはせて、「明日結婚するから二人とも出てくれ」との申し出に会つたことだつた。恋愛か仲人結婚か、この沈黙温厚勤勉の士の突然の話に二人は茫然として応諾し、翌日はそろつて式に出た。新婦は岸川氏政江で媒酌は薄井の勤め先の若手重役だつた。他に長野敏一(コギトに時時かいたが同人ではない)君が招かれてゐて三人とも上座に坐らされて恐縮した。さすがに薄井の無口をたしなめる同僚の人がゐて吾意を得たりと思つた。新婦の友の生島某嬢の祝婚歌でおひらきになつたが、未亡人、二嬢はどうしておいでか、このごろまたごさたで気になつてならない。長野敏一は式後、三人で茶をのむと漢口陥落後、日本国

内では騒動が起るといつてわたしたちをおどかした。わたしはこれにもあまりおどろかず、八月二日杉田屋での詩集印刷の見積り二百五、六十円といふ方におどろいてゐる。退

職手当ではまにあはないからである。しかしこのおどろきは四日に肥下が他の安い印刷屋を見つけてくれて止まつた。百五十円が出来るといふのである。これも親切な勤勉な男で

訣れを告げた者の歌

トラキクル
平井俊夫訳

黄昏の地

尊敬をこめてエルゼ・ラスカーロ・ジュラーに

1

月はまるで死者が
青い洞穴から現われるようだ。
そうして花々がしきりに
岩の小径に散る。
夕暮の池のほとり
病者が銀色に泣いて
黒い小舟で
愛をわかつ者が死の旅に立った。
あるいは足音がひびいてくる。
エーリスが杜を
ヒヤシンスの杜とおる
ふたたび柏の下蔭を遠ざかりつつ。

2

わたしらの故郷の
緑の森はこんなに微かだ。
水晶の波が
崩れた石垣に死んで
わたしらは眠りのなかで泣いた。
ためらう足を運び
茨の生垣のそばをすぎて
歌いつつさすらう 夕暮の夏
はるかに光線がうすれる葡萄山の
聖い静寂のなかを。
おお 夜の冷たい懐にいだかれた影。

散髪

今井茂助

井詰が朝寝から醒めると、二階ふたば続きになつた二階の窓はすっかり開けはなたれていて、さらさらとした風が部屋いっぱいにはいつてきていた。

軒の上で、大きな雀の音がする。

窓の外では、速くで鮮やかな鯉のほりが威勢よく泳ぎ、あちこちの屋根の間で、量感のある青葉が陽光にキラキラと濡れている。

五月の日曜日、泰平無事な午前。

思わず力いっぱい両腕をあげて背伸びをしていた井詰に、階段の下から妻の杏子の明るい声はわあがってきた。

「ねえ。良いお天気だから、思い切って散髪にいつてらっしゃいよ。夏樹と昼からどっかへ出かけましょうよ」

井詰は、散髪が嫌いなのだ。

まったく、髪の毛というものが伸びなければどんなに良いか、といつも思う。

かなしみの鷺。

静かに月光に癒やされてゆく
愛戀の紫のしるし。

3

おお 大都会よ
平原に
石でつくられている。
じっとおし黙って
故郷をもたぬ者は
暗い顔で追う 風と
丘の枯れた樹々を。
おお 遠く暮れおちる河よ。
風の雲の
おそろしい夕映えに
つよい不安がひろがる。
おお 死んでゆく人らよ。
蒼白い波が
音たてて夜の岸に砕け
墮ちてゆく星。

捕われたつぐみの歌

ルートヴィヒ・フォン・フィッシャーのために

緑の枝かげに暗い息吹。
青い花々が顔のまわりに揺れ
孤独者の金の歩みは
オリヅの樹下にしずまる。
夜が歎びの翼で舞いあがり
おお ひっそりと謙遜の血にぬれるもの。
花咲く茨から露が緩慢にしたたっている。
かがやく憐みの腕が
破れくだける胸をいだけ。

井詰が散髪嫌いになった理由は、ちょっと

特異であった。ものぐさや無関心というせいもあるにはあるのだが、もっと切実な理由は、子供のころから何度となく苦しんだ中耳

炎の恐怖であった。

実際、あのキリキリと錐を刺すような中耳炎の痛みだけは耐えがたい。いったい、痛みや恐怖というものは、もし神が創ったものだ

としたら、それは人間に危険が迫っていることを知覚させるだけで十分ではないのか。それにしても、あの凄じい烈しさはどうしたと

生あるものに対する何ものかの嫉妬か。

ともかく、いやというほど中耳炎に痛めつけられた井詰は、だから、中学で無理矢理水泳というものを習わせられて以来、海水浴場やプールに近づくのも厭うようになった。恐怖は年とともに嵩ずるばかりで、床屋で髪を洗われるのも避けるようになった。

井詰の散髪は、だから文字通り、髪を散らすだけである。鋏で刈られた無数の毛を、髪かみの繁みのなかから丹念にブラシで払い落して

もらって、オシマイにする。
井詰はまた年をとるにつれていよいよ人見知りをするようになった。ひとにものを頼むのがひどく億劫な上に、心情の未熟な床屋の若い職人に話しかけるのは大それた重いと

とであった。

こういう井詰にまったく恰好な床屋が見つかったのは、やっと去年の秋のことだった。それもどういう幸運か、井詰の家から歩いてほんの一分ばかりの手近なところだった。

床屋は表通りから入りこんだひっそりとした横町にあった。近ごろの東京には珍らしく、

どことなく鄙びて昔風にひかえめなところが井詰の好みに合った。なにより、無口で実直な中年の主人と、主人の姪だという大柄な田舎娘の二人だけでやっているのが良い。

固い待合椅子に腰かけて、何となく新聞をひろい読んでいた井詰のすぐ前で、若い男が椅子から立ちあがった。

実に頑丈で、ヌーッと背の高い男であった。太い縮柄のシャツの背中にブラシをかけてもらうと、男は黙って金を払って出ていった。

この若者は、大柄な女に髪を刈らせている間、白い刈着の下から両手を出して、手垢でボロボロになったマンガの本を一心に読んでいた。それからハイライトを一本吸った。そのあとで、前髪の形が気に入らないと女にちよっと註文をつけた。

それに、彼は時々、組んでいた焦茶色のサングラスの足首を勢いよくゆする癖があった。それが、まるで大きな鑿岩機か何かのように見えたのであろう。そばの小さな台の上に置いてあった鳥籠のなかで、水色のセキセイインコがそのたびに、チチチッ、チチチッと執拗に悲鳴をあげた。

鳥籠のなかには、もう一羽、貧相なカナリアが同居していた。たえずセキセイインコに

したのは老醜を恥じてのことではなかったかと思われてならない。

息絶えたインコは、井詰の手の上で、綿のように頼りなかった。

中学の一年生になって、急に遅しくなり、声変わりをはじめているらしくて調子はずれの割れた声を出している夏樹が、勢いよく庭隅の土を掘って、インコを埋めてやった。ひっそりと、木の枯れるような別離であった。

主人は黙って井詰の髪に鋏を入れていた。櫛で起こされた毛先が刈りとられる音がサクサクサクと耳に快ろよい。部屋の中には昼の陽光がいっそうみちあふれてきたようで、爽やかさが小鳥たちを宇頂点にさせるようだった。カナリアも、インコも、驚ろくほど勤い声で囀る。

鏡のなかには窓の外のいっそう明るい日向がまぶしく輝いて、屋根の向うで大きな櫛の木の青葉が映えている。

大木というのが井詰は好きであった。天に向って巨しく伸びた樹に出くわすと、井詰はいつでも佇ちどまって、なつかしそうに見あげた。何百年も生きつづけてゆくのだナと思っただけで、井詰にはその樹への愛着が切々と湧いた。不思議な安らぎと充実感が井詰を包

追い立てられているようで、隅の方で小さくなっていた。はじめ、どうしてこのカナリアはしょっちゅう目をつぶるのだらうと井詰は思っていたら、片方の目はつぶれているのであった。

「早くにアルコールで洗ってやってればよかつたらしいんですが、ほっといたもんで眼が上と下とくっついてしまっただけです」井詰の関心を見てとって、無口な主人が珍らしく向うから話しかけた。友だちのことを話すような口ぶりであった。

庭 Ⅱ

大村直子

六月 ひかげいろ時

だれも行かない庭すみで

私はしめった土を掘る

なにもないのに

すると むこうのつつじの下に

病気の白ねこがふせりに来て

あれは小鳥をうすめているのかと

いぶかる

遠くで

きこえぬほどに風りんが鳴り

花咲いた栗のこずえを

風は だまって過ぎていく

それから

私は ふいに うつぶして

落ちた小鳥に

かわってしまふ

み、井詰の心はやさしく素直になった。

西宮の仁川に住んでいたころのことを井詰は思い出す。

東京ではめったに見かけない壮大な松の林であった。夕ぐれ、勤めの帰りに道に高い空を風が渡って、松嶺の簾々と鳴っているときがあった。井詰は、全身で風と樹々のなかに傾斜していったものだ。死んだ父や祖母や弟の顔が、まざまざとうかんでいった。

鏡の額縁のなかでカーテンが揺れて、そのかけから十五、六らしい主人の娘が顔を出し

井詰は、家に飼っていたセキセイインコのことを思い出していた。

つい二週間ばかり前の、祭日の朝のことだ。いつものように杏子が餌をやるうとしたら、インコは鳥籠の床に落ちて、死んでいた。嘴のなかに餌が残っていて、抱きあげるとそれが彼女の掌のなかにこぼれたという。

年寄りのインコだった。そのせいも、黄色い羽根の色に熱帯の鳥に特有の明るい牙えがなく、おまけに嘴の根っここの鼻の上には、不恰好に反りかえった庇のような瘤をつけていた。容姿のどこにも華麗なところがなく、風采のあがらないインコであった。

彼はまた、年寄りの気難かしさでももあるように、妻が餌をやるとき、きまって巢のなかに跳びあがると、頭を奥の暗がりに突っこんで長い、しょぼくれた尻尾だけがこちらにはみ出しているというおかしな恰好で、じっと身をひそめていた。餌を入れおわった妻が籠から離れてしばらくたってから、ようやく巢のなかで窮屈そうに向き直ると、おもむろに餌壺のところへ降りてくるのであった。

「変人だわ、あのインコは。パパにそっくり……………」

そういうのが杏子の口ぐせであった。

井詰にはこのころ、彼が巢のなかに身を隠

た。彼女は細い白い腕をのばして、壁にとりつけた棚の上のラジオのスイッチを入れた。

三人組らしい漫才師の声と、客席の屈託のない高笑いが高きあがってきた。

「何をいってんだい、この台湾ゴリラ」どっと笑う声。

「台湾にゴリラがいるかね」

「そいじゃ、ベトナムのカバ！」

再び、前よりもさらに大きな笑いの波。

ふと、井詰はこたわるものがあつた。

あの若いアメリカ兵は、どうしたらうか。

一月ばかり前の晩、井詰は珍らしく銀座のバーにいた。仲間はまだみんなかなり酔って冗舌になっていたが、まるきりといつてよいほどアルコールに弱い井詰は、そろそろ自分をもてあます時間になっていた。

だしぬけに、井詰はうしろからつよい力で右の肩をつかまれた。不意をつかれていきさか険しい表情になった井詰を見おろしていたのは、口元いっばいに笑みをうかべた若いアメリカ人の小さい顔であった。

どこかにまだ幼なさが残りありと残っている顔であった。日焼けとも酒のせいともつかない、赤い、猿のような顔であった。

アメリカ人にしては随分小柄なその男は、

片手にビールのグラスを握りながら、大仰に両腕を開いて、

「サイゴン からやって来た」

とサイゴンに力をこめて怒鳴った。

細かい水色のチェックの半袖シャツに細いストラックスという、いかにもありふれたアメリカ人らしい身なりで、彼は一人の日本人といちばん奥のテーブルでさっきまで静かにビールを飲んでいたので。

酔いがまわるにつれて、急に何か彼の胸のなかで噴き出してきたように、彼はまわりの驚ろくような大声で喋りはじめた。

七日間の休暇はもうあと二日しかない。すぐまたサイゴンに帰ってゆかねばならぬ。トウキョウはじつにすばらしい。来年三月で兵役はすむので、必ず日本にやってくる。必ずトウキョウにやってくる。働くのさ！ とこのオクラホマ生まれの少年のような兵隊は、顔中から汗をふき出しながら、うすい唇をうごかしつつけた。

やがて、連れの日本人が席から立って彼を迎えにきたので、彼は肩をすぼめると自分の席に戻っていった。猫背の背中が、冗舌とはちくはぐに、虚しく淋しそうであった。

「運のわるい男だな」

井詰は、さっきから胸いっばいによとんで

いる重たい感慨を吐き捨てでもするように、思わずそうひとりごとを呟いていた。

「おまえさんには、まだ何にも分ってはいない。人のいのちも、人生も、殺戮も、親の心情も、よろこびも。だから、人殺しは止めてくれよ。おまえさんも死ぬんじゃないぞ。二十代で天死にするなどというのはとんでもないまちがいなんだ……」

井詰たちが席を立ったとき、隅の二人はまだ、黙って向いあつて飲んでた。アメリカ兵の瞳が、チラッと井詰を見た。

そのとき不意に、井詰は中耳炎のあの激烈な痛みを思い出してた。

成田れん子の詩(三)

浅野 晃

敗郷のうた

風よ 夜ごとに輝く彼の銀のはての赤き星を知らずや

をとめありてを求めゆけり
夜の深淵は重くして

銀河は霧のごとくけむれり

をとめは白き貝のひとつを抱きしが
知らざりき そは月と結べる
叛逆の悲哀の海の笛なるを

をとめの笛は清くして
霧の銀河の星の扉を青き月下に濡したり
ああされどをとめが求む彼の星は
月下の白き屋敷のいつくの扉にも見えざりき

をとめの笛の鳴るなべに

地上の民は扉に出でて
彼の天上に去来する奇しき笛は何ものぞ
そを死なせよと呼びあへり
ひとりの男の子えらばれて
青きつるぎを与へられ

杳けき山の彼方なる流浪の国に追はれたり
知らざりき 青きつるぎは頽落の
地上の民の笛にして

彼の天上の門に入る恋の調べは知らざりき
奇すしき笛は地を搏ちて
山河の樹々を哭かせたり
奇すしき笛はいつごぞと波うつ巨き山路を
超えつつ男の子さすらへり

惨雨(一)

緒方隆士

びっしゃげたトタン屋根が惨雨を浴びて激しく音を立て、いた。捻れ曲った軒燈の下で蛾が濡れた翅をた、んで死んだようにじっとしていた。

三吉は惨雨の中を傘なしで素足であった。

足の腹が虫でも踏みつけたように変にむず痒く不愉快だった。時々彼は襟元から脊筋へ走りこむ雨水を両手でびしゃびしゃと打ち続けた。家々は炭のように、くろずんだ屋根の下で灯のついた窓一つ持たなかった。

三吉は一時も早く酒場に着きたかった。酒場に到着して未だ灯のあるのを見ると彼はや々と安心した。彼は上着をとって、固く両手で絞った。それから再びそれを身に着けると、重いドアを獣のように休で押しあけた。

酒場の中はガランと暗かった。それでも三組程の客が黙りこくって座っていた。三吉は窓の傍の椅子へ腰を掛けた。其処で毎夜彼は、金がある時は、少量の酒と飯を食った。それから、その机の上で夜を明すのが習慣になっていた。気がついてみると酒場の中は足頭の

通信

吉本青司

英乃が保険証を送れといってきた
頭がふらつくので医師にみせたら
血圧が低すぎるせいだとのこと
電話でそれを聞かされてから

私もめいって

半病人になってしまった
食事は進まず

夜もろくろく眠れない

二日ばかりして長距離電話をしたら

白き銀河に噴き荒れぬ

夜ごとの星の門に立ち一つの星を求めつつ
をとめは海浪の巨き白牙にうばはれぬ

あをきつるぎと白き貝

天上影の射すくめに 地の敗亡の白眠の
夢をしづかに持すといふ

△わが血をもて恋はむとするものは何ぞ。
神それをゆるし給はず。▽

まだ大して変化はないが

医師も

仕事はしていいというほどだから
心配することはないと
かえってこちらが慰められた
洗濯もするし炊事もしているが
無理はしない

栄養にも気をつけているから
だんだん快くなるだろうとのこと
それでいくらか気持は楽になったが

二・三日は

平常の元気がもどらなかつた

あたりまで水で満ちていた。ドアの下や四隅の破れた壁の裂目から水が滝のように流れ込んでいた。酒場は道路より五寸も低かった。酒場の壁はゴテゴテと古い芝居のビラで、汚く貼り廻してあった。そして二つの隅には首のとれた仏像が一個ずつ、も一つの隅には二つに裂けた石膏のヌードが、銅線できくられてあった。

女は三人居た。一人は酒場の親爺の娘で、一番若かった。彼女はいつもほおずきを唇で噛みながら飛び廻っていた。他の二人の女はもう帰ったと見えていなかった。彼女達は三吉には宛で、山猿のように見えた。腐った豚肉のような皮膚をこの女達はしていた。そして絶えず猥雑な話をする癖があった。

ほおずきの娘は、膝のところで捲った裾を結んでいた。そこから美しい二本の素足が出ていた。彼女は水をパチャパチャ渡りながら三吉の机に、まがいウイスキーを持って来た。

三吉は続けて三盃程のんだ。沈みきった頭が急に活気が出て、胸が小刻みに振動し出した。彼はあまり酒に強くなかった。娘は三吉の机の上に腰を下して無心にほおずきを、ならした。彼女のほおずきを聞くと、三吉はいつも故郷の水田の畦道で遊んだ、幼年時代

を思い出した。蛙を竹で追いつたり、パチャパチャ跳ね廻る蛙を捉えて、尻に麦殻を、突きこんだりした幼年時代を。

「おい花公！今夜だけはほおずきを勘弁してくれ、嫌にいきいきいじゃないか！」先刻からブランデーを嘗めていた仏像の傍の四十男が首を上げて叫んだ。

「なあにいき……雨の夜に恋しい音楽さ」三吉が、吐鳴り返した。その機嫌に彼はぐらぐら、と眩暈を感じた。

「よかあないさ……お前なんぞ花公に惚れているからい、だろうが……」

四十男は、残りのブランを一気に、飲み乾して、コップをやけに音を立てながら、置いた。

「ふん……」

三吉は再び、雨の音を聞くような姿勢に戻った。花子は四十男のコップへ並々とプランを、つぎに行った。

「これで四盃だな花公！」男はコップへ口を持って行きながら聞いた。

「そうだよ……お前さんに今日堀出しものがない限り、これでお終いだね」

彼女はそう云って、故意に口のはおずきを音高く噛んでみせた。

天上の花

—三好達治抄—

萩原葉子 著

目次

幼い日々のこと／慶子と惣之助／逃避行／別離ののち／三好さんと母のこと／「父・萩原明太郎」出版の頃／叱責／ある夜のこと／旅行／文章会とルンペン／死／書齋の思い出
¥ 4 2 0

東京都新宿区矢来町七一
振替 東京 八〇八

新潮社

ブラボウ！ 思いがけなく、荒々しくドアを蹴飛ばして、既に酔った客達が、溝風のように濡れて飛び込んで来た。

自然喪失

美堂正義

今度は梅雨の小雨模様

七夕は年毎に梅雨の最中

昨年一昨年も小雨が降り

傘をさして子供等は怪を流しに行った

飾りつけは色彩も豊になつたが

幼な児の願ひごとには夢がなくなり

軒端に濡れながら

華やかなうちに淋しさが漂つてゐる

旧暦の七月七日は

晴れつゞきの天が澄んでゐて

星も明るく鮮明に輝き

白銀の帯の河が中天を横切つて

仰ぐ人々の胸に

秋のけはひが沁みてる

その頃

「花公！ 上等のとびきりて奴を持って来いウイスキーだぞ」
艶歌師の三人連だった。
「大した景気だね……」

二つの星は天の川をはきんで向ひあふ

太古

自然を頼りにして生活した人が

ふと見つけた二つの星

一年に一夜の逢ふ瀬を求めて楽しむを

雨の降らぬことを願ひ

恋の物語をつくりあげ

語りつぎながらいまに至つて

現在も人の心の底に美しく昇華してゐる

桃の花の咲かない雛祭り

菖蒲も花のつけない五月の節句

菊の花のない菊の節会

つゝましく生きる人間の感情を

自然と断絶したまゝ、に行はれる

星のロマンスも

草や木への親しみも

いつしか忘れ去られるに違ひない

仏像の傍の男が聲をかけた。

「へん、今日は違ったもんだぞ」

「どうしたんだ、馬鹿な酔っぱらいでも、ひっかつたのかい」

「そんなことあ、どうでもいい、これを押めよ！」

「光った紙入を彼は手でふって見せた。その拍手に、銀貨が、ばらばらと水沫を跳ね上げて散った。

「おい兄貴！ 金が落ちたじゃないか」

連れの男の一人が慌て、水を掻き交ぜながら叫んだ。

「何だと、へん、けちけちするな、ほれこれを見ろ！ 青獅子だぞ、安くねえぞこ奴あ。銀貨なんぞ懲しい奴に呉れてやれ！」

言葉が終わらないうちに、裸像の傍の客も、

仏像の傍の客も、三吉も、も一組の客も、一

齊に、演歌師達の足下に殺倒していた。

椅子が倒れ水沫が跳ね、取組んだ奴は、田

子のように水中を駆け廻った。

「あった、あったぞ」拾った奴が叫んだ。

突然の時ならぬ騒動に親爺が、泳ぐような

手つきで出て来た。併し肥っているの、機

敏には見えなかった。

幾つかの椅子は、足をからませて、重なり

合い、机は倒れた馬のように四肢を天井に向

けていた。

騒ぎはすぐ止んだ。金を拾った奴は喜びの為に赤くなり、拾い損った奴は呪言をつぶやきながら椅子に戻った。四十男は今の騒動ですりむいた腕を甜めながらブランを五盃にした。花子が来て——拾ったの？——と言ってくすりと笑った。

「うむ……たった一つ……」彼は五十銭銀貨を出して見せて、わざと不気嫌な様子を見せた。

「よくばってるね……それでも後四つブランがのめるぢやないの」

彼女は窓の傍の三吉に目交ぜして笑った。「おい花公！ こちらへお出よ！」

演歌師が聲をかけた。その聲は思春季の牝猫みたいに不気味な妖気を持っていた。しかし花子は、相変らずはおずきを噛みながら見向きもしなかった。親爺が花子の肩をこづき廻して、ぶつぶつ言った。

「お前馬鹿だな！ 行って捲き上げるんだ……ふん、彼奴らあ！ どこで盗んで来やがったかな……」

親爺は何故か無闇に腹が立って来た。彼は花子の耳をひっぱって、コック場へ連れて行った、そして、ビシャビシャ彼女の体を打ち続けた、花子は恐怖の為に聲も立てる事が出来なかった。三吉は不愉快さうに肩をしかめ

て、じっとしていた。雨の音は依然として、トタン屋根を打ち続けていた。

雨は夜が更けても止まなかった。酒場の中は次第に水量を増して行った。客達はもう一人も居なかった。三公だけが相変らず机の上に眩をのせて雨勢に聞き入っている風だった。濡れた上着がどっしりと重たく悪寒が体を走り廻った。

花子は、チュウインガムのようにはおずきを噛みながら子守のように肩をゆすり、眼は絶えず三吉を見守っていた。「これじゃもう、溝鼠の浮浪人もやって来まいね」

「うん——」

「もう何時だろう」

「さあ……時計はないし」

「時計だって？ 時計は客のじゃまになるばかりだぞ」

コック場で親爺が叱鳴った。親爺は一寸したコックでもあった。

「三公！ お前今夜でもこゝに寝られると思ってる？」花子が思い出したように言った。「ねむれるさ」

「夢をみて落っこちねえがい、よ！ それに今夜は雨で寒いからね」

知っているだろうに……

「でもね、そんな握り屋から絞り取る苦勞が女をひきつけることだってあるわよ」

「そうかな」

三吉は、その女の亭主の青い疲れた顔を見出した。

親爺が外出の仕度で荒々しく階段を蹴りながら降りて来た。二人は黙って顔を見合わせた。花子は仰山に頸をすくめて、はおずきを

傷ついた植物の樹液と少女の涙

花の生殖と僕らの生殖

わたしは植物を食へ

植物はいつか わたしを食へつくすであろう

輪廻転生の思いは

僕らの血の中に生きている

僕らの鉄をマグネシウムに置換しさえすれば

僕らは あの花の木のように
水と空気だけを吸い
芽えさえと青い顔をして
風の柀のような言葉を語り合って
生きつつけるのではなからうか

中国詩人選 4 (コンパクトボックス)

白楽天

田中克己 著

東京都千代田区錦田一丁目二ノ三
振替 東京 一五六五三

¥ 200

集英社

「有難う花ちゃん！ だがなれているからね、土管の中よりは増しき」

「そんなことは知ってるよ！ だから言うんだよ、たまには柔い綿の上に寝せてやりたいとね……」それから彼女は水音に気をつけながら三吉の肩に手をかけた、恰で秘密でも打ちあけると云う風に。

「今夜わね、親爺！ コレの所に出かけるんだよ。出かけたならこの雨だから帰って来はしないさ……」

「……」

「ね、親爺の寝床を一晚中淋しがらせたって

思い出したように噛み始めた、そして親爺の雑言が頭の上で破裂するのを覚悟した。それは朝鶏が羽ばたきして闘を作ると同じように外出する時の彼の習慣であったから——。

併し三吉はその晩、親爺の床に潜り込む事は出来なかった。親爺はドアに厳丈な鍵を、何時の間にか用意していた。彼は幾らか力を落して、肩をすぼめ、すっぽり濡れた上着を脇に抱えて、再び自分の机の方へ帰って行かねばならぬのだ。花子は彼の姿を淋しそうに眺めていた。

「三公！ 気の毒ね……この寒いのに」

「仕方がないよ、……着物だけなりと乾いた奴が怒しいが」

「女のものだってい、——私のを分けてあげるわ……」

「助かるね……」

「でも、それより……」

花子は思い出したように言った。

「それより、何さ……」

「それよりもね……」

彼女は少し顔を赤らめた、そして故意に乱暴に言うのだ。「ねえ三公！ お前さえ変な事しなけりゃ、あたいとこへ寝てもい、よ」

今度は三吉の顔が妙に歪んで、赤くなっ

植物人間

福地邦樹

植物の葉緑素と

動物の血液のヘモグロビンとは

全く同じ構造式で

ただ一つちがうのは

葉緑素をかたちづくるマグネシウムが

ヘモグロビンでは鉄に置き換えられている

だけだという

何と美しい類似の方程式であるか

植物の葉脈の網の目と動物の血管

植物の呼吸と人間の呼吸

増補・改訂版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 編
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文六篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華版。
定価 一八〇〇円

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一一〇〇三

果樹園 一二七号 昭和四十一年九月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

果樹園 一二八号 昭和四十一年十月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

果樹園

第128号

蓮田善明とその死 小高根二郎
山上の礼拝 田中克己
コギトの思ひ出 田中克己

やすらぎについて 吉本青司
り す 大村直子
あ い つ 浅田二三男
坂 の 話 萩本家義
トラークル詩抄 平井俊夫
惨 雨 緒方隆士
編集後記

蓮田善明とその死(三十一)

小高根二郎

蓮田は長明の和歌・管絃のスキを論ずるに当って、まず太宗治の次の言葉を用いている。現代の長明という前述した近似感からであらう。

2 鴨長明のスキ

「芸術家といふものは、つくづく困つた種族である。鳥籠一つを、必死にかかへて、うろうろしてゐる。その鳥籠を取り上げられたら、彼は舌を噛んで死ぬだらう。なるべくなら、取り上げないで、ほしいのであ

た。そして、口をもぐもぐさせたが何も言わなかった。花子は相手に黙られて、てれながら。

「ねえ、三公！ あたい恥ずかしいと思うけどあなたの為思つて言うのよ！」

「うん」三吉は黙つてうなずいた。

花子は恥しさに、エプロンのポケットへ手を突き込んだ。彼女の目は急に輝いた。

「ほれ！ 三公！」

彼女は手を差し上げた。五十銭銀貨が彼女の指先で、小さく光っていた。

「ほら、」三吉も急に活々とした顔になった。

「今日演歌師達が落した、あれだよ！」

「あ、花ちゃんも拾つたのか」

「うむ……三公は拾ひ損つたね」

「うむ」

「食べようよ、何か、支那そばでも——」

「おごつてくれる花公！」

傘も持たず二人は、何もかも忘れたように表手へ飛出した、深い闇の中に水はいつしか路に這い上つていた。水を渡る二人の足音が不気味に音を立てた。(続く)

(「雄雞」昭和六年七月号)

〔備考〕筆者名は緒方嶮となつてゐるが、読者の便のために緒方隆士と改めた。

編集後記

七月五日、京大助教授の飛鷹師氏より「表現主義2」
「ホフマンスタールの演劇への道」を頂戴した。前誌に飛鷹氏は「ユネタードラー」試論を發表しておられる。シユネタードラーは第一次大戦で戦死した天折詩人。飛鷹氏の同僚である平井俊夫氏が毎号誌に紹介して好評なトラークルも第一次世界大戦中に詩の死を吐いた。そういへば本誌が紹介する蓮田善明も第二次世界大戦のわが国の犠牲者だ。シユネタードラーやトラークルに特に親近を感じるのと同じ戦没に対する哀悼の思いからかも知れない。

七月十一日、松山の火山登山さんから山頂火列集「自画像」を頂戴した。山頂火が蓮田に与えた影響を考えずとも、この句集の附録「大山さんの書いた「山頂火の作品と生涯」は面白かった。わが反省の資としてである。

七月二十六日、休暇で須磨の観音先に四下していた大村直子さんに第一二六号の再校をお手伝いいただいた。印刷所からの帰り、彼女が敬慕する伊東静雄の詩材がいっぱいころがっている天王寺公園に案内をしたが、煤煙で汚汚れたこの場末の公園に彼女は興がった。地上が汚れすぎているので一層澄み切つた夕空に上弦の淡月が浮いていたが、彼女はそれを材料にして即席の童話をしゃべった。なんだか立原道造を女にしたような印象をうけた。

七月二十九日、伊東静雄全集が人文書院の松本章男氏の努力で予定日に刊行をみた。盛夏の大好きであった伊東はこの贈物を喜んでくれるに相違ない。(〇)

果樹園 第一二七号(毎月一回一日発行)
昭和四十一年九月一日発行

編集者 小高根二郎
発行者 小高根二郎

印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 二十円

されたときのことを書いてゐる。

自分はその筋の生れでもなく、天才でもなく、又人に認められた功者でもないのに、一首だけでも入選したのは大変な名誉だと長明は喜んだ。心友・筑州はその由を聞いて、奴は謙遜してそう言つてゐるのかと思つていたら、なんども同じことを言つてるところから推すと、存外ほんとに名譽だと思つてゐるらしい……と吃驚した。だいたい「千載集」には、誰彼なしに、十首、七八首、四五首といったぐあいに入選している。なんだあんな奴等が……と、長明はむしろ嫉妬するのが筋合いだ。ところが手放して喜んでいる純粋さから見ても、いまにきつとミューズの加護にあずかることうけあいだ……と筑州は感嘆した。

これは長明三十四才の時のことである。とうが立つた文学青年にしては、いささか純粋すぎるほどの喜びようである。彼のスキぶりを実証するに足るエピソードである。

又、加茂川を詠んだ歌で次のようなスキぶりを物語るエピソードもある。

した歌合せに長明は出席して、月の歌として歌をよんだことがある。

石川やせみのをがはの清ければ月も流をたづねてぞすむ

ところが判者の源師光は「せみのの小河なんていう川はわしは知らん」というわけで負けを宣せられてしまった。長明はいさ、か自信を持っていたのでその判定には不満であった。ところが、今般の判定はどうもおかしいという興行者・光行から意見が出て、改めて歌学者顕昭法師に判じ直しをやらせることになった。その結果、長明の先の歌の所に、「石川、せみのお河：なんていう河は聞いたこともない。但し、なかなか面白く下の句に続いているから、その河がはたして実在しているかどうか調査の上で、改めて判定すべし」と判詞を書いて勝負をおあずけにした。後日、長明は顕昭法師に出会った際、「あれは鴨川の異名で当社の縁起に出ております」と説明すると、法師は吃驚して、「よくも論難せんじやったことよ。わしの知らん名所なぞあろうはずはあるまいと、すでに悪口を書くところじやった。誰の歌かは知らんが歌の姿がなかなかええので、河の所在を確かめてから判定するつもりじやった」と長明は褒められた。

後日この瀬見河を肖像画家として有名な隆信朝臣も詠んだ。又、先の顕昭法師も左大臣家の百首歌合せにこの瀬見河を詠んで長明は面目をほどこした。後年、新古今集が選ばれたとき長明は十首も収録されて過分の光栄と感激したが、とりわけこの瀬見河の歌が入選していたことは生死の執念となるばかり狂喜したのである。

先の「千載集」に一首入選したときには「この道の冥加、身の程に過ぎたり」と随喜していたが、今度の「新古今集」入選にさいしては「生死の余執となるばかり、うれしく侍るなり」と狂喜したのである。まさに太宰のいう生死を賭けた鳥籠への執念だ。この若い日の徹底したスキき加減に、長明は晩年さすがにあきれかえって回想したものか、この思い出話を「但あはれ無益の事かな」と結んでいる。

以上のことは長明の二十代三十代の頃はなしてであるが、四十代の後半で、どうしたはずみでか和歌所の寄人に召された。千載・新古今両集に入選したことで随喜狂喜したことさいせんのような彼のことだから、まさに献身といつていい、自己を滅却した陶醉で、日夜奉公したのである。その様子を事務長の源

句集花筵

高藤武馬著

古川書房

¥ 250

東京都大田区上池上町一九三

家長は次のようにしている。

「長明……歌のことにより北面へ参り、やがて和歌所の寄人になりて後、常の和歌の会に歌まいらせなどすれば罷り出づることなし。よるひるほうこう怠らず。」

(源家長日記)

こゝに和歌所の鼠になりきって、外出もせず、たゞ所内を日夜駆け廻ってその小ぜわしさにホクホク……自足している長明の顔が見えるようである。

小島吉雄博士の調査によると、十四人の寄人中での中堅五人の年齢は、源通具三十一才、藤原有家四十七才、藤原定家四十才、藤原雅經三十二才であり、主宰の後鳥羽上皇は実に二十二才の若冠であった。これに対し新米の長明は最年長の四十八才である。小意地の悪い定家なんかに時にチャクリ！とやられなが

らも、想い設けもしなかった技擧の自足にすべてを流して、たゞ恪勤精励をする長明がさらに刻明に浮んでくるようである。

3 楽譜なき楽

長明が音楽を習い始めたのはいつ頃からであったろうか、音楽書「文机談」の伝えるところによると、琵琶を中原有安に習い、揚真撫まで伝授をうけたゞけで、先生の方がぼっこり死んでしまったそうである。しかし、形

山上の礼拝

田中克己

わたしたちは吊橋を渡って教会へと行った朝日を受けて十字架が輝いて見えたと
マタイの第十七章第一節の
主がペテロ・ヤコブ・ヨハネをつれて
高い山に登られるところが読まれた
そのあと求められてわたしは語った
「この聖日をあなたがた山の方たちとともに祝すことを感謝したてまつる
ここにつどふ山の方はあの戦争の時に
ニューギニアでフィリピンで勇しく戦った

の残る和歌より、後腐れなく消えてゆく音楽の方が彼の特異性に向いたらしく、彼が音楽家菊大夫として令名の高かった事実が、「十訓抄」の説話として残っているほどである。つまり、「念仏のひま／＼には糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ」と、遁世をしても、なお思い捨てえなかつた余執としてのスキ——音楽の道を棄めているのである。長明自らの「方丈記」も、「北の障子の上に、ちいさきたなをかまへて、くろき皮籠三四合を置。すなはち、和

あなたたちの運ぶ食糧は途中すこしも欠けなかつた

この強いみいくさは今や
主のみいくさとなり

同じく強いみいくさであるにちがひない
その強い信仰でわたしたちを上げまし

他日、山に近い天国で会ふ時は
一つのことばではなしあひませう

主よこれらの願ひと祈りとをききいれ給へ」
わたしたちはそのあとで写真をとった

技師は妻とわたしとがはるがはるだった
五十人の人たちが写ってゐて
いままをそれを眺めてみると勇氣が湧いて来る

(八、二七聖日)

歌・管絃・往生要集……ときの抄物をいれたり。傍に箏・琵琶をの／＼一張をたつ。いはゆるおりこと・つき琵琶これ也」と余執の模様を伝えている。

しかし若き日の音楽家・菊大夫長明は、スキのあまり激越の所業もしたかったのであった。歌道では、歌集に収録されたことで過分の光栄と随喜、せめて狂喜したにとゞまった彼が、音楽道では、スキが過ぎて魔にとり憑かれ、まさに執念の鬼と化した感がなくはない。「文机談」が伝える次のエピソードは、その長明をよく物語っている。

長明は和歌でも有名ではあったが、琵琶では名人と取沙汰された。スキのあまりのことだつたらうが、或る時知名の士を多く仲間に誘って廻り、加茂の奥で「秘曲つくし」という催しをおつ始めたことがあった。大納言経通卿、中将敦通朝臣、三品実俊卿、中納言感(感)兼卿、右馬頭資時入道が参加して「足柄」を謡った。この他にも多くの参加者があった。楽所では景賢景基が指揮をしたのでヒチリキの小調子、笙の笛の入調、笛の荒序、箏の調子に遺漏はなかった。会は順調に推移するかに想われた。主催者の長明は会の予想外の上出来に感激その極に達した。彼は琵琶

で奥儀と伝える秘曲「啄木」を感激のあまり
数返りひいた。なんともしれぬ面白さがあっ
た。弾く長明も聴衆も酔って、夢の世界にで
も生れ、知らぬ国に來たように耳を驚かし目
をみはった。

ところが事が漏れて、管絃の家の木工頭藤
原孝道（文机談の筆者の師の父）の耳に入り
激怒した彼はことを後鳥羽院に訴えた。「凡
夫下傍の仁として、身に伝はらざる秘曲を偽
りて、しかも貴所高人の奥儀をはかり奉る事
は是重き犯罪也。すみやかに糺さるべし」と
いう訴状であった。長明は当然御尋問をうけ
た。が長明の勅答はまさに破天荒といってい
いほどふるったものであった。

「然ること候き。長明人間に生を請けて絃
歌の好士達各々たしなむ所皆浅智なりとい
へども、諸道の奥曲朝暮是を庶幾するに堪
えず。臨終の妄念とも罷成ぬべく侍りしか
ば、とかくひけいめぐらして貴賤を勧め、
其道々の棟梁を選び語り申して、会合の
事は候しかども、啄木の曲に於いては、未
だ師説候はねば、終に是を仕る事候はず。
但さしもの千載の一会に心強くして止み候
なん事も且は無念に覚え候て、揚真の曲を
啄木に模したる事は候き。みづからかくろ
てを絶て他の白手を得たる事、浮華の言を

の科とがといへども、法意の糺す所いかでか
重科には準ぜられ候べき。道にふける心ざ
しのせつなる事只雲泥異なりといへども、
皇化の太聖をめぐらして敬察を下しまし
すべし」

まさしくお尋ねのことはございました。も
とも音楽のスキと申してもたしなむ程度は
しれたもの。私とて同じことでございますが
日夜諸道の奥儀の曲に恋いこがれ、臨終の妄
念にもなりかねまじく存ぜられましたので、
秘策をめぐらして貴賤の同志を勧誘し、その
道々のお頭を選んで仲間に取り入れて会合こ
そいたしました。が、啄木の曲につきましては
まだ伝授をうけておりませんので、これをひ
きなぞいたしてはおりません。但し千年に一
度といったチャンスに、あれほど熱願しなが
ら思いをとげられないとはいかにも残念に思
われて、習い覚えた揚真の曲を秘曲啄木の
調にまがえてひいたことはございました。身
のほどを考えず喝采をあてにした浮ッ拍子な
言動には罪はございませうが、重罪に当る
とはうけとれません。道にふける志の切なさ
においては雲泥の差があるかもしれませんが
同じスキ心がしでかしましたること、御慈悲
をもってお裁きください……といったのであ

コギトの思ひ出(終り)

田中克己

コギトの思ひ出をかくこととなつたのは森
亮、小高根二郎両氏の要請で、わたしは「果樹
園」の創立者の一人であり（お忘れになつた
らうが、創刊の辞を書いたのはわたしで、は
じめの十号はわたしの家を発行所とし、校正、
発送みな福地君の援を得て、わたしや家族た
ちがやつた）ながら、貧乏したり病氣したり
で、同人費はかんべんしてもらふ、原稿は書か

やすらぎについで

吉本青司

夏の休暇 山荘から帰ってきた
△ひととは逆である▽
土佐佐賀駅では
黒い眼鏡のひとがこわかった
混雑する駅前に
寝そべっている若い男や
ガムを噛んでいる女のひとが

気味わるく感じられた

車の座席をとうとうとして
ひしめきあう旅行者たち

その波のなかにはいると
ふしぎなやすらぎもあった

わが家に帰ってから
はげしく車の行きかう窓辺に
机を移して

随想八詩とあるく▽を書いた

る。

戒律が道であつた中世の楽壇に、長明が発
案した「秘曲づくし」という名人会がいかに
無法なものであつたか？ あまつさえ伝授を
うけていぬ啄木まがいの曲を、興に浮かれて
しやアしやアとひきながし会同者を陶醉させ
たのである。まさに傍若無人の所業である。
しかもその所業を、スキのあまりにしたこと
だから諷刺されたいと、厚顔にも強辯し、説
伏しようときえする気配がうかがえる。「文
机談」の筆者、或いはそれを筆者に語り伝え
た人が、すべて長明を責める藤原孝道の側の
人間であつたことを考慮に入れても、「道の
狼藉、向後の為め断絶し難し」と孝道が強訴
しなければならなかつた理由もわかるのであ
る。後鳥羽院は個人的には長明のなみなみな
らぬスキ、他意ない純真直さを諒とされ、
側近もまた世の常の破廉恥罪ではないと同情
の動きはありながら、御処断のやむなきにい
たつたのである。

〔訂正〕

第二十六号一頁二段鈴木敏世氏は鈴木知太郎氏（当時成
城高校講師、現日本大教授）の誤記。

である。新潮の原稿も百枚といふのを、七十
枚足らずのところを筆を折り、大あやまりに
あやまつて、掲載するかいなかは「み心のま
まに」（ことわつておくが編集の方のみ心で
はなく、主のみ心なのである）といつて、の
つたのを見て、主はおゆるしになつたかと思
つた。

あとこの調子で書くとしたら、

詩集西康省の反省

松下武雄の勇ましい死に方

保田を中心とする事変、戦争中のコギト

太宰治ら日本浪漫派とのつきあひ

蓮田善明、伊東静雄氏らの文芸文化との

交流

佐藤春夫先生の師恩

中河与一先生との関係

微用中の思ひ出

帰還後のわたしとコギト

などをこまかく書いて、場をふさぐことにな
るであらう。しかしわたしは実のところをい
ふともういやになつたのである。なにはじめ
からいやだつたのである。「反省」といふ詩
集を伊東静雄が出してゐるが、そのまへには、
「わたしの詩の読者は極めて少ないといふこと
に気がついた」とかつは驚きかつは嘆いてゐ
る。昭和の珠玉の詩に対してさへさうであつ

た読者は、この雑文に対してはもつと少いとわたしも確信する。

そんなわけでわたしは前述の企画は、必ず書く、書いておく。しかし果樹園にのせることは勘弁してもらはう。いま午前三時で——わたしは老年のせいで、夜半にねざめするのである——わたしの横では家内が安眠してゐる。その家内もわたしの書くことには手伝ひはしてくれない。(これが評判のわるいのを実証する一番の証拠であらう)。わたしは結婚三十年である。わたしはこの真珠婚(といふのださうである)を祝ふために、この夏とほしい小遣ひをさいて台湾へ二人で旅行することにした。「女誠扇」や「霧社」などの佐藤先生のお作をよんで行きたくなり、父に卒論の資料をとるためといひ、少ない月給から百二十円はたかせて遊びに行つたのが昭和八年の夏であるから、三十三年ぶりである。

わたしは飛行機の事故も覚悟している。(保険をかけるつもりである)。八月の台湾は気温平均三十二度で快適とはいへないが、教へ子の紹介のホテル(むかしの大稻埕といつた地域にある)はひよつとしたら冷房があるかもしれない。わたしは熱さにはわりと強いのである。家内はどうだらう。わたしはそ

んなことを気にしながら行くのである。召集されたり徴用されたりではないのに、どうして行かねばならないのだらう。わたし自身にわからないのだから、家内や家族にはわかるはずもない。この旅が象徴するやうにわたしの一生はわからないことだらけである。わかつたやうにいはいはうとし、他人はすでにいづてゐる、コギトの意義などは、わたしにはすこしもわかつてゐないのではなからうか。「記録だけで結構」といはれるなら、コギトの総目次を挙げれば宜しからう。東京では栗山博士とわたしのところにそろつてゐるコギトで、一夏の仕事として十分である(なに昔のわたしなら一日でやるだらう。)

とまれわたしは詩をやめた時と同じく、この文章をかくのがいやになつた。詩をやめた理由だけは、はつきり書いておかう。コギトがなくなつてから数年して、わたしは自分の作品が保田から買はれてゐないことを確信したのである。その日から書かなくなつた、といへばちよつとうそになるが、書く気はとみに減じた。いまはしかし違ふ。わたしは一度詩がかきたくなり、書くべきだと思つてゐる。これなら小高根さんに大して(ページの上下で)迷惑をかけないですむ自信がある。以上、半分は小高根さんへの相談だが、し

るしておいて終了の辯とする。

いのちあらばまたかへり見んあつま路の小夜の中山越えし日のこと
(一九六六、七、一〇)

惨雨(二)

緒方隆士

2

この酒場のある街は、三尺幅位の狭く、深い汚溝に取囲まれていた。三百軒位の出来るだけ粗末に、乱暴に非衛生的に造られた家々が、互いに押し合いながら、雑然と大きな掃溜場のようだった。

白いズボンを穿いた巡査と、一人の脊広がこれらの粗末な家々を、一軒一軒、丹念に赤い紙札を投げ入れて行つた。彼等は昼過ぎに酒場にやつて来た。

「何で御座います旦那！」

親爺が少し悚えながら悪丁寧に頭を下げた「注射だよ」

「え……」赤い紙札を調べながら、親爺は少し手先が顫えた。

「疫病の予病注射だ」脊広がつけ加えた。

「明日午前八時から執行する。間違ひなく出頭するように」

巡査はチョコ髭を撫で廻して、四辺を見廻した。

「へえい」

親爺は涙の分らぬ顔をして恐縮した。「時に喉が乾いた水を二ばいくれ」

リヌ

洋子に

大村直子

「その子はりますが欲しかったんだってどうしてもつがいで欲しかったんだって」

真夏の白い公園で
とほしい木かけをわけながら
いつになつても

あどけない目の友人は言う
(彼女は今 少年院の先生にならうとしてい
る)

「一匹買うお金なら持っていたの
でも一匹ではとてかわいそうだから
どうしても二匹でなきゃ!と思つたんだって
それで夢中になつて

よそのおばさんのお財布とってしまったんだ
つて
だから連れて来られたの

巡査は横目でウイスキーを見た。

「へい、そうでしょうとも、この暑さでは、さあどうぞ……」親爺はウイスキーをコップにつきながら、情なそうに油ぎつた顔をしかめた。

でも 私 なんだかうれしくなつた
あまり嫌なことがありすぎるもの……」

ああ いじらしい愛への欲求!
けれど「悪くない」人々は
「盗んだ」ということしか考えない

「私の方が よほどたくさん
盗みかえしているかもしれないのに……」
と彼女は空に目をなげる 遠く
そのあたり
まっ白と思つた雲に

この時の深いかげりを私は見る
そして はげしい日の中に
私たちの高さに
ゆらめいて

きょうちくとうは咲いている

運河

雨がふっている

「うむ、すまんなあ親爺」彼は一気にそれを呑み乾した。親爺は、巡査の顔色で、もう一盃つがねばならなかつた。

「酒見君 君はどうだ」二盃目をのみながら脊広に向つて巡査は聲をかけた。

静かにふついている

暗い午後
水に落ちた子をとむらいながら
運河のふちを
風が歩む

うらがえしになつたボートと
古いぼんぼん蒸気が
よりそいあって顔をかくし
小さいさん橋は

こわれはじめるとき
思いに沈む
ああ ひきさかれた意志の
無言の悔恨!

いましも 海にむかつて
どす黒い

引き潮の水を吐きながら
その子の微笑を
自分から
奪え 奪え! と
運河は思いつめている

「有難う……」脊広はそう言って笑った。
親爺は、愈々顔をしかめた。
巡査達は幾盆かを重ねて出て行った。
親爺は呪咀するように両手を上げて怒を爆
発させた。

3

「何が注射だ！」それから彼は赤い紙札を両
手で引裂くような風をしたが、思い返してそ
れを酒棚の隅へ押し込んだ。

あいつ

浅田 二三男

何もする気がなく
食欲さえもなくなった
そんなまっ昼間の
灰色のとき
あいつをおもうと
えへらえへらと
わらえてくる
わらえてくるが
わらいにならず
それは腹のあたりで
もりもり固まり
いわゆるファイトに形をかえる

ブルンと身ぶるいして
あつというまに起き上る
いやいや
起き上るといふほどのんきじゃない
光のようにはねかえる
雨風泥まみれ
水がたまってもうどうとすることがない
道端の雑草も
あれにかかつては顔色なしだ
ある日誰かが捨てた
ゴミやあくたの中に
あいつがまざっていた
むかしは
ピカピカ光る長くつか何かで
あつたのだらうけど
かくなる上は正体も不明だが
持って生れたくせだけは
日増しに高ぶるばかりだ

何もする気がなく
食欲さえもなくなった
灰色のとき
ほくの中でふくれ上る
道の上のゴムの切れっばし

賽の川原

高い山の
膚を堀りおこしては
田んぼや畑にしていた
ひとつ積んでは父のため……
ふもとから一つ一つ
石をこんでは積み
段段畑をこしらえていった
ふたつ積んでは母のため……
田んぼには

彼は救世軍本部と言われた大きな建築物
を、頭に描き出した。彼はその建築物が建て
られる時、職工達の助手として働いた事も思
い出した。それと同時に歳末銀座の並木の下
で、見すばらしい彼にまで、追い続った彼等

米がいく粒かみのり

土曰でころころとひいた

みつつ積んではきょうだいの……

畑では
菜の花がうこん色に咲き
おそろしい夜の灯にした

よつつ積んではわが身の……

するうち
とうとう山の頂きにのぼり
そうして
ついに里へはおりてこなかった
五つつんでは……

たくさんなこの百姓屋たちは
いまも
天の川原でうたっている
六つつんでは……

を。——彼奴等は街の囃子手のように、街を
騒がせ歩いて、そして、それが全部の仕事の
ように見える彼等が、どうしてあんな大きな
建築物を建てる事が出来たらう——三吉の単
純な頭には、救世軍を見る度に渦を巻く疑問

黄昏の空気は渾沌とし、疲れ、喘ぎ、蒸し
暑かった。明日は入梅だ。

天気労働者達の多い街の人々は、今年の梅
雨は空梅雨だと云うことを、会う人毎に挨拶
し合った。屑籠に空瓶や古新聞をつめこんで、
屑屋達は帰って来た。艶歌師達は化しい聲で
唱いながら商売に出て行った。鼻につまった
変にだるい聲が、遠く消えると、子供達の花
火が、威勢よく破裂した。と、どこからか賑
やかな楽隊が聞えて来た。その一隊は、赤い
筋の入った帽子と矢張赤く棒どった襟章をつ
けていた。甘い尻上りの歌を、その一隊は唱
いながら、やけに太鼓をならしていた。六十
歳とも思われる媼さんが一人交っていて、踊
子のタンパリンのようなものを、ニグロのよ
うにうち振っていた。例の酒場の前でその一
隊は足をとめて、神様についての演説を憫む
ようにし始めた。人々はそれを取巻きながら
街には珍しい不意の見世物を楽しんでた。
この群集の彼方から汚れた労働服を着た、三
吉が威勢よく帰って来た。彼は自分の前の人
集りを見ると急に好奇心を起して、人々の肩
越しに見世物が何であるかを見極めようとし
た。——何だ、救世軍か、彼は期待を裏
ざられて、落胆した身振を強調する為、大
地に向けてベッと唾液を吐きつけた。

であった。

神の説教者は、最期に今晚の会堂を群集に
告げて、再び賑やかな楽隊に浮れながら歩い
て行った。

——信するもな皆ぶつ殺されん——
群集の一人が大きな聲で楽隊の節に合わせ
た。皆がどっと笑った。子供達は尚威勢よく
見世物を追っかけて去った。

「三公ノ」散った群集の中から、病んだよう
な花子の顔が現れた。珍しく頬づきを噛んで
いなかった。

「お、花公」三公は駆けよりながら叫んだ。
「仕事はあったぞ——ほら」彼はポケットか
ら五十錢玉を三つ出して見せた。

「よかったね、あって」花子もしんから嬉し
そうな様子を見せて駆けよった。二人は口笛
を吹きながら肩を組んで酒場の中へ這入って
行った。

「よう、ウエルカム、紳士並びに……」

鳥打帽を冠った不良青年が、机の上に腰か
けて、足をぶらぶら振りながら冷かした。彼
は安酒で赤くなった顔を、光らせながら喧嘩
したような様子を見せた。三吉は黙って彼を
睥み返して、窓の傍の椅子に掛けて、買って
来たジャム入のパンを手でちぎって食った。
花子が、コーヒを持って来てくれた。親爺は

相変らず不気嫌そうに、口叱言を言いながら時々集って来る蠅を泳ぐように追い払っていた。

客が混んで来た。酒場の隅の机では、二人の屑屋の爺さんが、プランを替めながら、今日の掘出しものについて、議論し合っていた。机の上には小さな仏像が、載せられていて、禿の多い爺さんは、何が故に掘出しものであるかを説明する為に骨を折っていた。も一人の爺さんは、それをまるで飛び廻る蠅のように、あしらいながら「そんなものなら自分は幾つでもあると思う」と学者のような言葉で断定した。今夜は早いので二人の山猿のような女達も騒々しく飛び廻っていた。酔った中年の二人連が、この女達を一人ずつ、抱き込んで無理にウイスキーを口に割り込んでいた。戸の軋るような笑聲を、女達はその度に立てた。

「今晚は、」頭を腕刈にした、支那の少年が這込んで来て、いきなり二三度宙返りをして見せた。

「ようよう、うまいぞ」酔った客達の血走った視線の中で、少年はバツタのように跳ね廻った。幾度も幾度も彼は宙返りした。が結局誰も金を投げるものがないと知ると、帽子をもって、一人一人虱つぶしに金を要請して歩

いた。だが誰も対手にするものはなかった。金の代りに拳がとんだり、唾がとんだりした。それでも少年は去らなかつた。

「もう来るんじゃないよ」花子が少年を戸の所まで押して行って、十銭玉を手握らせた。三吉は、頬杖をついてそれを見ていた。彼の頭は今日明かに、昨日とは違って事を考えていた。花子と自分の関係や、今日仕事場で会った若い男の為に自分の性格が、ひどく変わったようにさえ、三吉には思えた。

若い男は、三吉が今まで会った人間とは随分違った所があった。彼は弁当をもたない彼に惜しげもなく自分のを半分割いてくれた。それから、なげなしの金でパンを買って来てくれた。落ちぶれた学生、三吉は最初そう思ったが、その男は、それは違うと言った。成程そう云えば、彼は希望に燃えた、明るい、快活な青年だった。彼は、激越な調子で、社会組織の不合理を痛罵し、労働者が次の新しい世界の創造者である事を力強く語って聞かせた。三吉には、彼の語る事が全部は分らなかった。併し彼の新しい材木のような活々とした、顔を見ていると、次第に自分迄が、明るく力強くなって来るのを感じた。

三吉はその男から名刺をもらった事を思い出した。彼は慌て、総てのポケットを裏返し

歌集 明日を賣む

安田 章 生 著

大阪府北区橋上町四五
振替大阪五七〇九九番

¥ 1,000

創元社

てみた。どこかで紛失したと見えて名刺は見当らなかつた。彼は取返しをつかぬ事をしたと思つた。新しい幸福がその名刺に一っばい書いてあつたに違いないのに。

「どうしたの？ 金でも失くしたの」
花子が不審そうに寄って来た。

「うん、もっと大事なものを」

「そう、なあにさ、金より大事なものはなんぞ」
花子はお可笑しそうに笑つた。

「金より大事な心と云う奴——隅の掘出し物を議論していた爺さんが交返した。」

4

疫病、予防注射は午前十時から始まつていた。往来迄も長く列を作りながら、人々は赤紙を持って、自分の番の来るのを待っていた。彼等は片膚をぬいで、緊張した顔色をしてい

た。人々の出足が遅く、二時間程定刻より遅

くなつたので、巡査や区吏員達は憤って、荒

坂の話

萩本家義

坂があつて

傾斜の急な、長い坂があつて
米俵を積んだ荷車の列が
あえぎあえぎ

その坂道を登っていた
車の挽き手も、あと押しも
汗みずくで、命がけだった
土地の人は、おとう坂と
呼んでいたが
正しくは烏頭坂——おとう坂
古歌に曰く

おとう坂越えて苦しき行末を
安方と鳴く鳥の音もかな
作者は道興という
室町時代の高名な僧侶
むかし、この地方にも
おとうという珍らしい鳥が
棲んでいて
道にせまった赤土の崖に

菓をつくつたが

坂の名の起りだとか
おとう坂越すに苦しき荷車の
しるき疲れを忘れざらめや

作者は萩本家義という
吹けばとぶような無名詩人
みんな、くらしに困つて
町の市場へ米を売りに行く
村の人たちだった
そのころの米の値段は
田米の上等で
一俵、わずかに十四、五円
それでも他の作物にくらべると
まだまだ、高値の方なのだ

坂があつて
おとう坂という名の
けわしい坂があつて
その坂道を、ようやく越えた
荷車の列が
道はたに立ち並ぶ老杉の下で
息を入れ、入れ
休んでいた

々しく、人々を叱りつけた。

三時間程で注射は終つた。がそれは街の人の三分の一に相当するものだった。

「こんな事ぢや注射なんかやらん方がえ、」
医者は無智な住民達を憐むような聲を出した。

「こりや市疫病の醗酵地だわい」彼はキラキラ光る眼鏡の下で、黒ずんだ、トタン屋根や膿のように濁つた空気や、臭気のある汚溝を見廻した。

「こりや、手がつかん」医者はひそかに溜息をついた。彼はこの汚い街から逃げて行き度かつた。彼は慌て、注射の器具を靴にしまひ始めた。

5

二十日はかり経つた。

毎日焼きつくような天気が続いた。
屑屋は毎日、他の街の家の勝手や、掃溜場を犬のように歩き廻つて来て、自分の家の周囲を空瓶や、古新聞で埋めた。艶歌師達は、縁日へと唱ひ続けた。

酒場は、生ビール樽の三樽も売れた。
が、街の空気は、更に神経を昂らしていた。貧しい葬式の列が、一日に二度も街から

訣れを告げた者の歌

トラークル
平井俊夫訳

冥界

秋の石垣のそばの影らが
鳴りひびく金を丘のほとりに
たなびく夕雲を
枯れたプラタナスの静寂のなかに探してい
る。
暗い劫罰の涙を思づく
おお この時。夢みる者の胸には
紫の夕映えと
煙る都会の憂鬱があふれる。
歩みゆく異郷者のうしろに
墓地の金の冷気がふきつけてくる
影のなかを可憐な骸が慕いよるように。

腐敗してゆく人びと。
黒ずんだ門から
冷たい額の天使らがあらわれる。
青。母らの死の哀泣。
かの女らの長い髪をくぐり
まるい日が炎の車となって転がってゆく
際限ない地の苦しみに燃え。

冷えびえと空ろな部屋。
家財は微び。瘦せほそった手で
青のなかにお伽の国をまさぐっている
きたない幼時。
戸や長持は肥えた鼠らにかじられ
心臓が
雪のしじまのなかで凍る。
腐る闇の底に飢えの
紫の呪咀がひびきわたる。
虚偽の黒い剣が林立する。
音たてて青銅の門がしまる気配。

訣れを告げた者の歌

カール・ボロメウス・ハイリツヒに

微かに石の建物が音をたてる。
孤兒らの庭。暗い病院。
運河には赤い船が一艘。
夢みつつ暗がりに浮かびしずむ

整然たる鳥たちの飛翔よ。緑の森や林は
夕暮 寄りあってひとときわ静かな小屋とな
った。
野呂鹿の水晶の牧草よ。
暗がりに和みゆくせせらぎの音や 湿った
影
また夏の花々。風のなかで花々は鳴り
想いに沈む者の額にいつしか夕闇がさまっ
ている。
そうしてその胸には正しい灯びがともる。
平安な夕餉よ。パンと葡萄酒は神の御手で
きよめられて
夜の眼のなかから兄が静かにおまえを見て
いる
茨にみちたさすらいの安息をえたいと。
ああ 夜の清明な青い懐。

部屋に沈黙も愛をたたえて老いた人びとの
影や

紫の苦難や大きい一族の歎きをつつんとい
る。
孤独な荷のなかで一族は敬虔に滅んでゆく。

狂気の黒い時間のなかからいっそう光輝に

あふれながら

忍従者が石になった戸口に眼覚める。

そのかれをひと抱く ああ 冷涼の青

輝く秋の終末

静かな家 森の古い伝説

尺度と錠 訣れを告げた者らの月の小径。

心臓

猛き心臓が森の縁で白くなった。

おお 死の

暗い不安。こうして金は

灰色の雲のなかで死んだ。

十一月の夕暮。

屠殺場のうそ寒い門のわきに

哀れな女らが群がっていた。

みなの籠のなかに

腐った肉と臓物が放りこまれた。

ああ 惨い食い物——

夕暮の青い鳩は

和解の使者でなかった。

ラッパの叫びが暗く

楡の樹々の

湿った金の葉むらら走りぬけた。

ほろほろの旗が

血煙をあけた。

耳を敬でている

おとこを狂った憂鬱がつつむ。

おお あの夕映えにひそんでいる

青銅の時代よ。

暗い玄関から

若い女人の

金の姿が歩み出てきた。

まわりには蒼白い月らが

秋の廷臣となって囲んでいた。

夜 嵐に

黒い椗の樹林が砕けて

城砦が険しかった。

おお 心臓は

微かに光って雪の冷涼に吸われてゆく。

眠り

呪われてあれ暗い毒よ。

おお 白い眠り。

この世にも不思議な庭は

夕靄に樹々がけむり

蛇と 蛾と

蜘蛛と蝙蝠がうごめいている。

異郷者よ おまえの無慚な影は

赤い夕映えのなか。

悲しみの塩の海に

真暗な海賊船がうかがふ。

白い鳥どもが夜の縁を舞いあがってゆく

崩れゆく

鋼の街々のうえに。

出る日があった。

白い手術着を着て、頭をピカピカ光らした若い医師達が、石炭酸やリゾールの匂を撒き散らしながら、酒場にやって来る事があった。彼等は陸に上った魚のように街の人々は思えた。酒場の親爺はぬげめなく、彼等の為に上等のクイスキーを棚に並べた。

死人を出した鶏小屋のような小さな家々は、噴霧器で残る隈なく洗われた。若い吏員にはこんな汚ない家なんか、焼き捨てた方が、どれ程気がいい、かと思つた。しかし家族の人達は、薬品の為に、台なしになる、買ひ溜めた紙屑類や、食ひ残りの飯を見ていると、身を切られるように思つた。

天気の良い午後、失職した若い労働者達が汚溝に這入り込んで、泥の中に埋つた、銅線や空瓶を掘り出して、通りかゝつた巡査がそれを見て叱鳴り出した。

「衛生を知らんも程がある。疫病流行の折、何じゃ」若い労働者達は仕方なしに岸へ上つた。それでも彼等は探し出した銅線や空瓶を捨てようとはしなかつた。

「何じゃ、捨てんか、そんな汚ないものをそう云うことをするから、如何に注意しても疫病が絶えぬのじゃ」

労働者達は、絶望した悲しみの中に小さな

反抗を押し隠していた。彼等は今日自分達が持っているこの銅線で、パン屑ぐらゐは買えることを知つていた。併し彼等は、巡査の命令に反抗する無駄を知つた。彼等は空瓶や古茶瓶を一つ一つ溝の中へ投げ返した。溝は泡を立てながらそれを呑みこんだ。

巡査は満足そうに剣をガチャツかせて歩いて行つた。巡査の影が消えると彼等は又溝の中にイナゴのように飛び込んで行つた。

三吉と花子はつかれたような瞳で慰めあつていた。三吉は二人だけの秘密が次第に、人に拡がって行くのを感じた。人々の瞳がいつも二人の上に、注がれているような、喜びとも不安ともつかぬ感情が、次第に輪を拡げて行つた。それと同時に花子を、酒場のような噂の市場からひっこ抜いて行き度い慾望が湧いて来た。花子は三吉のそんな感情には、お構いなしに、頬ずきを噛み、以前よりずっと楽天的な活々とした感情に踊つていた。

酒場は疫病の為に廃れはしなかつた。寧ろ客足が、ずっと多くなつた位だつた。酒は殺菌力を持つてると云う幼稚な信念が、彼等にはあるらしかつた。

親爺の気嫌が天気と共に続いた。彼は毎夜のように角の女のところへ、夜を空けに行つ

た。三吉と花子は、その為に一層親密に愛し合う機会が多くなつた。花子は或る時、三吉の首にしがみついたまゝ、甘えるように言つた。

「あんた、うちの親爺さん好き？」

「どうして、そんな事を聞くんだ」

「でもさ」

「俺はな、——お前の好きな人間なら誰でも好きだよ」

「そう——」

花子は何か考える風をして、少し青ざめながら言つた。

「あのね、うちの親爺ね、本当のあたいの父っさんじゃないらしいのよ」

「どうして……」三吉は驚いて聞き返した。

「理由なんか無いわ、只酔っぱらつて、そう言つたからさ、お前は捨子だつて、……でもね、そう言われると、そんな記憶が私にあるのよ、そう、あたいはね、広い、広い野原に捨てられたのよ、凄いな程星が出ている夜だつたわ……そして私は聲の洩れる迄泣き続けたの……」

彼女は夢みるような顔をしていた。気がついてみると目頭は涙さえ溜めていた。

「馬鹿だな、お前は、そんなことが……」三吉は、変に喉のこわばるのを感じた。

6

突然街に事件が起つた。街の一角が白昼焼け落ちたのだった。放火だと云う噂が、人々の間を駆け廻つた。それは噂だけではなかつた。黄昏頃、街の人々に二人の私服に両腕をとられて、足を突張りながら、ひかれて行く演歌師を見た。放火の理由は解らなかつた。只一向に、犯人は酔つていた事実を強調するだけだつた。酒場の親爺が参考人として呼び出された。署から帰つて来た親爺は、犯人の事を口汚く罵り歩いてた。

「あのころつき奴、俺の家の酒が火の原因のように、署長様に言つとる……」

親爺は散々不気嫌に人々に当り散らした。山嶽のような女給二人は、秘かにビールを飲む所を見つげられて、こっぴどく、脊中を打たれて、表へ飛び出してしまつた。

花子は、鞆竿で追われる小鳥のように働き続けた。彼女は肩を、射すくめられたようにすほめて、酒をついで廻つた。彼女は今朝から、時々暈を感じた。頭が甲でも冠されたように重く、酒をつぐ手が細くふるへた。遂に彼女は、酒瓶を抱えたまゝ、其処に卒倒した。黄色い液体が、瓶の割れる音と共に壁に散つ

島尾敏雄著

島にて

自らの創作の母胎「島」の稔り多い土壌を解明する線を入れたエッセイ集。民話の原典である秀抜な奄美大島民話十篇も収めている。新秋のこよなき読み物としてお薦めする。

¥ 520

東京都千代田区九段二丁目五
振替口座東京七五七

冬樹社

た。親爺が赤くなつて飛び出して、した、か花子の尻を蹴飛ばした。が声も立てず、青い筋を額に走らせたまゝ、死んだような彼女の顔を見ると慌て、抱き起した。だからと下けた彼女の手は瓶で傷ついたので、赤く血がにじんでいた。

翌朝になつても花子は起き上る事が出来なかつた。激しい熱の為に、意識を盗まれた彼女は、三吉にしかと抱えられながら、三吉ばかりを呼んでいた。親爺は、疫病と診断される恐怖から医師を招くことを、どうしても承知しないので、三吉は売薬を買つて来たり、水を買つたりして、看護した。

三日程こんな状態が続いた。花子の病気の為に酒場はひどく寂れた。

何時の間にか、人々の間に花子の病気が、疫病だと云う噂が拡がっていた。今は、時々かうもりのように、迷ひこむ客の外は誰一人寄りつかなくなつた。親爺は、朝から晩まで酒に浸りながら、大っぴらに角の女をひき入れていた。彼は酔つと、きまつて乱暴した。彼は街に拡がっている噂から、何時かは自分の家が、石炭酸やリゾールの為に無茶苦茶にされる、事を考えると、じつとしていられなくなつた。

彼は、酔つた足を踏みしめて、階段を昇つ

増補・改訂版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 共
富士正晴 共

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文六篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華版。
定価 一八〇〇円

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一〇〇三

果樹園 二二八号 昭和四十一年十月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行

印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

て行った。彼の瞳はグミのように血走って、手が怒の為に空気を掻きむしった。

「出て行け、いんぼん娘、育てた恩も忘れやがって、厄病神に取りつかれるなんて、俺の家を火葬場にでもするつもりか……お前は捨て子なんだぞ……捨て子の分際で……」

彼は悪態を火のように吐きながら、赤坊でも拾い上げるように、花子を寝床からひきずり出して、まるで独楽のように振り廻した。それから、花子の體をひきずりながら、階段を降りて行き始めた。

三吉は呆然とそれを見ていた。が突如として兇暴な憎悪が垣をきって爆発した。彼は聲にならない雑言を浴びせながら親爺に挑んだ。なぐった。蹴った。突き飛ばした。親爺は鞠のように階段をすっ飛んだ。三吉は前後もなく花子を抱きよせると一散に闇の中へ駆け出して行った。

(雄鶴) 昭和六年七月号から転載

編集後記

八月二日。「日本談義」八月号に後藤包氏の「故蓮田善明中隊長を徳が」が掲載されているのを発見した。蓮田の最後に關し又一つの新資料を提供して下さった。後藤氏ならびに編集発行者の荒木精之氏に感謝申し上げます。八月四日から六日まで家族や親戚の者らと伯耆大山で過した。海拔七百米にある山荘でも憂鬱しいような猛暑の毎

日であった。しかし夕露の中に誰の負殿のように最後まで暮れ残っていた穴道湖は忘れられない美しさであった。

八月五日。昨日別れた大山を俯瞰しながら今度は飛行機で舞い戻った。避暑ではなく今度は用務のためである。昨日までいた山荘をそこ……と確認しながら、自分の身分がなおそこに佇んでいるように感じた。と、いうのは、まさにその時刻、皇太子御夫妻は有料道路を大山に向け走っておられるので、その歓迎のためである。その夜僕が泊ったひきこ旅舎と裏表の東光園にふたかたはお泊りだった。

八月十二日。杉山平一氏より福井の詩人則武三雄氏の詩集「鴨緑江」の序に、伊東の短歌八わくさのわかき心のみたりけるゆめなつかしやきみがありなれVが載っていた由教示にあずかった。AありなれVとは鴨緑江の異名である。万謝申し上げる。五年後に約束された全集決定版に収録の予定であるが、それにしても研究とはなんと業のようなものではないか?

八月十六・二十九日の両日、小久保実氏に会って研究談義をした。まさに涼風のような感路だった。

(〇)

果樹園 第二二八号 (毎月一回一日発行)

昭和四十一年十月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根二郎

発行所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 二十円

果樹園 二二九号 昭和四十一年十一月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行

印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

果樹園

第129号

蓮田善明とその死 小高根二郎
トラークル詩抄 平井俊夫
ヘリツク詩抄 森 亮

ハイネとわたし 田中克己
検 診 美堂正義
庭 で 大村直子
菓 箱 吉本青司
知恵と別離 浅野晃
ある閑人の告白 緒方隆士
編集 後記

蓮田善明とその死(三十一)

小高根二郎

長明の和歌と音楽とに寄せるスキは、如上のように「いみじきすきもの」と呼ばれるだけ異常なものであったが、長明のいうスキには、もう一つ異種のものがある。それは世の「名利」に心を染めず、これを深癪に厭うこともスキとしているのである。

「発心集」六八の「侍従大納言幼少の時、験者改請を止むるの事」は、そうした名利に心を染めず、これを深癪に厭う、異種のスキの事例である。

侍従大納言の藤原成通は九才の時にオコリ

を思った。加持祈祷をか、りつけの僧都にしてみたら、加持が効き目がなかった。心配した父母は「いっそ坊んさんを変えてみたら？」と相談をした。それを小耳にはさんだ床中の成通は抗議をした。「お坊んさんを変えないでください。乳母^{はあ}の語だと、僕がまだお腹の内^{はら}にいたころから、あのお坊んさんだったというではありませんか！ 今まで無事でおれたのはあの方のお蔭です。今度の病気でだけケチをつけるのは気の毒です。他のお坊んさんでは、たとえ病気が治っても僕はいやです。それに、その人なら必ず治せるというわけでもありません。又、僕の病気が死ぬほどの重病でもありません。僕のことを考えてくださるなら、いつものお坊んさんをお願いいたします。きっと治ります。」と言ったので、父

母は涙を流し、「かえって子供に教えられた」と反省して、いつもの僧都にきてもらった。そして、これこれしかじかと事の次第を僧都に打ち開けたので、彼も感動して真心こめて祈った結果、成通のオコリはけろりと治ってしまった。

この成通大納言のエピソードの結語として長明は、「惣ていみじきすき人にて、世の濁に心をそめず、いもせの間に愛執あさき人なりければ、後世も罪あさくこそ見えけれ」と評している。つまり、こ、にいうスキは、成通のように恣意のない清廉さをさしているのである。

同じくスキが世の濁りに染まぬ事例として「発心集」七一の「室日上人和歌を詠じて行を為す事」に蓮田は注目をしている。

室日上人は「どんなお勤めをしておられますか？」とひとに訊ねられて「三時の行をとめております」と答えた。「それはどのような行法なのですか？」と、さらに問われて、明方には八明けぬなり加茂の河原に千鳥啼くけふも空しく暮れんとすらんVと詠じ、午には八今日も又むまの目こそ吹きにけれひつじの歩みちかづきぬらんVと歌い、夕には八山

里の夕暮の鐘の声ごと今日もくれぬと聞くぞ悲しきVと、その時刻時刻に間違ひなく、この歌々を朗詠するだけの行です」といった。

又、琵琶の名手であった源資通は、後世のつとめをするのに、ありきたりの経なぞをあげずに、持仏堂で得意の琵琶をひいて、それを向うとした。

長明はこのエピソードの評語として、「つとめは功と志とによる業なれば、必ずしも是をあたなりと思ふべきにあらず。中にも数奇といふは、人の交をこのまず、身のしづめるをも愁へず、花のささちるを哀み、月の出入を思ふに付けて常に心をすまして、世の濁にしまぬを事とすれば、おのづから生滅のこともわりも願れ、名利の余執つきぬべし」といっている。つまり、一身の没落を気にすることなく、濁世と人から遠ざかることがスキだといふのである。

蓮田はスキの特例として、「発心集」五五の「中納言顯基出家龍居の事」を念を押すように挙げている。

中納言源顯基は後一条天皇に仕え、若くして官位についたが万事粗漏なくやってのけて

これによく似た失駈けの功名を自讃したエピソードが「無名抄」四〇「榎の葉井の事」である。

宮内御源有賢が仲間七、八人と一緒に大和の葛城方面に遊山したことがあった。その道すがら荒れた大きな御堂があった。由緒ありげなので誰彼に聞いてみたが誰も知らなかった。そのうち白髪の老翁に出会ったので、この人なら知っていようと訊ねてみると、「これは豊浦の寺と申します」と教えてくれた。「こゝらに榎の葉井という井戸はありませなんだか？」とさらに問うてみると、「今は浅せておりますが跡はございます」と堂の西へ案内してくれた。一同は感激のあまり催馬楽を合唱した。△葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の西なるや 榎葉井に白玉しづくや 真白玉しづく おしとんどおしとんど……V。數十べん合唱を繰返えしてから、衣を脱いで老翁に礼にとらせたことがあった。

近頃、内大臣源通親の邸で毎月のように影供養の歌会が催された。お忍びで天皇もおいでになることもあった。この歌会で「古寺月」という題がでたことがあったが、長明は古りにける豊浦の寺の榎葉井になほしら姿を残す月影

羽振りがよかった。ところが心は現世の繁栄を好まず、深く仏道を願って来世を望む心だけがあった。つねづね白楽天の詩を口癖のよりにくちずさんだ。△古い墓はいつの世の人だろ、姓名も名もわかりはしない 路傍の土となり果て、春の草が年々生えるばかりV。彼は非常なスキ人で、朝夕琵琶をひきながら「罪なくして罪をかうむり、配所の月を見たいもんだ」と願った。天皇が崩御したときには、その悲嘆のさまは異常であった。

やがて出家をした。年頃の公達は父の袖をとって別れを哀しんだが、すこしもためらふことがなかった。横川に登って剃髪し、籠っていたとき、亡き天皇の母君から近況を問われたので、△世を捨て、宿を出でにし身なれども 猶恋しきは昔なりけりVとお答えした。彼は大原に棲んで一心に行いを澄ましていたが、摂世関白頼通が敬って訪れたことがあった。会談は宵から暁にまで及んでけれども、現世のことは一言もさしはさまなかった。

つまり、このエピソードのスキ人としての資質は、「心は比の世の榮を好まず」「此の世の事は一ことも云ひ交ぜ給はず」にあるわけである。

長明はスキ道として、一に和歌、二に管絃、

と詠んだ。俊成入道はこれを聞いて、「しまった！ 先手を越された」と、口惜しがった！ 感心したりした。これは催馬楽の詞だから誰でも知ってるわけだが、今まで誰も歌にしなかつた。後日、定家中将も歌にされた。

つまり「瀬見の小河」同様……長明の先駈けの功名——一種の捷敏さへのはにかみがちな屈折的自讃である。

もう一つ長明のときの自讃である「無名抄」六五の「会の歌にすがたわかつ事」を紹介しよう。

長明が和歌所に仕えていたとき珍らしい歌会が催された。六首の歌を、春夏は大きく大きく、秋冬は細く枯れた姿に、恋と旅は艶にやさしく詠み変えて奉れ……という後鳥羽院のお、せだった。思うように詠めなかつたら、その由をありのまま、申し上げよ、歌の姿をどのくらい知っているかを試すのが目的だからということであった。これは大変……と辞退をする者が続出した。結局、座につらなつたのはいずれも当代の一流——左大臣藤原良経、慈田、家隆、定家、寂蓮に、長明を加えた六人であった。長明は太く大きな姿の歌として

三にこの深辭とを挙げてはいるが、とりわけ蓮田をして長明に共感せしめたのは、この深辭に寄せる同資質であると思量される。

3 和歌の無益

蓮田はさらに長明のスキの一特質である自讃に言及している。しかもその自讃の仕方が屈折的なのはにかみがちの自讃となっていることに特徴がある。

「千載集」に長明の歌が一首入選したとき彼が幾度も「いみじき面目なり」と有頂天になった。その純粹性を見てとった友の筑州が、「さるにてはこの道にかならず冥加おはすべき人なり」と褒めた由、「無名抄」に書きとめていたが、これなぞはにかみがちな屈折的自讃の一例である。

又、長明が鴨川を「瀬見の小河」という異名で詠んで、歌合せて最初は負け、次にあずかりとなったが、それが異名である事実が判明するに及んで、判者の頭昭法師自らその異名を歌にとりこんだことがあった。その長明の先駈けの功名を、さりげなく「いと人も知らぬことなるを、とり申す人などの侍りけるにや」と、これまたはにかみがちな屈折的自讃にしていた。

雲誘ふ天つ春風かはる也高間の山の花さかりかも
打ちばぶき今もなかなん郭公卯の花月夜盛ふけゆく

を詠んだ。この時のことである。長明は春の歌を沢山詠んでまず寂蓮に見せると、彼は前掲の「高間の山」の歌がよいと合点してくれたので、それを奉ったのであった。が、後の披露のとき判明したことだが、当の寂蓮も高間山を詠んでいたのである。しかし寂蓮は同じ高間山を詠んだ歌をしりぞけ、他の歌を推したりなぞしなかつたことに長明は非常に感銘したのである。というのは、かつて他の歌会で、ある先輩は、長明の歌が彼の作に似ているという理由で、改作を無理強いしたことがあったからである。

長明はこのエピソードの結語として、「そも／＼人の徳をほめんとするほどに、我がため面目ありしたびの事を、長々と書きつづけて侍る。をかしく。このふみ（無名抄）の得分に、自讃少々まぜても、いかゞ侍らん」といっている。寂蓮の徳をほめようとして、自分の面目をほどこしたときのことを長々と書いたりして……と、真正正銘はにかんだふりをしながら、ものを書く役得として自讃を少

訣れを告げた者の歌

トラクトル
平井俊夫訳

嵐

歎く母ら。
少年の金の叫喚。
また 生まれていない者の
盲の眼から洩れる溜息。

荒々しい山嶽よ。鷲の
高貴なかなしみよ。

金の雲の峰が

石の荒地に煙っている。

静かに松は息づかいを殺し

黒い小羊が群がる断崖のところ

突如 青が

不思議におし黙る。

まるはなばちの微かな羽音。

おお 緑の花――

おお 沈黙。

夢のように山流の

暗い精らが胸をゆさぶる。

峽を覆って押し入る

闇――

白い声がさまよう

怖ろしい山懐や

荒んだ段丘をとおり。

あれは父らの強い怨嗟。泣き

おお 痛吉よ。燃えあがる

大きい魂の視線よ。

狂う車馬の

黒い渦のなかに

ばら色の不気味な稻妻が閃めく

鳴りひびく唐松のうえに刺さる。

気位高いこの頭を

つつんでゆく冷たい磁気。

怒る神の

燃える憂鬱。

不安よ 毒蛇

黒いものよ 岩石のなかで死ね。

いま涙の

激しい川がたぎり落ちる。

おお 嵐 憐みよ。

雷鳴の威すなかで

あたりの雪の峰々が反響する。

裂けた夜を清める

火。

憂鬱

おまえの力は大きい 暗い口よ

内部に住み 秋の雲の峰と

夕暮の金の静寂から

形づくられたものよ。

うす緑に山流が暮れおちてゆく

松の割れた樹々の

影の場所を。

村が

つつましく、同色の絵姿で消える。

ああ 黒い馬の群が跳びはねてゆく

霧の草地。

おお 兵士たち。

死んでゆく太陽の転がる丘から

笑いつつ血しじきが走る。

柏の下蔭に

おし黙って おお 怨嗟の憂鬱に閉ざされ

る

軍勢。きらめく胃が

音をたてて紫の額から落ちた。

冷えびえと秋の夜が来る。

星をまたたかせつつ

おとこらの砕かれた骨のうえに

しずかに女の情。

帰郷

暗い年月の冷涼

苦しみに希望を

ひしと抱いている巨岩

人気ない連嶺

秋の金いろの思つき

夕雲――

清い牙え

青い眼差でみている

水晶の幼時

暗い唐松のしたでの

愛と希望

燃えるまぶたから

露がうごかない草に――

小止みなく

おお あそこの金いろの小橋

断崖の

雪のなかで崩れ

青い冷涼を

夜の谷が息づいている

信仰 希望

あの寂しく静かな墓地

々混ぜても、どうなるもんでもあるまい……と、はにかみをはねかえして再た自讃している。二重に屈折した自讃である。よくよくの自慢咄ということになる。

如上の「石川や瀬見の小河」「豊浦の寺の榎の葉井」、この「三休和歌と高間山」などに見えた自讃は、いずれも人を出し抜き、或は先駆けの功名の歎喜であって、「思う所ありて詠み」出した「思う所」とは、まさにそのことをさしていると言えよう。たとえ当時流行の歌合せという競技の異常な零閑気を勸定に入れても、「生死の余執ともなるばかり、うれしく侍る」という狂喜は、確かに尋常ではない。

この長明の異常な執心は、ともすると彼の作風に、一種の場当たりをとる当てこみや、作り立てをする弊風をもたらしたようである。親友の筑州が「歌よみたて給ひそ」と、その弊風をたしなめた事実が、「無名抄」十三の「歌仙を立つ可からざる由教訓の事」に見えている。

「歌を詠み立て、はいけませんな。僕たちのように限界の決つてゐる者なら、どんな振舞いをしようかと恥をかくこともないが、君なんか

は家柄に生れ、しかも早くからみなしごになつたんだから、たとえ人が認めなくとも、志を持って立身出世を思い立つべきだ。もともと歌は堪能なんだから、あちこちの会から招かれても、これぞという歌を詠んだら面目もあり名譽ともなるが、あちこちにおべんちやらをして廻つて、月並な常連ということになつてしまつたら、歌で多少知られることになつても、将来必ず支障をきたすだろう。君なんかは出来るだけ人に知られぬようにして出席する歌会でもあれば、あれは誰だろう？ などと言われるほどにして、奥ゆかしく思われるのがいい。あちこちの人非人のやからに連つて、人に知られ、名をあげたつてなんにならう。たとえ面白くつて気が進んでも、必ず場所を撰別して、格式ある人だと言われるようにしたまえ。」

この筑州の忠告は、長明が多分に己が天分に甘えて、あちこちの歌会にへつらい歩き、その天才的な詠みくちで評判をとり、それを得意とした軽薄な事実があったことを示している。

又、師の源俊恵は、長明の秀句好みや当てこみにもとずく考えすぎを、たしなめたことがあった。長明はある時、八時雨にはつれな

くもれし松の色を降りかへてけりけさのはつ雲Vという歌を詠んだことがあったが、つれなくもれしVではなく、素直に八つれなくみえしVとすべきであると俊恵は批判した。あまり理由もないのにて「と考案しすぎで、後で見ると虚飾が妙なひっか、りになっているというのである。そういえば俊恵は、長明が弟子入りをした際から、虚飾屋・長明の歌点を看破していたようである。その時のことが「無名抄」五〇の「歌人の証得すべからざる事」に見えている。

「歌にはつきつめて定められた故実というものがある。この俊恵を師と頼むからには、その故事に背いてはなりません。そなたが後世の歌仙といわりようために、この契いをした上からは、くれぐれも申しておく。自分の才能が人に認められるようになって、得意になって気色ばんだ歌を詠んではなりません。ひとところ後徳太寺大臣はくらべる者のないほど手練の詠み手であられたが、故実がなく高慢ちきであったので、今は詠み口が退歩された。」

つまり、友の筑州にしろ、師の俊恵にしろ、長明に危惧すべき或る種の天才ぶりを予見し

て、この忠告となったようである。

他方、長明の方では、この俊恵を師と頼んだものの、いさ、か飽き足らず感じたのが本心のようにある。前述のように俊恵は長明に故事や修辭に重点をもつて教えたが、その大様は「無名抄」六七「近代歌詠の事」に見るところである。長明は「ある人答へて云く」という問答形式でもって、俊恵の眼を借りて和歌の風脈史をると述べている。つまり一般論では借物で澄ましているのである。

しかし俊恵という人は一応俊成に張合った姿勢を見せて權威ぶったりしたのである。名作の聞こえ高い俊成の八夕されば野への秋風身にしみて鶉鳴く也ふかくさの里Vの身にしみてという表現は露骨すぎると批評したりしたが、結局は俊成の後を追っているという以上にあまり出でない歌人であった。俊成が逆にこの俊恵を評した言葉を、長明は「無名抄」五五「俊成入道物語の事」に書いている。「俊恵は当世の上手なり。されど、俊頼には猶およびがたし。俊頼は思ひいたらぬくまもなく、一かたならずよめるが、ちからもおよばぬなり」と、不肖の子という判定を下している。そういえば後鳥羽院も、「御口伝」に、「俊頼堪能のもの也。歌すがた二様によめり。うるはしくやさしき様もことにおほくみゆ」

なVの古歌をあらわに取って、

今こんとつまや契りし長月の在明の月に
をしか啼く也

と、御所の歌合せでしゃあしやあとやつてのけたのである。早速やかまし屋の定家から非難の声があがった。素性の歌からたった二句変っているだけではないか！ という当然の非難である。この非難に対して、長明は口の

中でべろり……舌を出していた。その証拠に

「此の歌は、ことがらやさしとて、かちにき」と、長明は述懐しているからである。

もはや長明には歌の良し悪しなぞどうでもよかつたようである。歌合せという勝負には勝つことが本願だったのである。この長明の歌に勝を宣した物好きな判者は誰であつたかわからないが、してやったり……と内心ほくの機織物も、
はたかもの
かねのつは
古風な金属什器も、これらやこのほか数々の品が、

ヘリック詩抄(六十五)

森 亮

色は匂へど

車中から出すお前の手に臂を触れようとして
群れなして馬車に駆け寄る艶男たちも、
その車をするすると進ませる御者の先に立つて

ちよこまか走る供回りの僕たちも、

真珠で飾り、黄金で飾った紫の手綱に引かれ
白銀のくつつ穿く脚を蹴立てるたくましい驥馬

も、
柩を引くときのものであつたことがやがて分
からう。

お前の妻も、お前の子供も、豪華なベルシア

それらすべての主である病む身のお前を
楽しませない、そんな日がお前にもやがては
来よう。

ヘリックの詩の中から古典文学の投影の著しいものを一つ選んで訳してみた。その「色は匂へど」(六九七)は古い絵巻物の一場面でも見るやうな絵画的情景が珍らしいが、ローマのマルチアリスの或る作品にそのお手本がある。終りの二行に対してはボラチウスの「書簡詩」からの影響が見られる。柩車を曳く馬の空想はメリーケの「運命の歌」でも歌はれそれを伊東神楽が「曠野の歌」で利用してゐるが、ヘリックとメリーケとの関係は考へなくてよい。

と評しているに對し、「俊恵法師おだしき様に侍り」と簡単に片付けている。つまり、父の歌の姿は二様であるに對し、子の方は穏やかなだけの二様だといふのである。俊恵には俊頼のような革新的独断的な詩人の風貌はなかつたのである。

長明には、この上手で穩かな詠み手である俊恵が物たならなかつたのである。それはスキの点で学ぶところがなかつたからであらう。それを補うためかのように、長明は俊頼、好忠、和泉式部、宮内卿、小侍徒、頼政、道因などの「スキ」ぶりと「志の深さ」の根性に偏愛を示している。長明の歌作の源泉は実にこのスキに尽きるからである。しかも彼は、性急に、狂躁的に、スキの形づくる世界のくさぐさの素材を溺愛して、故事や秀句にあれこれと心をつ結びつけて、そこに歌を仕立てたのである。いわばでっかあげである。「無名抄」七〇「古歌を取る事」には、「古歌をぬすむは、ひとつの故事とばかりしりて」詞の撰別もせず型のように取って、取って付けたようになることを難じ、古歌を取るには、むしろ「いかにもあらはにとるべし」と放言してはばからなかつたのである。しかも、その見本を示すように、素性法師の今今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ち出づるか

そ笑んでるスキ者・長明の顔が見えるようである。

「その顔にはもはや古歌など書いてなくて、長明の顔だけが目をむいて突き出されてゐるのである。いはばすきといふよりほかに作品などないところへ返ってしまつてゐるのである。」
と、蓮田は評している。

ハイネとわたし (一)

田中克己

ハイネをはじめてわたしに教へて下さつたのは、昭和三年旧制高校文科乙類に入学したわたくしどもに、会話をお授けになつたロベルト・シンチンガー先生である。先生は今だにご健在(ただしお目がほとんど見えなくなつておいでのことは一昨年に気がついた)で学習院大学で、教鞭——といふより、昔どほり日本語を使はないでドイツ語を巧みに教へるメトデー——をとつておいでと思ふが、今の学生はついて行つてゐるかどうか。新制大学の第二外国語としてのドイツ語は、ほとんどフランス語にとつて代られ、旧制高校のフランス語クラスすなはち文内、理内の数校にとどまつたのは、大変なちがひである。

先生は教室に入って来られると「グーテン・モルゲン（おはよう）」といひ、ついで歌ひ出された。

それはわたしたちが近藤明風訳、フランツ・シルヘル作曲で「なじかは知らねど心わびて」と歌ってゐる「ローレライ」で、わたしどもは先生の板書によって、はじめてドイツ語でこの詩を歌ふことができ、今だにこの歌だけはそらで歌へる。昭和三年といへば、ヒットラーの政権を獲得した昭和八年よりずっと前であるから、原作者ハインリヒ・ハイネの名も明らかに板書されたのだと思ふ。この歌は戦争中も歌はれたがドイツではやむなく読み人不知に政府命令でなつたかの由である。

しかしシンチンガー先生はハイネについては何もお話しなさらなかつた。わたしは「ローレライ」を歌ひながら大学をも終へ、大阪で中学教師をしてゐる間に、ひまつぶしに、丸善で買って来たレクラム文庫の「ドイツ——冬物語」を訳しだし（読むのと訳するのとが同時になるのがわたしの常である）、これをわたしどもの同人雑誌（同人費月額十円）「コギト」の第五七号から第六二号までに分載した。すなはち昭和十二年二月号から七月号までの間に活字にしたので、日本とドイツ

とは前年に防共協定が調印され、親独気分が日本中に高まってゐたが、そのドイツの親玉がハイネを含むユダヤ人すべてを大きらひのヒットラーなのであつたから、これもわたしの反時流的性質のあらはれかもしれない。訳してゐるうち、わたしは中学教師をやめて上京する気になり、神風号が四日間東京ロンドン間を飛び（これは世界新記録だつた）、ヘレン・クラウ女史が来日し、イギリスへ秩父宮がジョージ六世の戴冠式に列席のためゆかれ、ウインザー公（前皇帝）が平民婦人と結婚するなど、わけのわからぬことばかり起つた。もとよりこの七月七日に日中戦争が起るなどは、予想しながらも希望してゐなかつた。

このわたしの東京への土産の「冬物語」はわたしの高校のフランス語の先生桑原武夫博士（ただし着任はわたしの卒業後だつたので、恩師とは呼べない）を通じて、岩波文庫に交渉してもらつたら、すでに訳稿が来てゐるのことでダメだつた。なるほどわたしが上京した、昭和十三年の四月には、井汲越治氏の訳で本となつて出た。

なぜ「冬物語」を選んだかは、全く忘れてゐるが、たぶん昭和十一年一月に出版された中野重治の「ハイネ人生説本」（六芸社）

行に先だつこと二年の昭和十三年六月刊行、テキストは勤め先の全集を参酌して最良であつたが、「あとがき」をよむと、おほむねの訳は東京で押入れ整理の時、出て来たノート一冊によつたさうである。このノートはもうわたしの記憶にもない。従つていつの訳かは

つきりしないわけだが、「あとがき」によると満洲事変のはじまる前の大学入学当時の訳で、わたしに詩を教へてくれたのは、「海潮音」と「珊瑚集」とハイネだと書いてある。前二者はどうもわたしの詩に教育の痕跡をとどめてゐないが、ハイネだけは詩をやめたい

水は冷く 碧く澄んで心を和ましたが

美堂正義

検診

胃カメラのカラースライド

ひとより思はずんで汚れ

肉体の深奥が

あからさまに映し出されてゆく

不思議なものを見るこち

医師は低い声で質問し

説明の果に再検査

暗室の間に腰掛けて

呆然それを聞いてゐながら

先日の旅行の途次

見た火山の裂目は

この臟腑と同じ色彩と荒廃

しかし 山上は湖水があり

のせいである。わたしはこの本で、ハイネが「ドイツの抒情詩人のうち、その詩の作曲されたことの最も多い人」、「三千の作曲を持つ彼」といふブランドスの評よりも、革命詩人ハイネを買ふべきだとの意見に動かされて、最も長い叙事詩であり社会主義の詩である（と思つた）「冬物語」を訳し出したのであらうと思ふ。

昭和十三年上京以後の東京生活のことはしばらく置く。敗戦後わたしは華北で現地復員し、北京、天津をへて、LST（上陸用タンク）第何号かで佐世保に上陸、窮乏の妻子をつれて思案にくれた結果、奈良県の某所にとめたが、ここでも食ふに困つた。そのどたん場で救ひの手をのべてくれたのは、奈良に新しくできた出版社三興社で、「叢書を出す。評論家保田与重郎、歌人前川佐美雄といふ大和出身の二人に次いで大和在住のあなたも」といふので、わたしはハイネの訳をと申し出、これが受諾されて叢書の第三冊として「ハイネ詩抄」が出た。初版何千部おほむね売れたが、この社の出版物はわたしの本で終りになつたやうに思ふ。

さてこの「ハイネ詩抄」はまた反時流的でハイネの恋愛詩集「歌の本」の全訳である。井上正蔵教授の岩波文庫「歌の本」二冊の刊

まも、明瞭にわたしの心臓にとどまつて、わたしはいまの勤め先では一等のハイニッシュ（皮肉な）な先生ださうである。保田与重郎にも、「田中、皮肉はやめよ」とたびたび訓戒を受けたが、効果がなかつたのである。そのわたしがハイネの邪気なく（ただし方向に失恋の恨みはこもるが、これは神さまもおゆるしだらう）、ひたすらに恋を歌つた詩ばかり出版したのは、前には反時流的と称したが、昭和十三年は古橋選手の水泳記録をのぞいては、よいことは一つもなく帝銀事件にはじまり、人気作家太宰治は井之頭水上に投じ（わたしは彼より大学で一年後輩なのに同輩顔をするといつて叱られた）、東条らの戦犯の裁判は清瀬弁護人らの弁護の下に着着と死刑、無期刑に進んでゐたのである。

わたしが奈良へ分割払の印税をもらひに行つた日に、市中には判決の号外がはられてゐたが、市民たちはそれを見てだまつて散つて行つた（わたしは東条は大きらひであるが、彼を世紀の偉人として一心に似顔を画いたシンガポールの少年たちをまだおぼえてゐて、ザマア見ろとはいへなかつた）。

昭和二十五年にはわたしにハイネを訳しろといふ角川書店主よりの申し出があつた（文学博士角川源義氏）。どんなことでさうなつた

ある閑人の告白 (-)

緒方隆士

沢山の人達が動いていますね。立ったり、坐ったり、歩いたり、然しどの顔を調べて見ても、(わたしは退屈しているのでしょうか)一人として愉快そうな顔をしている人はいないじゃありませんか。たれもかも、皆いちように苦虫かみつぶたような顔を、でなければ、どうして俺はこんなに不幸なんだろうかと、いまにも叫び出しそうな顔をしているじゃありませんか。

いや、いや、これはどうも少しわたしの主観を交えすぎたようです。と言うのは、わたし自身が如何にもそんな人間だからです。

わたしはさっき、わたしは退屈しているのでしょうか？ なんて申し上げましたが、そしてそれに少しの相違もありはしないのですが、実を申しますと、わたしの懐には、非常に重大な一通の電報がしまい込まれているので、身の浮沈にかかわるような報せがそれに記されています。

ツマ、コ、トモニキトク
電文にはこうあります。

ですが、ああ、わたしは実に怖い目に遭

おうとしているのです。わたしの想像が若し真実であるならば、あゝ、わたしはもうこの上もない極悪な犯罪者にさえなってしまったのです。

あなたは、わたしのこのだしぬけの告白めいた叫びを、何と聞いてよいかお解りにならぬだろうと思います。しかし、わたしはその想像から身を脱ぐことが出来ないのです。どう身をもたえても、一寸した過失に過ぎないと考えることが出来ないのです。

あるいは、神を置いて誰も知らぬそのことを、そのまま眼をつぶって神に任せることも出来ないのです。

然しまあ、わたしのそうしたもたえは兎も角として、妻子がどんな破滅で、死の塙を彷徨するようになったか、(或はもういまごろはすっかり仏となつていられるかも知れません)がわたしの話を聞いて頂きましょう。

わたしは南九州の、極く平凡な地主の息子として生まれました。そして割合に早く両親に死別したものですから、二十才を過ぎると間もなく、いまの妻をめぐったのです。気に入るも入らぬもありはしませんでした。まるで女を見る眼さえもろく、すつぽ出来上らぬ先に、わたしの親類の者達はわたしにその従妹にあたる女を押しつけたのです。

のか今ちょっと思ひ出せないが、わたしは京都にゐる貧乏のドン底(ドン底はいくらいてもまだ底に達しないものだから、正しくは、「と思った」と記すべきであらう)にゐるが、角川博士の訪問に感激し、すしをごちそうした、注文しても中も中もって来ないので、数百メートルを催促に往復した妻は、これももともと早産し、小さい女の子を生んだ。それからおよそ一年して出たのが角川文庫の第六四「ハイン恋愛詩集」で、「歌の本」からネットをのぞいた全部をのせ、定価一六〇円、わたしの給料税込み九九〇〇円(定期その他足代二千円がこれより除かれる)、印税はわたしの家の台所をにぎはしたと思ふ。しかし二五年の角川文庫は四六判で高すぎて売れず、二八年には岩波文庫にならひ、多少の削除をして七〇円の文庫本となった。わたしは「歌の本」の前半をのぞき、その代り、「ソネット」を入れて、手ぎはよく一五二ページにした。これは二六版を重ね(何万部か知らない)て版が磨滅したさうである。新潮文庫の片山敏彦「ハイン詩集」に版数がわずかに及ばないわけは、わたしにはわからない。旧漢字、旧カナヅカヒは板木が磨滅したので、今度の版からは改まることになった。

もっとも、妻は美人というほどではありませんでした。決して醜いというわけでもありませんでした。どちらかと言えば、田舎などでは美人とおおる方がわでしたが、どう言ものか、わたしは妻が好きになれませんでした。

とは申しましても、無論わたし達にも、無我夢中で愛し合っているように見えた時代もありました。けれどもそれは、あくまで見えたに過ぎないので、決して真の愛がそうさせた訳ではなかったのです。飢えきった二人の男女が、お互いに獲物視して愛し合ったに過ぎないので。

庭で Ⅱ

大村直子

あさがおの黄ばんだ下葉を
風がぐりぬけていく
音もなく 黒いひまわりが傾く
私の位置の危うさよ

人の行かぬ小みちに
最初の落葉がねがえりをうち

ですから、わたしはすぐにそういう生活が馬鹿らしくなりました。今までは左程でもなかった妻が、醜く、堪えられない程の無智な女に見え始めました。そして遂に妻の存在が、わたしにとって怖い者とさえ一変したのです。

何という劇しい変化でしょう。
昨日までは、わたしは妻の懐に遠慮なく飛びこんで、人間の喜びや快楽がどんなものか、あますところなく味わうことが出来ましたのに、いまでは人間の苦しみや怖しさが、どんなに苛酷なものか、妻によって味わされるようになったのです。然も、決してこれは妻の

林の上の空は 高く
色あせた庭からはなれていく

けれど むこうに 季節おくれの夏服の
白い妹は それで明るく光りながら
なにやら種をひろっている

そして おとろえていく自然の中に
静かな救いはきざしそめる
それは あなたの かたちのように

罪ではないのです。それかと言ってわたしの罪でもあるまいと信じています。

もっとも、こうなった直接の原因を索めるなら、それは妻にはなく、わたしの方にある訳です。彼女は依然として、嫁いで来た時と何等変わっている訳ではないのですし、——彼女は少し年を若い、ぶよぶよと肥ったばかりです——貞淑さも、無智ではあるが一所懸命な、わたしに対する愛情も、決して失くしている訳ではないのです。

ただわたしの彼女を見る眼が、変わっていると云えば言えることになりました。何故なら、彼女を怖しいと思ひ始めたのはわたしだからです。彼女に憎悪を抱き、起居振舞の一つ一つにさえ、嫌悪を感じるのにはわたしだからです。一例を申しますと、わたしは彼女の真夜中の鼾声に、毎晩のように悩まされ続けました。わたしはその為に妻と寝室を異にするようになりしました。わたしはそうすることにによって不眠から逃れ、同時に、その鼾声によって呼び覚まされる悪魔的な感情から逃れたかったのです。

ところが次の部屋に寝室を移しても、さらに次の部屋に眠るようになって、やはりその鼾声から逃れることが出来ませんでした。それはまるで、雷のような威力をもってわた

しを追いかけてくるのです。(わたしは決して冗談なんか言っているではありませんよ)

わたしはとうとう、玄関の傍の小部屋に眠ることにした。そして二日程はその妻の目から逃れ得たようでした。

ところが三日目ふと目を覚まして見ると、やっぱり微かではあるが、例の鼾声が聞こえてくるではありませんか、それは勿論、都会なんぞと違って、四辺が静かな、虫の這う音でも聞こえる程静かな故に依るのですが、わたしはその鼾声に気づくと、いきなり立ち上って妻の部屋に乱入しました。そして続けざまに口汚なく、出来るだけの憎悪をこめて罵ってやりました。

「なんでそんな豚のような鼾声を一晩中立てなきゃならんだら」と、まあ、わたしはこう叫んだ訳です。ところが、妻ときたひにゃ、てんでろくすっぽ眼さえ開けない始末なんです。いくら眠たいか知らんが、人が枕元で怒鳴り散らかしているのに、うす眼ひとつせず眠って居られるというのは、いったいどんな神経の持主なんでしょう。

わたしはあまりのことにあきれ果て、しばしは呆然と立ちすくんだままでしたが、そのうちむらむらと、殺意に似た怒りが湧き上っ

て来ました。するともうわたしはその怒りをどうすることも出来ないで、だしぬけに眠っている妻の頬に一撃喰らわせました。続いて布団を天井に舞い上げるほど蹴上げたのです。(真夏のことで、軽い小さな布団でした)で、やっとのことで妻は眠りから覚めたのです。

けれど、その場の様子がどうなっているのか、自分の夫が何の為に、半狂乱で自分におこっているのか、そうした判断がつかないらしく、ただ脅えたような眼を見張って、わたしを見つめているだけなんです。

——ですが、わたしはまた、なんでこんな他愛もない例を、よりに選って話し出したのでしょうか。

そうですね、わたしは別な話に移ることにしましょう。その方が、わたしと妻の仲がどんなに忌々しく発展したかを、説明するうってつけの例になるかも知れません。

こんなことがあったんです。そう、そう、それは割に最近の出来事なのです、昨年、いや一昨年のことでした。

わたし達には子供がなかったものですから……いやあることはあったのですが、ところがその児は(男の児でしたが)まる一年生きて居たきり死んでしまったのです。あ、そうだ、そのことについてもわたしは妻を怨まずに

天野忠詩集

動物園の
珍しい動物

諷刺詩人のくせに人を刺したりしない。刺したりしないでハニカミで人をつねる。つねっても痛くなくて、紅斑で後でしれるしやれたアイロニー……。

東京都東山区南梅屋町二〇六

¥ 500

天童社

は居られませんが、いま思い出しても腸が煮えくりかえる気がします。その児を殺したのも妻なんです。おやお、実に残酷な死をその児に与えたのは妻なのです。わたしはその当座、全くその児の死因が単なる過失だとは思えませんでした。どう考えても妻のわたしに対する復仇のような気がしてなりませんでした。

——その児はあんたノ焼酎死んだのですよ。わたしは現在も、まざまざとその時のむごたらしい情景を目に浮べることが出来ます。その日、わたしは起きぬけに妻と珍しくもない喧嘩をおっ始めたのでした。原因は、……そう原因は何だったでしょう。そうそ

ていたのですから。

しかもあろうことか、妻はわたしが帰ってそれを発見するまで、どこをどううろついていたものか家にも居ない始末なりました。おまけに、これは後で解ったことですが、妻はその児が這い出して床から落ちてはならないと言ったので、そのこたつの火の、かんかんにおこったこたつのです、すぐ側の柱に結わえて置いて置いたのです。いやはや、それが単なる無智から生じた過失なのでしょうか。

——この人殺し奴ノと、わたしは妻が家のいきいをまたぐや否や、ぐらぐら煮えたった土瓶を投げつけたものです。幸か不幸か(多分不幸にも)そのたぎり湯は妻の手にあざほどの被害を浴びせたに過ぎませんでした。わたしが呼吸を殺して、敬き殺してやろうと待ち構えたことは、それですっかり失敗に帰してしまいました。

いやどうも、すっかり話が死んだ児のことばかりに逸れてしまいました。……そう、さっきわたしは何を話し出そうとしていたのでしたか知ら。

あ、そうでした。で、つまりこんな訳で、わたしの本当の子は死んでしまい、後には児が出来そうにもありませんし、実を言えば出来る筈もないんですが、それはまあそれとし

巢箱

吉本青司

う、その頃流行った流行歌のことからでした。お笑いになってはいけません。わたしはその流行歌というのが大嫌いだっただけです。殊に妻の口から聞くのが、身ぶるい出るほど嫌いだっただけです。だってあなた、妻のその唄っている時の恰好と来たら、いやいや恰好だけなら我慢も出来たのですが、妻の声ときたひには、あまりよく鳴らない麦笛のような音なんですから……。

兎に角そんな訳で、わたしはその朝、大暴れにあばれて家を飛び出したものです。そして夕方少しばかり愉快をして帰って来たので

す。そしたら、おノ妻は何とということを出出かして居たのでしよう。全くわたしは男泣きに泣いたくらいです。だって予期しない不幸と言うものが、昨日まで非の打ちどころのない紳士を、淑女を、立ちどころにあられもない癡人にしてアうような例は、世の中に沢山あることなんです。……

で、わたしにした処が、その時そんな目に遭ったわけなんです。

だってあなた、くだいようですが、わたしの一粒種の、最善最愛のその児は、こたつの火をうち被って、黒こげにこげ死んでしまっ

木によしのほって
巢箱を のぞいた少年は
たまごをあたためている 一羽の
親どりを みた

秋がきて 旅からかえった
少年が 巢箱のなかに
見たものは
からになった 巢であった

みずいろの空から しきって
鈴の音がふっていた

少年は 巢箱をしかけた
たかいムクの木のいただきに
金いろの羽ののって やがて
小鳥たちが やってきた
そして
草の葉の 巢をいとなんだ

まして、いま申しますように児がないものですから、妻の方から突然もらい子をしようと言いだしたのです。

わたしは妻のこの突然の申し出を、最初は鼻であしらって、まるで取り合おうとしなかったのですが、いったい無智な女が、いったん思い込んだことほど執念深いものはないもので、全く挺でも動かない信念なぞというものは、必ずしも剛毅な男子にばかりある訳ではないようです。いやこれは冗談ですが……

あまりうるさく妻にせがまれるものですから、わたしも終には根負けがして、それならどうなり勝手にしろという気になりました。

ところが、誰を、どこの子をもらおうということになりまして、全く驚き入った話ですが、妻にはもう、何から何まで計画が出来上ってしまいましたものを見て、では信枝をもらいましょう、とすぐさま言い出して来ました。

信枝と言うのは、妻の姪にあたる五つになる子で、妻としては是が非でもその子が欲しいと申すのです。もっとも、わたしにしたところで、その子が普通の家庭の子であつてくれたら、何もういざ言いはしないのですが、何を言ってもその子の父親は、前科が幾つもあるような人ですし、わたしとしては見るも

汚らしい気さえる位ですから、こればかりは頸を斬られてもうんという気にはならなかったのです。

そのうえ、これはわたしのひがみかも知れませんが、どうやら妻にその、信枝の親達の指金で動いている態度さえ見えたのです。いや決してわたしのひがみではなく、明らかにそれは事実だつたに違いありません。何故なら、その話が出る前後から、それまではまるで足踏みもなかった信枝の親達が、三日にあげずやってくるのは、急にわたしにちやほやし出したりして、何かしら自分のいやしさを、わたしに振りまいては帰って行くのです。

そこで、わたしは彼らの目的がどこにあるか、漸く気づくようになりました。それは外でもない、わたしの財産にあつたのです。

それはむろん、わたしとしても、将来自分に子をもらうとすれば、ゆくゆくはそうなることです。ですから、差し支えはないようなものですが、やっぱりわたしの気持としてはそうは行きません。ことにあの父親のごろつき奴が、どんなからくりをわたしに掛けているか解りはしませんから……

そこでわたしは妻に向つて怒鳴つてやったのです。

——おまえはいいたい、どこがよくてあん

な不良の子が欲しいんだ。他に心当りがないではなし、早い話が、俺にだつて幾人もの甥姪があるのだし、その中のどの子にしたって、あそこの子とは比べものにならないほどではないか！と、まあ、わたしは妻に言ったのです。

ところがどうでしょう。たったこれだけのわたしの言葉のために、妻が、死ぬの、生きるのの騒ぎを始めたのです。

——まあ、あなたという人は、自分のことばかり考えて、ちょっと私のことは考えてくれない！わたしの老後はどうなります！誰を頼りに、誰を頼りに生きて行けるんです！男なら兎も角、女は子供ばかりが頼りなんですから私は、私は、私の赤の他人なんか自分の子にするのは否です！私の血をひかぬ、赤の他人なんか、あなたがもたらたら、私はもう、もう、もう、いーっ、死んでしまします……

という騒ぎです。

全く手のつけられる話ではありません。そして実際、頸でもくりかねない態度さえ示すものですから、とうとうこれも私の負けとなつてしまつて、それから半月も経たないうちに、信枝はわたしの子として戸籍にも入り、わたしの膝もとでいたずらを仕出かす

ような事となつてしまいました。

その信枝と云う児が、この電文の中の、オヤコトモニキトクのコという訳なんです……

知恵と別離

浅野 晃

1

浪といふ名の野獣の群が
あとからあとからこの岩壁にぶつかり砕ける
彼らは道伝ゆえの恐怖から
わが身を破滅に導いた

2

雲がゆく 風がゆく
日が暮れ 海が暮れる

3

氷の別れも光の中
光に二つはあるまいし
知恵などと軽く言ふが それも

4

いやどうも、話が変にややこしいようで恐れ入りますが、まあしばらく耳をかしてやって下さい。どうも話しますうちに、なにもかも、ほんのちよつとしたことも入れたくない

あなたや私より前から在る

眼二つが焦点をあはせ

感動もて見送るよ 出てゆく船を

彼はそこにかの一団の

決意を見てとるから また勇氣を

5

人間の選んだ方向を
船は持つ
どこかの岸をめさしつつ
それは進む

6

そして難破する
エス オー エス——

りまして、それと申すのがやはり少しでも、わたしという人間が、あなたに解つて頂き度いばかり、つまりはわたしの仕出かした罪の怖しさに似ず、わたしが決して心からの悪人ではなかった！そう思つてもらい度いばかりのことなんです……

で、そんな訳で、わたしは信枝という一人の女の子を得たのですが、どうも女の考えというものは、どこまで出鱈目な、得体の知れないものなのでしょう。

あれほどのぞみ、あれほど無理強いに信枝をもらつて置きながら、妻は、ちよつともその子を可愛がろうとはしないのです。

それは無論、始めのうちこそ何や彼やと騒ぎ立ててはいたようですが、一ヶ月も経つとおぼろり出したままで、そののみか、何かという、つねたり、ぶつたりし始めるしまつてしてまるで手のおろしようなない無茶を始めるようにさへなりました。

ある時なぞこんなことがありました。(まあわたしがよく家をあげるといふことも、あの子によけいそんな目に遭う機会をあたるわけで、幾分か責任はわたしが負わなければならぬでしょうが)とにか、その日も夜遅くなつてから、家路を急いでいたのでした。そうそう、その時わたしはいつにない上

増補・改訂版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫
小高根二郎
富士正晴 共編

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文六篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華版。
定価 一八〇〇円

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一〇〇三

果樹園 一一二九号 昭和四十一年十一月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行

印刷所 元市印刷株式会社

定価四十円 送料二十円

気嫌で、つまり打ち明けて申しますと、わたしはその夜あるかけ勝負に勝ち放しに勝ち続けて来たのです。もともとその日に限らず、わたしは外にいる時はにこにこしている性分なんです、所謂、外よしの内悪しとでも申しませうか、その上気嫌も家真近くなると、あとかたもなく消えてしまおうと言うのがならわしだったので。
で、その日もひどく上気嫌であったのですが、家へのある曲角のところまで来ると、わたしは次第にいつものように不愉快な陰鬱な気分になりました。
かててその時、わたしは思わず立ちすくむような怒鳴り声と、せいっぱいな、そのくせかすれたような女児の号泣が露地に吹きぬけて来る風に乗って耳を搏つのに気づいたのです。

——ああ、またやっついでいやるノなんといふ馬鹿ものだノこともあろうにこの真夜中に、……恥さらしなノと、わたしはもう一刻も其処に居堪まらぬ気がして、ふたたび家とは反対の方向に走り去ろうとしたのですが、それでは信枝が可愛そうだと思つて、ばたばた駆け込むようにして家の中に飛び込みました。(つづく)

編集後記

九月三日、蓮田敏子さんから熊本で三島由紀夫氏と一夕飲談した由のうれしげな便りをいただいた。「花ざかりの森」の作者―若冠の三島氏を蓮田が推薦したのは、まさに「鴨長明」の執事であった。「この年少の作者は、悠久な日本の歴史の請し子である」とまで敬賞したのである。三島氏の近作「英雄の聲」は、まさしく蓮田の声でもあるが、蓮田の聲はこの請し子の訪熊を首を長くして待っていたに相違ない。

九月五日、「キヨコ詩集」を頂戴した。「地虫」同人の寺島キヨコさんの非売詩集である。けれん味のないほんとの詩である。そういえば王守常の大大敬義氏の作品も近頃立派である。こんなほんとの人達を大事にしない興行的な最近の詩壇はおかしな植民地である。

九月八日、京都女子大の原田雄雄氏から「お便り」をいただいた。僕等が今日まで十年以上も歩いてこれたのは、これら英知の方々の鞭撻が不断にあったからである。氏は蓮田の贈外「青年」論が、贈外研究から全く疎外されているのが不思議でならないと思つておられる。

九月二十六日、天野忠氏より詩集「動物園の珍らしい動物」を頂戴した。老来こんな詩集を書く詩人は関西ではまれであると珍重したい。

九月二十九日、二年來雑誌中の淀野隆三氏より、久々に緒方隆士の作品を読んで蓮田の念しきり……とお便りをいただき、「雄鶏」所載の他の初期作品三篇をお教えいただいた。深甚な感謝を捧げるとともに一日も早い全快を祈り上げる。(〇)

果樹園 第二二九号 (毎月一回一日発行)

昭和四十一年十一月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根二郎

発行所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 二十円

果樹園

第130号

蓮田善明とその死 小高根二郎
あ め 天野 忠
ワイシャツの話 今井茂助

夕方と夜のうた 大村直子
ハイネとわたし 田中克己
ヘリック詩抄 森 亮
天 と 海 浅野 晃
トラークル詩抄 平井俊夫
ある閑人の告白 緒方隆士
編集 後記

蓮田善明とその死(三三)

小高根二郎

いわば長明にとつては、古歌も故実も彼の内実なぞに一つもなっていないのである。しかるに西行は世を捨てたそのことを独白風に歌いながら、古歌や故実の風韻につらなっていなかった一首もなかったのである。すべて王朝和歌的なもので豊かに満ちていたといっている。

山里は秋の末にぞ思ひ知るかなしかりけり
りこがらしの音
さびしさにたへたる人のまたもあれな庵
ならべん冬の山里

山里は人來させしと思はねどとはるることぞうとくなりゆく
花にそむ心のいかで残りけむ捨てはてて
きと思ふわが身に

ありあわせに引用したこのどの歌を参照してみても、西行は王朝から懸命に解脱しようとかあがきながら、結局は一步も解脱できていない。木枯の音で思い知らされた心に浮かび上ってくるのは、佐藤義清時代のなに不自由のないぬくぬくした環境だった。つい寂しさに堪えかねて庵でも近かったらなあ……と想う友は、やはり宮廷につらなる人々であった。いや、誰も訪ねてなんてこないほうがいい、……と悟り顔に澄ましてみても、いつの間にか足遠になった誰彼がかえって思い出され

た。結局、捨て切ったと思つたわが身に残っていたのは、花に染む心——つまり王朝思慕だったといつていい。

この西行に対し長明は全く反対である。前述したように、長明は王朝の古歌を丸呑みにしたといつていい、ほど徹底した本歌取りをしたが、その中味はたゞ空疎貧乏で、王朝の豊かさとは凡そほど遠いものが感じられる。しかし、もはやどうしようもなくなったのは長明ではなくて、「未だ何らか己を充たすものを頼みにして歌などを案じてみる時代の人達である」と蓮田は逆説的な解釈をしている。その論証のために、「新古今和歌集」所載の次の有名な実話を引用している。

寂蓮法師人々す、めて百首の歌よませ
侍りけるに、いなびて熊野に詣でける
道にて夢に何事も衰へゆけど此道こそ
世の末にはかはらぬ物はあなれ猶此歌よ
むべきよし別当湛快三位俊成に申すと
見侍りて、驚きながら此歌を急ぎよみ
いだして遣しけるおくに書きつけ侍り
ける

末の世も此情のみ変らずと見し夢なくば
よそに聞かまし

つまり、西行は寂蓮その他から百首歌をすめられていたが、詠まないま、熊野詣でにやってくる途中で夢をみた。熊野別当湛快が「なにごとく衰えてゆく末世だが、この歌の道だけは末々まで変ることがない。よろしく歌を詠むべし」と俊成を諭して夢をみたので、これはひとごとではないと、西行は急ぎ歌を詠んでこれを書き送り、百首歌に参加したのであった。

この事實は、西行に歌を詠みがたくしていた何かが迫っていたことを物語っている。しかし西行には、歌おうと思えだまだ歌いうる内実につながり得たことを示している。出家こそしなかったが、俊成もまた西行と同じく、歌を詠みがたくする何かに迫られていたと見ねばなるまい。それを夢で感応し合える仲は、千載集を選ぶときの二人の篤い友情でも、それと察しがつく。

俊成が千載集を撰ぶとき西行は歌を送って

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もや
あると君拾はなん

と歌い、俊成はその返しに

世を捨て、入りにし道の言の葉ぞ哀も深
き色は見えける

と歌っている。まさに消えんとする詩心を温め合っている二人の友情が、こゝに偲ばれる。

後鳥羽院もこの両詩人には特に回想が深かったのである。「御口伝」に「釈阿(俊成)はやさしくゑんに、心もふかくあはれる所もありき。殊に愚意に庶幾するすがたなり。西行はおもしろくてしかもこゝろに殊にふかくあはれる、ありがたく、出来しがたきかたもともに相兼てみゆ。生得の詩人とおぼゆ」とある。俊成の歌の姿はほゞ院のおほしめしに近く、西行の天才には全く批判ぬきで感銘されたのである。この事實を逆から言えは、両詩人がまさに王朝歌人の仕立てであることを示すものである。

俊成は若い日すでに衰亡を述懐していた。董咲く浅茅が原に分けきても唯ひと道に物ぞ悲しき
白雨のそ、ぎて過ぐる敷道火の湿りはてぬる我が心かな
世の中よ道こそなけれ思入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

衰亡を述懐しながら、その抒情はなんと豊かに満ち満ちていることだろう。西行と俊成は衰亡を意識し、捨てたと思っても、心の奥底では歌に対する深い信頼を抱いていた。しかも不思議なことに、先ほど西行は歌の道こそ

5 回天の雅遊
長明は「無名抄」六七「近代の歌の駄の事」で、和歌史をると述べているが、その中で自分の歌作について述べているところがあ

「人のことはしらず。身にとりては、中比の人々、あまたさし集りて侍りし会につらなりて、人の歌どもを聞きしに、我が思ひよらぬ風情はいとすくなかりき。わがつづけたりつるよりは、是はよかりけりなど思ほゆる事こそ有りしかど、聊かも心のめぐらぬ事は有りがたくなん侍りし。

しかるを、御所(院)の御会につかうまつりしには、ふつと思ひもよらぬ事をのみ、人ごとによまれしかば、このみちは、はやそこもなく、きはもなきことになりけりと、おそろしくこそおほえ侍りしか。」

つまり、中頃の年輩歌人が多く寄った歌会に出席した頃は、これは思いも寄らなかつたという風情はまれで、自分がつづけた句よりい、など思われることがあつても、全く思いつかぬといったことはなかつたものだ。ところが後鳥羽院の主催された歌会に参加してみ

ると、思いもよらぬことを人ごとくに詠んだので、歌道はもはや「底もなく極もない」途方もないとこに落ちてしまつたわい……と恐ろしくなつたと長明は言っているのである。この長明の述懐は、もはや過去の豊かな内実をいさ、かも内容とできなくなつた和歌の屍臭を、鋭敏に嗅ぎわけている王朝末期の詩人達が、まさにこと切れようとしてあえいでいる思の中に、幻のようになつてしまつた和歌を一つ気にと吐き出している……といった恐ろしい光景を言っているのである。

しかし、これは反面、長明の時代へのおびえをも示している。後鳥羽院の盛大で華やかなあの歌会が、もはや「底もなく極もない」とりとめもない衰亡に瀕して眼に映じるので、がた／＼と身慄いしながら、からも座の末につらなつて長明の姿が目に見えるようである。

6 空白のきおい

長明がなぜ底もなく極もないと看破した歌に、これまた底もなく極もなくつながらうとしたのか？ 同じくすきものとして名の高かつた源三位頼政などは、まだ歌の修業者という敬虔さであった。彼は王朝の遺産はあるも

世の末まで変らぬものであると夢で論されていたが、俊成もまた歌道の外に仏道を求める必要はないと夢で論されたという釈正徹の書いた逸話が伝えられている。

「俊成卿老後になりて、さても朝暮歌をのみよみて更に当来のつとめもなし。かくては後生いかならむとなげきて、住吉の御社に一七日こもりて此ことをなげきて、もし歌はいたら事ならば今より此道をさしをきて、一向に後生のつとめをすべしと祈念有りしかば、七日に満する夜、夢中に明神現じたまひて、和歌仏道全く二なしと申したまひしかば、さて此道の外、別して仏道もとむべからずとて、いよいよ此道を重き事にしたまひしなり。」(正徹物語)

西行俊成いずれの夢も、この道をおきてさとの道はない……と徹底した信頼を歌においていたが、長明はそれほどの信頼をかけてはいない。つまり、長明にとっては、歌は道そのものではなく、道につらなるてだてといつたほどの意味しか持ちえなかつたように見受けられる。

のと信じきっていた。したがって常住坐臥の間にも和歌を忘れず、和歌を練習し、和歌をもって生活を充たそうとしていた。それが可能であると信じきつて、そんな境界を愛しえていた。身の成る果てを覚つたのは自害をする最後においてであった。こんな頼政のことであるから、彼が歌会の座につらなつていただけで、我しらず誘われて歌の一つも出てくると俊成をして述懐させたほどである。その頼政のスキに長明は似ているようであるが、全く違っている。

長明は人々を誘う強烈な勢いのようなものをもっているが、それは突のない誘いだけのきおいであった。「秘曲づくし」のあれである。うれしくてひとりではくはくして得意げに悦に入っている長明の様子を見て、人々は変に感じ入らされてしまうのである。奇妙な、中味なぞまるでない、薄っぺらな言葉だけのモザイクのような歌は、彼の強烈なスキぶりに支えられて、なにか憑かれたようなものを感しさせ、その歌ができるまでに長明が充分な用意をし深い自信を持っていたかのように錯覚させられるのである。が、その内容を分析してみると、その作品はものほろの滓のように見え、長明自身は作品の外にぶらり……独り歩きをして了解しているような描えがたいむなし

さを囁まされるだけである。

それかといって長明は、寂蓮のように才気走っているように見えて、それとも違っている。寂蓮は大猿の仲である歌学者顕昭法師らにくさして、「下手な字は真似やすいと同様、下手な歌も習いやすい。顕昭法師らのような歌なら、筆先を濡らしてさら／＼と書いただけで充分さ」と放言しては／＼からなかった。

長明にはこの傲慢な自信もない。彼には和歌なぞというなにか文化的に意味ありげな内容なぞもはや微塵もなく消え失せているのである。そのくせ和歌につながっているのは、それなしではいた、まれぬほどの空漠が感じられるからである。形を失い、それゆえガツ／＼して、妄想のようなものに駆られ、ふツ！と烈しい言葉をまず詠みだして、その詠みだした言葉をうつ／＼に見て興奮し、足ずりして満ち足り悦ぶのである。が、もともと形の幻影のようなものだから、後で見ると、まことに力のない、中味のない、薄っぺらな思いつきだったり、露骨な本歌取りにすぎなかったり、あまりに掘出し物的な見え透いた仕業だったりするのである。しかし、それは長明一人の狂癖なぞではなく、最も正しく末期の文化を象徴しているところに彼の不思議に占めえた地位があったのである。このような長明はな

んと呼んだらよいのだろうか？ とても通例の詩人のカテゴリーには当てはまるまい。彼を人間といふよりは、唯そのまま時代だといひたい。しかしこのやうに、唯そのまま時代であるやうな人間が詩人でなくて何であらう」と、蓮田は逆説的に長明を定義した。

このような長明を唐木順三氏は次のように解釈している。

「長明自身にもはかりえない、いはばデモンが彼自身の中に住んでゐた。ただ強烈な表現欲と表現形式が、ことごとく食ひ違つてゐる不幸な時代の不幸な芸術家であつた。中略：幽玄だの長高だの有心だのといふスラスティックに依らなければ表現が公になりえない時代であつたことをあらためて知るべきである。そこで彼は退屈な所業を無自覚にやつてのけたまでである。中略：宮廷歌壇の表現形式に特別な未練があるわけではない。未練はないといつてもそれによらなければ表現の術がない。長明の才が軽薄に躍らざるをえなかつた理由はここにあつた。（唐木順三「中世の文学」）蓮田の見るところと全く軌を一にしているといえるであらう。」

この複雑な長明の心情は「方丈記」にいう「世にしたがへば身くるし、従はねば狂せるに似たり」によく現れている。「いずれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも心をやすむべき」。しかし、この現世厭離の思いが、世を己の外の事象として突っ放さずして、いやむしろ己の内に体頭さるべき生理として感かれたところが、長明なのである。いわゆる風狂者、長明の身上なのである。その証拠に、彼は後年方丈の庵の座右から「往生要集」を離しえなかつた事実を見てもそれと判る。彼はその大文第一厭離穢土篇とこの世の阿鼻地獄をひきくらべようとしたからである。彼は己の魂のあらわに露出した傷口を和歌管絃で癒そうとしながら、風流韻事ではとうてい治療すべからざる己が激越の情を知るゆえに、むしろその狂おしい激越の情に伴奏させながら、大文第一厭離穢土篇に匹敵するこの世の地獄を写実したのである。

即ち、安元三年の都の大火、治承四年の大鷲風、及び福原遷都による平安京の廃墟化、養和元年に始まる二ヶ年の大飢饉、元暦二年の大地震。ほゞ長明二十才余から三十才前後

にわたる十年間の出来事である。その間において、かつての蘇我氏の暴逆を想起させるかのごとき平家の興隆とその滅亡とを、末世の狂った人間の姿としてうつ／＼に見、又、堂上家と新興武門のいずれ劣らぬ権勢慾の奴隷ぶりをまのあたりに見たのであつた。

ワイシャツの話 (一)

今井茂助

約束の時間までにはまだ小一時間もあつたが、孤りになって考えたいこともあつて、私

は出先からそのまま塚端にあるホテルに出かけていった。仕事で月に二、三度は顔を合わせるあるアメリカ人が私を昼食に招待してくれていたのである。

英語で話しあいながらする食事は、それにしてもしも通訳つきで日本語で通じてしまうのだが、今日はそれもなるまい。日本人の私が東京で英語を喋るといふことには、どうにも厭味と自己嫌悪がつきまとう。

ホテルのロビーの絨氈を踏んだ途端に、そ

長い長い接吻

あめ

天野 忠

老婆が二人
つけっ放しのテレビを見ている
うっすら埃りをかぶって
西洋映画が写っている
あたたかそうな広い部屋のまん中で
若い夫が 若い妻を抱いていた
ふさふさした捲毛の女の子が見上げていた

「……あんな具合に わたしや……」
一人の老婆が呟いた
「……亭主に可愛がってもらたことなかった」
「……ほんにわしら
あんな恥ずかしげなこと」
もう一人の老婆が言った
「……いっぺんも せなんだ……」
そして 手持無沙汰に
おやつに出た黒いあめを
しゃぶりはじめた

これまで私のまわりを無数の粒子のように分厚く稠密に包んでいた都会の騒音が、嘘のようにどこかに逃げていってしまう。それで、ときたま外人の女か男が一人だけ高声で喋ると、それがいやに明瞭に遠くから私の耳に響いてきたりする。

ホテルで私がきまわってしばらく身体の浮くような落着かない気分になるのは、多分この一種独特の妙に息苦しい静かさのせいなのだ。この静寂は、たとえば八岩にしみ入る蟬の声Vの、あの解きはなたれてやわらかな「自然」の閉けさではない。人工られた、閉じこめられた「西洋」のそれなのである。

それにまた、ホテルで働いているボーイやクラークたちの立居振舞という奴が、どこことなく借りてきた猫めいて板についていない。これも同じ「西洋」の仕業であろうか。それにしても、この閉じられた人工の静謐のなかでまるで一日暮らしている彼らが、仕事を終えて表に出たとき、東京ちゅうの無数の騒音が、蠅のたかるようにワーツと彼らをとりに囲む感じは、どんな風に凄じいものだろうか……。

ホテルの最上階にある瀟洒なカクテル・ラウンジ。片隅のソファに身を沈めて、大きな一枚ガラスの嵌められた窓から、スモッグ

の傘を被ったトウキョウの背中をほんやり眺めながら、私はさっきから馬鹿々々しい想念にとりつかれていた。

ウィークデーの昼前のラウンジは空いていて、手持無沙汰なボーイが、バーカウンターに凭りながら時々私の方を盗見していた。こんなところにやってくることのめったにない私が落着かないのと同じように、ボーイの方も私の存在に落着かないらしい。

実際、ホテルのなかを往来したり、腰かけたりしている日本人というのはまず例外なく、クラークやボーイよりもっとソワソワとしていたり、何とも貧相に見えて、照れ臭い感じがするのは、私だけなのだろうか。

外人たちはどうかというと、ホテルのなかを歩いている彼らは、東京の雑沓のなかで見かけるときよりもずっといき生きとしていて、いかにもアット・ホームなのだ。男はみんな堂々としてハンサムで、ゆったりと自信と貫祿の歩をはこび、ソファーにくつろいで葉巻をくゆらせる。

女はというと、そんな堂々とした男たちにエスコートされると、誰もかれも大そう満ち足りた表情でいる。私は、サンフランシスコの丘の上に建っていた石造りの古風なホテルのロビーを思いだ

す。たまたま何かのコンベンションが開かれていたらしくて、夕ぐれのロビーの赤い絨氈の上には人々がいっぱいあふれていた。

男たちがみんなダークなスーツで堂々としていたのは一緒だが、七月というのに日が暮れるとサラサラした空気がひんやりするせいで、女たちは肩や背中をあらわにしたドレスの上に、思い思いのミンクやチンチラの肩掛けをつけて、それが豪華なシャンデリアの灯にほのかに艶光りしていたのである。

私はこの光景を、大きな柱の脇に置かれていたソファーに腰かけて、まるでこいつはアメリカ映画だなと思いつつ眺めていたのだが、映画とちがうところは、この紳士淑女たちのなかでたまたま私のそばを通りかかった幾人かが、ジロジロと私を見下ろしていったことだった。その視線は、不躰で執拗で冷たく、痛みをおぼえる種類のもの、背の低い貧相な面相をもつ東洋人の私には甚だ不快なものであった。

日本人の外貌の貧弱さ。読者のなかには必ずしも同感でない方もあるかもしれないが、私はやはり日本人の面貌や風体は西洋人やインド人、中国人やフィリピン人に比べても貧弱であるように思う。それは、崩れていてム

夕方と夜のうた

大村直子

一日が
林の背後にくずおれる
暗い風が　そこで生まれる
ねがいのうたがたちのぼる
低く　流れのほとりに
白い蝶の不安な眠り
しなやかな枝にかかって
夜の底に　さそわれながら
そこに　おく病なげものは
しのび出て　夢みつつ
風倒木のこずえをわたる
すんだ勇気を飲みこみ

それを　ためらいがちな月かげが
ひそかに　ずっと　うべなっていく

サクルシイ。特に、家の外での日本人はそうである。

しかし、日本人のこの肉体的外貌と、日本人が創りだしてきた独自の精神文化や芸術はまったく無縁なのであろうか。私はそうではないとも思う。

たとえば私たちの庭の美しさはどうか。西洋の庭のあの幾何学的、シンメトリカルでアーティフィシャルで平板で、まるでロゴスの象徴のようなところが、日本人が造型した庭はもっともつと複雑で幽雅でエモーショナルなのだ。この含蓄を西洋人にどう理解させようかと思うたびに、私は一種の絶望感に包まれてやりきれなくなる。この崩れていて、しかしなお一分の隙もない美のよろこび。いやいや、もっと荒れすさんで、傷み朽ち果て露に埋もれ、こころほそく住みなしてこそ「もののあわれ」の凄じさを、あの堂々と逞しく端然たるアングロサクソンにどう共感させるものか。彼らはいく、苔の湿りは汚ない、削ぎとって砂と芝を植えるべしと。噫。サンフランシスコのあのホテルの地下アーケードのショーウィンドーに並べられていた下卑た陶器たち。いやそれよりも、金門橋を渡った対岸から遠望した真昼のサンフランシスコの町は、まぶしいばかりまっ白で、死

伊藤信吉著

高村光太郎研究

高村光太郎の回想
モリストの運命

芸術生涯の起点／近代の詩人として／人道的詩人として／社会的詩人として／戦争の詩人として

高村光太郎の世界
高村光太郎の周辺
高村光太郎の作品鑑賞

高村光太郎の作品世界／刃物を研ぐ人／失はれたるモナ・リザ／ぼろぼろな鴉島／雨にうたなるカテドラル／樹下の二人／雪白く積り

参考書目・年譜・覚え書
¥1800

東京都文京区本郷一―五―一七
振替東京八二二

思潮社

の町か、それとも巨大な墓地かのように私には見えた。(つづく)

ハイネとわたし(二)

田中克己

以上がハイネとわたしとのクサレ縁であって、わたしはこの詩人を高山樗牛博士ほどは愛してゐない。博士は人も知ることく、明治の天才の一人で、明治四年山形県に生まれ、国家主義の理想をかざして活躍し、明治三五年には肺結核で死んでゐるが、全集数巻をのこした。博士の学位はいつもらったか、しらべてゐないが、二十代か三十代か、しかも昭和三五年のサヨナラ博士、それ以後の大学院博士コース博士より偉かったはずであるが、全集中、もっとも愛誦された「わがそでの記」には「月の夕、雨のあした、われ「はいね」を抱きて共に泣きしこと幾度か」とある。時に博士は二七歳で、その涙は何の涙だったろう。国家主義の涙であれば幸ひだが――。
樗牛にまさるとも劣らない明治の三風、姉崎嘲風(正治博士)、相馬御風、登張竹風とならび称せられたドイツ文学者竹風は、大正一〇年刊の尾上柴舟(八郎、歌人)の「ハイネの詩」の序文で「余は独逸の詩人中、最も

ハイネを好むものなり。(中略)ハイネの詩はグエテの天真を有せずといへども、しかも流麗は伯仲の間にあり。シルレルの雄渾に及ばずといへども、しかも奔放自在の妙は却てこれに過ぐ。「といひ、しかもその比を見ない特徴は「冷罵のうちに流あり、諧謔のうちに教ある」点だとした。ただし柴舟の訳を見ないで書いたこれは序文に多いことである。証拠は、柴舟の訳がほとんどその「序文」の特徴をとらへないで

おのが涙

おのが涙のした、らば
麗しき花咲きぬべし
おのがなげきの響きなば
鶯の音となりぬべし

われを思は、をとめ子よ
花をば君にまゐらせむ
きみが窓辺にうるはしき
鶯の音もひびくべし

との流麗の詩にとどまってるのは皮肉である。

ついでながらこの詩(抒情的間奏曲の *meinen Tränen sprissen...*)の訳が、昭和

ではどうなってるか対照してみよう。岩波文庫(前述、井上教授訳)では

涙より
花はもえいで
ためいきも
しらべとぞなる

情あらば
花をおくらむ
まどべには
うたもうたはむ

とみことな文語調。片山敏彦教授の新潮文庫は

わが涙より咲き出づる
わが涙より咲き出づる
かすかずの美しき花。
わが嘆きより響き出づる
うぐひすの 諸声の歌。

君われを愛したまはば
花すべて君に贈らん
また君が窓のほとりに
うぐひすの歌こそひびけ。

ドイツ語は旧制高校で習ったのみであるから誤訳はあるであらう。
誤訳といへば、旧制中学しか出ず(?)独学でドイツ語を修めた生田春月は、この詩を

ヘリック詩抄(六六)

森 亮

月桂樹

しるしの墓石も、人からの歌も
わたしはむりに欲しいとは思はない。
ただ、ローレルの葉かざしよ、
そなたの清らかな若枝が、
わたしをうづめた塚から生えてほしい。
それが四時かはらぬ緑の色で
訪れる人の目を柔しませるなら、
やがてそれは伸びに伸びて
ひともの木といふだけでは足らず、
わたしのこしへの形見になってくれませう

わたしのあつ、涙から
いろんな花が咲いて出る
そしてわしのため息は
あの夜鶯の歌となる

臥せったま、わたしが葬られないでゐたら、
旅人よ、亡骸を地にうづめてください。
道心がお有りなら、わたしの上に墓石を据ゑ
あるいは芝王をかぶらせるのがつとめです。
いや、更にひとこと言はせてもらへば、
もうその必要さへないので、去んで下さい
葬らうにも押への石に事欠く死びとをば
大空が四天井をひろげて待ってゐてくれます

死を思ひ、死後を思つた歌がヘリックの詩集には相当の數入つてゐる。それが恋の歌であることもあれば瞑想詩のこともある。また、唯事歌にほんのちよつぱり奇想をまじへた、いかにもヘリックらしい作品もある。初めの「月桂樹」(八九)はこの部類に属する。いささか物欲しげな歌ではあるが、詩人に名譽欲のあるのは常人のもつ色気のやうなもので、それをほんのり匂はせるのを私は不潔と思はない。次の「草枕」(八三)も死を歌ふが、これは「ギリシア詞集」巻七の悼歌・碑銘の詩風に近い。

と、これまた一層みことな文語調。最後に拙訳は(前掲、昭和二五年版角川文庫)題なく(あるべきはずもない、原本がさうだもの)、訳は

わが涙からかすくの
花が咲き出す
そしてわがためいきは
夜鶯のコーラスになる

おまへが僕を愛してゐるなら
花はどれでも贈つてやる
おまへの窓のまへには

夜鶯の歌をひびかしてやる
となつてゐる。ナハティガルはホーホケキョと鳴かない別の種類である。わたしだけがそれを厳密に(或いは神経質に)しるし、尾上、片山の二先輩は鶯、井上教授は五七調のために「うぐいす」をぬいて、セレナードを歌う男に誤解される訳をしてゐる。みな癖があるものだと感心をあらためてする。この癖のある人たちのほん訳を読む読者は一冊ですめばよろしいが、二冊くらべてよむと当惑するだらう。わたしは詩も学術論文も、正しく伝へるのが翻訳の正義だと信じてゐる。ただし諸先生とちがつて(尾上柴舟先生をのぞく)、

おまへがわたしを愛するのなら
この花をみなおくりませう
そしておまへの窓のそとに
夜鶯の歌はひびくでせう

と、口語調の歌にしてゐる。これをわたしは一等いい訳だと思ふが、七五調のためには、やはり多少のことは附加をしなければならなかつた。

ハイネの社会詩人としての価値(マルクスが親友として正しく評価している)、ユダヤ人としてのコンプレックス、浪費癖の強かつたこと、父なる神、子なる神、聖靈とのことなどは、一冊の本にしなければ書けないが、本にすればハイネに対する感じがどうかはるやら、わたし自身にもわからない。いまのわたしには一言にしていへば、死後百余年まだ記念碑もたない、生きてゐる時にその人を愛するものなく、死んでわたしの飯のたねになつてゐるこの詩人のたましひの安らぎを祈るのみである。

ある閑人の告白(一)

と、まあ、そこではどんな折かんが行われていたと思います。じっさいそれはお話にならぬことだらけだったのです。

全くいままで、いまがいままで、こんな大それたことが、それも自分の足元に行われていようとは思いませんでした。

それは、いま思い出しても胸が悪くなりませんでした。

だって あなたノやっとなつたばかりの、骨もまだすっかり固まっていけないような信杖を、妻はぐるぐる捲きに柱にしぼりつけて置いて、そのうえ、その前に新聞紙のしわくちゃになったのを、五六枚ほど積み重ねているのです。しかも手に火のついた蠟燭(そ)れは蚊帳に蚊が這入ったとき焼き殺すため妻が常に用意しているものではありませんが)を持っていてののです。そして時折、信杖の、怖れのために死んだようになってる信杖の体をこすき廻しては、てんで話にならぬ脅迫をやっているのです。

——さあぎ、すりなさい、ぎっすり泣き止んでノもう決して寝小便なんかしないと仰言。でないと、かあちゃんは、このぶんぶん紙に火をつけますよ……火をつけて、のぶちゃんの家も、のぶちゃんも、それから母ちゃんも、みんな焼け死んでいきますよ!

妻はこんなことを言っでは、じいじい燃えている蠟燭を新聞紙のすぐ近くまで持って行っているのです。

どうです、これが正気の分別のある女が、がんぜない児に加える折かん方法でしょうか……いえ、いえ、決して妻は冗談なんかでやっていたのではありやしませんよ、本気なんです。しかも大真面目でそんなことをやらかしているのです。

——この人間の出来損い奴ノとわたしはあまりのことに、いきなり妻を二三間も跳ね飛ばしました。そして何やら唸りながら、めちやくちゃに鞆のめしてやったのです。

ところがどうでしょう。全くしぶどいたらありやしません。だってあなた、口も開けられないようにわたしの拳を受けていながら、妻はその下から顔とわたしに抗弁して来るのです。

——あなたという人は、何でそんな出過ぎたことばかりするのです。こどもしつけは私に任せて下さらなくちゃ、悪い癖はいつまで経ってもなおりはしません、だってその子は、いくら言っ聞いて聞かしても寝小便は止まんし、そのほか一つだってろくなことはやらかさんのですノとこうなんです。ねえ、なかなか大真面目でしょう。きちが

神風連九十年記念 神風連研究

¥ 200
熊本市東井町五一
報喜口 熊本二一五六五
日本談義社

いに刃物と言いますが、これはそれほど切味もありませんから、まあ、馬鹿の一つ覚えでしょう。

ああ、どうもだいぶ説(はな)しくたびれました。おや、此処は何処でしょうか知ら、あ、そうTですね、船はどうやらとまっているようです。わたしはすっかり言い忘れていました、電報を受けたのが大阪だったものですが、そこからすぐこの船に乗り込んだわけでした。

いつか、有名なあの詩人が、自からを葬り去ったという海の上も、つい二時間程前に過ぎ去ったんですね。もっとも、わたしはついでそんなことは気にかけてもいなかったのですが、すぐわたしの傍に、美しい女の人が佇んでいて、月光に青く冴え返っている海を見下しながら、感慨深げにそんなことを話しているのを小耳にはさみましたよ。

船は未だとまっていますね。しかし、今にすぐ動き出すことでしょう。なんでもここには二十分位しか居ない筈なんですから。あ、どうやら動き出したようです。重いもの愛い汽笛ですな。

では、ほつほつと喋り始めましょうか。ですがわたしは、この旅に立った日の最後の出来事を、いったいどんな風にお話ししたら良いのでしょうか。じつを申しますと、わたしは

天と海(断片)

浅野 晃

朝空になびく黄の雲
いそいで鳴くひぐらし

川原で四つ手があがる夕空を
鳥の渡りがすぎる
いつからこのやうに冷たい
天の色

これを話し出したことに、ちよっぴり後悔を感じ出しているくらいです。

ですが、どうかお聞き下さい。それは五日前の夜のことから始まります。あなたはわたしが、いまでお話ししましたことで、わたしと妻との関係が、じつに異常な二つの性格(生理的なものまで含めた)の争闘によって、しだいにある突発的な危機をはらみつたつたことに御気づきでしょう。

めぐし乙女よ

あなたの指が弾いてる讃歌は
奇蹟をうたつてゐる
不毛の地におちた一粒の種子が
花をひらき実をむすんだ奇蹟を

けれどあなたはあなたの指が弾いてゐる讃歌の有様を知つてゐない
うつくしい乙女子よ、それでよいのだ
不毛の地におちた種子がこのやうに
見事に実をむすんであなたの前に立つてゐるの
気がつかない、乙女子よ、
それでよいのだ

そうです、それは実に十五年という長い間わたし達を苦しめたのです。忌むしい、どうすることも出来ない、一日とても辛抱しきれないような生活が、実に十五年間も続いたのです。

実際わたしはしまいにへとへとに疲れてしまつて、何ひとつ手につかなくなつてしまいました。もともときりつめてさえいけば、生活がそのためにどうなるということもなかったのですが、遊びごとひとつ手につかぬやうになつては、もう人間もそれでおしまいで

体とてもめっきり弱り果てて、骨の筋々は痛み始めるし、しらがはふるふるで、四十歳そこそこのわたしが、たれの眼にも六十歳とも見られるほど老けてしまいました。

そのくせ妻はと見ると、まだ二十七八かと思えるほど若々しいのです。まるまると肥つていて、何の苦勞もないという顔つきをしています。おまけに不幸にも無類の貞淑もので、どんなにほつたらかしていても、男の中に追いやつていても浮いた話ひとつこしらえはしません。……内心わたしは、どれほど妻の不貞をのぞんでいたか知れませんが……。

いや、またわたしは言わぬでものことを申しています。

では、すぐと五日前の夜からの話にうつり
ましょう。

その夜わたしは、いやその夜に限ったこと
はなかったのですが、その頃わたしはひどい

不眠に悩まされていまして、ついその晩も眠
れないままに起き出し、こっそりと雨戸を開
けて庭に降り立ち、夜風に吹かれながらぶら
ぶらし始めたのでした。

訣れを告げた者の歌

トラークル
平井俊夫訳

夕暮

夜

死んだ勇士らの姿を
月よ おまえは払げてゆく
もた 黙す森や林に
弦月よ——
恋人らの
優しい抱擁や
誉ある昔の世の影らを
朽ちてゆく周辺の岩に映す
ほの青いこの光の
照らし出す街
冷たく 邪悪に
腐りゆく一族が住み
白い子孫の
暗い未来をととのえている

おお 月光のもつれる影らが
溜息しつつ浮き沈むうつろな水晶色の
山の湖
荒涼と裂けて
夜の嵐のなかに
そばだつ山嶽よ
この灰色の塔らにひしめく
笑う魔物
火の獣
粗い羊歯 唐松
水晶の花々——
際限のない苦しみ
おお 神を抱きたいものを
優しい精よ
滝のなか
波うつ松の樹林でおまえは歎息する

啓示と没落

ヘルブルンにて

黄昏がふかい傷を曝している

夜への帰依

いまいちど夕暮の青い歎きのあとを慕い
丘の辺をすぎて春の池のほとりをゆく。
あたりには遠い昔に死んだ人びとの影
僧位の王侯や貴婦人らの影がゆきかう。
ああ かの人びとの花 厳肅なすみれが咲
き出ている
夕暮の谷に。青い湧き水が水晶の波をたて
て
こうして靈氣にみちて緑に芽ぐみはじめ
柏の樹々が死者らの忘れられた小徑に。
池にうつる金いろの雲。

歎き

不安 胸をふさぐ死の夢
荒れた墓へいそぐ年が
樹や獣のなから覗き見ている
野も耕地も枯れて
牧人が怯える群をいざなう
妹よ おまえの青い眉が
静かに夜のなかで招いている
風がむせび地獄の笑いが聞こえ
心臓は怖れに凍ってゆく
おお 星と天使を仰ぎ見たいもの
母は幼児をだいてふるえ
赤く地底で鎔岩が底ごもり鳴る
欲情 涙 石の苦しみ
巨人族の暗いかずかずの伝説
おお 憂鬱 孤独な驚がかなしみ哭く

女僧よ おんみの闇のなかへ迎えたまえ。
おお 山々は青い冷涼にひたされ
暗い血の色の露がしたたる。
きらめく星空に十字架がそびえる。
偽りの口は裂けて紫になった
冷たい崩れた部屋のなかで。
笑いと金の団居が光るけれど
鐘は最後の余韻をふるわせている。
月をおおう雲。黒ずんだ色で
果実が夜にみとられて落ちる。
やがてあたりは墓所にかわり
地の遍歴は夢となっておわる。

すと、それは妻の部屋からだったのです。
そこで、やっとわたしはいくらか安心しま
した。ついには愕かされただけに忌々しくも
ありました。だって妻にはそのようなことが

度々あったのです。
でもそのうち、わたしはその唸りこえが、
風でも募るように激しさを増して行くのに気
づきますと、どんなに憎んでも、やはり

わたしの妻に違いないものですから、どうし
たのだろうと妻の部屋に行ってみますと、眼
を不気味に大きく見開いたまま、まっかな顔
をして、うんうん苦しんでいる始末なんです。

—おい、どうしたんだ？とわたしは蚊帳の外から声をかけました。ですが、妻は苦しさのあまりでしょう。まるで振り向きもしないで、怖いほどの眼で、まさにほんやり灯っている電燈の方を必死に睨んでいるだけなんです。で、わたしも是はいかぬと狼狽て出して、すぐ医者へと駆け出したわけなんです。が、そして、その夜はそれで済んだわけなんですが……。

その翌々日となって、わたしは飛んでもない怖い魔に襲われてしまったのです。

そうです！それは確かにわたしの仕事と言うよりも、魔の仕事なんです。

だがこう話が飛んでしまつては、何が何やらお解りならぬでしょう。妻の発作は、妻の病氣は、医者にもしかとは解らないらしかったのですが、どうやらその頃九州一帯を襲ったあのし、眠性脳膜炎だろつというものでした。そのためでしょう、妻はその夜医者の手当てで落ちついてからと言ふもの、ただこんなと眠るだけで、あの騒がしい、あの恐ろしいことばかり仕出かす妻が、まるで仏のよるな優しい顔でいるばかりです。

ああ、そのときのわたしの喜びと言ふものはどんなでしょう。わたしは全く、幾十年ぶりで、落ちついた平和な日を迎え得たので

す。——だが、その上もないわたしの喜びこそ、わたしに忍びよつた魔に外ならなかったのです！ああ、そいつこそわたしを誘惑した本尊です……。

まったく、わたしは妻に意識がなく、口が利けない、体が動かさないとさうそれだけで、有頂天な喜びを感じたのです。

ところで、飛んでもない、あのおせっかいの医者奴が、その喜びを跡方もなく打ち消してしまつたのです。

お！わたしはあの飯医者を呪わずには居られません。実を言うと、わたしはその医者の手腕をちよつとも信用してはいはしなかつたのに、その先生、要らぬときに一生一代の手腕を振つたても言うのでしようか。

あのこんこんと眠っていた妻が、その医者の注射や、手当てのために間もなく意識を吹き返して、そればかりか夕方となると、もう寝床の上から、あれこれとわたしをこき使う始末なんです。

たとえば、やれ水をくんで来いとか、小便をしたいの、大便をしたいの、ほれ信杖は何処に行ました探していらいしやいのと。

ああ、わたしは全くた、まけてしまいました。それと同時に妻に対する募り募つた憎悪が、火を吹き出すような勢でほとばしり出始めま

した。——ああ若しまる三日、いや後二日

よい、妻があのままこんこんと眠つてさえてくれたら、わたしはあんなことを仕出かさずに済んだでしょうに……。

いや、わたしはもうそんな言い逃れを申しますまい。確かにこの手で、このわたしの手

でやったことです。わたしは、あまり妻がうるさいものですから、……病氣をたてにして、まるで無茶なこ

とばかり言い出すもんですから……。たとえば、もう一つ申しあげますと信杖が

ざん、ざん泣きながら帰つて来たのを、わたしがやんわりあやしていると、病人とは思えないキイキイ声でこう言うのです。

——此処へ連れていらっしやい！そんな手ぬるいことでは駄目です！

——なんですあなた！人が病氣していると思つて、馬鹿にしないで下さい……いいいいいい……とこうなんです。

それかと思うと、突然、小声でわたしの大嫌いな（いかに嫌いだったかは先刻も申し上げましたが）はやり歌など口にし出すという風で、……わたしは全くきちがいになりはしないかと思うほど、神経がいらいらして、おまけに体があまり強い方でないので、打ち倒

れんばかりに弱り果てていました。

ですから、その夜、わたしは眠り薬でも飲んで、一時間でも良い、二時間でも良い、ぐっすり眠つてやろうと、丁度粉薬を紙に移しかけていた時です。妻のキイキイ声がいきなりわたしの耳に飛びこんで来ました。

——あんた！どうしたの、私の薬の時間じやありませんか！何を懲り々々しているの！

わたしは妻のその叫び声を聞くと、電気でも当てられたようなある考えに捉われま

した。魔です、魔がさしたのです！決して全部私の責任ではありませぬ！……あ。

わたしはただ、その思わしい妻をこんこんとあの時のように眠らせたかっただけなので

す。わたしはそう瞬間に考へて、自分がのむために紙にうつしていた睡眠剤を、いまは妻に与えようと思ひ立つたのです……。

ですがその時、わたしが妻のキイキイ声に振り返つた機に、缶の中の粉薬が、紙の上

に普通の倍以上もこぼれ移つていたのに気づきませんでした。いや、いや、気づきはしたのですが、何となく、その思わしい妻にはこれぐらいが適量だろうと信じたのです。ああ、何という錯覚をわたしはそのときおこしたのでしょう。それは全く、妻に対する憎悪によってひきおこされた、わたしの飛ん

定本

中河与一全集

(全12巻)

新感覺派の旗手として、先鋭の感性と剛直ともいふべき精神をもつて、文学活動に身を投じた氏は、深蘊するがゆえの激しい苦悩の時代を経て、高雅な一大作品群を産んだ。本巻はその開花期の力感みなぎる「蕨たき花」から、荷風によつて日本の「若きウエルテル」と激賞せられた永遠の名作「天の夕顔」、美しき魂の証ともいえる「失楽の庭」に至るまでの作品を収録。

定価一五〇〇円 千一六〇

第一回配本

第4巻 天の夕顔／蕨たき花／墮落
／三連符／失楽の庭

東京都千代田区富士見町二
板橋口地東京一九五二〇八

角川書店

でもない間違ひだったのです。

ですが、わたしはすくそれに気付きました。妻にそれをのませてしまつてからすぐあとです。ああしかし、一分間も前にはすべ

って行きました。妻はこんこんたる眠りにおちて行きました。けれどもわたしには、そのとき何の罪悪感

も起こつて来ませんでした。と言ふより、それを感ずる気力も失せていたのでしょう。

ところが翌朝になると、わたしは次第に自分の犯した罪が、どんなに大きなものかに気が始めました。そして、わたしは青くなつて急にうろたえたえだしたのです。

わたしは妻のもとに走りよつて、三十分もゆさぶり続けました。でも、もうそれはすべ

て無駄です。だが幸いなことには、未だ温みも尋常ですし、呼吸も聞こえますので、わたしは医者にかけつけ、人に頼んで妻の身うち

に来てもらいました。ああしかし、わたしはどこまで卑怯な男で

しょうか、そんなつもりではなかつたのです。が、医者に会うと、すらすらと嘘を吐いてしまつたのです。そして、それは美事に成功しました。何より医師の最初の見立てのし、眠性脳膜炎と言ふことが、わたしに味方してく

増補・改訂版

伊東静雄全集

(全一卷)

桑原武夫 編
小高根二郎 共
富士正晴 共

五年前刊行された初版に、新たに詩八篇、散文六篇、雑二篇、書簡三十二通の多くを加え、作品年譜その他の不明に属した部分を解明、誤謬を訂正した豪華版。
定価 一八〇〇円

人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西
振替 京都 一〇〇三

果樹園 一三〇号 昭和四十一年十二月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所

元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

ですから医師をはじめ、こんこんと眠りに落ちた妻を、ただ病気の故だとばかり思いこんで、つゆ程もわたしを疑おうとはしませんでした。

でも流石に、そのままわたしは妻の傍に居る勇氣はないので、すぐその夕、のっぴきならぬ口実のもとに、万事は妻の身うちの人に頼み込んで、旅にのぼったと言いつてした……。

そしてそれから三日目、この電文を受けつつたのですが、ええ、万一のことがあったらすぐしらせるように、言い置いたものですか……。

え？ではこどもの方はどうしてキトクだと仰っしゃるのですか？おう、そう、それはわたしにも帰らなきや分らないことなんですよ……。

……こりやどうも、つまらぬお話を申し上げているうちに空が白んで来ました。もう間もなく港に着くでしょう。ああ、乗客達が、ざわざわと騒ぎ出したようです。

え？有難う。ですが、わたしは、言うなら一番最後に陸地に上る人間です……どうぞおかまひなくお先にお出でを願います。

(二世紀一昭和九年六月号)

編集後記

十月一日。「日本談義」十月号——神風運符集は珍重すべき読み物であった。荒木精之氏の巻頭言によれば、十月二十四日が拳兵九十年に当る由である。幸い前掲の広告のように抜刷製本されているので、心ある人士にお薦めする十月五日。小川和佑氏より「立原道造研究文献目録要覧」をいただいた。この萬字の人にしてこの縁の下の力持ちのような仕事ができただのである。

又、この日朝日新聞の神林一氏より山頭火の写真二葉を頂戴した。大山澄太さんが朝日「こころのページ」に連載した「俳人・山頭火を語る」を御つたあの写真である。そういえば十月二十三日の「こころのページ」に蓮田の竹馬の友丸山学氏が「民間信仰と現代宗教」という立派な文章を書いておられた。縁は連環している。

十月十四日。渡野隆三氏より緒方隆士が「推韻」に発表した初期作品三篇のトーヨー版をいただいた。感謝申し上げます。

十月二十七日。ロイヤル・ホテルで開催された新潮社七周年記念パーティーに出席した。盛会だった。保田与重郎・前川佐美雄氏に久しぶりでお会いできた。京大の谷友行・高安国世氏や司馬遼太郎・小野十三郎・岡部伊都子氏にも挨拶できた。その他黒岩重吾・水上勉・田辺聖子・会田雄次といった流行の人も見えた。とりわけうれしかったのは、佐藤義夫社長から拙研究の労を多とする由の御言葉をいただいたことだ。尚、「新潮七十年」には河盛好蔵氏からも有難いお言葉をいただいた。万謝申し上げます。(〇)

果樹園 第一三〇号 (毎月一回一日発行)

昭和四十一年十二月一日発行

池田市石橋二丁目六ノ五

編集者 小高根二郎

発行者 大阪市東住吉区桑津町五ノ八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市石橋二丁目六ノ五

発行所 果樹園社

定価 四十円 送料 二十円